

念能力者(?)なひかりちゃん(?)

汗汗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

(ここ、おれんちじゃなくね…?)

気づけば田んぼの中から空を見上げていた。言われるままに起き上がり家へと帰る。一晩明けて見渡せば木造の、どこか懐かしいような時代を感じる風景。朝食の席で聞いたラジオからは”ネウロイ”の4文字。

(ス、ストライクウィッチーズウウ！)

これは見知った結末を覆さないために力を求め、最終的に斜め上の方向に行ったひかりちゃん(?)のお話

※だからだら書いていたせいで序盤とは書き方が変わっていたり設定に矛盾があったりします。いつか書き直しますががいつ直すかはわかんぬい

## 目次

1936年○月×日	1
修行編　　くゴン達って念覚えてからGIクリアまでほぼ一年ってマ ？はやすぎでしょ	7
修行編　その2　　く自分でもなんでできたのかわからない思い込 みってあるよね	16
学校入学／修行編　その3　　く原作始まるまでは全編修行編なので は？ボブは訝しんだ	26
小学校編　　く正直書いてて詰まんないから年単位で時間跳ばす	33
佐世保海軍航空予備兵学校／修行編　その4　　く念って想像力豊か じやないと大成できないんじゃないかと思ってる	41
佐世保海軍航空予備兵学校　　く刀語原作で七実様がちやっちゃと殺 されたのも納得	54
佐世保海軍予備航空兵学校　　く原作突入前にやることもうほとん どない	63
原作開始　　く北欧行くなってなったら何もってく？泊まるのは中世石 造りの城だけ	72
原作第2話から、出航欧州へ！　　く前回のサブタイこつちで回収し ちやったよ	83
原作第3話！　　く正座って小技知ってればそこまでつらくない	94
原作第4話前編　　く改編の余波が直撃回。正直自分でももつといい 展開あつたと思う	108
原作第4話後編　　く統合戦闘航空団って天才の集まりなわけ	

原作第5話 　　く冬將軍（ネウロイ）く

閑話1

原作第6話 　　くアニメって必ず仲間に関点を当てた話があるよねく

原作第7話 　　くサトルヌス祭（クリスマス）く

閑話2 　　くおまけで設定まとめてあるく

原作第13話 　　く正直間空きすぎて設定覚えてないく

原作第8話 　　く冬の北極海って血の池地獄とかと同義だよな

原作第9話 　　くブレイブウィッチーズの設定どころどころガバくな  
い？く

久しぶりの修行編 　　く季節感くるいそうく

原作第10話 　　く姉vs妹 　　頭蛮族の戦い！く

原作11話 　　くフレイヤ作戦・原作崩壊の本格化く

1945/2/10く11 　　ペテルブルグ包囲戦の開始

1945/2/13く15 　　解放準備作戦のそのまた準備作戦

2つの統合戦闘航空団

いぎ（東）カレリア

ペトロザヴォーツクにて

登場人物・設定まとめ

年末if

フリゲーター型ネウロイ

ノアの箱舟

414

396

380

367

353

335

324

289

270

246

236

219

183

173

161

146

138

124

焦れったい2日間	430
2つのパブロフスク	445
10+3で出来た1	462
前哨戦	477
前へ進んで／前へ進ませるために	485

1936年〇月〇日

「めでたいのう」「やっぱりひかりちゃんもかあ」

最初に聞こえたのはそんな声で、その次は、舗装もされていないあぜ道や田んぼ、”今どき見ないような”木でできた電柱が視界に入った。

(……?)

どうやら自分は田んぼの中でしりもちをついているらしく、尻の下にはなにかを押しつぶしたような違和感があった。

聞いたものや見たものが頭に入っていない。

真つ白な思考のまま、こつちの顔を、より正確には頭の上を見たまま会話する周囲の人たちをボウとみあげていると、

「ひかり?大丈夫?」

横合いからそんな声を掛けられ、自然と

「あ、うん。大丈夫だよ”お姉ちゃん”」

そんな声が出た。

そのあと、家に着くまでのことはよく覚えていない。

何となく覚えているのは、自分が”姉”と呼んだ人物に手を引かれて道を歩いたこと。最初、なぜか思うように歩けず、フラつく自分の足にイラツときたがすぐに慣れたこと。

家は見知らぬ古いつくりであり、入ってから、中にいた夫婦と言葉を交わした。夫婦は泥だらけの自分を見て驚いていたようだったが、”姉”と一言二言交わした後は途端に笑顔になった。

泥を落としてくるように言われ、”姉”に連れられて風呂に入った。出ると用意されていた服は肌触りのいいとは言えない和風のもので、なぜか上だけで”ズボン”が見当たらなかった。

ぼんやりした頭のまま、居間へと連れられると食事が用意されていた。夫婦の夫のほうが言ったイタダキマスの声に続いて自分も頂きますを唱え、食事を始める。一緒に卓を囲んでいる三人は食事の中に会話を挟んでいて、そのなかで、

「ついにひかりも”まりよく”を発現したかあ」

「たしか、孝美も6歳くらいの時だったと思うし、やっぱり姉妹なのねえ」

「そうだったけ？」

そんな会話を聞いたのは覚えている。

食事を終え、「もう寝なさい」と母親らしき人にいわれた”姉”の後ろについて少し離れた部屋に入る。部屋は物があたりに散らかっていて生活感があり、子供部屋といった印象だった。

”姉”と協力して布団を押し入れから引き出し、床に並べて、明かりを消して中に入る。

”姉”の気配を隣に感じながら、ふと思った。

(ここ、おれんちじゃなくね…?)

眠気は消し飛び、思わず目をかっぴらいてしまった。

(えっなにこの家。今どきおばあちゃん家でもここまでのナチュナルテイストはそうそうないぞ)

(しかもまりよくってなんだよ…、え?魔力”か?)

(いや、”まりよく”はまだいい。いやよくないが)

(田んぼからここまで電化製品の類をろくにみてねえ!電線と電球くらいか!?さがせばラジオくらいはあってもおかしくない雰囲気ではある、つていうか今どきおばあちゃん家でももつと見えるここに電化製品あるわ!)

(あと服だよ服。なにでできてんだこれ。しかも上だけって、家の規模的に貧乏って感じじゃなさそうじゃん?)

(タ、タイムスリップ的な…?でもだとしたら家族がいるのはおかし、てかその家族との会話もスラストラ…支障なくできてたし???)

「んー、ひかり…?まだ寝ないのお?」

「あ、うん もう寝るよっ」

(だめだわかんね、ねよ)

目が覚めて、よくないと知りながらも目をこすりながら、朝食の席

に座る。父親であろう男がなにやら後ろをむきながら何かをいじっているのに目が行ったが、それがラジオであると気づく。と、同時に、ラジオのガワが木でできていることに驚愕する。昨日のタイムスリップ説がいよいよ真実味を帯びてきたな…、などと考えつつ、運ばれてきた朝食に手を付ける。

ラジオからはノイズ交じりの音声がかえだし、それに満足した男は手を合わせて食事を始めた。

ザーツ《先日より、カールスラントはベルリンにおいて11回目となるオリンピックが開催され…》

ザーツ《昨日の陸上競技男子マラソンでは、扶桑国南洋島出身の…》

ザーツ《ヒスパニアにて発生している内乱では、戦場で”ネウロイ”の姿が確認…》

ザーツ《このことから各国より”ウイッチ”を含む大規模な連合部隊が…》

”戦場でネウロイの姿が確認”

”各国より

ウイッチを含む…”

”…でネウロイの姿が…”

”…より

ウイッチを…”

”ネウロイ”

”ウイッ

チ”

(ス、ストライクウイッチーズウウ！)

思わず箸を取り落としたまま固まってしまい、”姉”に声をかけられたところで気づく。

「…おねーちゃんの名前って”たかみ”だっけ？」

「えっ、うそでしょひかり、お姉ちゃんの名前覚えてなかったの…？」

「いや、ちがつ、おねーちゃんは自分の名前、字で書ける？」

「なんだあ、！お姉ちゃんはもう10歳だものちゃんと書けます！」



そういつて”姉”がよく磨かれた木のちゃぶ台に、指の油で書いた字は、

” 雁淵孝美 ”

それを見ると同時に自分が何と呼ばれていたかを思い出し、  
(んんんんんんんんん、アアアアアア！)

決して表情には出さず、静かに思考がオーバーフローした。

箸を床に落としたまま固まっているところを母親であろう女性、いや、母親が見とがめ、言われるままに箸を拾い、食事を終える。どうやら”姉”は学校に行くらしく、あわただしく家を出ていくのを見送った。すでに父親は仕事に出たらしく朝食の後片付けを聞きながら自室に戻る。

(ストップパンの世界に紛れ込んだどころか外伝(?)主人公になつとるやんけ！)

片づけられる前の布団にもぐりながら思考を続ける。

(雁淵姉妹の孝美とひかり、カールスラント、扶桑、南洋島、決まりつけはウィッチ！、数え役満どころの話じゃないじゃん…)

(てことは今何年だ？ えーと原作1944年で十代前半のひかりちゃんが今くらいの年齢ってことは1930年代後半、かな？ どーりで電化製品がほとんど見当たらないわけだよ。三種の神器だって戦後の話だもんな…)

(そしてなによりやばいのは)

「俺が”、”ひかり”ちゃんってことだよ…」

(それつまり、Ⅱで戦場行確定ってことじゃんさあ…)

(ウィッチってべつに強制徴兵ってわけではなかったし、行かないこともできるけどさあ…)

(それはつまり、ブレイブウィッチーズのお話から”ひかり”の要素が抜かれるわけだえ、)

(幾つもまずいことがあるが特にやばいのはえーっと)

## の被害

- 1、最序盤の扶桑艦隊襲撃で502が到着するまでの被害
- 2、めつちや寒くするネウロイ戦
- 3、船団護衛
- 4、巢の破壊

(どれもやばいッツツ、特に3！ピンポイントでクルピンスキーの生死にかかわってる！)

いや、そういう意味なら残りのどれもそうだけど)

布団の中で頭を抱えながら、顔から血が引けていくのを感じる。

(い、行きたくねえ、死にたくねえもん…。 けどウィッチが死ぬのも嫌、つてかつらい！ 極論顔も知らん兵士や将校はまだ無視できるけど顔知ってるウィッチが死ぬのを見て見ぬふりするのとはつらすぎる！)

(そんなことしたら後悔の苦しみで残りの人生地獄確定じゃん…)

(つまり行くしかないわけでえ…、そのうえで生き残るには…)

「戦って生き残れる力…ですかねえ…」

(この世界の戦場において最強はウィッチ！つまりは魔力の有無)

(魔力だけあったって戦えるわけじゃないだろうけども、魔力のあるのとないのではまるで違う)

(原作宮藤は魔力の多さで序盤乗り切っていたようなものだし…)

“ひかり”ちゃんの魔力が少なさは原作序盤のウィークポイント、しかし克服する描写はあった…)

(つまり欧州行く前から鍛えておくことは可能！ロスマン先生の助言…助言？も何となく覚えてる！ 少なくとも1番…欧州行の前から戦闘力を原作より幾分底上げしておけば、中身“おれ”のひかりちゃんでも原作をなぞっていけるかもしれない)

(いや、魔力周りが原作よりも早くましになればその分原作より強くなることも…、腕のいい人がいっぱいいるわけだし、教えを乞うこともできるだろう。それこそロスマン先生を頼ればいいわけで)

(そうと決まれば…)

「やるべきは魔力の…制御？ …何すればいいんだ？」

初手からけっ躓いた感じがした。第一の関門である。

修行編　くゴン達って念覚えてからG Iクリアまで  
ほぼ一年ってマ？はやすぎでしょく

こういう時は先人に頼るもの。

なお、母親は頼れない。そもそもウィッチかもわからん。いきなり「魔法の修行つけてくんろー！」といったところで相手にされるどころかなんか怪しまれそうだし、いい言い訳も思いつかないので別の者を頼る。

「おねーちゃんまほうってどうやってつかうのー!？」

「んー？しょうがないなあひかりは!？」

ちよろい

なにやら姉のキャラちがくね？　とも思うがこの年頃の子は頼られると嬉しいものだしそういうものだとな納得することにした。

姉である孝美はすでに魔力を使えることが昨日の会話でわかっているので都合がよかった。

家に帰ってきたばかりのところを悪いが、声をかけさせてもらい、教えを乞う。

結果、幼女の抽象的な、もはや暗号ともいえる説明を賜ることとなり、人生経験片手に必死こいて解説した結果は

”集中して””体の内にあるものを””感じ取れ”

という、何とも少年誌感を感じさせてくれるものであった。

さつそく、うんうんうなつてみるがうんともすんとも言わず、これはどうしたものかと思っていたところ、

「なんで羽もしっぽもださないの?？」

とのご意見。　k w s k といつてみたところ、お姉さまご自身はいつも羽と尻尾をはやしてから魔力を感じ取るとのこと。

お前そういうのは早く言えよ…、と思うもそれも無体な話か、と今度は羽と尻尾…いや、”ひかり”ちゃんはリスだったかな？の耳と尻尾を思い浮かべる。

「あつ、でたでた」

「すごい簡単にでるじゃん」

ぬるっと出てくると同時に体が暖かいものに包まれるような感触がする。

(「こえぜつたい」まりよく)「じゃん!」)

思わず外見通りの幼女ムーブをかましつつ、言われた通りに自分の内側に集中して魔力の感覚をつかみにかかる。

(あ、これですわ間違いない)

体の外に出ている力をたどってみればなるほど、体をめぐる”十二か”を感じ取ることができた。

→第一関門あつさり突破のお知らせ

自分の指導の結果に満足げなおねーちゃんのそばを離れ、部屋で続きをする。

(なるほどこれが魔力… 未知の力を感じる!と、同時に確かにこれ少ない… 少くない? 絶対少ないよこれ、宮藤ちゃんとかどうなつてんだろ…)

わかつていたことではあったが、自分の魔力量は思った以上に頼りなく、同時に原作主人公様に恐れおののきながら次の課題を考える。

(多分、魔力量自体は成長とともに増えるんじゃないかな? となるとまずは操作か)

原作ロスマン先生の教えは、魔力を適量手に集めることで壁を蜥蜴かイモリのごとく登れるようになる、魔力の適切な配分を学ぶというものであった。

(ジョジョの波紋…、いやNARUTOのチャクラのが近いかな?)

どちらも作中で”力”を集中させることで壁に張り付くことができた。問題は…

(魔力強化があっても6歳児に壁登りはキツイっすよ!)

壁が登れないのだ! そして、登れない以上壁に手が張り付いたところでそれが適量かどうかはわからないのだ! NARUTO風に走れることもできないし、段階すつ飛ばして水面に立つのもどうだろう

か。

(そう考えると原作ひかりちゃんやんはNARUTOの逆順でやってんだな)

ひかりちゃんが苦戦してたのはもしや…?などと考えたが、閑話休題

(なんか別なの考えないと…なんかあったかな)

”力”を操作する系の作品かあ…)

”念”、H×Hとかあ…?)

”念” H×Hの作中で生命エネルギー、”オーラ”を操作する技法の総称 シンプルかつ単純な力の操作を基本とした念は魔力の操作に意外とあうかもしれない。

他にも魔力や似たような力ではっきりなのやネギま、似たような力でもBLEACHやNARUTO、ドラゴンボールがあつたが前者は魔力操作というより魔法や術式ブツパな世界観なので参考にならず、後者も参考になるのはごく限られたもので基礎的なことを鍛えるには向いていない気がする。

(えーと、精孔を開くとこまでできてるってことでいいのか?)

んーでも、確かに体から漏れてる感じはするが”纏”をしなきゃ死ぬって感じでもない… あ、瞑想とかでゆっくり開いたのと同じってことか?)

(んー、まあ順当に纏の修行から始めればいいか 飯くってこよー!)

以後、自分に満足がいくまでの間は、纏を意識して修行することに決め、ひとまずは夕食をとることにした。

”燃”の四五行を交えながら、起きて飯食って外で纏して飯食って纏して…といった生活を繰り返す。 代り映えしない修行風景に飽き、工夫も凝らし始める。

纏をしたまま昼寝したり、母親に見つかりそうになったり、外でやったら寝過ぎして、帰るのが遅いと心配させたりといった生活を送り3か月もたった頃。

(そろそろ”練”に手を出してみるべ)

ひとまずの目標であった寝ながら纏をする修行、原作では休んでい  
る間も脳を緊張させとく訓練とされていた。 ” 岩を結んだ紐を自分  
の上に吊り下げ、紐の先を持ったまま眠る修行 ” をアレンジ（岩の  
代わりに小石や本に手加減する）していたものにも成果が見えたこと  
で、次の段階に進むことを決意する。

修行のために家の裏山まで出てきた。 ” 練 ” が周囲にどんな影  
響を与えるかわからないためだ。

「えー、体中の細胞からかき集めたオーラを ” 溜めて ” ” 増幅させて  
” ” 放出する? 」

H×H原作における念の修行パートは印象的でよく覚えている。  
それでも、一言一句間違えずに覚えているかと言われればNOだし、  
今後もどんどん忘れていくだろう。今のうちに思い出せるだけの  
内容を書き留めておきたい、というか念に限らず書き留めておくべき  
ことは多い。参考になる作品の内容、何より 『ブレイブウィッチーズ  
』 原作の流れもある。

とはいえ、

「もう、家出ちゃったしなあ。 家帰ってからかね」

やりたいと思ったことが思った瞬間にできるわけでもなく、素直に  
あきらめて今やるべきことを見据える。

「スウー、ハアーアアア、……………」

深呼吸をして頭と体を落ち着ける。 次いで全身に意識を集中し

て魔力をかき集めるイメージ。最後に、

「ヌンツ！」

魔力に集中しすぎて気の抜けた掛け声になったがとにかく魔力を  
噴出！

「これは…、失敗じゃな? 」

イメージしていたような魔力の噴出はなく、ひよろひよろと気がぬ  
ける様な噴出があるだけだった。

「んー、かき集めた魔力も増幅も放出もどれも足りてなかったって  
感じ? 」

何となく自分にまだ余力があったような、そんな感じがした。正直、焦っていたような自覚はある。一刻も早く身に着きたいという焦りが。欲ともいう。

「ふーっ、焦るな焦るな。まだまだ時間はあるし、始めたばかりだ仕方ない」

そう言い聞かせて、再び練をする。これを何度も繰り返している  
と、

「ハアーツ！、ハアーツ！」（っ、疲れたツ！、汗が噴き出て止まらない！）

考えてみれば当たり前である。魔力を出し切った、ようは”練”の先、”堅”の修行を開始した時のゴンと同じ状態なのだ。原作で”練”の修行をしていた時、ゴンやキルアが平然とした様子を見せていたのに対し、ズシが息を切らしていた覚えがある。ひかりちゃんボディーの純粋な魔力の絶対量の少なさから”練”モドキですら大きな負担となるのだ。

（これは、まずい）

（6歳児の幼女ボディーにこれは悪影響を及ぼしそうだ…。最悪栄養失調なんかになられても困る）

（練の修行は纏以上に時間をかけるしかない。焦ると文字通り身を滅ぼすことになりそうだ）

しかし、今まで纏に充てていた時間のうち、ほとんどを練に充てるつもりでいたため、空いた時間ができてしまった。

（練の一日の修行回数を決めて余力を作ったうえで、別の修行に時間を充てるしかないかね）

練の修行に注力してしまうと、魔力を使い果たし何もできない状態のまま長い時間を送ることになり、無駄ができてしまうと判断し、時間と魔力の配分を考える。

（練で大量に魔力を消費する以上、使う魔力の少ない修行…。あ  
るじゃん、オーラを一切消費しない念）

（”絶”覚えるべ）



そうと決めた日の翌日からは、午前は家で絶を、午後は裏山で練の修行をし、家に帰ってまた絶。それ以外の時間は纏を維持し続ける生活を始めた。なお、その弊害として俺が家にいるはずの時間なのに親が俺を、異様に見つけにくいという問題が発生した。修行に集中しすぎて呼びかける声が聞こえなくなっていることと、”絶”の影響で気配が薄くなっていることの相乗効果で、少し視界に入る程度では気づけないのだという。

しかし、周囲の家族への影響に対して、修行のほうは苦戦していた。

（”絶” ムツツツズツツツ！）

魔力を漏らさないという工程とにかく苦戦していた。全身の精孔を閉じる感覚でやっているが全身をくまなく閉じるイメージがうまくいかず、必ずどこかから漏れ出し、そこをふさげば別の場所から漏れるを繰り返していた。

（”絶”の応用…というか小技はできているのに…。いや、言い換えればがつつり集中してようやくその程度ってことなんだが）

その小技というのは”絶”をしたうえでケガや疲労したところのみ精孔を開くことで、疑似的な”凝”や”硬”をするというもので、意図的に体の一部の回復能力をピンポイントで強化するというものである。これにより、疲労を無視した長距離行軍で遠くまで修行をしに行くことができるようになった。虫刺されにも効果があった。蚊帳つて頼りない。

（でも結局”絶”はできてないわけ…。ひよつとするとこれ”練”のほうが形になるの早いかもしれん）

苦戦続きの”絶”に対し、”練”の成果は日に日に増しているように思えた。

（すっごくいいしょっぱい感じではあるが”練”っぽいものはできるようになってる…。ま、原作主人公に比べると時間かかっているもんな！これでできてくれないと心が折れかねん）

この時点で、ひかりちゃんボディに憑依しておよそ5か月が経過し

ている。そのうち、3か月近くを”練”と”纏”に費やしていた。原作主人公たちが念に目覚めると同時に纏を覚え、練に半日ということを考えて、比較するのもおこがましくなる。

ズシに親近感を覚えたが、あいつも”練”は何週間かで出来たことを考えると、それも霧散した。あいつも10万人に一人の才能とかいわれてたつけ…、主人公組の1000万に一人の才能とか、能力ありきとはいえ2週間で基礎を教えたとかに比べればイマイチ印象薄いけど。

(そういえば五か月たってんだよな)

年明けが近くなり、空気はもうだいぶ冷たくなってきた。同時に、思い出そうとして思い出せないことも増えた。家じゅうからかき集めた紙に書き込めるところは片っ端から書き込み、見つからないよう缶に入れて隠したりもした。今でも紙があれば何でもいいから書き込むことを意識している。

また、最近気になることがある。今6歳のひかりちゃんのかみ孝美は学校に通っている。そして、孝美は今5年生で、来年6年生になるらしい。

つまり…

(この年で、ピッカピッカのツ、イツチ年生ッ！ をすることになるとは…。いや、6歳ですけどね?)

そう学校に通うことになるのだ。今までのように日がな一日魔力で遊び倒す毎日を送れなくなるのだ。

(今、6歳で、原作開始時点で14歳…、つまり後8年。毎日暇な時間は修行に費やしてればそれなりには時間を確保できる。言い換えれば学校生活でできる修行と、学校が始まるまでにある程度目途をつけておきたい修行について考えるべきか)

この時代の学校がはたしてどういうカリキュラムで運営されているのかは知らないが、まあ、午後3から4時、移動含めれば、8〜9時間もの時間をとられることになる。それだけの時間ロスを考えれば、少しでも補填したいというもの。

(おおまかに分ければ、移動時間と座学に分けられるのかな。移

動しながらできる修行と座っている間にやる修行… いや、移動しながらだからこそできる修行もあるのではないか？)

移動、体を動かす。 原作にも体を動かしながらやる修行はあった。

### （”流”）

体にまとったオーラを攻撃や防御といった動作に合わせて適量配分しなおし、強化するというもの。 H×H原作では手や足にのみならず全身にオーラを分配しては、また別のところに割り振る、といった修行をしていた。 より詳しく言えば組手などもやっていたしそっちのほうがメインで効果も大きそうなのだが、さすがにどうにもならない。

（本来なら基礎を終えた後の応用だが、ぶっちゃけ戦闘に直接影響する技術ってだけで基礎を修めてないという意味がないってわけでもないしな）

”念”のうちで応用に分類される”凝””硬””流””陰””円””周””堅”は基礎4つ以上に直接戦闘中に求められる技術だから応用にされてるんじゃないかなって考えている。 基礎の発展が多いが、”流”はすでに覚えた”纏”と”練”そしてまだ修行を始めていない”凝”の応用である。

（学校が始まるまでの修行は”凝”で決定かな。 正直すでに似たようなことはやってるし、絶の小技よりも難易度低そう。 ”凝”してるそこ以外から漏れちゃいけないってわけじゃないし）

（学校までの移動は多分歩きだろうし、そうなると足と手の動きに合わせてオーラを流動させればいいか。 慣れないうちは時間かかりそうだし、学校始まる前から修行場への移動に使ってなれておくかな）

原作修行編でも最初のうちはスローモーションか何かみたいな動きでオーラを動かしながら組手していた。 そのことを考えると学校が始まるまでに歩く足に合わせて動かせるぐらいの速さで動けるようになっておきたい。 じゃなきゃ遅刻する。

（移動はこれでいいとして、座学はどうしようか。 魔力を放出

する”練”は相変わらず無理だろうなー というか”練”修行する時間ほとんどないな。 帰り道：姉と一緒に帰らせられるだろうし無理か 隙を見つけてやるしかないな、毎日途切れさせずにできるかな…、つと)

(閑話休題、閑話休題。 周りに気づかせずにできる修行かー、あ?)

瞬間、重大なことに気づいた。

(耳と尻尾だしっぱで授業受けるのは無理くね???)  
念の修行、第二の関門である。

おまけ — そんなに修行にのめりこめるもの?—

正直、幾ら生死がかかっているとはいっても、あまりに先のこと過ぎて最初のうちはいまいち修行にも気が入らなかった。

が、

(クツツツツツソ暇!)

そう、暇だったのだ。 山の中にある一般家屋、1930年昭和真つただ中において碌な娯楽などなく、数少ない娯楽も、姉妹である以上女の子趣味のモノばかり手につかない。

結果、

「ハアアアアア、フンヌア!」

暇つぶしを兼ねた修行で時間をつぶしている。 そういう側面もあった。

修行編 その2 く自分でもなんでできたのかわからない思い込みってあるよねく

年明けまして正月。

佐世保ってやっぱ雪降らないんだなー、などと考えつつ、現代よりも質素ながらも、食品添加物も養殖もないオール天然素材という、高級なんだか質素なんだかわからない正月料理を食ってるここ数日。

正月休みで一日中姉がいるせいで修行に支障をきたす日々をすごしていたある日のこと。

(はて、昼食ってからというものの姉の姿をみないな?)

いつもならファンネルかスタンドの如く横や後ろにくっついていた姉の姿がないことに気づいた。

家を回ってみれば母親もいない。

親父は寝ていた、ぐっすりだった。寝正月いいよね、羨ましい。

こっちはクソ寒い中、山向こうまで修行に往復しまくっているのに。

大方、2人は一緒に街にでも出たのだろうと考え、気づいた。

(今なら家で”練” やっても問題ないんじゃない?)

万が一にも練の修行をしているところを見られない、気づかれないうにとわざわざクソ遠い山向こうまで修行しに行っているのだから、父がぐっすりな今、家の裏庭程度に離れば直接見られる事を警戒しなくていい以上、問題ないと考えた。

【修行できないストレス】を溜めこみ、欲求不満でイライラしていた自分は家を出てちよつと行ったところで練の修行をすることに決めた。普段ならもつと深く考えて行動したであろうがストレスで頭がおかしくなっていた。田舎は暇なのだ。

いつもなら”練”の修行場に行く時間をとくに過ぎており、今から行くと向こうでできる時間が限られてしまうというのもあった。

「……、ハアッ！」

練の修行を始めてそこそこたつ。一連の工程にも慣れ、最初のころの絞り出すような気合の声も、今では格好がつくようなものへと変

わった。

吹き出す魔力量も見た目だけは一端といえるようなものになり、さして大きくないまでも充実した、力強いと言え…いえ…、言えなくも、将来性を感じさせる程度には見れるものになった。

とはいえ、”練”をするには未だに溜めが必要で、必要になったらスツと出せるような領域にはまだまだ届かない。G・I編に”練”に時間かけすぎで修行不足、とキルアにバツサリ言われたハゲがいたがあんな感じだ。

最近は何をこなすだけでなく”堅”の修行を意識して、維持することに注力している。

とはいえ、持続時間は30秒に満たず、加えて、暇を見て書き綴った”記憶メモ”によれば戦闘時は平時の6分の1しか”堅”を維持できないとなると実践では5秒となる。ウル○ラマンかどこぞの平和の象徴みたいだな…、なんて思いつつ、目標タイム達成まで残りあと数秒というタイミング。

「ひかり何してんのー？」ポンツ

「ヒョッ!？」

肩に手を置かれたと同時に喉からは鳥をしめたかのような声がした。めたことないけど。

首ねじ切れる勢いで振り返ればそこにはニコニコした姉の顔。

「あつ、つえ…、別に？ボオツとしてただけだよ？」

「えー、うっそだあ！　すごい顔してたし汗で顔ビシヤビシヤだよ？尻尾も耳も出てたし」

ちつ、要らんとこで鋭いなこの姉…　などと心の中で悪態つきつつ全力でごまかしにかかる。(はたから見れば)恥(でもなんでもない)も(ありもしない)体面も捨てて。

「えー、そんなにあせすごいー？　じゃあお風呂入ろっかなー　おねえちゃんも一緒に入ろ？」

「!!　お風呂！　しょうがないからお姉ちゃんが洗ってあげましよう！」

(勝ったツ！第三部完！)



「ああ、いい感じだ。うまいぞおー」

「よかったー!」

限界が来る前に早めに”練”を解く。

(なんも感じてないじゃん!　じ、自分の記憶にワザップされた!)  
練が人に感知されないとはまでは言わずともそこまで違和感を感じないのであれば、纏や絶と同様に家に、いながら修行することができるということになる。

(”記憶メモ”に書いたことになんかないか!?)

はやくメモを確認したいという逸る気持ちを抑えつつ、速攻で食事を終え部屋に飛び込む。　いまいち参考にならない記述を読む飛ばしている、気になる一文を見つけた。

(天空闘技場編　ウイング　セリフ　”キルア君、これから君を殺したいと思います”)

(天空闘技場編　ウイング　セリフ　”それは私に敵意がないからです”)

(あつたなそんなシーン…、ヒソカのほうが印象強くていまいち思いついてなかった)

(この書き込みも、思いつくのを片っ端から書き込んでいた時のだし、すぐに頭から

すっぽ抜けていた…)

まさかの思い込みからくる大失敗に思わずうなだれる。　が、すぐに頭を上げ、気持ちを切り替える。

(しかしこれで…)

(今まで以上に念の訓練に時間がさけるというわけだな!　いや、”流”の練習が減るか?　まあ、目標は春までに、歩くのに合わせて動かせるようにだし、これはまあ、気にしなくてもいいか)

気持ちを新たに考えていたところ、母親に眠るように言う声が聞こ



えたため、慌ててメモを隠す。

眠そうな姉とともに布団を敷き、明かりを消す。

布団に入り、寝たふりをしながら考える。

(そうなるとう修行内容は学校開始後含めて考え直しだな… 先に登下校含めた、学校での内容からか)

(移動に関しては変わらず”流”を使った歩行でいいだろう。座学の時間は、さて…)

(座学が一番時間が取れるといえる。 とすると習得に時間がかかるもの、応用の中でやっておきたいのは)

(”円”ッ！君に決めた！)

まだ手を付けていない応用の中で”周”硬”は訓練にある程度の動きが必要で授業中にやるのは難しい。 残る”凝”隠”円”のうちネウロイ相手の戦争で隠は優先度が低く、最も優先される、かつ訓練に時間がかかるのは円である。

(念の応用の中で一番気になるのは正直”円”なんだよなあ。)

学校始まるまでの間は、今の使える時間が多い間にしかできない修行を優先すると決めているので、円は後回しにする。

(となると、残る修行的にやるべきは”周”と”凝”かな)

ネウロイ戦、それも空戦ウィッチである以上”硬”は使う機会が限られる。使えるんだったら使えそうなウィッチも思い当たるが。

”凝”に関しては難易度がそこまで難しくくないというのがある。日課である”纏”や”練”、”絶”の片手間で充分こなせるのだ。

(メインは周、練が家でできる以上修行の時間は…)

そこまで考えたところで気づく。

「周の修行すんだったら遠くでやんなきゃダメじゃん…」

”周”それは道具に自分のオーラを”纏”わせる技であり、その修行法はスコップにオーラを纏わせたうえでただひたすらにトンネル、大穴を開け続けるものである。

6歳幼女が大穴開ける光景を人に見られるわけにはいかないので

ある。

修行の方針を改め、結局毎日遠出する生活には変わりなく、だれの土地かもわからない山にて、崩れない程度の長さの穴を掘る日々を送る。最初の一月で良さげな斜面は掘りつくしてしまった。加えて、固い地層を掘れていない。

「やっぱ、垂直掘りするしかないのかねえ…」

山の側面を掘るのと違い、垂直掘りには問題点がある。

垂直掘りの問題点は”崩れて生き埋めにならない対策”そして”穴の下から上へ戻る方法”の2つだ。

そのうち、前者は穴の直径を大きくすることである程度可能だろう。問題は後者である。幼女の身ではハシゴを買うことなんてできるわけがないし、家の倉庫に都合よくあったとしても持つてくるなんてできない。

”念”で何とかするしかないか、さて」

「参考になりそうなのはツエズゲラの垂直飛び」

H×H原作G・I編に登場したツエズゲラは、実力者っぽい感じながら念能力を見せずに消えた人物だ。

そんな彼で印象的なのが、オーラを足に集中させての跳躍であり、自己ベストで16m跳んだとイキっていたところを次の瞬間には主人公組に軽々超えられていった。

「まずは跳躍の練習からしなきゃダメか。うーん、しかしなあ…」  
跳躍するということは着地もあるということである。

「着地って危ないよなあ…」

着地に失敗すれば取り返しをつかないことになる。

「ち、ちよつとずつ高くしていくか…」

忍者の修行を思い出した。

「お父さん聞いた？最近、山向こうの谷中さんちのお山で突然たくさんのお穴が開いていたってお話」

「ああ、電信所でも話のタネだよ。なんのために掘られたのかもわからない大穴が、斜面にも地面にもってはなしだろ？」

「盗掘かもって話でもうすぐ警察も来るって話だし… 嫌ねえ…」

「学校でも、大穴騒ぎが続くようなら休校にするかもって先生たちがねー…」

(やっべツツツ！埋め戻しとくんだったツツツ!!)

顔も知らぬ谷中さんに心の中で謝罪し、”周”の修行を切り上げ、家での修行に時間を回すことを決めた。

一月に満たない時間で”周”の修行を切り上げることとなってしまったが、どうしようもない。谷中さんにはいつかなにかのかたちで謝罪できることを願う。

(…今後の修行どうしよっか)

(今思うと修行計画の練り直し多いな。まあいいや)

(現状基礎四五行のうち”発”以外の修行は順調…完全に軌道に乗ったといってもいい)

(応用のうち、とりあえずの練度が十分なのは”凝”と”流”、十分といっても修行で集中してる時の話で空戦しながらできるかって言われたら、ノー。 ”流”に至っては歩く時の手足に合わせられるよう訓練している最中)

(残る”隠””周””円””堅””硬”のうち、修行が軌道に乗ってるのは”練”の延長上でやってる”堅”のみ)

(軌道に乗る予定なのは”円”のみ)

(のこる) 隠 周 硬 は優先度が低い。対人用の隠はネウロイ相手に効果があるかわからない、どころか隠が有効な念にするかも決めていない)

(”硬”は使いどころが限られすぎ、”周”はここ1か月の谷中さんちの尊い犠牲により、半日掘り続けてもピンシヤンしてるくらいには感覚をつかんだ。やわらかい地層しか掘ってないともいうけど)

(各 念 の修行にかけた時間はH×H原作主人公組よりもずっと多い。 原作組が習得早すぎともいう)

(1000万や10万に一人つてほどじゃないが、ウィッチつてことで下駄はいてる分、常人より習得速度は速いほうだろう)

(基礎は十分)

(そろそろ、一回試しておくべきか…?)

(発を)

”発”

H×H原作における”念”修行、その集大成。

ストパン風に言うなら、固有魔法を自作するに等しいといえる。

しかし、それはあくまでH×Hの世界におけるお話。ここはストパン世界であり、念の修行だって、元は原作における魔力操作訓練ができないかったから代わりに訓練の参考にしようと思っただけだ。

しかし、訓練を続けるうちに、魔力操作の訓練のはずが、”念”の修行そのものをやっているかのような感覚になっていた。

あまりにも修行が思い通りに進んだのだ。これまでの訓練の中で魔力とオーラは性質が似通りすぎていたから。

それでも、これまで十分納得することはできた。他の作品にみるような異能の力でも似たようなことはできそうだったから。それなら魔力でできたっておかしくない。

”纏”は力を体に”纏”うだけ。  
”練”は力を”練”つて体外に吐き出すだけ。  
”絶”は力を体外に出さないよう”絶”つだけ。  
”凝”は力を”凝”らすだけ。  
”周”は物を力で”周”く覆うだけ。  
”堅”は体自体を”堅”くするだけ。  
”円”は力を”円”状に広げるだけ。  
”硬”は力で体を”硬”くするだけ。  
”隠”は力を”隠”すだけ。  
”流”は力を”流”れるように扱うだけ。

どれも、気や魔力、チャクラや霊力といった他作品の異能力でも応用が利く、再現ができる、同じ事ができる。

しかし”発”だけは違う。

これは”念”のみの技法、技、特色、特徴。他の力で同じことはできない。

あくまで”俺”が使っているのは”魔力”であり、”オーラ”ではない。そのはずである。

もし、できてしまったのなら、”発”ができてしまったのなら、それは、”魔力”がオーラと同一のものであるということの証左に他ならない。

それは、念の特徴がそのまま適応されるということ。

老化の遅延、固有魔法を自作できてしまうということ、なにより、

”念”の使用に年齢制限はないのだ。

（”発”が使えるのかどうか… わたし、気になります！）

ひかりちゃん（の中の人）

そこまで（深刻には）考えてないんだけど。

学校入学／修行編 その3 〔原作始まるまでは全編修行編なのでは？ボブは訝しんだ〕

4月、春満開！な季節になってしばらく。

山を下り、しばらく行き、街に出る。 ついに小学生のスタートを迎えた”俺”は毎日そこその距離を、姉と二人で歩いていた。

前に出す手と足に30、後ろの手と足に20の魔力割り振りを意識した”流”をしつつ、姉との絶え間ない会話をしながらと登下校は、なかなかの修行となっていた。 最初のころは、流と会話の両立がえらく難しく、無言になる、足がもつれて転ぶ、歩くのが遅くなるなどの問題が多発し、姉から「もしかして、学校行きたくない？」と心配されたりもした。

「ひかり、友達出来た？」

「ん、んーまあ 休み時間とか、帰る前に会話する子は何人か作っていた」

「つく…、まあお友達出来たのならいいのかな？」

正直、この年頃の女子の会話なんて微塵もわからないので、初日の休み時間、新しい環境に戸惑っている女子たちに片っ端から声をかけ、一か所に固めて自己紹介。印象付けたうえで、放課後に再度集めて全員から名前や家のことを聞く。 誰もかれもが話のタネを持っているわけじゃない以上、だれでも話題の中心になれるのは、家と家族の仕事ぐらいであり、それを強制的に話す場を作ること、また積極的に話を振る、質問をすることで疎外感が生まれにくいように配慮しクラスの女子を一塊とする。

これにより、女子特有の話題についていけずともグループの中に入るようにし、ケンカの抑止、メンタルケアにより、集団の頭としての地位を盤石とする。

(なんで小学校で戦略SLGやってんだらうか)

自分でもよくわかってないが、学校で孤立する状況を避けるべく、自発的にグループを作りにかかったことまではよかった。 いやよく

ないが、そこに大学生のグループ維持のノウハウをつぎ込んだ結果である。

これにより、授業中明らかに授業以外のものに集中してくせに質問には正確に答え、休み時間にはグループの中心で女子たちのとりもちをやっている という教師的に非常に扱いにくい生徒が爆誕した。

(授業中に) 円の修行をしてる”以上、これに慣れるまでの間、はたから見れば不良少女でしかない。下手に親よばれたりして、修行に集中できなくなっても困るし、セーフティーとなる実績が必要なのは確定的に明らか)

小学生として多数とかかわる身となった今、世間体というものは大切なのだ。たとえ小学生であつたとしても。

そして、魔力を授業中に扱っている理由。過去、使い魔の耳と尻尾が出てしまう問題で断念した修行がなぜ行っているのか。一言でいうのならば”発”に手を出したからだつた。

「ひかりちゃんおはよー」

「おはよー」

「おー、みんなおはようー!」

姉と別れ、クラスにはいれば多くの子からは挨拶される。少数の自発的に挨拶できない子にはこっちから挨拶して回る。

もはや日課となった”あいさつ回り”も終え、授業が始まる。

授業開始⇨修行開始なのだが。

(”円”がこれほど難しかったとは…)

”円”は”練”と”纏”の合わせ技であり、普段自分のまわりを数mmから数cmの厚さで覆っているオーラを、自分に必要な範囲まで広げるといふものである。

2m以上1分維持してようやく”円”と認められ、応用の中でもっとも難しいらしい。

事実、原作キルアは使用できず、放出系より強化系のゴンですら、



はつきり”円”と呼称されるものは使用していない。

原作で放出系が”円”をつかったシーンは無いがノブナガで4m、カイトで45m、原作屈指の実力者であろうゼノ・ゾルディックは自称300mで少なくとも半径100mはあるセメタリービルをくまなく探れるようだ。

ぶつちやけ空戦を主体にするウィッチの交戦距離は銃次第で500に届いたりする以上、索敵目的で”円”は使えない。目視のほうが遠くまで見える。海の上の戦艦ですら2〜30kmの視界があるのだから。

(でも、”円”の中のものは舞い落ちる木の葉の数さえ把握できるってかっこよくない?)

とはいえ、かっこよさだけで修行しているわけはなく、実戦でも使いようはあると判断してのことだ。

”円”は全身からオーラを放ち、その中に入ったものを感知する技術であり、それは目では見えない背後や頭上、下方までカバーすることができると。つまり、奇襲を受けたとしても、実際に被弾する前に察知することが可能ということであり、察知してから対処するまでの猶予は円がどれだけ広いかによって変わる。

つまり、実はほかのどの念よりも、空戦で生き残るのに適した技術なのだ。

しかし、

(”練”や”撃”と違って全身から噴き出しはしてもそこまでの密度じゃなくていい…、てのはわかってても、全身からうつつすら広げるって感覚がわかんねえ…)

ただ全力で噴き出すのに比べると、出力を限りなく弱に調整しながら、さらに全身から広範囲へと意識して広げるとするのは難しいのだ。

(長い目で見るしかないか…、あと数年でどれだけ広げられるかな)

学校が終わり家へと戻った。いつもどおりならば、夕飯ができる

まであと二時間ほどだ。

（今日も”発”の修行、始めますか）

そう、できてしまったのである。

これにより、”オーラ”と”魔力”が同一のモノであることがはっきりとしてしまい、多くの問題が発生する。これからの立ち回りはかなり慎重なものが求められるだろう。”念”の詳細が知られればウィッチの戦力的価値を考えれば、下手をしなくても国単位で追われる案件だ。そうなれば戦場には出られなくなる。それは原作に關与できなくなり、助けられた人を助けられず、失ってしまうかもしれない。

（それでも、戦場で”念能力”を使わないという選択肢はない。

自分自身が生き残れるかもわからないというのもあるが、それ以上にはたして”俺”自身にこの戦争を戦い抜けるだけの力があるかどうか自信がない）

（だから、出し惜しみはしない。使えるもの全部使って周りの人間救えるだけ救って、生き残ってやるんだ！）

”発”を初めてやった時、分かったことは”魔力とオーラは同一の存在”であるということにつきる。

しかし、それは多くの場面で影響する。特に重要なのは”H×Hの世界の住人はオーラを操作するのに使い魔を必要としない”という点。つまり、

（魔力を使うのに使い魔は必要ないはず、なのになんで最初使い魔の耳を出さないと魔力を感じられなかったのかといえ、”使い魔は精孔を開くのに必要な力”だからだ！）

ウィッチが使い魔を出していない状態は、一般の人間と何ら変わらないといえる。

ウィッチが人とどう違うのか、言ってしまうえば使い魔の有無と魔力の有無である。

（人のまま、使い魔を出さずに魔力を出す方法、人のまま”精孔を開

く”！)

そう思い立ってから魔力を使い魔なしで扱えるようになったのはすぐだった。

とにかく片っ端から思いつくことを試し、最終的に、”練”を行いながら使い魔を引っ込めるといふ何とも荒っぽい技で無理やり精孔を開いたのだ。

魔力を生身で扱い始めたあと、”発”の修行を開始した。その内容の関係から、家での”練”の修行はすべて”発”に置き換えられている。

(台所からパクった湯飲みに葉をのせて、”練”！)

”発”修行は言葉の通りで、グラス(昭和の一般家庭にはない)に水を表面張力で盛り上がって見えるくらいに入れ、葉っぱを浮かせる。それを触らない程度に手で挟んだうえで”練”をするというものだ。

正直、”練”の修行以外の何物でもないのだが、”発”で自身の固有の念能力を作るまではこれが”発”の修行とされている以上他にできることはない。

(∴始めたばかりの時に比べて、増えたな、”溢れる水”)

”念”には個人の適性が、タイプが存在し、6つに大別される。

物事の働きや性質を”強化”することに向いた”強化系”

オーラを別の物質や性質へと”変化”させるのが”変化系”

シンプルにオーラを”放出”するのが得意なのが”放出系”

オーラを介してナニかを”操作”するのが得意なのが”操作系”

オーラを”具現化”してモノを作るのが”具現化系”

そして、

どれにも当てはまるしどれにも当てはまらない”特質”をもつ系統が”特質系”

以上6つであり、自分の資質を見分ける方法が今やっている”発”

の修行である

”水見式”

なのだ。

系統ごとに水見式では違った”現象”がおこり、”水の量が増減する”のは”強化系”の証である。

(そういえば、性格分析的に”強化系”は”単純一途”だっけ。∴、そうかなあ…?)

自分の性格なんてものは自分が一番わからないものだが、お前は”単純一途”だといわれて納得できるかといわれても納得できるものでもない。

(∴、考えても仕方ないか、別のこと考えよ…)

(念能力、どうするかなあ…)

”自分だけの念”は念能力の集大成であり、”奥義””必殺技”といえるもので、”発”が基本四五行に含まれることもあり、これを習得してようやく一人前といったところであろう。

(必要な力は”原作キャラを死なせない力”! 原作をたどった場合に生き残れる力!)

(ひかりちゃんとの戦いをなぞったときに命の危機は多い、特に最終決戦)

(生き残れる力といっても一体、二体に有効じゃダメなわけで、汎用性が必要)

”念能力”はいくつも無制限に作れるわけではなく、作れる量には制限があり、容量メモリと呼ばれる。能力が強力であればあるほど容量の消費は多くなり、また、無駄な能力を作っても容量の無駄遣いとなり、強力な能力を作れなくなる。

実戦で使えるだけの性能を維持しつつ、容量に収まるように作るには、多くても2つか3つであり、応用の利く能力一つに絞る者もいる。中にはちよつとした小技を使うことで、5つもの能力を使うものもあるが、”念能力”の修行は、一つ能力を作るだけでも多くの時間がかかるため、いくつも能力を作ればそれを使いこなす手間がさらにかかるといえる。現実的とは言えないだろう。

(空戦で生き残れる力かあ…、難しいな)

空中戦はウィッチも戦闘機もほとんど変わらないものと考えた場合、交戦距離は500mを想定される。ウィッチが人型大であることから近接しての戦闘をするものはいるが、生き残ることを志向するなら、近づくのは避けたほうがいいだろう。

(かといって、距離をとった戦闘をするとなれば”念”を使って直接攻撃するのはほとんど無理筋…、原作にもそこまでの射程を持った能力は少ない。龍星群くらいだろうか、あそこまでの威力なら十分に立つだろうが、あれは間違いなく長年の研鑽によるもの…、やっぱり直接攻撃系は切り捨てるしかないだろうな)

(空戦で使える力なんて飛んだことも無いのに判るわけ無いじゃん…)

考えても答えが出せるはずも無く、これからの課題とする以上のことは出来なかった。

小学校編　　く正直書いてて詰まんないから年単位で  
時間跳ばすく

夏休みツ！　それは学生の心のオアシスであると同時に、暇を持て  
余し、怠惰をむさぼる日々の始まりを意味するツ！

「俺　からすると半年前の生活に戻ったに過ぎないんだよなあ  
…」

正確には少し違う。なぜなら、

「ひかりいく、どこにいるの〜？」

学校がないのは姉・孝美も同じなので、すべての時間を一人での修  
行に費やせたあの頃とは違う。

「ひかりい…」

夏休みが始まってしばらくたった頃、気づいたことがある。

「うう…」

家と学校での、姉の様子がまるで違うのだ。いや、正確には家での  
様子がこれまでと違った。

今まで、家にいた時の姉は、アニメ本編やいくつかの漫画を読んだ  
時の印象から大きく外れてはいない、こんな感じなのかな？程度のも  
の。

学校での大勢から挨拶されている時の姿は、海軍中尉として慕われ  
る未来を感じさせるものであったし、家にいる時も、妹に構いたがり  
のお姉ちゃんといった感じで、常識の範疇だった。

それが、夏休みに入ってから暫くすると、こんな有様になっている。

「…、ねえおかあさん？　おねえちゃんあんなかんじだったっけ？」

「あー、あれねえ。　ほら、ひかり、夏休みはいる前は孝美と一緒に  
いること多かったでしょ？登下校もいっしょだったし、帰ってから  
も、お風呂やお布団、一緒に入ってたじゃない」

「なのに、夏休み入ったらお友達と遊びに行くって言って、いつも出掛けちゃうじゃない？だから家で一人になっちゃって…」

「あ、うん。えーと、つまり寂しい？」

「そういうこと」

「そういうことらしい。」

「ここでいう、」友達と遊びに行く」というのは、修行に行くことを悟られないための隠語のようなもので、実際に遊びに行くときもあるが、殆ど方便だ。

「あー、おねえちゃんは友達と遊びに行ったりとかは・・・」

「たまに行くことはあるのよ？ でも、ひかりほどじゃないし…、」

それに、孝美はひかりにかまってもらいたい、っていうのもあるからねえ」

（かまってもらいたいって言っちゃったよ）

正直、時間があれば出来るだけ修行に費やしたいのだが、これ以上放置するのは気の毒な気もする。

「今日もお友達と遊ぶの？」

「うーん、今日はおねえちゃんと一緒にいようかな」

「そうしてくれる？」

お母さんのにも見るに堪えない状態だったのか、念押しされるように言われてしまった。

「お、おねえちゃん、なにかあったー？」

「！ ひかり！ そうね、今日は時間あるの？なら、一緒にお出かけしましょうか！ 一緒に簡単なお弁当つくりますよ？」（早口）

（さては遊びに行ってたのが羨ましかったな？）

「おねえちゃんとおでかけ？行くー！」

姉を振り切って修行するよりも、適度にかまった方が結果的に修行できる時間は多い。そう思うことにした。

当初は、そんな穏やかな日々が続くと思っていたころ、そんな予想はあつさりと覆された。

ザーツ《…先日の舞鶴襲撃を端を発する大陸への出兵…》  
ザツ《…扶桑陸海軍は最新の装備を纏った最精鋭ウィツチ部隊を…》

ザザーツ《…舞鶴に集結した連合艦隊はこれより浦塩へ向け…》

「戦争…、またネウロイだなんて…」

「まさか欧州ではなく、扶桑海の間こう側にとはな」

「…舞鶴まで来たんだろ？ なら佐世保にだってさあ」

「だから、軍は大陸まで行って制圧しようってんだろ？大丈夫さ…」

「…やっぱり、町は戦争の話ばかりだね」

「し、仕方ないよ。佐世保にいた艦隊も出撃しちゃったんだし」

「佐世保は大丈夫なのかな…」

この体になって約一年。

舞鶴にネウロイが襲撃してきたことにより、後の歴史において”扶桑海事変”と呼称される戦いがはじまった。

町は戦争の話題でいっぱいだった。

(クラスの皆も、思っていたよりも戦争を感じ取ってるんだ)

遊ぶ約束をしていた子達と町まで出てみれば、あたりにいる大人達は数人で固まって口々に出兵について語っていた。

(“扶桑海事変” といえは、後のエースが山ほど出てきた戦い…なるべく意識しておきたいな)

不安をこぼす同級生たちを横目にそんなことを考えていた。

「ねえ、ひかりちゃんはどう思うっ？」

「…ええ？何？どう思うって？」

「…ここは大丈夫だと思う？」

そんなことを考えていたら、話を振られてしまった。下手に原作知識から語ってしまわないように気を付けしつつ、それらしいことを言っておく。

「まあ、大陸から来てるんだし、軍が大陸にいるうちは大丈夫じゃない？ある日突然くって事は無いと思う」



「そうなのかな?」「でもそうじゃない?」「ひかりちゃんがそう言うなら:」「でも怖いね」「うん」

思っていた以上に、自分の発言力が強そうなことに戦きつつ、言葉を続ける。

「ウィッチがネウロイを倒してるって、ラジオが言ってるし、ウィッチが大陸で戦ってくれてるうちは、大丈夫だよ」

「そっかー」「なら大丈夫なのかな」「ウィッチってなあに?」「わからない」

友人達も落ち着いたようで、過剰におびえるような子はいなくなっていた。

「大陸のことはどうにも出来ないんだからさ、ほら、せっかく町に出たんだもの、学校や家では出来ないようなことしなきゃ!」

子供達を率いて歩き出す。

七月はもう終わろうとしており、陽射しがまだまだ夏が終わらないことを感じさせた。

”扶桑海事変”のニュースは1937年中、常に報じられ続け、1938年になっても続いた。

初戦のころのような華々しい戦果は聞こえなくなり、現地軍の奮戦を訴えるものや、見るからに新兵といった様子の”ウィッチ”達が家族に別れを告げ、出撃していく:、といった直接戦況には言及しないものばかりとなった。

一般人に知られるにはまずい戦況、といったところなのだろう。それにしてもごまかし方がお粗末と思うが、虚飾で覆いつくした結果、取り返しのつかないことになっても困る、という苦悩が見え隠れするようである。

このことは両親にとって意外なところから我が家にも飛び火した。姉が航空学校への進学、ひいては”ウィッチ”として軍人になると言い出したのだ。

姉なりに、町や学校での様子に思うところがあつたのだろう。ま

して、責任感があり、ウィッチとしての素養があるともなればなおさらだ。

このことに、父は猛烈に反対し、ひどく声を荒げて叱った。

が、これに姉より早く反発したのが母で、曰く、「よそ様の家の娘が命かけてるのに、うちの子だけダメとは言わせない(意識)」だそうので、娘がやりたいといった以上は送り出す姿勢らしい。

これに対し父は、「娘が死んでもいいっていうのか! (要約)」と反論。どちらも譲らない姿勢に、主役であるはずの姉が蚊帳の外に置かれるといった事態に。

そんなバチバチに火花散らした空間にいるのはごめんなので、父母に挟まれ、発言も許されなまま身動きが取れなくなっている姉に、胸の中で手を合わせ、”絶”で逃げる。

結局論争は、その場では決着がつかず、母による父に対する”弁当攻勢”により気力の衰えた父を姉が説き伏せる形で決着した。これが自分の時に起こらなくてよかったと思う。姉という前例がいるなら口説くのも難しくないだろう。

姉は航空学校においてすでに頭角を現しているらしく、休日で家に戻ってきた姉に対し、「自分からはいいづらいものね?」と母は笑顔で詰め寄った。

苦笑いを返す姉の顔は、たった数か月しか経っていないはずなのにどこか、憂いを感じさせるものだった。

「…、ね、お姉ちゃん」

「ん?、なあに? ひかり」

「何かあった? なんていうか、心ここにあらずっていうか」

「…そんなことないわ。気のせいよ、きつと」

こつちと目を合わせず、つぶやくように言うその姿からは”自分でもそうだと思いきみたい”そんな印象を受けた。

7月になって大陸の戦況はついに大きく動いた。”陸軍大反攻”の威勢のいい言葉がラジオから聞こえたと思ったら、一週間もた

たないうちに潰走の知らせへと変わり、ついに民間人を含む大陸からの全面撤退が報じられた。

混乱は本土にも広がり、ネウロイの侵攻だけでなく、避難民の処置をどうするのかという声も聞こえるようになった。

政府では混乱をとどめるには力不足だった。収まる兆しが見えたのは、陸海軍が合同での作戦決行を告げた、8月末。

この戦いに軍は、余力をすべて吐き出しきる勢いで臨んだらしく、未だ航空学校一年生に過ぎない姉すらも沿岸防衛の一翼として駆り出されたらしい。

今思えば、あの時すでに姉は実戦に駆り出されることを知っていたのだろう。出撃に対する不安からあのようなどこか儂い雰囲気を漂わせていたのだろう。

(とはいえ、いまの”俺”にできることはない。それに、舞鶴沖での戦いは海上でウィッチ隊によって決着つけていたはずだしな) 今、我が家の姉を除く3人は居間に集まり、ラジオの前に座っていた。

この時代、民間に一番早く情報が入ってくるのはラジオであり、この戦いの結末、あわよくば姉の無事を知りたいと集まっていた。

母はひたすらに手を合わせて拝み続け、父は目を閉じ、ただ待つのみといった姿勢だが、こっちはこっちで仕事の行き帰りに神社に寄っていたらしい。

ザーツ、ザザツ《臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げます。》

ザツ《8月31日20時発表。帝国陸海軍は扶桑海舞鶴沖における怪異との大規模な戦闘を終了せり。》

ザツ、ザツ《この戦闘により、扶桑海より侵攻していた敵超巨大怪異を撃滅。》

ザーツ《大本営陸海軍部で”扶桑の安全は保たれた”との発表がありました。》

《臨時ニュースをお送りしました。》

「かつ、勝ったっていつてたよな？」

「言ってた言ってた。」

「た、孝美は？孝美のことはなんて？」

「冷静に考えてラジオで一兵士のことは報じたくない？」

微妙に冷静さを失っている両親をあしらい、部屋に戻ることを告げる。

（扶桑海事変はこれで終わり。ここからブレイブウィッチーズ本編開始まではあと6年…、焦りたくはない、が、”俺”に1000万人に一人の才能なんてものがない以上、一年で中堅ハンター並みになるなんて真似はできない）

（H×H主人公たちは常人が数週間、数か月かける内容を数日で修めたというが、）

（”俺”は常人よりはマシだがそこまでの才能はない。マシというのだってウィッチ故にスタートダッシュが早かったに過ぎない。精孔を開く手間がなかっただけだ）

（”俺”に残されたものは”時間”だけ！およそ8年を修行に費やすことができる点、のこり6年、ここ2年で培ってきた成果は時間相応だったといえるだろう）

（幼さゆえに基礎と応用を同時に修めるだなんて非効率的な真似をせざるを得なかったが、それでも原作同時期の”ひかり”よりは断然強い！）

（肉体的な意味では既に大人以上、あと足りないものがあるとするなら、それは空戦で生き残る技術）

（それだけは、念の修行ではほとんど補えないものであり、将来の航空学校での2年で十分なものが身につくかはわからない）

（だから、念能力という裏技は”ここ”でつかう。空戦の中で、これがあれば生き残れるという”必殺技”！”固有魔法”！）

おおまかなイメージは固まりつつある。楽しんでズルして強くなれる、そんな力。

（航空学校の教官は引退か、上りを迎えた実力者たち、他にも、行事

や授業で現役が来ることだってあるだろう。必ず、その実力を見る機会はある)

(小学校の間は基礎と応用、特に”発”の”系統別修行法”に力を入れよう。”固有魔法を作る”その日のために)

佐世保海軍航空予備兵学校／修行編 その4  
念って想像力豊かじゃないと大成できないんじゃないかと思ってる

(修行計画の組み直しも久しぶりだなあ)

自分一人が眠る部屋となつて久しい姉妹部屋で、布団の上で胡坐をかきながら考える。

元々、姉が航空学校へ行った頃から大体そんなものだったが、休日には必ず帰ってきていた。

しかし、これからは年単位で帰つてこない。というのも、今は1939年の年末。

姉・孝美は欧州派遣に志願し、今は船上の人だ。年越しは船の上で迎えることになるだろう。

欧州派遣にあたつてもまた、家族会議が開かれたが相変わらず姉の決意は固く、扶桑海事変で自分に自信がついたのか、父のことを正面から見据え、徹底抗戦の構えだった。

「欧州への派遣部隊、もう扶桑に帰つてこられないかもしれないってことは…」

「もちろん、わかつてて志願しました」

「そう、か」

「人を守る、大切なお仕事だ。ひかりもなんか言つてやりなさい」

「んー、人を守る前に自分を守れないようじゃ、結局助けた人も死なせちゃうだろうから…、まあ強くなるしかないんじゃない？」

「子供のころから嫌に受け答えがはつきりしてるとは思っていたけど、すごいこと言うわね…」

「そ、そうね、正直妹からすごい含蓄あること聞いちゃった気分で、もやもやするのだけど、強くならなくちゃいけないのは改めて分

かったわ」

マジのガチで命のやり取りをする欧州戦線に行く以上、油断は禁物ということで、なんかそれっぽいことを適当な漫画か何かのセリフをミックスして言ってみたがいまいちだったか。

「わかった…、お前がウィッチになるのを止められなかった時点で俺ももう腹をくくった…つもりだ。今更もうグダグダとは言わんさ…」

「父さん…、ありがとうございます」

と、こんなやり取りがあり、姉は無事に欧州へ向けて旅立った。

(姉…、孝美は孝美で頑張っているだろうし、こっちも頑張らないとな)

姉と呼ぶのが気恥ずかしくなってきた。そんなお年頃。

気持ちを引き締めなおし、今日の昼にやった修行を思い出す。

(”系統別修行”、”強化系レベル1・石割”)

”系統別修行”

念に存在する6つのタイプ、系統。それぞれに適した、それぞれを鍛えるための系統事、専用の修行。

”石割”はそのうちの一つ”強化系”を鍛える修行。手に持った石を”周”と”纏”で強化し、他の石を割る、言ってしまうとそれだけである。

しかし、難易度は高く、石の交換は禁止、一日に1000個割つてようやく合格である。

参考に”1000万人に一人の才能”を持つ原作主人公組で初日は150〜200個くらいだった。

ついでに100個割れるようになるまでに普通は何週間もかかる

らしい。

(じゆう、よんーじゆう、っつ、あつ)

結局、記録は14で終了。合格までは程遠い。

加えて、この修行の難しいところは

(次にやるのは明後日か…)

そう、同じ修行を連続でやってはいけないことになっているのだ。さらに、“系統別修行”は一日に一回しかしてはならず、残りは基礎修行に費やす。

念の系統は自分の適性のものしか使えないわけではなく、自分に適性のない系統の能力を作ることまでできる。

しかし、“六性図”的に見て、自分の適性から遠い系統であるほどに、その性能は劣化していき、容量<sup>メモリ</sup>もまた、無駄に消費されていく。つまり、100%極められるのは自分の適性系統だけなのだ

よって念の修行は自身の系統を一番に、加えてその両隣の系統を鍛える。

“俺”の適性は“強化系”であるため“六性図”上の両隣は“放出系”と“変化系”である。

(明日は変化系、明後日はまた強化系その次は放出、でループだ 合格にどんだけかかるやら…)

得意な系統の修行ゆえに、もっと多くの石が割れると思っていたが、14はさすがにショックだった。

変化系と放出系のレベル1の修行はそれぞれ、“オーラを操作して0〜9の数字を1分以内に作る”と“指先から放ったオーラの粒を1分維持した後、放ち離れた的にぶつける”というもの。

どちらも、最低合格ラインがこれ、というだけで“変化系”のほうは最終目標5秒以内、放出系の方なら、主人公のゴンなら2、3日オーラの粒を浮かべていられるらしい。



(うーん、相変わらず才能の差ってやつを見せつけられてる気分) しいていうなら、魔力の形状を変えるほうが得意なので、変化系よりの強化系といったところなのだろうか。 とはいえ、”しいていうなら”レベルの話であってどちらもしよっぱい成果しか出せないまま続いている。

ところで、この”系統別修行”、レベル1と書いたが当然それ以上もある。クリアしたら次へ行くわけだが、問題がある。

原作に描写されている”系統別修行”がほとんどないのだ。上記3つ以外に放出系のレベル5しか書かれていないのである。

(つまり、自分でそれらしいものを作り、目標を定めなきや行けないわけであ…) はつきり言って難問である。放出系のレベル1とレベル5の差

を参考にするしかないが、クリアに何か月もかかる内容を段階で刻んで複数考えなくてはならないのだ。

「とりあえず、明確な基準となる修行がある放出系からかね」

「”放出系”の通りオーラを”放出”するのを得意とする系統」

「まず、レベル5を参考に、魔力を放出する圧力でモノを動かす修行。レベル5が難しいのは自分の体重を支えながら、かつ垂直に、十分な圧で噴き出す必要があるからだと思う」

「極限状態でやらされてるようなもの、なので難易度を低くするためにその部分を省き、ものを動かすのに十分な圧力で魔力を噴き出すことを目標とする」

「手近な重量物か、海辺の岩くらいかな」

「これはレベル3、4を兼ねさせるか、重量と移動距離で調整しよう」

「で、レベル2ではこれとレベル1の間を埋める修行にする」

「必要なのは、粒を飛ばすだけじゃなく、押し出すような力。的あて

の部分は変えずに、離れた位置にある目標を魔力の放出で砕く感じにしてみるか。いまいち変わり映えしないラインナップになってしまったな」

お次は変化系

「ビスケがやってたオーラで文字を書く奴は、修行によさげだし、レベル2はこれでいいかな」

「んー、”変化系”の真骨頂はオーラを別の性質をもつものに変えること、電気とか糸とかガムとゴムの合の子とか…」

「そこまで行ったらレベル5の段階だろうなあ。 あー、性質を変化させる前だったらゴンの”チー”はいいな」

(あれ、かなりよくない?、まだろくに修行が進んでいない状態のゴンに出来るシンプル具合)

「うん、レベル3は”刃状に変化させる”でけっちえく!」

が、順調に決まったのはここまでで、変化系のレベル4と5はなんも思いつかなかった。

「うーん…、これ以上考えてもいい案は浮かばないだろうし、後に回すしかないか」

最後は強化系の修行

「レベル1は”周”と”纏”で石を強化していた。同じように”強化系”は”念”を纏わせたもの自体を強化する性質を、そのまま強く、出力を増すことで一系統として成り立たせてる、…そんなイメージがあるな」

「…”石割”の難しい点は、石を割るといふ動作と長時間の”纏”の維持、つまり、強化系に求められるのは、何かをしながら、念で強化するという二つの行為を同時にすること?」

「んー、強化系の能力が必ずしも体を動かしたりしながら使うものではないと思うんだけど…、原作の純粋な強化系がゴンとウボオーギ

ンとパームぐらいしか思い出せなくていまいち説得力が…」

「緋の眼” ってチートモードのクラピカがやってた” 回復する鎖” なんかは攻撃じゃないし…、いやどうだろうか、クラピカの場合戦いながら回復することも考えていただろうし…」

「まあ、どうせ空戦中に使う以上、動きながらできる必要はあるし修行もそれを考慮して考えるべきか」

「動きながら” 強化する”、できる運動なんてせいぜい走るくらいしか…テレフォンパンチの修行したところであ」

「そういえば原作ひかりも走ってたな結構」

「走りながら” 強化する”、となれば足と心肺機能か？」

「うん、いいんじゃないか？ 手っ取り早いし、強化系念能力者のトンデモ戦闘には必要だろう」

「流” の修行や” 流水組手” のことも考えると、かなり多くの魔力で” 強化” しつつ走る必要があるだろう」

「多分” 念” の系統修行はどれも極限状態の中でのオーラ操作が重要なんじゃないだろうか」

「…学生生活との両立、キツキツ…」

強化系のその後も思いつかないまま、眠ってしまった。

時は流れて1942年

すでに、小学校を卒業し、航空学校へと進学した。

「俺” が航空学校へと進学したいと思ってることは、何となく両親ともに気づいてはいたようで、その意思を示した時には” やっぱりか” といった反応だった。

今年で12歳。

佐世保の航空予備学校は民間からのウィッチ志願者を受け入れて

いる場所で、12歳〜約14歳までのおよそ2年の間、教育を行い、6、7年を実践勤務するものとして想定している。

甲種飛行予科練習生と呼ばれ、乙種や丙種が別に存在する。

乙種は扶桑海事変以前には飛行予科練習生と呼ばれていた正規のウィッチのことで、海軍付属小学校で学び、10、11歳のころにはもう飛行訓練を行っており、将来の海軍士官としての教育が行われる。舞鶴に存在し、扶桑海事変において最精鋭部隊として送られた部隊はこの卒業生のみで構成されている。

対して丙種は、遅咲きのウィッチが主であり、予備航空学校に行くには遅いがウィッチとしての素養があると判断されたウィッチに対する教育がなされ、魔法弾やウィッチ用の魔法的処理の行われた物品の製作者になる者も多く正直飛行の2文字がふさわしいのかどうかは疑問である。乙種のウィッチは、精神修養の一環から刀剣や槍、弓といった武術を修めているものが多く、実戦においてもそれを使うものがあるため、丙種の中では彼女らの用いる武具を鍛つ仕事は人気がある。

「ひかりさん、放課後時間あるかしら？」

「まさか、また”扶桑海の閃光”？何回見たと思ってるのさ…」

「何回見たっていいじゃない！何度だって見れるでしょあの空中戦！」

「お、おう 主演陸軍だがね？」

「は？なに、巴御前にケチつけようっての？は??？」

「急にキャラ変えるのやめよう？行くからさ」

放課後の教室、帰りの支度を進めていたところ、クラスメイトの目白さんから声をかけられた。

”扶桑海の閃光”は”扶桑海事変”における”舞鶴沖での戦い”

の再現映画として陸軍主導で撮影されたもの。その裏には減耗したウィッチを民間から補充したいという陸軍の暗い裏事情が見え隠れしてはいるがそれはそれ。純粋な娯楽としても楽しめ、ストライカーを改造した専用の撮影機材まで作って撮られたド迫力の空戦映像は扶桑映画界の金字塔とまで呼ばれる作品となった。

実際、戦闘の再現を主眼に置いた空戦機動は飛行訓練生として驚嘆の一言であり、授業中に真似をしようとしてあわや！というところまで行ったことから学校側から正式に模倣の禁止が言い渡されたくらいだ。

「他には誰が来るの？」

「秋山さんとか菊田さん、ああ、あと、」

「…私も行きます」

「そう、三隅さんもくるって！」

”三隅美也”

久方ぶりに見た新規原作キャラで、おそらくは後に欧州行を賭けて勝負することになるであろう人物。

姉・孝美に憧れているらしく、原作では主席であり、落ちこぼれなひかりに当たりが強かった。が、この世界線では変わらず主席であるが、ひかりの方が空戦は並だが魔力操作で優れることから成績のいいほうに分類されているため、顔を合わすと微妙に目つきがきつくなる程度だ。

「学校終わったら校門集合ね！」

「いいけど終わったらすぐ帰るからね？また感想戦はごめんだよ？」

「私たちは寮住じゃないし、明日は休日だよね？」

「そこまで計算して誘ってんのかよオ！」

「また映画見て帰ってきたの？」

「実際見るたびに気づくところがあるから、嫌とも言いづらくて…」

家に帰るともうとっくに夕飯の時間になっていて、帰るのが遅いと小言を言われながら食事をする。

「今日はもう寝るの？」

「ん、ああ。明日は”友達と遊びに行くから”早く寝ようと思って」  
「孝美も少ないわけではなかったと思うけど、ひかりはほんと多いわねえ…」

お決まりの方便を使いつつ、自室に戻り布団の上で目をつむり、胡坐をかき、集中する。そして、

「そろそろ形になってきたね、”写輪眼”」

開いた眼には”三つ巴”が現れていた。

航空学校に入り、飛行訓練が始まってからしばらくの頃。

”発”の方向性を決めるのは飛行訓練を体感してからと決めていたが、実際にやってみると、

(結局のところスポーツや武術、”念”と同じで積み重ねたものが物を言うということか…)

単独での飛行は許されず、地上ストレスを這うように飛ぶ程度から始めたが、それが高度を上げていくにつれより強くそう思うようになった。

(何もわからない、なにも参考にならない…どこまで捻ればいい?どこまで捻っていい?)

(どのくらいの速度の時にどこまで高度を落としてもリカバリーが利く?)

(わ、わからん…、最低限のことは座学で教わるが、あくまで聞いた知識にすぎん、複座練習脚は零式や紫電とは違いすぎて頼り切るのは難しい 第一自分の動きができない!)

(”発”でどうやってこの問題を解決するにはどんな能力だったらいい?)

(経験を積む?でも、「少しでも失敗したら終わりなのが空戦…二パのような自己回復?即死したらどうする!即死無効するほどの強力な”念”は俺には無理だ!)

(時間がない？時間操作なんてもつと無理だ！ゲームのような経験値増量も無理！)

(経験ある教官からおそわっても、それを全部理解しきることができない！…他人の感覚を言葉から全てくみ取るなんて無茶だ！)

(…言葉じゃなければいい？ 例えばなんだ…、追体験？夢とかで… いや、それは”操作系”の領分だ、”強化系”の俺にはできない！)

(いや、まて…発想は悪くない ”言葉じゃ理解できない”んだ、それを体感できればいい。”他人の感覚を体感する”自分を強化するという形で”)

(なんだ、なにか、思い出せそうだ ”他人の感覚…いや、技を自分のものにする”、そんな力)

(他人の技を、学、習、修、見取、そう！見取るツ 「見稽古」！) ”鑪七実”、”刀語！ 見ただけで相手の技を完全にコピーする力！)

(これだ…、”自分に経験がない”なら”他人の経験を自分のものにすればいい！)

(自分の眼と頭…、洞察力！理解力！動体視力！ 自分自身の強化で賄える)

(多分、自分の念の練度でも十分実現可能…下手な能力よりよっぽど”容量”も食わなそうだ)

(それなら、なにか、追加で能力を持たせてもいいな…、”制約と誓約”で強化してもいい)

”制約と誓約”

”発”の使用に”制約”<sup>ルール</sup>を持たせ、それを遵守すると”誓約(誓う)”する。 そうすることで念の出力を大幅に上げることができる。

指先から念弾を飛ばす能力を強くするのに指を半ばから切り落としたり、特定の相手以外に使用したら死ぬと誓ったり、”制約”<sup>ルール</sup>は様々だが代償が重たいほどに強く強化され、同時に、自身が定めた”

“制約”を破れば能力を喪失することもある。一般的に“制約”は念の発動条件”として設定されることが多い。

(とすれば何が付け足せるかな、”眼”に関係する力になるからな、追加能力や”制約”もそれに関したものにしたいな)

(…眼? あつ、”接触魔眼” あつたなそんなの…)

”接触魔眼”

雁淵ひかりのもつ”固有魔法”。

自分の体に触れた対象の”核”の位置を見抜く、といった力。

姉・孝美のそれは見るだけで捕捉するのに対し、厳しい条件だが、その代わり孝美のものよりも精度がよく、正しい位置を見抜くことができる。

(ある意味あれも”制約と誓約”で縛って強くしてるようなもんだな…、リターンのわりに条件が厳しすぎるような気もするけれど)

(”接触魔眼”は空戦でも役に立つし、最終決戦における超重要なキー、これも強化しておきたい…)

(弱点は射程、条件は接触。なら、”円”で触れることで起動できれば条件は満たせるんじゃないか?)

(…それでもだいたい厳しいか いや、実力のあるウィッチは肉薄するものが少なくない、参考になる動きはあるはず)

現在のひかりの円の半径はおよそ10mにまで達していた。5年近い歳月の鍛錬の結晶である。

達人ともなれば50m、それに近いカイトで45mということを考えればかなりの上達であると同時に伸びしろがあるともいえる。

距離が広くなればなるほど難易度は上がり、昔以上に射程が伸び悩んでいるが根気よく続けている。

(そうなると、”接触魔眼”と”見稽古”で二つになっちゃうのか一つに出来ねえかな)

(あれだ、”見稽古”中に”円”で触れないと発動しないかたちにして”円”自体を強化できねえか?)

(”接触魔眼を使うには円を使う必要がある”、”円の内部に入っ



たものには強制的に接触魔眼を起動して魔力を消費してしまう”

(うん、いけそう いやいける！そう思うことにする！)

(… 触れたものの本質を見抜く魔眼”なんかそんなのあったような?)

”写輪眼?”

”写輪眼”

”NARUTO”というHUNTER×HUNTERの次の年に連載を開始し、先に完結した(強弁)作品に登場した魔眼ともいうべきもの。

優れた動体視力と洞察眼により、相手の忍術、体術を即座に看破、本人の力量次第では己のものにまでしてしまうという能力をもち、他にも複数の能力がある。

(”視線を合わせた相手に幻術…催眠をかける”あたり?それ以上は”万華鏡写輪眼”か)

(”操作系”かあ…、おまけに条件が簡単すぎてそこまで強力な能力にはならなそうだ)

(”容量”に余裕があればいつか試してみればいいか、なら今は)

(”写輪眼”と”見稽古”に集中する!)

物思いにふけるのもやめ、胡坐を解き、電気を消す。

「…せっかく完成させたのだし、そろそろ使ってみないとね」

仕込みはすでに済んだ。映画館は暗かったし、上映中に他人の瞳をのぞき込むような人もいない。

「…明後日が楽しみ」

佐世保海軍航空予備兵学校　く刀語原作で七実様が  
ちやつちやと殺されたのも納得く

「本日より、事前の通達どおり急降下からの切り返しと急上昇を  
やつてもらおう！」

「実戦では高度を問わず必須となる技能だが、あえて一番危険な地  
表スレスレでの訓練を行う」

「目標は地表から30cm以内！その後、バーの下を抜け、障害物とな  
る柱をよけたうえでその先につるされた鐘をはたいてならせ！」

「実戦では足を止めるなどもつてのほか！故に、どれだけスムーズ  
に終わらせられるかでも評価する！」

「ただこなすだけでは合格はくれてやれんということだ。まして、  
何か目に付くような減点があれば校庭10周、終わらせることすらで  
きんような奴は20周だ！」

「まず見本として上級生の深井にやらせる、よくみておけ」

「深井、行きます！」

「誰が旋回を交えてやれと言ったバカタレ！」

「いや、上級生の訓練でやるときの感覚で…」

「教官に口答えしてんじゃねえ！10周走ってこい！」

「貧乏くじだ…」

「何ともついてない先輩だねえ」「私、旋回なんてできないよ」「私  
だってそうだよ」「バーをくぐるところまでは参考になるからそれで  
なんとかするしかないよ」「くっ、簡単に言ってくれちやつてさあ！最  
初にやるの私なんだよ!?!」

「うるせえぞ秋山！まずは貴様からだ！来い！」

「はい…」

「走りたくないってのがひしひしと伝わってくるね」「私たちだって  
人事故じゃないよ」

「？イヤアアアア？バカヤロオ、キシユアゲネエデキリカエセルワ  
ケネエダロ！20シユウハシツテコイ！」

「いったか…」「これみんな走るようになるんじゃない？」「なら早い  
ほうがいいなあ…」

「次！磯野！」

「ハイ！」

今日の前で学友たちが次々と飛び降りては罵声を浴びせられているのは、原作第1話でも描写されていた、下降↓急上昇をいかに減速させずに切り返すかをみる訓練だ。

少し気になるのは、現在1943年になって1月といった状況で、この訓練をやっていることだ。あと1年半で卒業という時期にこの訓練を始めている。

つまり原作ひかりちゃんとはあと半年で卒業という時期にもこの訓練で合格がもらえない状態だったわけで、よく502で生き残れたなといったところだ。

「次、雁淵！」

「、ハイ！」

ゆつくりと前進し、所定の位置につく。

エンジンを吹かして回転数を上げ、急な切り返しに備える。

『ピーー！』

教官のホイッスルに合わせて、ブレーキを解くイメージで勢いよく前進する。

頭を一気に下げ、急降下する姿勢までは”深井先輩”のイメージのまま落ちる。

傾合いを見て機首を上げ、滑り込むようにバーを潜る。ここからが

”魅せ”場。

立ちほだかる障害物に対し、両足の戦闘脚のプロペラ回転方向をそろえ、生まれた反トルクでもって体を独楽のように回転させ、左へと傾き、浮かびあがるような軌道で弧を描きながら回避する。

再び、戦闘脚のプロペラ回転方向を戻し、弧を描く軌道から抜け、遠心力を加えた加速でもって一気に鐘へ向けて猛進する。

《カーアーン…》

「おおー！」「なにいまの!?!」「いまのひかりなの?」「…?なんだろう?見覚えが…?」

「…雁淵合格！先に教室戻っててよし！」

少し離れたところに着地し、教官の指示に手を振ることで応え、ケージへ戦闘脚を戻しに行く。

後半の障害物を避けて突進する技は”捻りこみ”。

零式戦闘機で有名な技だが、これはウィッチ特有の技のほう。

扶桑軍ウィッチの中でも使えるものは限られ、有名な者は”坂本美

緒”西沢義子”北郷章香”江藤敏子”そして”穴拭智子”

そう、これは”扶桑海の閃光”から”写輪眼”で見て”写し”とつた技だ。

学校側で封じられて久しい技だが、学校の人間にもできるものはほとんどいない。

なぜ、それをここでやったのかといえば、後の欧州行への布石としてだ。このまま原作どおりに欧州行の選抜が行われたとして、それがコース上のチェックポイントを通過するものそのままかはわからない。選抜が行われる以前に実力を見せておくことは後々有利に働くことはあっても不利に働くことはないと考えたのだ。

「あ、ひかり居た！」

「皆、もう走り終わったの?」

「何言ってるんの、もう授業から30分は経ってるよ?流石に走り終

わるって」

「え?もう?」

「そ・ん・な・こ・と・よ・り!」

「あの機動は何!?あんなの習ってないよ!」

「そうだよ」ひかりさん「ちよ、なんでさえぎるの」

「あれは”捻りこみ”だよね?」

”巴御前”の」

「やっぱり目白ちゃんにはわかっちゃうか、正解だよあれは”捻りこみ”」

「学校がだめって言った奴じゃん!」「ひかりちゃんはやらかさなかつたのに何でいきなり!」「ちゃんとできた人初めて見た…」

「いやー、まあね?」

ズル以外の何物でもない方法で身に着けた以上、正直後ろめたいのだが、固有魔法は持つてるウィッチのほうが少ないレアな以上、下手に口にするに残りの学校生活をぼっちで過ごすことになりかねない。まして能力が能力だ。

「…雁淵はいるか」

「…く、国崎教官に敬礼!」

「…!」

突然、教室の引き戸をあけて教官が声をかけてきた。

(ひかり、よびだし?) (映画の技を再現するのは禁止って校長が言ってたじゃん!) (ああ、それだわ) (できたって言っても規則は規則なわけで) ヒソヒソ

(やツツツベ、考慮に入れてなかった)

いいこと思いついた!と思ってても、それがどう影響するかまで頭を回すのが苦手だったりする。 ”強化系”の要素がここにも。

「か、雁淵はここに居ます」

「ああ、このまま私と一緒に3階応接室まで来い。校長がお呼びだ」

「こ、校長がですか!」

「そうだ。つべこべ言わず黙ってついてこい」

校長に呼ばれるのは完全に想定外だった。せいぜい生徒指導室で教官に叱られるくらいだと思っていた。

「君が、雁淵ひかり君か」

「あ、ツエ…、はい 雁淵ひかりです…」

「佐世保海軍航空兵学校」校長、北郷章香  
扶桑海事変における英雄 数々の海軍エースの指導教育を行った歴戦のウィッチで現在は引退しているが”軍神”とよばれた迫力は健在のままだ。

部屋には校長と教官のほかにも2人先生がいたが、覚えのない顔だ。

「なぜ呼ばれたかは理解しているか？」

「こ、校則で禁じられている機動を行ったためです」

「間違っではないが、正しくもないな」

(???)

「その顔では理解していない、というのは酷な話か…」

「あれは、”穴吹智子”の動きそのものだな？」

(そ…：…ツツ、そうきたかア…ツツツ)

「無言は凶星ととるぞ？」

「あ、いえ！その、」

「言っておくがごまかしは効かないぞ？この場の先生方もあの映画を見ているし、わたしに至っては実戦で間近に見ている」

即座に悟った。

(ごまかしむりじゃん…)

こちらの反応がないのを見て、校長はさらに畳みかける。

「校則で禁じる前の生徒がやっていたような、見るに堪えん動きとはまるで違う。実践した経験からくる動きだ」

「当然、一生徒ができていい動きじゃない」

「固有魔法」だな？」

(熟練のエース怖…)

「どうなんだ？」

「ハイ…、ソウデス…」

「そうか、やはりな」

(もしや鎌かけられた!?)

「見た相手の動きを模倣するといった能力か？」

「…」

「どうなんだ？」

「セ、セイカクニハチヨットチガイマス…」

「ほう？ではどんなだ」

”ストライクウィッチーズ零”で知る”北郷章香”と違いすぎて思わず委縮してしまいうまく話すことができずにいると、

「落ち着け雁淵、なにも取って食おうってんじゃないんだ」

「そうだとも、ただ、固有魔法を持った生徒というのは珍しい。学校側でできるだけ把握しておきたいというだけさ」

「二度深呼吸をして、一つずつゆっくりと答えていけばいい」

見かねた周囲の教官から声をかけられ、そのアドバイスに従う。

「スゥー、ハアー」

「落ち着いたか？で、固有魔法についてだが」

「…はい、わたしの固有魔法は動体視力と洞察眼の合わさったものです」

「対象を見ることでそのものの動きを理解することができます」

「ただ模倣するだけでなく自分のものにできるといふことか？」

「はい、あの動きはお察しの通り”扶桑海の閃光”の中での動きを見て取ったものです」

「おい、その前のダイクは深井のやつだろ」

「…はい、深井先輩のも写し取りました」

私の言葉を聞いた校長以外の教官たちは顔を突き合わせ、それぞれ



の意見を交わしだした。それを見て校長は、

「それは、どんな動きでも可能なのか？」

「目で見て取れるものなら。固有魔法や、わ、私自身の能力的にできないものはあります」

「例えばなんだ」

「筋肉の必要な動きや、動作自体はできても知識の必要な技能などです」

「ふむ…」

そう言ったつきり校長は顎に手を当て、思案する姿勢のまま固まっています。

代わりに今度は教官たちからの質問攻めの番だった。

「貴様、いつからその能力を発現していた、幼いころからか？」

「い、いいえ、明確に見て盗れるようになったのは最近です」

「今まで、見て真似れるようになったのはなにがあるの？」

「く、空戦機動だけです。他に、見て盗れるような動きに出会う機会もありませんでしたので」

そうしていると、校長が口を開き、

「雁淵といったな、寮住か？」

「いえ、自宅から通っています」

「手配はすべてこつちでしてやる、寮に移れ」

「えっ」

「放課後に時間を作れるようにしろ、教官の持ち回りで課外授業をつけてやろう」

「お前のその力を最大限に活かせる環境をつくってやる。確実に強くなれるからな」

思ってもない申し出だった。

その場では決めようがないと一度は断ったが、戦場で生き残るために少しでも強くなっておけと言われ、自分で家族を説得するように言いくるめられてしまった。

「…と、いうわけで寮に移るようにと言われてしまつて…」

「いいんじゃない?」

「え、軽くない? いいの?」

「だって強くなれるんでしよう? そのほうが生き残れる可能性があるつてんなら行つてきなさい」

父が何か言う前に母によって決定されてしまつたが、父も異存はないようで、腕を組んで頷いていた。

「いつから移るの?」

「すぐにもつて言われてて」

「ならすぐに部屋戻つて用意してきなさいな! 明日学校行つてそのまま入っちゃいなさい」

「ええ…」

すつぱり言い切られてしまい、おとなしく言われたとおり荷造りに行く。

持つていくものをまとめたはいいものの、入れていくのにちょうどいい入れ物を持っていなかったので、親に借りに行く。

「…いいのか? あんなにあつさり送り出してしまつて」

「いいのよ。そのほうがあの子のためになるつていうのはあなたもわかつているでしょう?」

「そういうことじゃなくてだなあ…」

「このほうがあの子は生き残れる。なら、親としてその背中を押してあげなきゃ」

「あの子が生き残つてくれれば、家族としての時間なんてそのあと幾らでも作れるんだから」

「…おかあさん」

聞かせる気はなかっただろう、そんな告白を聞いてしまい、思わず出ていけなくなる。

「なんならこの間に家族を増やしたっていいしね！」

「おかあさん…」

台無しだった。

佐世保海軍予備航空兵学校　　く原作突入前にやるこ  
とがもうほとんどないく

放課後

教師たち持ち回りでの訓練は固有魔法を使った空戦機動のコ  
ピーだけではなく、空戦機動を扱うのに必要な座学や変わったところ  
ではあまり民間に広まっていないような欧州戦域の現状などについ  
ても学ばされ、悪戦苦闘の日々が続いていた。

「うーん、これは…、おい雁淵」

「ハアーツ、ハアーツ、は、はい……。なんででしょうか……」

「もしかしたらと、思ったんだけど」

「はい…」

「剣振ったこと、ない？」

「普通ないです…」

事の発端は「見た相手の動きを模倣するといった能力か？」という  
北郷校長の発言。空戦だけでなく剣術も仕込もうという発想に至っ  
た校長が放課後の指導内容の中に混ぜた。

しかし、

「お前、体力はあるし鍛えてて腕力もそれなりにあるのに何でそん  
なに息切れするんだ？」

「…多分、剣術に使う筋肉や筋が普段の訓練で鍛えられないところ  
が多くて、魔力を使っても長持ちしないんだと思います」

「ああ…、構えは見事なのに長く持つていられないと思ったらそう  
いうことか」

今まで走り込みを中心に兵学校でやるような訓練しかこなしてこ  
なかつた身に、剣術に用いるような筋肉は無く、魔力なしの状態では  
数度振っただけで腕が上がらなくなる。コピーした構えこそ校長の  
物そのものなのだがそれも魔力なしでは長続きしない。

「仕方ない、今後剣術の時間はすべて素振りやらに回して、剣技はそ

れが仕上がってからだな。ま、お前は一目見れば理解するんだ、何度か立ち会えば十分だろう」

「あの、そもそもなんで私は今、剣術を仕込まれているんでしょうか……」

「ん？まあ、今どき近接戦は時代遅れなどと言われることもあるが、それでも、自分が培ってきたものが廃れて消えていくのは悲しいものなんだ」

「校長には有名なお弟子さんがいたと記憶していますが……？」

「それはそれ、これはこれ 自分の剣を受け継いでくれる奴が多いに越したことはない」

「……」

この放課後訓練の中で、剣の訓練が始まった時からどうしても校長に聞きたいことがあった。

「……校長はそれでいいんですか？」

「それで、とは？」

「私の能力は、一目見ただけで相手がこれまで培ってきた努力を自分のものにしてしまう。私自身はさした努力もなしにです」

この能力を作ったときには、そこまで強く考えなかつたことだ。自分が生き残るのに必死で他人の気持ちまで考えてはいなかつた。

けれど、剣術という形で”見ただけでは写せず、努力しなければ再現できない”力を目の当たりにして、考えさせられた。

「なんだ、そんなこと考えてたのか」

「そんなことって！」

「元々、武道には見取り稽古なんて昔っからあることさ。単にお前はそれが優れていただけのこと。そりゃあ、嫉妬も何も浮かばないか、って言われたらそれはまた別の話だろうがそれは他の、いわゆる”才能”ってやつも同じだろう」

「それに、私だって考えてることはある」

「考えていること……？」

「お前に剣の才能はない」

「お前はあくまで模倣どまりでその先の自分なりの剣ってやつを見

つけることはできないだろう」

「だからこそ、お前の剣は私の写し、私の剣そのものと言えるだろう」

「他の誰でもないお前だからこんな真似ができる」

「何人かちよつと驚かせてやろうと思つてな？」

そう言った校長は、悪戯を思いついた悪ガキのような笑顔であると同時に、自分のこれまでをためらいなく他人にくれてやろうという度量を感じさせる顔、

なんというか、大人だなあ、と思うと同時に、自分が将来こんな大人になれるだろうか、願わくばこうなりたい、とそう願わせる姿だった。

ある日の昼休み、仲のいい子たちと集まって弁当を食べていた。

「ひかり、最近放課後に特別講義受けてるんだって？」

「うん、”この前の機動”で目をつけられたみたいでね、あれができるんならもつといろいろできるようになるだろうってことで教えられてる」

「えー、いいなー特別授業」とか言ってるけど授業でも普通の動きしかできないアンタじゃ無理無理」「それはそつちも一緒にしよー!？」  
「だいたい皆そうでしょ…」

「ひかりがすごいってことでいいじゃん」

「それに、空戦だけじゃなくて座学もあるんだよね…」

「ああ、アンタそれはダメだわ…」

「ひかりさん、いつも授業中は上の空というか別のものに集中してる感じだものね」

「試験も一夜漬けだからよくて平均だし…」

「言つてはならないことを…」

いつもの穏やかな日常、今日は少しだけ違いがあった。

「雁淵さん」

「?、三隅さん」

普段は別のグループで会話もない、三隅さんが話しかけてきた。例の“捻りこみ”をやった授業以降、姿を見る機会は減り、今思えば意図的に避けられていたようにも思う。

「あなたに言っておきたいことがあって」

「言っておきたいこと？」

「私は、あなたを認めない」

「確かにあの”捻りこみ”ができるのはすごいことだと思う。けど、」

「授業は碌に聞かず態度が悪い、座学の成績もよくはない、そんなあなたが雁淵中尉の妹だからと、ただ実技ができるからといって優秀なウィッチであるとは認めない！」

彼女はそう啖呵を切って教室を出ていった。

「何、あの子！」「主席の三隅でしょ？感じ悪い」「実家が金持ちだからいつも同じ金持ちか取引のある家の子としかつるんでないって話」「なんでひかりさんのお姉さんの名前が出てきたんでしょう？」「ひかりが優秀なことにお姉さん関係ないでしょ」

「…」

原作でもひかりに絡んでいた彼女だが、彼女にとって理想の英雄雁淵孝美に対し、“俺”のイメージはそぐわない、理想に届かない邪魔もの、認められない存在だったのだろう。

「うん、あの子にだけは絶対負けてやらない。そう決めた」

授業を聞いてないのは自業自得でしかないのだが、棚に上げて。

1943年も終わりが近づいてきたころ。

新聞では統合戦闘航空団の新設が報じられ、505までが設立されたりらしい。ある記事には31統合戦闘飛行隊について触れているものもあったが規模の小ささで話題にならなかったのだろう。

501はブリタニア本土防衛、502はカールスラント攻撃の主力、503はオラーシャ側からのカールスラント攻撃、504は南ア

ルプス以南の防衛、505は503と同じくカールスラント国境のオラーシャ側、しいて言えば防衛寄りの性格をした配置。

506以降は、原作一期のガリア奪還以降の話で、連合軍側の戦力配置と防衛思想はおおよそ完成したといえ、現状世界の戦線は停滞しているといえる。

言い換えれば、ネウロイの単攻撃に対する展望が見いだせず、足踏みしてるといえる。

それが変わるのはあと半年、正確には1944年の9月を待つことになる。

今日は久しぶりに現状の”念”に関する話をしようと思う。

現在”念”の修行は基礎となる”纏””練””絶”を朝晩、移動中は”流”、座学の時間は”円”の修行を、放課後の訓練時は”弁”を使えばなしいった具合だ。

”周””隠””硬”はほぼ切り捨てており、朝晩の基礎の時間に試す程度でしかやっていない。

”凝”は派生型である”流”をやっていることから問題ない。”撃”も同様に”練”の訓練のうち朝は”練”、夜は長時間維持することと”撃”として修行し、倒れるように眠る。

”撃”の修行は開始してから7年の歳月が経過しており、初めのころの30秒も保たなかったころから成長し、維持時間は原作主人公すらも上回り6時間近い。

とはいえ、この結果はむしろ短すぎると言える。

本来”撃”は10分伸ばすのに1月かかると言われ、そのままの成長率を維持するようなら14時間を超えていなくてはならない。半分以下なのは学校生活との両立もあるだろうが、年齢故の肉体の幼さと鍛え不足、そして才能、という奴だろう。

問題は、

(系統別の修行をする時間がない…:というか寮生活に入ったせいで修行する環境が作れない)

系統別の修行は、修行に必要なものがある場合が多く、石割の石な



どがそうだ。

(変化形はいい、使わないから。問題は放出系と強化系)

放出系は、本来の予定では放出した魔力で岩を押して動かす修行をしており、強化系でも同様に強化した肉体で岩を押す修行をしていた。

(放出系はもう”浮き手”を始めるしかないか…)

”浮き手”は片手逆立ち状態で手のひらから放出したオーラで体を浮かす修行。6〜70cm浮き上がって合格。攻撃に転用すれば相手を数m吹き飛ばせる技にもなる。

コントロールが非常に難しいうえに逆立ちという集中力を要する姿勢でこなさなくてはならない。

(ゴンですら制限期間内にはクリアできない難易度、どれだけかかるかわからない)

(しかし、いつかもしかしたら放出系の能力が必要になるかもしれない、訓練は続けなくては。容量が後どれだけあるかはわからないけど)

念の修行はどれだけの時間を費やしたかがその能力の強さに影響する。いつかに備えるなら今からやらなければならぬ。

(問題は強化系…、何を強化するか…)

強化系の修行の基本は”何かをしなから””何かを強化する”であると以前考えた。そのため、石や自分の肉体を強化して鍛えてきた。

(今後も寮や学校の敷地からあまり出られない、欧州行きの時は1ヶ月艦の中だとすれば持ち込めるもの、もしくは自分の肉体)

(自分の肉体を強化するとして、負荷をどう掛けるかが問題か)

敷地内や艦内に、持ち込める物の中に過剰に重たいものや破壊してかまわないものが大量にあったりはしない。

(ダメもとで聞いてみるか)

「学校の敷地内に持ち込める鍛錬用の資材？」

「魔力の操作訓練にですね、今までも河原で石や岩を使ってたんで

す」

「よくわからんがそれなら剣振つとけ剣」

「いや、あの魔力の操作をですわね…」

”念”の修行を隠しながら、参考になる話を聞くのは無理があったか。

「なんか勘違いしてないか？ 剣を振る中でも魔力は操作できるだろう」

「はあ…」

「ウィッチの剣術の技の中には魔力の精密な操作を前提としたものもある。ちよつと考えてみる」

「わかりました…」

結局その日の訓練中に参考になる意見はもらえず、”剣”を使った修行、強化系に通ずるものを考えてみることになってしまった。

「剣の修行で参考になるのってなんだ…？ ろうに剣心？ あれは、主人公ある程度強かったからなあ…」

もうすでに前世の記憶はだいぶ薄れ、思い出せるものは限られているか、深くは思い出せない状態だった。

「…記憶メモにあるかなあ？」

日曜日、実家に戻った際に、部屋に隠したままだった”記憶メモ”を確認する。

思い出せた漫画タイトルと大まかな内容が書かれたページをめくる。

「うーん、作品それぞれのオリジナル異能が多くて参考には…？」  
ほとんどのページには参考にはならない、もしくは参考になりはしても学校や艦内ではできそうにないものばかりだった。

しかし、最後に開いたページには、作品内容はそこに技や鍛錬に関するものが多く書かれていた。

「シングルイ、の”練り”」

”練り”

漫画シングルイに登場する剣術修行

どでかい木刀”かじき”による素振りを一回振り下ろすことに30分かけて行うといったもので、力みすぎのあまり奥歯をかみ砕かないよう、手ぬぐいを噛んで行う。

「棒状のものはいくらでも手に入る。刀自体を重たくするんじゃないよ、紐を結んで…天井の梁か木の枝にでもかけてやって反対側に何か結べば…」

「強化するのは棒自体と紐かな。自分自身の強化は控えめにしないとおもりが持ち込めない大ききになるか…」

学校へ戻る際に廃材から鉄の棒と縄を掻き出し、おもりには寮の裏にあつた廃材を使うことにした。

「ふんっぎぎぎぎぎぎ…」

結んだ縄は強化しなくてはちぎれ、鉄棒はひん曲がるだろう。それをギリギリのところまで、強化し続けながらひたすら時間をかけてゆつくりと一動作をこなす。ときおり、あえて速く振り下ろしてみる。強化が乱れ、縄が切れそうになる。

ふと、ネテロの感謝の正拳突き1万回を思い出し、集中が途切れてしまったため、縄が切れて廃材が落ちる。

誰も足を運ばないような裏庭ゆえ、問題はないだろうが見られても問題がない程度に体裁を整え、部屋へ戻る。

（縄はまた探しに行けばいい。3日に一回ならそこまで負担でもないだろうし）

正直”念”の修行としてはいまいちだったがそれでも停滞していた強化系の修行ができたことに満足し部屋へ戻る。

後日、

「そっくういえば雁淵」

「はい、なんででしょうか！」

「結局剣で魔力の鍛錬は何か思いついたのか？」

「はい！鉄の棒の先に縄をくくって枝にかけて釣り上げるようにし

て素振りしてます!」

「はっ!」

「とりあえず見せてもらったが」

「はい!」

「その…かじきとかいったか?どこで拾ってきた知識かは知らんが…、やりたいことはわかった。もつとまともなの用立ててやるから素振りはそれでやれ」

「えっ、いや」(強化系の修行も兼ねるとは言えない)

「それでやれ」

「ハイ…」

校長には言えない事情を説明するわけにもいかず、かといって強化系の修行をおろそかにすることもできず、校長の手配した鉄心入りの木刀が来てからは、それと修行の両立で睡眠時間を削る羽目になった。

原作開始　く北歐行くってなったら何もってく？泊まるのは中世石造りの城だけどく

梅雨が明け、夏が始まり、佐世保も暑くなってきた頃。

放課後教練のため、体育館へと来た。

「ああ、雁淵来たか」

「はい、今日は校長の剣術でしたかと」

「うん、その通りなんだが、その前に伝えておこうと思ってな」

「なんででしょうか？」

「南方から三航戦が戻ってくるらしい」

「！、インド方面の航空支援にあたっていた？」

「そうだ、君の姉も乗っていたな」

### 三航戦

皇国海軍第三航空戦隊の略で翔鶴、瑞鶴を軸にした航空戦隊。

なお、ストパン世界では蒼龍飛龍は翔鶴型の船体で建造されたらしく、4隻まとめて蒼龍型らしい。

「いつ、入港ですか？」

「今朝、シンガポールからの入電があったそうさ。となると遅くとも2週間以内には上陸するだろう」

「では校長さ、いや4日の外泊許可をお願いしますか？」

「いいだろう。やっぱり君も姉には会いたいのか」

「いや、私が家に居なければ姉のほうが拗ねるでしょうから」

「佐世保の英雄も人の子、いや姉というわけか！しかしわかるぞ、私も会えるなら妹には会っておきたいからな…」

校長の家族話に口をはさみながら、頭の中は姉の帰還を聞いた事で混乱の中にあった。

（は、はやい、早いよ孝美さん!?予定では9月と思ってあと一月二月

あると思っていたのに!?)

(だ、だが、現状は少し予定が早まっただけのこと。欧州に行った後の影響まではわからんが扶桑で今やることは変わらん!)

「今日はずいぶん話し込んでしまったな…、うん、雁淵」

「はい、なんでしょう!」

「そろそろ空戦での型も覚えてもらおうと思つてな? 今日からはこの時間もストライカーを履いてもらう」

「!」

何となくだが気づいた。今までそんなそぶりはなかったのに急に剣の型を仕込もうとしてきたことで。

「…随分急ですね? もつと陸の上で振つてからだと思つてましたよ」

「ああ、いや、そろそろ覚えておいたほうがいいかと思つただけさ」

確信した。”覚えておいたほうがいい”なんて言葉はこんな場面じゃなきや使わない。

欧州派遣の話が来ているのだと。

「わかりました。でも、どなたが指導してくださいるのですか?」

「ん? 何を言っている?」

「お前には私の剣を写させるといったらどう?」

校長まだ飛べるんですか!?

「確かに私は扶桑海事変での負傷で引退したが、あくまで負傷であつてあとに残るようなケガではない」

「それに、少し下の年では今でも飛んでいる奴がいる。まあ、妹なんだが」

「陸さんで教官をされているとか?」

「ああ、あいつももう、実戦は無理があるようだな」

「で、飛ぶんですか？」

「当たり前だろう。さつきつからそう言っているじゃないか」

「後ろで教官方が顔青くしてらっしゃいますけど」

「なんだそろって風邪か？情けない」

「首横に振ってますけど」

「じゃあ、二日酔いあたりか。教職ともあろうものが」

「いや、あゝいいから行くぞ！上がれエー！」え、ちよ

教官たちの静止の声を振り切るようにして急上昇した校長はこちらを置き去りにし、空に模様を描くように飛んだ。

《はは、これが”零”か！95、96とはえらい違いじゃないか！もっと早く乗っておくんだった！》

「待っててください校長。もしかして零式初乗りですか」

《なかなか機会がなくてな。周りが乗せてくれん》

さっきの教官たちも必死だったもんな、と思った。すでに発動機を吹かしてしまっているから止められなかっただけで。

「さあ、行くぞ雁淵！」

「待っててください。見て写す前は普通のウィッチと変わらないって、ヴぁー！、ちよ、あつぶえー！」

久しぶりの空にテンションがバカ高い校長の猛攻は続き、あたりが暗くなつてからしばらくして、ようやく下に降りた。

「ハアーツ、ゴホツゴホツ、ちよつと、詰め込みすぎではありませんか…」

「次飛べるかはわからないからな、今回で私の培った実践剣術は仕込んでおく必要があったんだ。許せ」

「言いたいことはわかりますけど…」

打ち込まれたり、後ろについて飛んだり延々連れまわされたが、多くの技を見るだけでなく、実戦での使用タイミングとその際の注意まで学べたのは大きく、頭の中で空戦をイメージした際、よりリアル

に想像できるようになった。

「ま、今日の講義はこれで終了だ。帰って今日のことを思い出しながら眠るように」

「ご指導ありがとうございます…」

数日して、三航戦の帰投は町中に知れ渡ることになったようで、港には人が詰めかけ、横断幕まであったらしい。

あつたらしいというのは今日も兵学校は変わらず講義を行っており、展示飛行なども見られなかったためだ。当然生徒からは不満が噴出したが、校長や教官たちは譲らなかった。

「扶桑海の閃光」の時のようなことをされても困ると、信頼度ゼロのお言葉をいただいては、黙るほかなかったともいう。

「あれ、ひかり今日は寮じゃないの？」

「うん、多分お姉ちゃん家に来ると思うから」

「そっか！孝美中尉もお家のほうに帰ってるのよね！」

「ねね！遊びに行ってもいい？」「私も私も！」

「今から外出許可取れたらいいよ？理由的に許されるかどうか知らないけど」

「うぐっ」

そう言いくるめて、自宅への帰途に就く。

変に寄り道もせず自宅への道を歩いていけば、比較的開けた田んぼの中の道では遠くからの音がよく聞こえた。

振り返ってみれば、空で真っ白な第二種軍装が光を反射して輝いていた。

「ひかりーっ！」

「お、お姉ちゃ、…孝美姉さん！おかえりなさい！」

「孝美姉さん!? あっ」



目の前で、佐世保のエースが田んぼにハードランディングするのを見てしまった。

「た、孝美あんたなんでそんな泥まみれなの…」

「うう…、第二種軍装が…結構するのに…」

田んぼに突っ込んでしまい立ち往生していたところに、孝美の荷物を積んで追いかけていた車が追い付いてきたため、ストライカーを無理やり荷台に詰め込みそのまま家まで乗せてもらった。

荷物を家に置いた後、車はストライカーを載せ基地へ戻るらしい。

「騒がしくして悪かったわね、みんな孝美のこと一目見たいって。まあその孝美が泥んこの軍服で帰ってくればああも騒ぐわよ」

「気にしないで、私の未熟もあるから…」

家の前には、近所や周囲の家から姉を幼いころから知っている人らが詰めかけ、小さな宴会のようなものが催されていた。

が、泥にまみれて帰ってきた姉をそのままにするわけにもいかず、宴会は次の日に持ち越された。

”俺”達は居間で姉が風呂から上がるのを待っていたのだが、姉が帰ってくる前から、商工会のジジババと盛り上がっていた父はすでに酔いつぶれていた。

「あ、そうだ。これ見てちょうだい！」

「アルバム？やだ、全部私の記事!? 恥ずかしい…」

「恥ずかしいもんかい！ ウイツチとして立派にお仕事を果たしてきた。その証拠だよ？」

「…ああ、そうだ今日の新聞も見ておかないと」

今日の記事には、記憶の通りなら重大人物が映っているはずだ。

「あら、ウィツチの記事？」坂本少佐、第501統合戦闘航空団にて獅

子奮迅の活躍をす」

「ねえ、孝美姉さん知ってる人？」

「ま、また孝美姉さんって…」

「知らない人なの？」

「ああ、うん、リバウでの撤退戦で一緒に一緒したわよ？厳しかったけど尊敬できる人だった。あの、それよりひかり私の呼び方…」

「へーすごい人なんだあ…」

孝美姉さんの話を聞きながら、私の視線は写真の隅に映っている人物に向いていた。

(これが主人公！そんなヤベー奴には見えない顔してるけどもうすぐガリア解放すんだよな…)

写真の隅には扶桑の女学生の服を着た女の子が写っており、この人物こそが”ストライクウィッチーズ”の主人公”宮藤芳佳”だ。

「ひかり、何見ているの？あら、この子も扶桑のウィッチなのかしら」

「うーん、どうかしら。それならもつとニュースになってもおかしくないはずだけど」

そのあとは、他愛もない話をして、就寝の時間となった。

「ねえ、姉さん？」

「やっぱりその呼び方変えない？昔みたいにおねえちゃんって…」

「遠洋航海が終わったわけだし、またしばらくは佐世保に居られるの？」

「意地でも変えない気なの…?!いいわ、だったらこつちから変えさせて…」

「いられるの？いられないの？」

「あ、ええとそのことなんだけど…」

「港で新しい辞令をもらってね？」

「欧州へ行くことになったの」

それは8年間何よりも望んだ言葉だった。

「静粛に、これより校長先生より重大な伝達事項があります。それでは」

「生徒諸君、知つての通り欧州の戦況はまだまだ厳しく一人でも多くのウィッチが必要とされている状況だ」

「欧州からの強い要請に従い、わが校からも欧州派遣に参加する志願者を募ることとなった！」

ザワザワ「欧州派遣!?!」「実戦つてこと!?!」「まだ学生なのに…!」  
「静粛に!静粛に!」

「学生の身故、最前線に配属されることはないが決して楽な任務ではない!」

「欧州行はあくまで志願制であり、また一名のみ」  
「志願者はその場で挙手!」

「志願します」  
「1年主席、三隅美也!」「雁淵ひかり!」

「私は、ここで学ぶべきことはすべて学び終えたと自負しております!」

「自分の技量は既に欧州戦線において十分に通用しうるものだと確信しております!」

「いいだろう、3日後にどちらが適任かを見極める」選抜試験”を行おう!」

「各々万全の態勢で臨むように!」  
昼休みの時間、弁当を食べる前に体育館へと集められ、こんな一幕があった。

「欧州派遣…選抜試験?」

家へと戻り、居間に家族がそろった時に、家族にもそのことを説明した。

「そう。その試験で適していると判断された方、私か三隅さんが欧

州へ行くことになるって」

「そんなにウイッチが足りていないのか…」

「あんだ、卒業まであと半年近くあるっていうのに…、孝美だって欧州に行ったのは学校卒業してからだっていうのに」

「孝美姉さんは特進してた上に扶桑海事変で学徒動員食らってるじゃん。いつもウイッチなら世の中のお役に立てって言うって言ってさあー!」

「それは…、だってあんだと孝美は違うでしょう!」

「実技に関しちや校長のお墨付きじゃい!もう寝る!」

「ひかりっ!」

予想外の反対にあってしまい、結局家族の理解は得られなかった。相変わらずこの手のことは母が一番の発言権をもっており、姉と父が何か言うことはできなかった。

「ひかり、まだ起きてる?」

「…起きてはいるよ」

布団に入り、眠るまでの間”纏”と”練”を続けていた。

「ひかりは…欧州に行きたい?」

「…うん、いろいろ理由はあるけれど。私は欧州に行きたい」

死にたいわけじゃない。見殺しにできない人たちがいる。それだけじゃない、7年の間に多くの出来事があり、その中で新しい理由が見つかったりもした。

「なら…、それは聞かないほうがいいかな。でも一つだけ」

「なに…?」

「夢でも目標でもいい。ひかりが行きたいんだよね?」

「うん。私が、私の意思で行きたいんだ」

「なら、お姉ちゃんは応援してあげます!」

明確に応援してくれた唯一の味方。

「ありがとう、…お姉ちゃん」

「ひかり今なんて!」

「これより、欧州派遣選抜試験を行う！」

「試験内容は実戦に即したものだ」

「兩名武装の上、決められたコース上の課題を時間内に処理してくること！」

「チェックポイントを通過しなかったり規定時間に間に合わなかった場合は失格だ！」

「兩名が合格した場合はより早く戻ったほうを派遣要員とする！」

「兩名用意！」

空は灰色の雲が広がり、時折強い風が吹き抜ける。

国崎教官が旗を振り下ろすと同時にエンジンを吹かし、ロックを外す。零式練習脚は地面を離れ、空へと上がる。

「…負けないんだから」

「それはどっちのセリフでもあるでしょうよ！」

最初の課題は海上の塔型ブイの間を抜ける。

ついで、沖合で停泊中の三航戦の間を規定どりのコースで抜ける。曲がるたびに互いの体が前に出て、徹底的な差がつかない。

空戦ではないレースでは取るコースなどさして変わらず、よほど腕に差がない限り差は出ない。

雨が強くなってきた。

雨はついに雷雨となり、あたりには稲光がほとぼしっている。

「雨が目に入る…、服が重い…」

三隅がぼやくように、土砂降りの雨がたたきつけられ、互いに濡鼠といった有様。

係留気球を利用した的を”わずかに早く”に撃ちぬき、残骸をすり抜ける。

「この雨の中で速度が落ちない…！どんなスタミナしてるの！」

「…魔法力の消費を抑えないと」

流れは原作どなりに進むらしい。揚力を稼ぎ魔力消費を抑えることでラストスパートにかけようというのだろう。

結果は原作どおり、

「前見ろ前！危ない！」

「えっ、きゃっ！」

視界が悪い豪雨の中、低高度のしぶきに紛れて見えなかった建造物をよけきれず、弾き飛ばされる。

原作と違うのは、

「よっ」と

はじかれた三隅さんがこっちに突っ込んでくるのは”知って”いたので危なげなく受け取める。

「ぐっ、雁淵さん!？」

「だいじよぶ？飛べる？飛べるね。じゃ、残りも頑張ろうか。負けることはないだろうけどね」

受け止めた段階で意識があつたので、そのまま連れていくつもりだったのを変更し、思いつき後ろにぶん投げる。

悪いとは思うが負けるわけにもいかないのだ。

「あ、か、かぁりいふちいいいっ!!」

その後、ひどい形相の三隅さんに追われる形で試験は続いたが、追い越されることはなくゴールした。

「試験終了！欧州行は雁淵で決定！」

ゴールすると同時に沙汰が下されるのを聞き、その先の草原に降り立つ。

「くっ、雁淵さん」

「私の勝ち、悪いけど文句は言わせないよ。判断ミスって事故つたのはそっちだもの」

「…ええ、そこは認めるわ。欧州行にふさわしいのはそっち」

「おお、思ったより素直だった」

「失礼な！言つとくけど後ろにぶん投げたのは許してないからね！」

「いやいや、元の位置に戻しただけだって不正はないよ」

全身ぐっしよりさせ、ストラライカーを脱ぎもせず言い合っている

「事故ったとか後ろにぶん投げたとかちよつと聞き捨てならんなあ…?」

「げ、国崎教官」

「その、”げっ”の部分含めて詳しく聞かせてもらおうか」

「ひかり、欧州行きはどう?楽しみ?」

「楽しみだね!わくわくが止まらないよ!」

試験2日後、姉と連れ立って父へ弁当を届けに行く。試験中のごたごたは最終的に結果には影響しないと判断され、”俺”の結果はそのままだった。

「おはようございませす」

「はい、おはよう。中尉が来るのは久しぶりだな」

「お父さん、はいこれ」

「孝美に届けてもらうのも久…、まで、まさかまた走ってきたのか?」

「ええ!鍛錬代わりにひかりとね」

「うわ、ヤな予感…。ああ、やっぱり…」

父の開けた弁当箱は具も米もぐちゃぐちゃにシエイクされ、見るも無残なありさまだった。恨みがましい目で”どうして止めなかった”と視線で訴えられたが知らんぷり。

「水沼中尉、電信です」

「ん?おお!ほら、ひかりちゃん」

「海軍軍令部!合格通知だ!」

「やったねひかり!」

受け取った電信には『カリブチヒカリ　ゴウカクス　オウシユウハケン　ジュンビセヨ』と書かれていた。

原作第2話から、出航欧州へ！　　↳前回のサブタイ  
こつちで回収しちやっただよ〜

欧州行まではおおよそ2週間あるらしくその間に、準備を進めろとい  
うことらしい。

「というわけで、いろいろ伝手のある校長にご協力をお願いしたく」  
「身近な人間を頼る。というのは正しいことだと思うが、そんなの  
頼んできたのはお前が初めてだな…」

平日で、本来なら講義を行っている時間。欧州行で校長に相談があ  
るということで今日一日公休をもらっている。

「で？私を頼りたいというのは何だ」

「いろいろありますが、特に、欧州はスオムスのカウハバはとても寒  
いと聞きますからその対策をと思ひまして」

「ああ、今の時期佐世保では防寒具などそろえようもないか…かと  
いって官給品ではな」

校長も満州では苦労したという話を聞いていたのでここはスムー  
ズに進んだ。

「親も姉も金は出してくれるというので」

「そうだな、毛布や靴下、寝間着も温かいものがいいだろう。ウイツ  
チといえど魔力を常に維持するのは難しいからな」

(あれ、それができる私はもしかして防寒具いらない…?)

衝撃の事実気づきつつ、もらえるもんは欲しいので話を続ける。

「それとは別にですねえ…、欲しいものがありました」

「察するに本来なら軍人として持ち込まないようなものだな…？  
言ってみろ」

「北陸のほうですすね、ある程度持ち運び可能なこたつがあるらし  
くて…」

「そう来たか…確かに欲しいのは認めるが…」

「安全反射コタツって言うらしいんですよ」

「まあ、探しておこう持ち込めるかどうかはわからんが、艦隊勤務で



はないのなら荷物扱いで送れるかもしれん」

とんとん拍子で話は進み、補給の問題から缶詰や嗜好品など”いろいろ”と伝えて用意をお願いする。

「ま、2週間あればなんとかなるだろう。気長に待て」

「雁淵イ…、とんでもないもの注文してくれたな…。例のこたつ、北陸で10年前に出た代物で北陸にしか流通していないとか、最近のは電熱線だからスオムスでは使えるかわからないから炭を使う古い奴じゃないとだめだとか、面倒な物を…」

「いやあ、ありがとうございますー…これで凍えることはなさそうです！」

欧州行の前日になってそんなことを伝えられ、謝っておく。

「まあいい…その代わり、欧州行の貨物便に乗せることができなかったから、翔鶴に自分で積み込め」

「うわあ、机の天板と足をもつて乗り込むウィッチは前代未聞でしょうね…」

などと軽口を交わしていたら、突然校長が姿勢を正しこちらを見据えてくる。つられてこちらも背筋を伸ばし、膝に手を載せる。

「いろいろ用意してやったが、教え子が戦場に行くんだ。私からも何か餞別を送るべきだと思つてな」

「餞別ですか？」

「ああ、受け取れ」

そういつて後ろ手に取り出されたのは二つの刀袋。

「白地に黒の波模様のほうは”津田越前守助広”」

「黒字に金の菊が描かれているほうが”井上和泉守国貞”」

「どちらも江戸時代に活躍した刀工の業物だ。といつてもお前にはわからないか」

「なっ」

校長の剣術は二刀流でどちらも打刀以上の長さのものを扱う。現役時代には”虎徹”と”同田貫正国”の二本を振るい、どちらも弟子

に渡したという。

「饞別にしちや、高価すぎやしませんかね!？」

「これぐらいの”箔”はあっても構わんだろう。それに、私のコレクションの中ではそこまで惜しくない」

業物とか言っていたのはどうしたのだろうか。

「いや、助広のほうはたしかに惜しいんだが、国貞のほうがなあ…」  
といった校長は慣れた手つきで茎を見せてくれる。

「見えるか？」

「あとから付け足した感のすごい”真改”の字が」

「だろう?この刀を打った刀匠は確かに”真改”の字も持つんだがなあ…」

「私の二つ前の所有者が真改の銘の入っていたころのを探していたんだが手に入らなかつたらしくて同じ刀工の作だからと勝手に刻んでしまったなあ…」

「まあ、物はいい。それは間違いないからお前にくれてやる」

「あ、ありがとう」

ようはケチのついた名品。そんなところだろうか。

「ま、これで私の用事はすべてだ。気を付けていけよ、実戦のネウロイの光線はじかに目で見ないとその怖さがわからないものだ。まして、ネウロイ自体が交戦するまでわからん能力をもった個体ということもある」

「薰陶、確かに賜りました」

「いってきまーす!」

欧州行第3航空戦隊、その出航には同期の学生たちやお世話になっ

た教官、校長がそろって見送りに来てくれた。

三隅さんが埠頭ギリギリまで走ってきて「次は負けないんだからー！」と叫んで伝えてきたので腕を組んで胸を張ることで応えた。

それから三週間、すでに艦隊は北極海へと入っている。

「軍曹は、中尉と同じ部隊へ配属されるのです？」

「いや、わたしはスオムスのカウハバ基地での勤務で、中尉はオラーシャのサントペテルブルグだ」

「隣の国ですね、だいぶ離れてしまいます」

「ま、徴用した学生を最前線へ送られても困るしね」

艦の人員とも交流が増え、ちよつとしたおしゃべりぐらいはするようになった。

《甲板要員は至急退避！雁淵中尉が訓練飛行を行われる！》

アナウンスがあつたかと思えばエレベーターが上がり、紫電改を履いた姉が勢いよく発艦していく。

「おお、いつ見ても惚れ惚れしますな」

「そろそろ、わたしも一回飛んでおきたいんだけどねえ」

「そういえば軍曹が飛んでいるところを見ていませんな」

「陸上基地勤務だからね。発着艦訓練はしているんだけど、学生つてこともあつて」

艦内に自分用の“零式二二型甲”と“零式練戦”を積み込んではあるが、整備はしてあつても飛んではない。

「お疲れさまでした！」

帰還した孝美は格納庫で整備の人たちとの会話を終わらせたところだった。

「これが新型…」

「ええ、紫電四二型。と言つても試作機で、これ一機だけなんだけどね」

「テストパイロットしてるんだっけ」

「うん、量産型ができるのもそう遠くないはずだからひかりのところにきつとくるよ」

扶桑において零式はすでに旧式であり、紫電シリーズが次期主力戦闘脚として決定している。

「どう、乗ってみる？」

「！乗れるの？」

「まあ、お願いしてみてください」

「…それだったらむしろ一緒に飛んでみたいな」おねえちゃん」と

「!?わかったわ！艦長とお話ししてくる！」

(これ便利だな…)

《ウウ》

「警報!？」

「んあ、あれ、なんでおねえちゃん一緒のベッドに居んの…」

自分と姉の船室。二段ベッドのうち下を自分が上を姉が使うことで決めたはずだが、警報に起きてみればなぜか隣で姉が体を起こしていた。

《方位190にネウロイ反応！距離3万！》

《航空隊発艦作業はじめ！対空戦闘用意！》

孝美は身支度を整え、部屋を飛び出していった。おそらくは甲板へストライカーを装備しに行ったのだろう。なぜベッドにいたのかはぐらかされてしまった。

《電探室より報告 中型10、小型30》

《回避！取り舵いっぱい！》

本来群れないはずのネウロイが集団で現れたことに、艦内では混乱が見られたがアフリカや欧州戦線序盤はいくらでも群れていたような気がするのだが気のせいだろうか。

「雁淵中尉が中型を墜としているそうだ」

「第二派発艦の用意を急げ！」

《岸波被弾！1番砲塔炎上中！》

格納庫で発進準備を進める。本来なら、ここには零式練戦しかないはずだったが、姉との飛行を行うということで梱包されていた二二型を出してもらったのだ。

「よろしいのですか軍曹！出撃許可は！」

「取ってから用意してたら間に合わないさ！、！おっちゃん、こつちへ！」

すぐ目の前のエレベーター部分が吹き飛ばされ、鉄骨や飛行甲板の部品が落ちてくる。

それをシールドで受け止め、除ける。

吹き飛ばされた甲板は大穴が開き、青空とそこに広がるシミのようなネウロイが見える。

加えて、

「すげえ…」「あれだけのネウロイを一掃した！」「あれが中尉の”絶対魔眼”！」

髪が深紅に染まった姉が連続で中型ネウロイを撃墜していた。

姉、孝美の固有魔法”絶対魔眼”は同時に複数のコアの位置を特定し、そこに正確に弾丸を叩き込むというもの。その発動中は髪が赤く染まる。

強力だが、同時にコアの特定までに時間がかかるうえ、その間無防備であるという弱点があり、援護の要員が必要な能力と言える。

ゆえに、

「…？中尉が！」

無防備な状態で立ち尽くしていたために、シールドでは防ぎきれなかった光線がよりにもよって古傷の近くをえぐり、出血と痛みで気絶してしまっただのだ。

「おっちゃん離れて！いきます！」

甲板に空いた穴から直接飛び出し受け止める。すぐにエレベーターから艦内に入り衛生兵に引き渡す。

《北海沿岸に未確認のネウロイの巣を確認！》

後にグレゴリーと名付けられる最新のネウロイの巣。艦隊の航路のすぐそばに出現したその巣より現れたネウロイに我々は襲われていた。

「おっちゃん！九九式！弾もありったけ頂戴！」

「そ、それは構いませんが…。よろしいのですか中尉のところに」

「おねえちゃん」ならあの程度で死なない！それより早く！」

「あ、ああ、いや！わかりました！」

「艦長！雁淵ひかりは艦隊直掩に回ります！」

「ん!?誰だあのウィツチは！」

「中尉の妹のほうです！」

「あの子は学生だろう！」

「行きます！」

艦橋要員たちの声を無視して勝手に発艦する。姉の撃ち漏らしだけじゃなく、巣からも追加でネウロイが来ている以上時間に余裕はない。

目標は先頭で突っ込んできている二機。

”円”

半径20mを超えた”円”は、それでも空中戦で使うには射程が短い。光線を発するパネル部分を”写輪眼”で見切り、九九式二十耗をばらまいて破壊し、攻撃を封じる。

「見えたぞコアがア！」

そのまま接近してコアを撃ちぬく。手早く処理したつもりだが、艦隊の周囲には水柱が立っている。撃墜するまでの短い間だけでもそれだけの攻撃が艦隊を襲っていたということだ。

このままでは艦隊が危ない。いまから退避するよう進言したところで艦の速度ではにげきれないだろう。

(ならこっちから突っ込んで足止めするしかねえ！)

そう考え、呐喊しようとしたところで、比較的近くまで接近していた小型個体が撃墜される。

火箭の方向を見れば、6つの人型。

「ウィッチだ！ウィッチの増援だ！」「オラーシヤの502部隊だ！」

(あれ、こんなに早く来たんだっけ…)

そんなことを考えながら、502の隊員がネウロイを攻撃するのを見ていた。

(残りは来てないのかな、隊長は腰の問題もあってあんまりでないんだっただか)

502は連携をとりつつ攻撃しており、「扶桑海事変」ごろの単騎駆けばかりしていたころの”巴御前”がもとになっている自分は邪魔になるだろうと、艦隊直掩として下がっていた。

艦隊も十分に離れ、最後のネウロイが墜とされたころ、一人のウィッチがこちらへと近づき、つられるように他のウィッチもやってくる。

「孝美！やっぱり孝美が墜ちるわけ、なん…。」

「誰だテメエ」

カチンときた。

「扶桑皇国海軍第327海軍航空隊欧州派遣支隊”雁淵”ひかり軍曹です」

”雁淵”の部分に力を籠め、真正面から言い放つ。

「ああ!? 雁淵!? テメエ孝美のなんだ!」

「妹ですが! そういう貴殿はどこのどなた様でしょう!」

「海軍343空、管野直枝、少尉様だコノヤロウ! 陸の連中みたい  
に言いやがって!」

「そうですか少尉殿!...ああ、姉、孝美中尉は負傷で翔鶴の医務室で  
す」

「な!」

そう言った少尉は途端に顔をクシャつとさせて、聞いてきた。

「おい、孝美が戦闘不能つてのは本当なのか」

「::はい。リバウでの古傷のすぐ傍を抉られました」

「そんな、じゃあ、孝美は何のために::」

「ひとまずは、翔鶴の上に降りさせてもらってノヴォホルノゴルイ  
まで行きましょう。隊長の指示を仰がないと」

”ポクルイーシキン大尉” だろう人物がそう言い、翔鶴へと降り立  
つ。”ルマール少尉”と呼ばれていた人物を医務室へと案内し、よう  
やく姉の姿を見ることができた。

傷自体はわき腹のみだが、第二種軍装には血が滲み、破れた生地か  
らは抉れた肉が見える。

(うつ::)

初めて見る生々しい傷にこみ上げる吐き気を抑え込み、姉の顔を見  
る。顔だけ見れば眠っているかのようだ。

「中尉は、気を失うまでずっと軍曹の居場所と無事を案じていた。  
こちらの判断で勝手に無事だと伝えてしまったがね」

「いえ、ありがとうございます::」

「わ、私の力では傷をふさぐのが精一杯です::」

「::体温22度、脈拍10、これではまるで冬眠じゃないか::」

「戦闘で絞り切った後の残り僅かな魔力で何とか生きています  
::」

「”おねえちゃん”::」

強い不安に襲われる。失うかもしれない。たとえ先を知ってい



てもその通りになるかはわからない。

(…)

ノヴォホルノゴルの艦隊司令部にて、

「では、孝美は艦隊の補給が終わり次第一緒に扶桑へ」

「ああ、途中輸送機に乗り換えても半月かかる、保てばいいがな…」

「…あまり聞きたくはないが扶桑からの増援は？」

「絶望的だろう、な。北方航路の閉鎖もあるが何より自由に動かせるエース級のウィッチなど…」

「そうですか」

ドンドンドンッ！と力強くノックする。

「ん？誰か！今は対応中だ！」

「その対応相手についてです」

そう言つて許可も得ずに中へ入る。ウィッチであることを示すために耳と尻尾を出しながら。

「海軍327航空隊欧州支隊の”雁淵”ひかり軍曹です！」

また”雁淵”の部分に力を入れる。姉の名声を利用するようで気が引けるがこちらもなりふり構つていられない。

”雁淵”？孝美中尉の…」

「孝美は姉です！」

扶桑艦隊スオムス駐留基地の指令にそう言い放つ。

「で、その軍曹が何の用だ」

カールスラントの軍服。少佐の階級章。この人が”グンドユラ・ラル少佐”

「お願いがあります」

「ほう、なんだ」

”私を502部隊に配属させてください”

正面から、相手の眼を見返す。”纏”が乱れて魔力が漏れ出す。

「ほう…、しかし、君は軍曹だろうか？それになぜ欧州まで来た？」

「カウハバ基地への増援としてです」

「学生を徴用して送るとは聞いていたが」

「学生？学生が最前線の502に入りたいと。君にその資格があるのか？」

「初陣で2機撃墜！腕は、軍神”のお墨付き！それでだめなら一度実戦で使って判断してください！」

「ほう……、初陣で二機か」

「ああ、報告にもあるな。孝美中尉が倒れた後の艦隊直掩として戦闘。二機撃墜ののちは502が来たことにより艦隊直掩に注力した、と」

少佐は考えるそぶりを見せ、

「ふむ、良いだろう。502へ来い」

「！、ありがとうございます！」

「ただし、君がどんな思惑で502に入ろうとしているかは知らんが、弱ければ死ぬぞ？」

「死ぬまででいいので入れてくだされば！」

少佐は少し笑うそぶりを見せ、「ついてこい」といって部屋を出た。

原作第3話！　　く正座つて小技知つてればそこまでつらくないく

「扶桑から援軍として派遣される予定だった孝美中尉が負傷し戦線離脱したことにより、代わりに妹のひかりさんが入隊します」

「雁淵ひかりです。得意なのはインファイトでの戦いと剣術、姉と同じでコアが見える固有魔法がありますが射程が短いため近づく必要があることからこのような戦術になりました」

502の宿舎で一晩を明かし、朝食の席で自己紹介をする。

「おい、固有魔法のことは聞いてないぞ…、ああ、私は502の隊長で”グンドユラ・ラル”。階級は少佐だ」

「私は”アレクサンドライワーノヴナ・ポクルイーシキン”。階級は大尉よ。戦闘隊長を務めています」

”ヴァルトルート・クルピンスキー”、中尉だよ。伯爵と呼んでくれるかな？」

「この人の冗談には付き合わないでいいから」

「ひどいなー、先生。」

「私は”エディータ・ロスマン”曹長よ。この隊の教育係をしているの。だから先生」

「…”ジョーゼット・ルマル”。…少尉です」

”下原定子”。同じく少尉です」

「おい、おい…管野の番だよ」ヒソヒソ

「知るかよ…」

「ああ、えーとこいつは”管野直枝”少尉。私は”ニツカ・エドワードイン・カタヤイネン”曹長。仲間なんだからさ、”ニパ”って呼んで」

「紹介は終わり、食事にしましょう」

各々がそれぞれのペースで食事を始める。

「ねえー雁淵さん、”ひかりちゃん”って呼んでいいかな」

「はい、かまいませんよ」

「ひかりー、気をつけな？伯爵はひどい女だったらしで有名なんだ」

「おおっと、誤解を招くようなことは言わないでくれニパ君。僕はただ女の子皆に楽しい一夜を提供して、僕もそのおこぼれに預かるうってだけさ」

「ね？」

「あははは…」

「味付け、どうかな？」

「すごいおいしいです！陸の部隊はあまり期待するなって言われてたんですけど、あー、下原さんが作ったんですか？」

「ええ、炊事班もいるのだけど、私、料理が好きなの」

下原さんと会話しているとロスマン先生が

「このヤマドリタケよく煮えててバターとの相性いいわねえ」と言った。

「それはニパさんがとってきてくれたものなんです」

「次は何探ろうか、カンタレッツリカ… トリュフもいいな！」「トリュフ…」

「でも、次ストライカー壊したらキノコ採り禁止です」「そんなあー！」

「おわかりありますか？」「ええ、いいですよ」

頃合いを見計らっていたのか伯爵が会話に入ってくる。

「いっぱい食べる子ってかわいいなあ…」

(視線がネットリしてる…)

皆が食事を終え、一息ついたタイミングを見計らって隊長が発言する。

「よし、朝食は終わりだ。各々の午前のシフトに入ってくれ」

「私とジョゼは警戒待機だったよね？」「うん」

「僕はどうしよっかなー」「暇なら書類、手伝ってくれてもいいのよ？」「冗談」

「私は在庫確認に、雁淵さんが入ったので見直さない」と「ああ、頼

む」

「うーし、二パ、付き合え。走るぞ」「おー、いいね。雁淵さんはどうする?」

「走るんですか? だったらご一緒していいでしょうか?」

「チツ…」

サンクトペテルブルグにある502基地は古い城砦を改造したもので、周囲を星型の土塁で囲まれている。3人はその上を走っていた。あたりには朝霧が出ている。

「カンノ! とばしすぎだよ! いつもよりだいぶペース早いじゃないか!」

「うるせえ!」

「ひかりがついてこれなかったら…」

「えっ、なんですか?」「あれ、普通についてきてる」

「これくらいなら普通ですよ。学校に早く着きたかったらもっと早く走らないと間に合いませんし」

「ふん、素人が俺たちについてこれるわけねえ!」

「「ええー?」」

やがて階段にさしかかり、

「へえ、へあ、もうダメ…」

「ふっ、ふっ、ふっ、…」

「お…、おいテメエ!」

他の二人がダウンし、膝に手をつけて息を整えてる時、止まらないよう足踏みをしていたら管野少尉が話しかけてきた。

「ふっ、ふっ、はい? なんですか?」

「俺は、認めねえからな…! テメエなんか孝美の代わりだなんて!」

「アイツと俺で”巢”をぶっ壊すはずだったんだ!なのに、テメエが弱エから!」

管野が絞り出すように言った言葉に対し”俺”自身の思いをぶつ

け返す。

「…言い訳するつもりはないです。けど、私は人を守るために来ただんです。おねえちゃんの代わりになるんじゃないやなくて、私自身の意思で！」

「弱え奴は周囲の人間も危険にさらす！最前線のここに必要なのは即戦力だけだ！」

「弱いかどうかは実戦で見ってから言ってください！邪魔なら後ろから撃つたっていい！当たりませんから！」

思わずニパが割って入る。

「ちよつと二人ともケンカはよそうよ、仲間だろ!」「仲間じゃねえ！」

そう言つて管野は別の道のほうへ走って行ってしまった。

「ちよおつとカンノお!…ごめんね？あいつも悪い奴じゃないんだ。口は悪いけど、あいつはあいつなりに、今必死なんだ」

「わかってます。いきなり学生が肩並べて戦うってなったら納得できるとはありますもん」

「あー、ところで雁淵さん」

「はい？」

「雁淵さんってマラソン選手か何か？」

「あー、いや修行も兼ねて長距離よく走ってはいましたけど選手ってわけではないです」

「えー…、うっそだあ…」

マラソンを終え、基地へ入るとブリーフィングがあるといわれて会議室へと案内された。

「これまで、我々の最重要目標はカールスラント、オラーシヤ方面に存在する、アンナ、ヴァシリーと名付けられた二つの巣でしたが、新たにもう一つ確認されました」

教鞭を握るロスマン曹長によって地図を前に説明がされる。

「また厄介なところに…」

「よし、新たな敵性目標を”グリゴリー”と命名する」

「グリゴリーより出現するネウロイの影響は既に広範囲に広がっており、このままでは補給が絶たれるのも時間の問題です」

「そうなれば、我々は当基地を放棄、戦線は大きく後退する羽目になります」

伯爵が茶化すように言う。

「やれやれ、絶体絶命じゃないか」

「そのためにも、我々502は可及的速やかにグリゴリーを攻略しなければならぬ」

すると、下原が手を上げる。

「あの、ネウロイの巣って倒せるんですか？」

「501がガリアの巣をせん滅したのは聞いていると思いますが…」

「最重要機密、だそうだ。クソツタレめ」

(そろそただわな、ブリタニアのせいで空母一隻沈めて他にもブリタニアにとってヤバイ機密がごろごろと)

「だが、501にできて我々にできないという道理はない」

「俺がぶっ潰す」「その意気だ管野。雁淵！」

「はい！」

「お前は午後から訓練だ。それまで誰かに基地を案内してもらえ」

「じゃあ、そうね。ジョゼさん、お願いできる？」

「え、わ、私はちよつと用事が」

「そう。じゃあ、二パさん、お願いできる？」

「はい！」「ちっ」

「では、改めて各自午後のシフトどうりに」

二パに連れられ、基地中を巡る。ストライカー格納庫、高射砲群、射撃訓練場。施設そのものは扶桑の兵学校でも当たり前にあるものだが、欧州の城砦を改造して作られたこの基地の施設はどれも新鮮で見ごたえがある。

「この基地はね、全部で1, 500人くらいがいるんだ」

「おお、もうちよつとした町ですね」

「でも、サンクトペテルブルクの町はもともと200万の人がいたんだよ？みんな疎開していなくなっちゃったけどね。ここは、対ネウロイの最前線基地だからね」

「あ、管野」

「はい？」「ほら、下だよ」

「うおおおおおおおおお」

「なんでタイヤ引つ張って走ってるんですか？」「体力で負けたのがよっぽど悔しかったんだな…、一応言っておくけど真似しちゃだめだよ？ロスマン先生が怒るからね」「真似したくないので大丈夫です」

「雁淵さん。用意はできてる？」

「いつでもいいです。大丈夫です」

基地案内の後、格納庫で零式を前にロスマン先生を待っていた。

「初等、中等訓練はすべて終了。結果はA判定…座学が足を引張っているようね。いいわ、ストライカーを履いて！」

扶桑から送られたのか、”俺”の成績表らしきものを持っている。何だか恥ずかしいのでそちらを見ないようにしつつ、言われた通りにストライカーを履き、発動機を起動する。

「混合比9：1、回転数1000でキープ！」

「話に聞いていた扶桑の新型が見れると思ったのですけれど、残念です」

「1200にあげて！いいわ、発進！」

ロスマン先生とポクルイーシキン大尉の間を抜け、高度を上げる。

《300まで上がったら基地外周に沿って旋回、その後滑走路の上を全開飛行！》

「はいー」

佐世保の秋と違い、こっちは既にかなり空気が冷たい。気温が低いせいか、いつもよりも零式のフケがいい気がする。

「良くも悪くも普通かしら」

「ですね…。見慣れた光景です」



「そんなに新型が楽しみだったの?」「はい…」

その後も言われた機動を続けた後、格納庫へと戻って機体をハンガーに固定する。隊長のところへ報告に行くのでついてくるようにと言われる。

「で、どうだった?」

「航空学校での成績どうりといったところです。目立つ荒はありませんので実践しだいでしょうか」

「そうか…あとは例の魔眼だな」

「射程20mの魔眼は前代未聞ですね。新兵にそこまで突っ込ませるのはどうかと思います」「私も同意します」

「だが、雁淵本人はそれを見据えた訓練をしているのだろうか?」

「はい!北郷先生に近接戦闘をご指南いただきました」

「扶桑海事変で名の知れたエースウィッチだ。期待はできる」「なら…」

《ウウー!!!》

「警報!」

《方位087より中型1!高度3000速度300!》

《シフトどうり管野、二パの2機が発進!》

「クルピンスキー中尉は私とペアで上がります!」

「雁淵さんあなたは私とよ」「了解しました、曹長」

上がった先で、2機ずつの編隊を組み、進む。先行した2機からは発見の報告があったが大尉は後続を待ってから攻撃するように言ったため、攻撃開始は6人全員がそろってからになった。

「こちらも敵を視認しました。前衛の2機は交戦を開始してください!」

《よっしやああ、行くぜえええ!》

突っ込んだ2機が足止めをしている間、曹長と相談する。

「あなたの魔眼を確かめるにはここから近づくわけだけど…。あなた、そのソードもしかして使うつもり?」

「突っ込んだら銃よりも早くて攻撃範囲が広いですからね」

「そ、そう…。じゃあ、今から私がこの”フリーガーファウスト”で弾幕を張り、機首をつぶします。貴方はその隙に」

「突っ込んでコアを確認する。私はそれを伝えたほうがいいですか？それとも…」

「やれると思ったのならやっても構わないわ。でも、判断を誤って危険な状態に陥っても助けてあげられるかどうかはわからない」

言外に本当に行くのかと問われたような気がした。ので、”写輪眼”でそれに応える。

「そのあたり含めて教わっていますからご安心を」

「それがあなたの魔眼…。思ったよりはつきり発動が見てとれるのね」

「かつこいいでしょう？」

ロスマン先生は少し笑って前へ向き直る。無線で一言つげ、前衛が散ったのを見てフリーガーファウストを撃ち込む。最後の一発が出るとこちらを向いてきたので黙って頷く。

「行きますー！」

煙に紛れるように突っ込み、すれ違うようにして接近、コアを見る。

”捻りこみ”で滑るように弧を描き、前から相対するように見た時、相手の左下から潜り右上の位置に出る。

一瞬同行戦の姿勢に入りネウロイと並んで飛んだあと、コアへ向けてまっすぐに突っ込む。オーラを刀身にまとわせ、そのうえで先端に”凝”。

「ハアアアア！」

突き刺した先端がコアを砕いた感触を感じると同時に刀を引き抜きながら体をひねり、反対側へ抜ける。ネウロイの破片を”円”で探し、避けつつ距離をとり、無線を入れる。

「見ててくれましたか？」

「…そうね、いろいろ言いたいことはあるけどひとまずはよくできました。ただ…」

「なんです？」

「本当は銃の扱いも見るともりだったのよ、どうしたものかしら」  
連携するならまだしも一人で突っ込むなら剣のほうが早い。などと考えてしまうのは自分が強化系だからだろうか。

「すごいやひかり！剣でネウロイを、わあ眼が！それが魔眼？」

「はい！写輪眼”なんて呼んでますが」「シャリン？」

前衛の二人やそれを援護していたポクルイーシキン大尉とクルピンスキー中尉とも合流した。大尉と曹長、それ以外で分かれて会話する。

「実力はあるようですね」

「問題は連携かしら。突っ込んで、切るか突く動きはすごいんだけど、魔眼を使わせることを考えると、どうしても近づく必要がある以上、管野さんより扱いが難しいわ」

「コアがわかるといっても、中型までなら数人で弾幕張ったほうが安全で、かかる時間もあまり変わらないでしょうし」

「へー、魔眼ってこんなはつきり模様が浮き出たりするもんなんだねえ」

「んなわけあるか。孝美のは魔力がうっすら張るくらいだったし、それは下原もそうだろう」

「全力出すと髪が真っ赤にかわるお姉ちゃんの方が意味わかんない魔眼だと思っんですけど」

「あゝあゝ!？」

「落ち着きなよカンノ、すごい顔になってる」

《お前たち、戦闘が終わったのならとつとと戻れ。二パと管野で残敵哨戒だ》

「了解！」

帰投後、曹長と一緒に執務室へと呼び出される。

「で、どうだった」

「筋はいいです。機動とタイミングを見切る目も。ただ、魔眼を活かすには近接戦を強いられる以上扱いが難しいうえ本人にも高い技量が求められますから」

「そうか」《隊長！ニパさんが墜落したとのことです！原因は冷却器に大量のイナゴが混入！》

「なんだそれは…」

「相変わらずついてないわね、回収班は？」

《墜落場所の特定ができず、時間がかかるそうです》

「夕飯には間に合いそうもないか…」

せつかなので申し出る。ニパともっと友好を深められるかもしれない。

「よければ私に行かせてください。出撃したのに夕飯が遅れるのはかわいそうですから」

「よかろう。現在ラドガ湖上空待機中の管野と合流して搜索に当たれ」

指示を聞いて、すぐに発進する。

ラドガ湖の南側で飛行する管野をみつけ、接近する。

「管野さん」

「あ？テメエ何しにきやがった」

「私もニパさんを探しに」「チツ、勝手にしろ」

管野が比較的高い位置から全体を見ていたのでこっちは高度を下げ、声をかけて探す。日が暮れだし、あたりが茜に染まったころになつてようやく見つけた。

「いました！」「なに!?いたか!」

ニパは木の枝に布団のように引っかかっていた。近づくと寝息が聞こえたが声をかければすぐに起きた。

「あれ、カンノ…に、ひかりも」

「あれ、カンノじゃねえんだよ心配させやがって」

おっツンデレか？などと考えていたら睨まれた。

ニパの両手を二人で片方ずつ持ってぶら下げるようにして連れ帰る。ニパのストライカーは損傷し、飛べ無くなっていた。

既に日は暮れ、あたりは真っ暗だ。万が一が無いように高度を上げ、雲の上に出る。

「おもてえ…」「あー！いってはいけないことを言ったなあー！」  
疲労で元気がない管野に対して、ひと眠りしたからか元気なニパの声を聴きながら飛んでいると、

「二人とも下だー！」

「なに!?」「な!」

いち早く気付いたニパの警告の後、下から雲を突き破って光線が伸び、続いてネウロイが姿を現す。

「新手か!」「グリゴリーが近いから!」

ネウロイはそのまま上昇し、こちらの上を占有する。

「チツ、銃を持つてるのは俺だけか!ニパを任す!」

「おいカンノー!」

ただの搜索だと思っていて銃も刀も置いてきてしまった。

ニパをこちらに預け、管野は一人で上昇し空戦を始める。

「502基地、こちらは雁淵!ネウロイ出現!現在位置はえーと」

「キロフスクのあたり!管野が一人で行っちゃった!」

《《こちら502基地、相手の規模は!?》》

「中型が一機!だけどすごい高くで戦ってるから管野の零式じゃ無理だよ!」

見れば、先ほどまでと打って変わり、ネウロイは管野の下側からビームを浴びせ、降下させないようにしている。

《《すぐにジョゼさんと下原さんが上がります!それまで持ちこたえてください!》》

「つて言っても二人のストライカーだって高空で戦えるわけじゃないし、管野がそれまで持つかどうかかも…」

下原は同じ零式二二型、ジヨゼのV.G. 39は水冷でいくらかマシンだがそれでも十分な装備はない。

「なら、私たちがやりますか?」

「どうやって? ひかりの零式だって高く上がれば動けなくなる! それじゃカンノと同じだ!」

「いいえ、動きません。ニパさん私と交代してください!」

空中でストライカーを片方脱ぎ、ニパに渡す。

「ええ!? 空中で履き替えろって!?! いや、履き替えたところでどうするのさ」

「私がニパさんの銃で撃ってニパさんがシールドを張る!」

「...それ、ストライカー履き替える必要がある?」

あるのだ。

「私シールド張るの苦手で防ぎきる自信なくて...」

そう、実は空戦機動や剣ばかり振っていた結果、若いのにシールドがそこまで強くないという、劣化もっさんと化しているのだ。

「し、仕方ないか...。カンノのためだ! やってやる」

必死に上昇するニパに背負われながら、銃を構える。普段使うものより小口径で射程が短いので気を付ける。

「おおい、カンノー!」

ネウロイの斜め下につき、ニパが声をかけ、管野に合図する。

こちらにも射撃を開始すれば、ネウロイの攻撃もこちらにも向く。結果、管野のほうに隙ができ、その瞬間に固有魔法”剣一閃”で突っ込む。

ネウロイはコアを殴り砕かれ、消滅する。

「やったあ! おおい、カンノー! カンノー?」

「つ、疲れた」

魔力切れで飛べなくなった管野をニパが抱え、その背中に乗る。ニ

パのストライカーは”俺”がつけている。

「やっとなり帰ってこれたー」

「おなかすきましたねえ…」

「俺はとつととシャワー浴びてねてえ…」

見れば、502のメンバーが滑走路で待つている。ネウロイを撃墜した段階で連絡を入れたため、ジョゼ・下原のペアもそこにいる。

「…ハツ、ハアツクシヨイ！」

「は？」

滑走路の直前に大きな水柱が立った。

「三人ともそこに正座です」

「ちよ、俺たちは悪くねえだろ！」

引き上げられた後、ポクルイーシキン大尉にお叱りを受ける。

ニパは”俺”が履いていたニパのストライカーから飛び出したイナゴが、鼻をくすぐった拍子にバランスを崩したらしい。

なので、落ちたことについて叱られたのはニパのみで、”俺”とカンは増援を待たずに戦ったことについてだ。

「クソっ…ねみいつてのに」

”グーツ”

「わあ、ニパさん今の一瞬で寝ましたよ。しかも人の肩枕にしてるせいで私動けないんですけど」

次に大尉が見に来るまで正座を続けるように言われ、格納庫の隅で3人並んで座っている。

「…管野さん？管野？」

「…まあ、連続での戦闘でしたし、管野さんもずっと飛んでましたから大目に見てあげましょう」

「ところで雁淵さんは平気そうですね？」

「剣術やってる人間は板張りの道場で正座くらいやってますから効  
きませんよっ。」

「それは…どうしましょう」



原作第4話前編　　改編の余波が直撃回。正直自分でももつといい展開あつたと思うく

ペテルブルグの朝は秋でもかなり寒く、佐世保で8年育つた身としては魔力なしでは正直定住したくないレベルだ。

朝食よりも大分はやくに起きてしまい、手持無沙汰だったことから基地の外周を特に目的もなく歩いていた。

基地は川に囲まれていて、一部に河原があつた。河原というよりは瓦礫や破片といったものも混ざっていることからなんらかの建造物が破壊された後の破片をまとめておいた感じだろうか。

川辺に石や岩が転がっている風景は佐世保で修行していた河口近くの川べりを思い出す。

「1、2、3…」

ふと懐かしくなり、時間も余つたことから懐かしの”石割”などやってみた。既にこなした修行な上、終えてからも修行を続けていた成果か、さして苦勞することもなく1000個割り切つた。

「へえ、面白いじゃない」

”石割”に夢中になつてる間に近づかれたらしく、声をかけられると同時に肩に手を置かれるまで気づかなかつた。

「うひゃーあ、ロスマン曹長、えと、おはようございます」

「はい。おはようございます。それで？今何をしていたのです？」

そう問いかけてくるロスマン曹長の目は細く、口元はうっすら弧を描いている。

「あははは、子供の手慰みですつて」

「扶桑の子供はそんなに精密な魔力操作で石を割り続けるの？それほぜひともカールスラントにも広めないといけないわねえ」

「いやあ、そうですね？」

目はさらに細められ、口角がさらに吊り上がる。

これは完全に返答を間違えたな。下手なごまかしをしたせいで怪しまれている。

この世界、魔力はほとんど何となくで使っているようなもので、わざわざ石を割るのに適した魔力操作を鍛えたりはしない。なのにそんなことをしてる奴がいて、おまけにごまかしてきたのだ、そりやあ疑うだろう。

「どうやって扶桑の子供はそんな魔力制御を身に着けるの?」

これで下手なごまかしをして、あとで他の扶桑ウィッチに確認されたら、とそこまで考え付いたところで、

「でも、管野さんや下原さんはそんなことしたことないし多分できないでしょうね?」

こちらが判断に迷っている間に畳みかけられてしまった。同時に逃げ場が封じられかけていることにも気づいた。

「扶桑のウィッチの中でもごく少数:どこかあなたしかできないんじゃない?」

「今までに見た扶桑のウィッチの中でそんな馬鹿げた魔力制御してる子見たことないもの」

「なのに、目の前で学生徴用の子がそんな馬鹿げたことをしている」「あとね?自分でもなんで思い出したのかわからないのだけどあなた、シールドを張るのが苦手だって言ってたわね」

「あの時は単純な訓練と経験の問題だろうと思っていただけ、今の魔力制御を見せてもらったら変だなんて思ったの」

「それだけ操れるのなら十分にシールドに魔力を集中できたはず。ましてニパさんを捜索に出た時の交戦で、あなたたちはほとんど動かなくてシールドと魔力消費の少ない零戦にだけ魔力を振り割ればよかった」

「なのに、あなたはあの作戦においてシールド役をニパさんに任せてあなたは魔力を消費しない射撃に回った」

「あの作戦を考えたのはあなたでしょう?」

「あなた、魔力自体はあまり多くないのではなくて?」

凶星だった。

実は、”念”の修行で増えた魔力自体は実はそこまで多くない。航空学校に入学した時点で周囲の子たちよりもいくらか多いくらいまでだった。いわゆるエースと呼ばれる人種たちや宮藤主人公様には到底かなわない。”念”の修行を始めたばかりのころは原作通りの魔力だったのを8年に及ぶ”念”の修行で平均ちよつと上まで増やしたのだ。H×H原作に登場したモラウやノブのような実力者たちの”発”のような大規模なものは行使できるようなになれる気がしない。

長時間の”練”や”堅”、”円”ができるようになったのは”纏”と”流”の習熟にともなつて、余すことなく魔力の全てを用いることができるようになった事と、より絞り出す方法を身につけただけ。

ようは原作と何も変わらない。

原作よりも少し増えた魔力を原作以上の精度で制御する。そこに、”練”という奥底から魔力を掻き出す方法を知っただけ。

細胞の一つ一つから絞り出しきる”練”は気絶すれば2、3日起きれなくなる。ただ魔力を消費しきっただけではこうはならない。

「…そうなんですよ！魔力が発現した時から少なくとも、それでもお姉ちゃんと一緒に飛びたくて、」

「ええ、だから。あなたのその魔力制御。どうやって身につけたのか教えて？」

できない。教えられない。魔力の制御は”念”そのもので、”念”を学べば自ずと魔力の使用に年齢制限も、男女の違いもないことがわかる。そうなれば、その方法を、具体的な修行方法を知る自分は周囲からどう扱われるかわからない。それこそ、”念”をどこから学んだのかを問われうっかり前世のことなど話したら間違いない日を拝むことのできない生活だろう。

「…」

だが、この場でごまかす方法も知らない。

頭がいつぱいになってグルグルして、

「用事を思い出したのでまたいつ「逃がすわけないでしょう！」  
ぐえっ」

だからその場から逃げ出した。逃がしてくれるはずもなかった  
が。

「曹長も雁淵もいないとはどういうことだ」

「まさかと思ってお部屋にもいったんですけどいなくて」

「…で、朝食の場にも現れずに呼び出したかと思えばどういう状況  
だこれは」

「わ、私は悪くないですよ。雁淵さんが抵抗するから」

「ああ、たんこぶが。これはジョゼさんに診てもらわないと」

全力で念を使っても逃げてやろうと思った矢先、石で思いつきり  
殴られ気づけば知らない部屋で少佐、大尉、曹長に囲まれていた。

「し、少佐、助けてください！ラル少佐！曹長が石で殴ってきて目が  
覚めたら知らない部屋に監禁されてたんです！」

少佐に助けを乞い、その場をやり過ぐすことを考える。うまくうや  
むやにできれば、と。

「状況証拠含めて言い訳できないだろうこれは…。私たちを呼んだ  
のは何だ？自首でもしたかったのか？」

「曹長…、どうしてこんな…」

「ま、待つてください！せめて話を聞いてください！私だつてこん  
な真似はしたくなかったんですよ！雁淵さんが逃げようとするから  
！」

「襲われたら逃げますよ！クルピンスキー中尉だけじゃ満足できな  
かったんですか！」

「伯爵と私かなんだと!？」

「双方落ち着け」

その場を混乱させ、曹長の発言を封じにかかる。この場を切り抜

け、何とか口封じできればまだ何とかなると信じて。

「このままでは埒が明かないな…。大尉、両方の口を縛ってしまえ」  
「…そうですね。どのみち両方から話を聞く必要があるんです、片方ずつ聞いていきましようか」

「ムームー！」

が、冷静沈着な隊長の判断はこちらの策を台無しにするものだった。

「ふむ…」

「どうしました？隊長。既に縛って5分は経過していますが」

「いやなに、5分経ったらロスマンのほうは落ち着いているのに雁淵のほうが興奮しっぱなしだと思ってな」

「確かに…。もしかして何か後ろ暗いことがあるのは雁淵さんの方なんでしうか」

「さあな、それは今から聞いて確かめることだ。曹長の布を外してやれ大尉」

「で？」

「…私は、ひかりさんがやっていた魔力操作訓練について聞きたかったんです」

「魔力操作訓練？」

「隊長や大尉は魔力を石にまとわせて千個の石をそれで割れますか？」

「いや、おそらくは集中がもたん」「私もです」

「ひかりさんはそれをやって、平然としていました。明らかになれた動作です」

「それで？それを知ってどうしたかったんだ」

「あれだけ精密かつ長時間の間魔力を操作する技術、新兵に仕込めればそれだけで生存率は段違いです。より強いシールドや必要魔力量の多い強力なストライカーを履けるようになります」

「なるほど。教育者として見過ごせなかつたわけか。で、頭部を石で殴打し、使われてない倉庫にふん縛る理由は？」

「それは、ひかりさんが逃げようとするから…」

「いや駄目だろう」「駄目ですよ」

曹長は顔を背けて黙り込む。大尉は、今度はこちらへと近づき今度はこちらの布を外す。

「で、逃げた理由を聞かせてもらおうか」

「…」

言い訳が思いつかない、逃げることもできない。ただ、口をつぐむことしかできない状況。

「…言いたくないらしいことはわかった。少し聞くが言いたくないのは自分のためか？それとも迷惑がかかる相手がいるのか？」

「…自分です」

「言った瞬間にまずいのか？」

「…えっと、言った瞬間は大丈夫でもいずれ気づきます」

「そうか で、それを言った時点で自分が今危ないということには気づいているか？」

「えっ」

「お前は危機感がなさすぎるな…。今の会話だけでもお前ひとりを適当な理由で拘束し、尋問で少しずつでも情報を得ればいずれ真実にたどり着けてしまうことになる」

「な！」

「本当にそうでしょうか」「いつもの言い

くるめね」ヒソヒソ

「で、だ。お前はこの場の人間が信じられないか？お前を売って利益を得るような人間だと思おうか？お前とも一緒に戦った人間を信じられないか？」

次々と声をかけられる。よく聞き取れないが502の人たちがそんなことするわけないそう思った。

「言ってみろ雁淵。一人で抱えるな。お前の持つ情報が本当に危ないのなら私たちが守ってやるさ」

「少佐…」

「隊長のほうが一枚も二枚も上手ね」ヒソ

ヒソ

「本気出せば波風立てずに言いくるめられるのに」

「どうしていつもはああも…」ヒソヒソ

「ああ、私の時みたいな」ヒソヒソ

4人で普段は使われない会議室へ行く。基地のはずれにあることから誰も近づかないらしい。話しにくいことを言うのならそのほうがいいだろうという気づかいだそうだ。

先ほどから、なんだか胸がすくような気持ちでいる。秘密を隠さないうで済むことがこんなにも気を楽にさせるなんて。

会議室にて、3人が席に着き、”俺”は前に出る。

「口で説明するよりも見てもらったほうが早いですかね」

そういつて使い魔なしで魔力を扱う。置いてあったメモ用と思わしき紙に魔力を通し、壁へと投げる。手前にあった花瓶をすり抜け石壁に半ばまで突き刺さった。ちよつとしたデモンストレーションだ。

「!? 使い魔はどうした!」

「これが私の隠していたもの、つまり、”使い魔なしで魔力が使えるようになつてしまう方法”」

とたん、隊長の顔がこわばる。

「それは、”誰でも”か?」

「それは”イエス”でもあり”ノー”でもあります。私は、使い魔との契約があつたから苦労なく使えましたがそうでないならどうすればいいかはわかりません」

「方法は?」「修行するしかありません。”念”の修行を」「”念”?」

「私が勝手にそう呼んでいる魔力を操作する技術のことです」

「魔力を操作する技術!」

曹長が反応する。

「それは私たちにも使えるものか？」  
次の少佐の質問は、必ず来るとそう思っていた質問だった。  
「できます。だって私ができたから」



原作第4話後編　　統合戦闘航空団つて天才の集まりなわけです

「念」とは魔力を自在に操る能力」

「魔力が誰の体にもあるかはわかりませんが少なくともウィッチにはある」

「しかし、ウィッチの魔力の操作は意識して訓練したものでないと垂れ流し状態です」

「これを体に留めることを纏」と呼び、これをするだけでただ使い魔力を介して魔力を発露させる以上に体は頑強になります」

ペテルブルグ502基地、

基地内の少し外れた場所にある会議室は、普段は使われない会議室であり、その場にはラル少佐、ポクルイーシキン大尉、ロスマン曹長。そして”俺”がいた。

「絶」とは魔力を絶つ技術。気配を消したり、魔力の消耗を少しでも抑えることで極度の疲労を回復したりすることもできます」

そこで、”俺”は3人に自分の使う技術”念”の解説をしていた。

「練」は通常以上の魔力を生み出す技術」

”練”を実演してみせると3人共反応を返す。

「感じましたか？」

「ああ」「圧迫感…とでもいうのかしら」「これが他人の魔力…」

3人に”念”の存在がばれた時、少佐から”一人で隠しても限界がある”、502の人間が信じられないか?”と言われ、結果信じることにした。

「魔力は邪念を持って攻撃すれば魔力のみで、動くことなく相手を殺しえます。まあ、少佐方には今更でしょうが」

ひとまず、その場にいた3人にだけ”念”の詳細を告げ、どう扱うかを決めることにした。

「そうだな。普段から魔力を扱っている我々だ。魔力が強大な力で

あることも、そんな強大な力を持っているウィッチがたやすく死ぬことも知っているさ」

「とはいえせつかくですからちよつとした実演でもさせてください」

そういつて腰を落とし、腰の前でこぶしを握った腕を交差させる。「今からもう一度、**練**をします。ただし、さっきのものと同じとは思わないでください」

3人が何となく身構える。大尉は立ち上がり腕を少し上げる。曹長も立って腕を持ち上げているし、少佐も組んでいた腕を解いた。

「では少佐。今からあなたを**殺**したい」、と思います」

「ほお」「ちよつと雁淵さん!？」

大尉が声を上げたが構わず始める。

「あなたを…殺す」

とたん、曹長は身を隠し、少佐と大尉はシールドを張る。

「今のが邪念をもつて魔力で攻撃するということなのですが」

「…なるほど。魔力自体での直接攻撃。ネウロイ相手にはわからないが人間なら殺しうるだろう」

ちよつとしたデモンストレーションのつもりだったが少佐と曹長は居住まいを正し、大尉には睨まれた。やりすぎたかもしれない。

「では、本題だ。どうやってそれだけの魔力制御…**念**？**だ**ったかを身に着ける」

「ウィッチである以上使い魔を出せば自ずと魔力に包まれます。まずはそこから」

3人に使い魔を出してもらい、目を閉じてもらう。実は移動してくる前に部屋でウィング編を読み返させてもらってから来た。

「イメージを。そして体感してください。貴方たちの体からは湯気のように魔力が立ち上っています。それは体表全体から立ち上り、空气中に霧散しています」

「……ああ、これだな。穏やかにだが噴き出すように出ている」

「あ、なるほど。激しく噴出しているわけではないんですね。魔力の放出ってこういう感じなんですか」

少佐と大尉はすぐにつかんだ。自分も最初に使い魔を出した時点で魔力自体は感じ取っていたのでイメージさえ伝われば簡単なのだろう。あるいは、それほどまでにウィッチの放出する魔力自体が多いのか。もしそうだとすると、

「ん…、んう…？」

ロスマン曹長が苦戦しているのもあがり近く、魔力が減退しているのが原因かもしれない。

現に、”凝”で見れば曹長の噴き出す魔力は他の二人に比べて弱弱しく感じられる。

「曹長、ちよつといいですか」

「な、なにかしら」

「無理やり精孔開けていいですか？」

ようは精孔が閉じかけているのではないだろうか。使い魔との契約で精孔が開き、以降徐々に閉じていき、二十歳になる頃におおよそ閉じ切ってしまう。使い魔の出し入れで魔力のおおよそのコントロールをしていたんだとしたら普段、魔力の消費しすぎで倒れるということがないのも納得できる。

「お願いできるかしら、ここで一人だけできませんでしたはごめんだしね」

「じゃあ、上脱いで背中見せてください」

顔を真っ赤にして下着をさらけ出す曹長。

「シャツ一枚で大丈夫ですよ」

「え!?そういうことはきちんと言葉に出しなさいよ!」

見て悲しくなる肉付きとか口に出さないようにする。姉の体はすこかったんだ…。

シャツだけを着た曹長の背中に手を当て、集中する。

「ぶつちやけ成功するかわからないんで頑張ってください」  
「えっ」

”練”で出したオーラを手に集め、曹長の背中に押し当てる。

「これ、雁淵さんの!?ぐう、ちよつと強すぎ…っ」

一度うめき声をあげるが、すぐに

「あの、大尉」「はい、なんですか?」「穏やかにとか言ってみましたっけ」「ええ、穏やかに噴き出している。そんな印象ですよ」

「すごい勢いよく噴き出してるようにしか思えないのですが」

曹長の魔力はいつそ異常なほどに噴き出し、近くにいた少佐はその圧を感じているようだった。

「あ、曹長それまじいです。早く落ち着けないと倒れます」

「ちよ、どうすればいいの」

「頭の前からぐるっと、血流のように魔力が体の内側を流れているのをイメージしてください」

曹長は苦悶の表情を浮かべつつ、強く目をつむり集中している。

「その流れがゆっくりりと減速し、最後には凧いだ水面のように体の表面を揺蕩うように」

曹長の顔からはしだいと険がとれ、ゆっくりりと自然体の姿勢へと動いていく。

「なるほど。自然体が一番楽みたいね」

「じゃあ、もう目を開けても大丈夫ですよ。お二人も今言ったイメージで”纏”を…」

”そういつて振り返るとすでに二人とも目をつぶって、すでに魔力を”纏”っていた。

「魔力を意識的に操るといっただけでこうも違うのか」

「暖かい膜につつまれている…、いえ、膜というよりも土?雪?」

「既に強い力を感じる…:というかまるで昔に戻ったよう」

「わあ…:いつの間に」

「まあ、隣で聞いていたのに何もしないというのものな」

落ち着いたところで、話を続ける。

「慣れれば寝ながらでもできますし、そのほうが修行にもなります」

「なんとというか…:基礎!て感じの修行をするのはいつ以来かしら」

「しかし、ただの魔力操作といった印象だな。使い魔なしでも使え

るようになるということにはあまり結びつかない」

「意識的に魔力を操作しているのは確かですが、そこまで精密な魔力操作という感じでもありません」

「外部に漏れると危険だというのはもつと後の内容ということか」  
各々魔力を纏った体を動かしたり感想を言い合っている」と、

《隊長！サーシャさんに先生、ひかりも！もうとつくに夕飯だけどこにいろのさ！》

放送の声はニパだった。窓の外を見ればとつくに日が落ちていた。

「そういえば私たち、お昼も食べてませんね」

「ああ、いかな。それはいかな」

その場はひとまず切り上げ、続きは食後ということになった。

「おせーぞー！先食ってつかんな」

食堂につくと、さつそく管野に遅れたことをとがめられる。

「すまない。雁淵の処遇について話していてな」

「ええ、本来の配属先へ送る書類とかね」

少佐がはぐらかしにかかり、曹長もそれに乗っかる。うまく話に乗れるかわからない”俺”と大尉は口をつぐみ、食事を始める。

夕食はいつもと変わらず進み、また解散した。ただ食事中、ニパが口を開かずつと顔を背けていたことだけが気になった。

食後、解散となり再度会議室へ向かう。残りの4大行に関する説明や念についても話すためだ。

人気のない離れた区画へ連れだつて入る。少佐が会議室のカギを開け、全員が入ったところで、

「御用改めであるー！」「ここで何をしているんだあー！」「怪しいなあ！4人だけでこそそとさあー！」

ブレイクウィッチーズが乱入してきた。

「ロスマン先生がひかりのこと気絶させたのを見ちやったような気がして」

「こいつが俺たちにそのことを相談して」

「で、昼食の席で聞いただけせばいいと言っていたら出てこなかったもんだから」

ということらしい。昼食後も探したが見つけれられず、夕食前になってダメもとで館内放送をしたら、気絶させられたはずの”俺”まで連れ立ってきたうえにそれらしい言い訳をされたから最初はそれを信じていたらしい。ニパ以外。

で、夕食後連れだつて何も無いはずの区画へ歩いていくのを見たことからあとをつけ、部屋に入った段階で管野が飛び出し、他の二人も後に続いたらしい。

「どうする雁淵？この状況」「少佐、言いくるめられません？」「無理だな」

「こいつらもお前が信じるといった502だぞ？どうする？」

「うぐう卑怯な…実は気づいてたとか言いませんか？」

「まさか」

もうごまかしがきく状態じゃないし、下手にごまかせば部隊の連携に亀裂が入りかねない。少佐もそれがわかってて言っている気がする。

「もう、いつそ全員ばらしてしまえ。信じるのだろう？」

「じゃあその代わり、何があっても少佐だけは道連れにしますからね」

「いいだろう。私も信じているからな、君含めて」

「と、いうわけでして」

下原さんとジョゼさんも急遽呼び出し、”念”についての説明をする。魔力の制御技術であること、その過程で使い魔無しで魔力が使え

るようになってしまうことからもしかするとウィッチでないものにも魔力が使えるようになってしまいかもしれない事とそこから予想される問題など。

「思ったよりずっと大きな問題だったねえ…」

「よくわかんねえけどやばそうだったてことはわかった」

「理解が追い付かない…」

とはブレイクウィッチーズのお言葉。

「とにかく今日のことは機密事項とする。同時に、再現性の検証のために全員に”念”を覚えてもらう。以上だ」

「大変そう…」 「でもすごそうだよ」

「おい、ひかりこれやったら強くなれんのか？」

「んー、そうですね。”念”の応用に”硬”っていうのがあるんですけど」

そうやって”硬”をする。あまりやってこなかったので”絶”が甘かったりするがそれらしくはなる。

「管野さんの固有魔法に似てませんか？」

「まあ、確かに…。つええのかこれ？」

反応がいまいちだったので、証明代わりに近くにあった机を小突く。すごい音と共に碎け、欠片がはじける。

「これと固有魔法かけ合わせたらすごいと思うんですよ」

「おおー！」

表情を一転させて目を輝かせる。原作主人公の必殺技でもあるし威力はある。ネウロイ相手に”硬”で殴りかかれるのは管野くらいだしちょうどいいだろう。

「早く教えろ！」 「応用を応用してやってるようなものなのでだいぶ後ですよ？」

そういうと管野は顔をゆがませ、今度は催促してきた。

「じゃあ、早く次を教えろ！」

”纏”にもっと習熟してからです」

「もう完璧だ！」

最後は隊長の「やかましい」の一言で互いに黙って終わった。





## 原作第5話　く冬將軍（ネウロイ）　く

「このカーシヤおいしー!」

ある日の朝、食堂には全員が集まって朝食をとっていた。

「このスープもうめーな」  
「オラーシヤではシチーというの。シチーとカーシヤ、日々の糧ってね」

今日の朝食はオラーシヤの伝統料理らしく、大尉もスプーンの進みが早い。

「下原さん、オラーシヤ料理ってどこで覚えたんですか?」

「こつちに来てから覚えたの。実は大尉もお上手なのよ」

料理が好きというだけあって下原さんのレパートリーは多く、限られた食材から各国の料理を再現してだしてくれたりもする。

「下原ちゃんの料理の腕はいつ食べても最高だよお」

「オラーシヤ料理もいけれど、昔出してくれた扶桑料理も繊細でおいしかったわよねえ。ひかりさんは何か作れるの?」

「料理ですか…お米を炊くとか漬物とかは料理かと言われるとちよつとなあ」

家の手伝いぐらいしかしたことないので自分で包丁を握った事はほとんどない。

「お漬物だって立派な料理ですよ」

「そうよ、それだってできない人もいるんだし」

曹長が見回せば、自覚のある者がそれぞれの反応を返す。気にしていないのが管野とクルピンスキーさん。苦笑いがニパ、ジョゼは目を彷徨わせ、意外なところで少佐が思いつきり顔をそらしていた。

「戦争って残酷ですねえ」

「お前も勝ち誇れるほどじゃねえだろ」

食事が終わって後、朝練をしてから部屋へと戻る。実は、初めての一人部屋であり、ど真ん中にこたつを置き刀掛けや今年の書初めなんかを飾ってある。

「おお、また掃除されてる」

割と服を脱ぎ散らかしたり、こたつの上に持ち込んだ缶詰を放置したまま忘れてたりするのだが、次の日の日中には綺麗になっている。ジョゼさんが掃除して回ってくれているらしい。ボタン

という戸を閉める音が聞こえたのでそちらへ向かう。近くの部屋をのぞいてみればジョゼさんがいた。割と神出鬼没な感があり、お礼を言う機会がなかなかないのだ。

「ジョゼさん！」

「ひゃい！」

「あ、すみません。いつも部屋の掃除してくれているみたいなんでお礼を言いたくて」

「いえ、そんな。私がやりたくてやってるので…」

「それでも助かってるんだから言わせてください」

ジョゼさんは目を合わせようとせずに、お礼を言わないでくれと言ってくる。

「おい！俺の部屋で何してやがる！」

話していたら管野が声をかけてきた。それでここが管野の部屋だと気づいた。

「いや、違うんですよ」

「何が違うんだ！」

「あ、あの。私はこれで」

管野に絡まれている間にジョゼさんはバケツをまとめて出て行ってしまった。

「ああー、結局お礼できたのかなあ…」

「てめーも出ていくんだよ！」

蹴りだされてしまった。

午後、会議室には502の全員が集まっていた。

「現在ネウロイはラドガ湖北方でその動きを停止しています。しかし、湖の凍結が始まると活動を再開し、一気にこちらへ南進してくる

と予想されます」

「湖の凍結って12月の頭だよな？」

「あと一か月足らずですね…」

ネウロイの侵攻について情報共有を行っていた。

「ですので、次の補給を待つて防衛線を再構築しなおす必要があります。今日の定時偵察の当番は誰ですか？」

曹長の問いかけにジョゼさん、下原さんが手を上げる。

「偵察範囲をラドガ湖北方ペトロザヴオーツク周辺まで広げます。気が付いたことはすべて報告してください」

「了解」

「…連絡が途絶えて4時間」

「僕のかわいい子猫ちゃん達、大丈夫かなあ…」

偵察班からは定時連絡すらも途絶え、基地に残った隊員たちはあわただしく出撃準備を整えていた。

なんかおかしいなと思つて久しぶりに記憶メモを確認してみたところ”下原ジョゼと出撃”冷気を発生させるネウロイ”の記述があり、原作にあつた戦いだということが分かった。

原作に描写されていない戦いも多く、記憶メモもとぎれとぎれの文章しか記述されていない戦いも多く参考にならない。どちらかと言えば501の方のネウロイのほうに記述されているくらいだ。

「みなさん！三人の搜索中止です！」

「「なっ！」」

「なんでだよ！」

「見ればわかります。ゲートを開放してください」

そう言つて開放されたゲートからは吹きすさぶ吹雪で真っ白になつた外が見えた。

「この視界で出撃は危険ね…」

「全員別命あるまで待機です」

「クソッ！」

その後、別命が出ることなく待機が続き、夕食の時間にまでなつてしまった。

席についた時、目に入ったのは紫色の液体。中には謎の粒が浮いていてひどい見た目だ。

「なんだこれ…」「見た目はスープですね…」

誰も手を付けようとしないうち、曹長が先陣を切る。

飲んだ瞬間に顔から血の気が引き、真っ青だ。

「おいしいだろうか？先生秘蔵の食材で愛情込めて作ったんだよ！」

厨房から出てきたのはクルピンスキー中尉。手にはおたまを持ち、軍服の上からエプロンをしてこっちに向けて親指を立てている。

「なんですつてええ!?!」

すると曹長が立ち上がり、厨房へと駆け込むと同時に甲高い悲鳴が聞こえてきた。

「わ、私が一年以上かけて溜めたオラーシャ産のキャビアが…」

何とも悲壮感溢れる悲鳴が聞こえてくる中、残った全員でスープ？に口をつける。と、同時に顔を青ざめさせ、口を押える。

ゲロまず。

「う、うおええ…」「ふぐつ、うええ」「飯はやっぱり下原じゃなきや

ダメだ…」

唯一、少佐だけが顔色一つ変えずにスプーンを動かし続けていた。

「さすが隊長…こんな時にも冷静ですね…!」

「まずい」

やっぱり隊長でもまずいんだ…。

夜も更け、ストライカーを使った今日の搜索は完全に終了した。

「陸上搜索班からの連絡は」

「まだありません。…お二人は本当にこの吹雪がネウロイと関係があるか？」

「空気が、妙に気になるの」

「あの、ところでなんで私ここに呼び出されてるんですかね」

ここは隊長室。隊長と戦闘隊長、教育担当の曹長の三人しか立ち入らない。ほかの隊員はせいぜい書類の提出か、隊長に用があるときくらいだ。

「確認したいことがある、雁淵。お前ならこの吹雪の中でも飛べるか？」

つまり、探しに行けということだろう。

「飛ぶことはできます。」周”でストライカーを覆って、お二人は”写輪眼”で。魔力なら近づかなくても見えますから。でも吹雪の中でペトロザボーツクまで行く自信は…」

そういうと少佐はニツと笑って、

「よし、ならば明日の夜明け前に飛んでもらう。案内に管野とニパをつける。お前もあいつも海軍だし、天測航法も推測航法もできるだろう。雲の上まではお前が2人を先導しろ、その後は2人に方角を確認させながらペトロザボーツクまで行け」

天測航法は星や月、太陽を見て自分の居場所を把握する飛び方で、推測航法は速度と角度から判断する。こつちでの経験が長い管野とニパの組み合わせならがいれば地図上の町まで飛ぶのはわけないだろう。

「了解！」

「夜明け前になっても変わらねえ、というかむしろ強くなってねえか？」

「スオムスでもこんな吹雪の中飛んだのは2、3回だなあ」

「えっあるんですか」

「帰投中に吹雪いたことが何度か」

夜明け前、格納庫扉の外は1m先も見えない真っ暗闇。この状況で航空機が飛び立つのは自殺行為でしかないがウィッチならば強引に雲の上へ出るくらいはできる。雲の上にさえ出せばその影響は少ない。

「つしやあー行くぜ！」早く見つけてあげないとね！」「お二人のこともですけどこの中を飛ぶ自分たちのことも心配しましょうよ」

雲の上まで2人を押し上げたあと、水平飛行へ移る。夜空は普段と変わらないはずだが、飛行しながら見るのは初めてだった。

「えーっと北極星があっちで…多分あいつらの飛行ルートはこっちだな」

「大丈夫かよ…不安になるなあ」

町も山も見えないとどの方向も同じに見える。

「二人は大丈夫かなあ」

「アイツらだって歴戦のエースだ。大丈夫だろ」

ふと気になったので聞いてみる。

「あの二人は502で長いんですか？」

「ん？そろそろ1年になるか？43年の12月。サトウルヌス祭の前だったはずだ」

「ジョゼさんはそうだね。下原さんはそのあと」

そうだったか？と管野は首をひねる。ニパにとつては思い入れのある事だったらしくよく覚えていようだ。

「アウロラねーちゃんが来たのもそのあたりだったからよく覚えている」

「あー、そうか。酒のねーちゃんな、覚えてる」

「そういうえば今年のサトウルヌスももうすぐだね」

そういうニパの顔は、年以上に幼く見える笑顔だ。

「今年もモミの木は陸戦の連中に任せよう。ありや空戦の仕事じゃねえ」

「モミの木もだけど他の飾りつけも用意しなくちゃ。ますますジョゼさんと下原さんを見つけないと」

「あー！そうか今年は下原がいるってことはもっとうまいもん食べるのか！去年と一緒なら物資使いたい放題だろ」

「ところでサトウルヌス祭ってなんですか」

聞き覚えがあるようなないような。

「あれ、扶桑の人つてもしかしてなじみない？でも管野は知ってたよね？」

「俺はこっちもそこそこ長いからな。そういう行事とかはどっかの部の部隊の人間が騒ぐと部隊全体に伝播するもんだ」

「で、結局なんなんですか？」

「大正天皇祭って言ったほうがわかりやすいか？12月の終わり、大晦日の前くらいにやる祭りだ」

それで思い出した、要はクリスマスだ。ただしこの世界はウィッチの存在もあってか宗教の色が薄く、北方由来の祭りとして楽しめる。

「なんか聞いたことあるかもしれないです」

「なら、当日を楽しみにしていなよ！準備から参加するともっと楽しいよー！」

「基地要員みんな集まるからな、普段会えないようなのと知り合えたりもするぜ。さつき言った陸戦の奴らも紹介してやる」

雑談を交えながら飛んでいると雲が途切れだしたことに気づく。

「あ？なんだこりゃ」

「この雲、そこまで広い範囲つてわけじゃないんだ」

眼下にはペトロザヴォーツクが見えてきた。

「町が丸々凍っちゃってるー！」

「うわあ、人が住んでなくてよかったですね」

完全に凍り付いた町は人が住めるような環境ではなくなっており、うず高く積もった雪が戸を埋めている。

「ここはどうだろう…二人はいるかな」

「わっかんねえ。おいひかり、見えるか？」

そう言われて”写輪眼”をつかう。特にこれと言って見えるものはなく、手掛かりになりそうなものもない。

「駄目です。お二人の魔力は見えませんが」

「これはひかりがだめなのか二人がいないのかどっちなんだろう

な」

「さすがにその言い草はひどくないです?」

その後もしばらく飛び回ってみるが明かりなどは見えない。分かれて探していたが、ニパが無線で集合をかけたので聖堂を目印に集まる。

「仮に二人がここに居たのなら、寒波がどつか行ってから探しても無事だと思うんだ。だから、ここに居ないと考えてもう少し遠くを探してみないか?」

というこもらしい。管野も”俺”もそれに賛成し、町を出る。空の向こうからは日が顔を出しており、すぐに空が明るく青くなる。

「ここまで明るくなれば俺達でも十分探せるぜ」

「もう一回手分けして探そうか」

二機とも即座に身をひるがえし、離れていく。自分も再び”写輪眼”で地面を眺めながら飛ぶ。無線はつながりっぱなしで情報を共有する

《ラドガ湖もカチカチだ》

「これまずくないですか?ここ凍ったらネウロイが来るんでしょう?」

《そうだよ!?まずい!一刻も早く基地に戻って伝えなきゃ!》

《そのためには早く二人を見つけねえと!》

《うひゃあ!》

《おいどうした!》

突如無線からは悲鳴が聞こえ、心配する声もそれに続く。悲鳴を上げたのはニパですぐに返事が返ってくる。

《あ!二人を見つけた!砲弾かなにかを炸裂させて合図にしたんだ!破片がすぐ横を通り過ぎて行ったけど!》

「安定の不運ですねえ」

「驚かせやがって」

ニパが伝えてきたのはさして離れていない地点ですぐに全員が合流した。

「二人とも無事か!無事だな!」



「ええ。…ごめんなさい、私のせいで3人にまで迷惑を」

「そんな！定ちゃんだけの責任じゃ！」

二人は言い合いを始めてしまいこちらが置いてけぼりになってしまふ。

「そもそも二人は何で遭難したの？吹雪いてくる前に戻ることで」

「ネウロイの仕業です。あの吹雪はネウロイの仕業なんです」

「なに!?!」「なに!?!」

多分”記憶メモ”に書いてあった奴だろうなと思いつつ驚くふりをしておく。二人の説明によればかなりの大型で、加えて近づきすぎるとこちらのストライカーをも凍り付かせるほどの冷気をぶつけてくるという。

「ラドガ湖が凍っていたのもそいつの仕業か！」

「しかも、あいつは徐々に基地に向かって近づいているんです」

「だから、定ちゃんはここでネウロイを撃破しようとして…」

また二人の顔が暗くなるが、落ち込んでいる時間はないとすぐに取り繕う。

「だが、問題は冷気か…」

「近づきようがないし、銃の射程の外じゃ倒せないよ」

すると、下原さんが足元にあった藁藁を持ち上げてこちらに差し出してくる。

「だからこれを作ったんです。放棄された戦車の燃料にアルミの粉末を混ぜた特製の焼夷材を」

「これをぶつけて着火すれば、ガラスの熱割れで装甲を砕いてコアをむき出しにできるんじゃないかって」

「ガラスの熱割れ？なんだそりゃ」

「冷えたガラスのコップに熱湯を注ぐと温度差で割れやすくなるんです」

「着火はどうするんですか？13mmの曳光弾で着きますか？」

「これを使います」

そう言つて下原が指さした先には手作りの弓と矢。

「…まじ?」

「扶桑人やっぱり変だよ。拳、刀ときて弓とかいつに生きてるのさ」

「全員が全員ってわけじゃないですからね?」

「少なくともこの場の三人に言われても説得力ないよ」

ニパの厳しい言葉に思うところのあった3人は何も言えない。下原さんも口を引きつらせてる。一緒にされたのが嫌だったのだろうか。もしそうだったらこのまま弓矢を使わせ続けさせてやる、色物の仲間入りだ。

「まあ、とにかく準備を手伝ってください。急ぎましょう」

全員のストライカーに申し訳程度の耐寒装備をほどこして飛び立つ。応急処置用のテープを巻いたに過ぎないが発動機の熱を逃がさないようにということらしい。

焼夷材は”俺”とジョゼが持ち、管野とニパがおとり役を務める。

「いっくよー!」 「事故んなよ!」

おとり役は正面からネウロイに対峙し、その隙に攻撃組が別方向から上をとる。着火役の下原さんは後ろで弓を構え、焼夷材の投下役二人が突っ込む。

「いけえ!」

「やあ!」

ぶちまけられた焼夷材の入った葉莖に下原さんの矢が激突する。砲弾の信管をつかったという矢じりが炸裂し、誘爆を引き起こす。

結果ネウロイは全身に亀裂が入り、やがて砕けた。中心にはコアが怪しく光る。

「下原さんこれ」

そう言ってから下原さんに機銃を渡す。ここまでの段取りはすべて彼女が決めたのだからとどめも彼女がいいだろう。

「えーわざわざ私がやらないでもひかりちゃんか…」

「いいからー!」ここまでやったんだから公式記録にも自分の功績だつて残してくればいいんですよ」

そういつて押し付けければ、目を合わせて頷いてから受け取る。そのまま上昇し、コアに向かって真つすぐに飛び、やがて射撃で破壊する。ふりかえってこちらへ戻ってきた彼女はどこか自分に自信がついた、そんな感じだった。

「やったね定ちゃん！」

「うん。二人もありがとう」

「おわりましたねえ」

「そうだね…おなかすいたなあ」

「なら、早く帰ってご飯にしましょうか」

《ニパが落ちた！あの程度じゃやっぱり寒さに耐えられなかったらしい！》

「その前に回収しないといけない人が増えたみたいです」

「あはははは…」

基地へと戻ると出迎えに来てくれた大尉からねぎらいの言葉を受けつつ、下原さん、ジヨゼさん、ニパの三人は医務室へ行くように言われた。吹雪の中で一晩過ごしたことから念のためということらしい。結果、夕食を下原さんが作ることはかなわず、大尉がうでを振るった。クルピンスキー中尉は曹長によって拘束されていた。

「食べ逃しちやったね…」

「今から温めなおしても時間がかかりそう。そもそも残っているかどうか」

「おなか…減った…」

食後の散歩にと要塞を散歩していれば、医務室組を見かけた。思ったよりも検査に時間がかかったらしく、今になって解放されたらしい。

3人には普段からお世話になっているし、少し恩返しをしてもいい。

かもしれない。

「3人共」

「わっ」「ひかりさん」「おな…へ…」

「よかつたら部屋に来ませんか？ちよつとした缶詰くらいならありますよ」

「えっ、いいん」「行くツツッ！」じゃ、じゃあお世話になりますね？」

食い気味に来たジョゼに若干引きつつ3人を部屋へと案内する。電気をつけて部屋を明るくすると、下原さんがこたつに反応する。

「えっ、こたつ！こたつなんて持ち込んだの？」

「そうなんですよー。北欧に行くのはわかってましたからいろいろお願いして用立ててもらったんです」

入るように促すといそいそと足をいれる。疲れもあつたのか顎を天板に乗せ、垂れてしまう。すぐに気をもちなおし、背を伸ばしたが繕えてない。

「わあ、そんなになつた定ちゃんは初めて見た」

「言わないで…気が抜けちゃつたの…」

「わあ、あつたかい。これいいね」

ニパとジョゼさんも続いて腰を落ち着けたのを見て、お茶と秘蔵の缶詰を出す。

「缶詰なんてどこから…」

「扶桑から持ち込んだのをとつてあるんですよ。お赤飯もどうですか？お米久しぶりなんじゃありません？」

出したのはそれぞれ、缶、お赤飯、ミカンのシロップ漬け。どれもお気に入りだが、大事にとつておきすぎて食べる機会を逃し続けていたものである。自分一人ならとつておくが、人にふるまうのなら出すのもいい。

「おいしいツツッ！」

「ジョゼさんテンション高いね…。おいしいのは確かだけど」

「お米…、小豆も久しぶり…」

「私が来た時の補給ってなんでお米なかったんですか？」

疑問に思っていたことを聞く。ペテルブルグに来た時、扶桑艦隊か

らの物資も一緒に来たはずだが、502で扶桑食は食べたことがない。

「あの時の軍需物資がほとんどで、艦隊も北欧駐留要員の交代が主な任務だったの。だから食材とかは次の船団だったのだけど…」

「グリゴリーの航路封鎖もあって届かなくなっちゃって…。大西洋側はそっちの部隊で消費しちゃうし…。また扶桑食がたべたい…」

ジョゼさんがそういうと下原さんが思案顔になる。やがて頷いたかと思えば、

「なら、明日の朝食は扶桑食にしてみました！こっちの食材でも作れるものを！」

といったのでこちらも。

「そんな下原さんに相談があるんですよ」

「なんですか？」

「ここに、さして料理ができるわけでもないのに海外行だからと調味料を買い込んだアホがいます」

そういつて荷物入れからは醤油の瓶と味噌の入った小壺をだす。

欧州派遣経験のある教官から持っていくよう強く言われたものだ。

「いいんですか！」

「大事に使ってね？」

「2人とも無事で本当によかったわ」

朝食の席。全員が席に着いた後、曹長が切り出す。

「それにしても吹雪がネウロイの仕業だっただなんて」

「下原さん達、今回は大手柄だったわよ」

「いえ、任務ですから」

軍服の上から給仕服姿の下原さんはそう言って配膳をする。ジョゼさんもそれを手伝っている。

「あら、おいしそう！」

「今日は扶桑料理にしてみました」

焼き鮭におひたしと卵焼き、きんぴら、茶わん蒸しに味噌汁。白米がないことを除けば典型的な和食である。

「おおおおお！」

菅野が大興奮で食べる。

「あら、これ…」

「缶詰の底にキャビアが残っていたので使ってみました」

茶碗蒸しに入ったキャビアに気づいた曹長がうれしそうに笑う。

「キャビアの使い方よくわかってるわねえ。どこかの偽伯爵とは大違いだわ」

「キャビアなんて塩辛いだけで何がいいんだか」

「だからあなたは偽伯爵なの！」

そんなやり取りを横目に下原さんに食事の感想を言う。

「おいしいですよ！この味噌汁！白米がないのが本当に惜しい！」

「ありがとう！やっぱり私はお料理が好きみたい」

「はぐっ、もぐ…」

「ジョゼさんはせめて言葉にしましょうよ」

声を発する時間も惜しいと言わんばかりに視線で意思を伝えながら食事を続けるジョゼ。

「やっぱり食事は大切ですね」

「うまい」

## 閑話1

「今日は一段と冷えやがるな」

「いよいよ冬本番って気がしてきたね…」

ついに12月に突入したサンクトペテルブルグ基地。

石造りの要塞はそのほとんどを白く染め上げられ、積雪で開かない扉、凍った地面、死ぬほど寒い廊下といった問題との戦いの始まりを予感させた。

朝に布団から出るのが一日で一番億劫とまで言う人もいる。

「おまえ、ここ初めてのくせに平気そうだな…北の生まれだったか？」

「私はお姉ちゃんと一緒に佐世保の生まれですつてば」

自室を出たところでいつもの三人が一緒にいるのを見つけたので、一緒にさせてもらった。3人も特に示し合わせていたわけではないらしい。

食堂へと向かうが、廊下は石造りで窓にもガラスがはまっているが風が吹き込まないだけであり、室内だというのに気温は外とあまり変わらない。部屋にはセントラルヒーターがあり、一応の暖房がされているが、少しでも熱を逃がさない用にと誰もが部屋を閉め切る。それでもまだ寒く、布団の中で縮こまり朝を待つ。

「纏 してるとそこまでじゃないですよ」

「は？」

「うわっほんとだ。廊下移動するくらいなら十分持つよこれ」  
ただし、例外もある。

502の隊員の”念”は概ね”練”を始めたくらいだ。誰もがさした苦労もなく”纏”を覚えたという直視したくない現実から目をそらしたくなる。

加えて一部の、具体的には某撃墜数世界三位が既に”絶”に手を出しているが、今年中は全員”絶”の修行に入れたら御の字だろう。

「慣れれば寝ながらでもできますよ。”練”と違って消費するわけでもないのよ」

「何年もやってるってだけはあるねえ。やっぱり教えてはくれないのかい?」念の出处ってやつは」

「勘弁してくださいってば」

”念”については変わらさずその技のみでどこから教わったのかなどは言っていない。修行内容が具体的である以上自分で考えたなどは言えるはずもなく、かといって現在ありもしない漫画を参考にしていますなどとほざいたら正気を疑われる。

なので、誰にも言えない、そこまで大事なこともない、他に知ってる人もいないではぐらかし続けている。

「隊長にもあまり問詰めるなって言われてるだろ。それよりおなかすいたよ」

「だな。ちよつと急ぐか」

「今日の朝食は何かなー」

そういつて少し足を速めた二人についていく。面倒からは逃げるに限る。

「僕が悪かったから露骨においていこうとするのはやめてくれないかい?」

食堂と厨房はヒーターが効いているため快適に過ごせる。が、食事時以外は節約のため食堂の方の暖房を切っている。そのため、朝食後に部隊員が集まるのは搭乗員待機室か談話室となる。搭乗員待機室は出撃待機のウィッチ2人程度が待機することを目的としているため狭く、集まるには向かない。

逆に、談話室はある程度広く暖かい。隣にお湯を沸かせる程度のキッチンがあり、お茶を飲みながら他愛のない話をしたり、本を読むなどの時間をつぶすのに使われる。

全員が朝食を終えるといつも通り、少佐からの通達があった。

「…朝食も終わったところで、今日の伝達事項についてだが、先日からの懸念が現実となった」



「まさか…」

「談話室の暖房が故障した」

この事態により隊員は3つの反応に分かれた。

もともと執務室にこもる組、食堂（厨房）を多用するため影響の少ない者、そして普段談話室にこもっているため行き場のない者達だ。

談話室の暖房はこのところ効きが悪く、不安に思われていた。原因は不明だが談話室での修行なのではないかと勝手に思っている。

「どこにいりゃいいんだよ！」

「隊長！修理までの間だけでも食堂を開放できないかな!？」

「駄目だ。節約は上からの命令でもある」

少佐はそんなに規則とかを厳格に守る質ではなかったとは思うのだが、軍人である以上命令には逆らいつらくしぶしぶ皆従うことにした。

その場は解散し、隊長たちは執務室へ行った。

外が吹雪いていることからネウロイの侵攻もないだろうという判断で、今日の待機は無しとなった。そのため、残った面々は自室へと戻るだろう。

今日は自室で修行でもするかと考えて食堂を出る。

「ねえひかり、ひかりの部屋に行ってもいい？」

出たところでニパに声をかけられた。

「ひかりちゃんの部屋に行くのかい!? だったら僕も行きたいなあ！」

「中尉を部屋に招くのはやめとけ。ろくなことにならねえぞ」

すかさず中尉が反応し、管野が止めに入ってくれる。

とはいえ、クルピンスキー中尉だけを部屋に入れるのなら流石に警戒するが、ニパとついでに管野もいれば大丈夫だろう。

「だったら、三人とも来ますか？ 私は構いませんよ」

「中尉はやめとけ！ いいのかいひかりちゃん！」 ぜってえ碌なことにならねえぞ！

「こたつなんて持ち込んだのか！」

下原さんと同じ反応をした管野がこたつへと滑り込む。ニパも同じように入ったことから中尉も足を入れる。

「暖かいねえ、良いじゃないかこれ」

お客様に出す用にお茶を用意し自分も座る。あいにく自室の菓子類は切れていて無いし、そもそも朝食を食べた後なので用意しない。お茶は茶葉なのでかさばらず、2度使うようにしているため結構余裕があるのだが、菓子などの気軽につまめる物は割かしはやくに食べきってしまった。

「お！お茶まであるとは気が利いてるな」

「これなんだい？扶桑のお茶？」

「そうですよ。緑茶です」

「これがほろ苦いってやつなのかな。結構おいしい」

「へー」

三人とも落ち着き、それぞれがそれぞれのことを始める。

管野は自室から持ってきた本を読み、中尉は何やら手紙を書き始めた。共通語で、あて名が女性名ばかりなので察した。

ニパは談話室から持ち込んだレコードとプレイヤーをいじっている。

手持無沙汰なので扶桑から持ち込んだ模型を作る。この時代なので当然プラスチックではなく木製で、意外と作りがいい。塗料があったら塗ってみたい。

「あつそうだ。ニパ君直ちゃん、それにひかり君もだけど」

「んえ？」「ああ？」「はい？」

「いつもの来てたよ。ちよつととってくる」

そういつて出ていったクルピンスキー中尉が戻ってくると分厚い紙束をいくつも抱えていた。

「手紙ですか？」

「そうそう」

見れば、家族をはじめ、クラスメイトや校長と教官の連名などもあった。変わり種では行きに乗った艦隊からも来ていた。つていう

か一番多かった、乗っていた艦の名前が一緒に書いてあるので知らない差出人でもわかりやすい。それ以外にも知らない差出人がある。読めない字とか明らかに個人じゃなさそうなものもある。

「おお、まだ半年もたつてないのになんか懐かしい人たちが」

「私もいろんな人から来てるよー。でもイッルは無いなハッセはあるのに」

「あー、艦隊と原隊と、うげ、まーたこいつらか」

家族からの手紙から見ていると管野がおかしな声を上げる。見ればいくつかの手紙をまとめて人の部屋のごみ箱に突っ込もうとしていた。

「えー。変なもん人の部屋に捨てないでくださいよ」

「あーうつせえうつせえ俺だつて見たくもないんだこんなもん」

「あー、”国債”かあ。見てごらんひかりちゃんあてもある」

そう言つてクルピンスキー中尉が指し示すのは字の読めなかった手紙。何かと聞いてみればカールスラント政府からの国債購入の勧誘らしい。

「えー、カールスラント、オラーシヤ、スオムス、ガリアあたりはまだ隊員でかわりがあるからいいがヒスパニアとか一切かわりがないんだが」

「なあカンノ、ビルマ連邦つてどこ」

「アジア」

他の三人も受け取っているらしく、全員のをこたつの中央に集めたら山ができてしまった。

管野は国債勧誘の比率が多く、除けたら手紙がだいぶ減ってしまった。

「うーんやつぱり孝美はまだ起きてねえのかな…」

「あ、こつちの家族からの手紙に書いてありましたよ。舞鶴の海軍病院で治療を受けることになったとか」

なに、貸せ！と言われて取られてしまった手紙には安否を問うものや海外での生活の違いに戸惑つてはいないかといった内容でクラスメイトからもそんな内容だった。

逆に校長たちからのものはそのあたりの心配は控えめで、戦果を挙げたかどうかや部隊員について尋ねる内容が多かった。最近酒をたしなみだしたらしい校長が鮭を送ってこいとか書いてあったので酒を送ってきたら鮭をくれてやると返すことにする。ちよつとしたお茶目だ。

「なんて返信したもんかな…」

「おつ、閃いた」

この人数に返信するのは大変だなと書く内容を考えていると、中尉がこつちをみてにやりと笑う。

「ひかりちゃんせつかくだからちよつと変わった近況報告なんてどうだい？」

「はいい？」

「ちよつど戻ってきてきたみたいなんだよねえ。リベリオンから」

「ああ、あいつ戻ってたのか」「あー、なるほどね。面白いこと考えるじゃんか」

「手紙もらってききたときに執務室に案内されてくのを見たんだよね。今から行けばちよつどいいかも」

話についていけないうちにこたつから引き出され、廊下を連れられて歩く。どこに行くのかと聞くと格納庫だという。目的の人物はよく格納庫に出没するらしい。

「ああ、いたいた」

「おや、こんどこそ新顔かな？」

格納庫にいたのは見慣れない、記者風の女性。首には大ぶりのカメラを提げている。男装の麗人、そんな感じだ

「はあ…、雁淵ひかりです。階級は軍曹」

「私はデビー・シーモア。リベリオンのグラフ誌と契約している…まあ記者みたいなもんかな」

握手を求められたので答える。記者というあたりで中尉のたくらみを理解してしまい、柄にもなく緊張する。

「まあまあ、そう固くならないで」

「はい、えとシーモアさんは何を聞かれるのでしょうか」

「ああ、デビーでいいとも。そうだね、軍曹ってことは新任かい？着任までの経緯なんか聞いても？」

「それは勘弁を。軍機に触れますので」

さつそく取材が始まったかというところで、声がかかる。見ると発進促進装置の陰から大尉が顔を出した。どうやらまた、自分で整備していたらしい。

「お、いいね」

何か琴線に触れたのかデビーは素早く写真を撮る。

「いいのか大尉撮られちゃって」

「検閲で弾きますから大丈夫です」

「軍機でもないのに弾きやしないさ」

今度は少佐が出てきた。何をしに来たのか問えば、気になったかららしい。最近気づいてきたが、この人結構お茶目なところがある気がする。

「で？雁淵に何を聞くんだ？」

「そうですね…本人に聞くのもいいですが同僚に聞いてみるのもいいですね」

そう言っただけで周りにいた隊員たちに話を聞きだしたデビーを慌てて止めようとしたが隊長に静止されて阻止できなかつた。ひどい羞恥プレイだと訴えれば中尉が興奮しだし、大尉に助けを求めれば黙ったまま視線でお前も道連れだと訴えてくる。

最終的には、インタビューだけで無くユニットを装着した状態や武器を持った状態での写真なんてものまで撮られてしまった。止めなくて良いのかと何度も少佐に確認したが面白そうだから何とかするなどと言っただけで後押しする側だった。

その日の夕食の席でも話の種にされてしまい、早々に食事を終えふて寝た。

なお、談話室のヒーターは結局ペテルブルグまで来ていた工兵の中から手を出せる人間を大尉が見つけてきて何とか動くまで持つて行ったが、それまでの間、部屋をブレイクウィッチーズ共に溜まり場

にされてしまった。

「ああ、あと悪いがその記事の掲載は来年を迎えてしばらくしてからにしてくれないか」

「？、どのみち送る手間も考えれば出回るのは二月になるかならないかごろだと思いますが、分かりました」

原作第6話　くアニメって必ず仲間に焦点を当てた話があるよねく

「こらー！待ちなさい！」

「ごめんなさいーい！」

ある日の午前。

格納庫で曹長から欧州戦線で使われる武器に関する講義を受けていたところ、騒がしく追いかけてこをする二人がそばを駆け抜けていった。

こちらを盾にするかのように、グルグルと周囲を回っているのはニパ。それを、腕を振り上げながら追いかけているのはポクルイーシキン大尉。

ニパはしばらく格納庫中を使って逃げ回っていたが、転がっていた箱を飛び越えた先にあったオイル缶を踏んづけてひっくり返り、頭から地面に落ちた。

「いてて…。どうしてこんなところにオイル缶が転がっているんだよ…」

整備も行う格納庫である以上オイル缶はあるだろうが、ピンポイントでそれが横倒しになった状態で足元に転がってくるのはさすがとしか言いようがない。

頭には見事なたんこぶができ、見るからに痛そうだ。

「ニくパくさくん」

「サ、サーシャさん…、アハハ…」

「そこに正座あ！」

追いついた大尉に見下ろされ、逃げられないと悟ったのか笑ってごまかしにかかったがあえなく罰を言いつけられてしまう。

素直に従ったニパはすぐに体をゆすり始め、辛そうだ。

「またユニットをこんなにして…」

ニパが追いかけられていたのは、例によって例のごとくストライカーユニットの破損が原因らしい。

天性の不運故にありとあらゆる災難に見舞われるニパは、特に出撃中に災難が降りかかると、ほぼ確実にストライカーユニットをダメにするので、502での物資をやりくりしている大尉はそりゃキレる。

ニパもわざとやってるわけではない以上理不尽と思わなくもないが、決して安くない装備がポンポン破壊されるともなれば言いたくない気持ちもわかる。

なお、502にはニパに加え、空戦で突っ込みがちな上にその場のテンションで装備を投げ捨てる管野と、固有魔法を発動するとユニットに負担がかかるうえ飛び方的にも被弾が多いクルピンスキー中尉の二人がおり、三人合わせて”ブレイクウィッチーズ”などと不名誉な呼ばれ方をしている。改善の余地があるのに直さない二人のほうがたちが悪い気もするし、そつちもそつちでやっぱり叱られている。

「ニパさんたんこぶ大丈夫ですか？なかなか立派な奴が…」

「ああ…、平気平気」

声をかけてみれば、何とも意気消沈しているという雰囲気である。

魔法力を発現し使い魔であるフェレットの耳と尾を出すと、ニパのたんこぶはみるみる縮み、消えてなくなった。

「私の固有魔法は超回復だね。他人は治せないけどほら、自分の怪我ならこの通り」

「ひかりさん。こつちに集中なさい、いつ必要になるかわからないんだから」

ニパと話しすぎたようで、曹長に注意されてしまう。

こちらがそちらに向きなおれば、ポクルイーシキン大尉の方はストライカーをいじりだす。どうやら今回の機体は致命的な破損ではなかったようで、整備班に回さずに自分で直すつもりらしい。

ポクルイーシキン大尉の固有魔法は”見たものを忘れない”というもので、加えてどうやら透視かなにか、分解せずとも機械の中を見る力があるらしい。魔法力を込めて見る必要があるらしいが応用の利く能力だ。

「さっすがサーシャさん！これならまた墜ちても…」



「また？」

「あ、いや…。あ、安全第一で…」

迂闊な発言をしたニパが語気を強めた大尉に詰め寄られているのを横目に、曹長の方を向く。すると曹長は大尉の方を眉をひそめて見ている。

「サーシャさん？ 戦闘隊長であるあなたの力は、できれば修理以外で活用してほしいものね」

「…すみません」

大尉が申し訳なさそうな顔を見ると、ニパの表情も曇る。ニパからすれば自分のせいで叱られてしまっているようなものだし、かといって自分でどうこうできる問題でもないことがくやしいのだろう。

「はあ。ひかりさん講義を再開しましょうか」

「はい。MG42についてからでしたね」

今日の講義、欧州戦線で使われる武装は、主にウィッチが使用するものについてであり、今使っている扶桑製の兵器が補給の問題で使えなくなるようなことがあった際に最低限の訓練で使えるよう事前に学んでおこうというものだ。

「そうよ。MG42はカールスラント製の武器で、カールスラントウィッチが多い西側の戦線で多く見られるわ。特徴は速い連射速度と比較的小型で取り回しがいいことよ」

「確かに扶桑の九九式よりも大分小さいですね」

扶桑の九九式は航空機用の機銃をウィッチが取り回しやすいうようにレイアウトを変更したもので、全長が180cmを超える。初期のものなら130cmほどだが性能に難があり、比較的初期に置き換えられ予備的に保管されているに過ぎない。

対するMG42は歩兵が運用する物がベースであるため小型で、120cmほどだ。

加えて、九九式が40kg前後なのに対し、およそ11kg程度だ。

「ええ、取り回しの良さや発射速度の速さは初心者から熟練のものまで広く使われる要因となったわ。空戦において銃口と敵機が交差

するのなんてほんの一瞬、その一瞬でより多くの銃弾を叩き込めるMG42はより確実に敵機を撃墜できると言えるわ」

他の機関銃が毎分500〜800発程度のもが多い中で毎分1200発もの弾丸を吐き出すのはこの銃くらいだろう。

「ただ、正直装弾数の少なさと威力の低さがあまり…」

「ええ。7.92mmは正直な話、装甲の固いネウロイ相手では頼りないともいえるわね。特に大型のネウロイともなると装甲が抜けない上に、どこにコアがあるか探ることから始めなきゃいけない以上消費はより多くなるわね。…あなたの場合は別だけど」

毎分1200発発射する割に装弾数は75発しかなく、一瞬で吐き出してしまう。頻繁な弾倉交換が必要になるが、空戦の最中に交換するのは大きな隙になる。カバーしてくれる僚機が常にいるとは限らない。

「やっぱり私は使うのなら九九式がいいなあ」

「ひかりさんの九九式は20mmの方でしたね。あの大火力に慣れてしまうと確かに使いづらいかも」

九九式は航空機用だけあって口径が大きく、それに比例して威力も大きい。20mmの装弾数も100発と60発で選択でき、発射速度も平均程度にある。MG42が異常なだけだ。

欧州派遣艦隊所属のウィッチは補給の問題で、リベリオン規格の12.7×99mm、通称“ファイティーンキャリバー”を使う”改”モデルを使用していることがほとんどだ。が、扶桑からの学徒動員兵に持たせる余裕はないらしく本国仕様の20mmを持ち込んでいる。そのため、管野の12.7mmと”俺”の20mmで補給が二重になってしまっていたりする。

「大型のネウロイを相手取るのには、最近ではもうフリーガーハマーがあつて当然みたいなどこはあるわね」

「あれの威力は別格ですよね」

”フリーガーハマー”

カールスラント製の多連装ロケット弾発射機。弾頭の大きさ、ひいては炸薬と魔力を含む量が多いことから多大な威力を誇り、弾丸で装

甲を貫くのではなく、爆発の衝撃波で叩き壊すといった攻撃となる。欠点は装弾数の少なさで、ロケット弾を9発しか装填しておけない。

502においては曹長のみが使用する。ちなみにMG42は少佐とニパ、曹長、たまにクルピンスキー。九九式は本国仕様は”俺”のみ、”改”を下原、管野。あとの二人はそれぞれの国の銃を使うし、クルピンスキーはStg44を好んで使う。

「あれは、引退が見えたウィッチの寿命を延ばすのにも一役買ったのも普及した要因ね。距離をとつても威力が変わらないからシールドが弱って接近戦ができない以上はね、私もこっちに來てからは使いだしたものだ」

「…この前MG42使つてませんでした？」

「久しぶりに使いたくなっただけよ？スコアを稼ぐならやつぱり機銃だし。最近は調子がいいの」

《ウウ》

「ああ！」「っ！」 「警報!」「敵襲ですか!」

《北方監視所がネウロイの襲撃を受けた。出られるものは全機出撃せよ》

突然、格納庫内にはサイレンが響き渡り、次いで少佐が出撃命令を出す。

北方監視所はペテルブルグの中に位置し、ある程度の部隊が駐留していた。

「行かなきゃ!」

「ニパさんは留守番です。まだ修理が終わってないですから」

「ええ〜!そんなあ…」

大尉の語気はまだ強かった。心なしか目つきも少しきついような気がする。

《状況は》

「目撃した兵によれば砲撃は一発のみ。ペテルブルグ外周部から撃ち込まれたものだと推測します」

現場となった監視所に到着してみると、4階建ての建物の一部がその上の尖塔部分ごと根こそぎ吹き飛ばされ、その周囲も崩れていた。

「クソツ、とうとう町の近くにまで来やがったか!」

「今まではラドガ湖が陸上型ネウロイの侵攻を阻んでくれていたけど…」「この前凍っちゃったから…」

管野が憤りを露わにすれば、ジョゼと下原が反応する。先日の気象に影響を与えるネウロイの影響でラドガ湖が凍って以降、連合軍は陸上型ネウロイの侵攻を警戒し監視体制を強めていた。

この監視所もそれを受けて兵員の増強を行っており、ゆくゆくは監視所を増やすそのための事前準備をしていた。その矢先の攻撃だった。

「隊長、指示を」

《サーシャに任せる》

「ええ!」

少佐は判断をポクルイーシキン大尉に一任した。戦闘隊長なのだし、現場での判断に任せるとなればおかしなことでもないだろう。

「それでは戦闘隊長、ご命令を♪」

「こ、これより手分けして周辺空域の探索を始めます。ラドガ湖方面を重点的に探ってください」

「了解!」

クルピンスキー中尉が茶化すが、それを流して大尉は指示を出す。その場の隊員は少佐とニパ以外がおり、班を作って捜索に当たることになった。

《こちら、下原班。ポイントAには異常ありません》

《ポイントBも同じくどうぞ》

「了解しました。帰投してください」

”俺”の班は大尉と曹長で他は下原ジョゼ組と管野クルピンス

キー組だ。

すでに時刻は夕刻に入っており、太陽が半分近く沈んでしまっている。

「これよりネウロイの搜索は陸上ウィッチに引き継ぎます。ロスマンさん、雁淵さんと先に戻っててください。私は最後にもう一回り」

「了解。行きますよ雁淵さん」 「了解」

大尉の指示に従い帰投する。

「もうすぐペテルブルグ市内に入るわ、少し高度を下げましょう」

「了解」

曹長の指示に従い、高度を下げる。同時に監視哨にも連絡を入れる、ネウロイに間違われて警報を出されたり砲撃されても困る。

「こちら…」

《ヒュウウウウ…》

まって、砲撃音!？」

こちらが連絡を入れようとしたちょうどその時、頭上を飛翔する黒い影が恐ろしい速度で過ぎ去る。

次の瞬間、大気が轟音とともに震え、土煙が高くまで上がる。

「ひかりさん、行くわよ!」

「えっ!?!被害確認ですか!?!下手人始末ですか!?!」

「被害確認の方!」

「監視所の次は貯蔵庫か…!」

「物資が不足がちな今、貯蔵庫をやられたのは痛いな」

502基地のブリーフィングルーム。

全ウィッチ隊員が集まり、現状把握と情報共有を行う。ちなみに他の隊員が2人並ぶように座っている中で一人だけぼっちだったりする。人数が9人で奇数なのが悪い。統合戦闘航空団の定員は10だから11人だっただけなのに。

「すみません…私が油断したばかりにネウロイを取り逃がしました」

ラドガ湖上空で別れた後、大尉はネウロイが砲撃した瞬間に立ち会ったらしく交戦もしたらしい。しかし取り逃がしてしまい、今なおネウロイはどこかに潜伏しているらしい。

「失敗は誰にもありますよ、あはは」

ニパはフォローを入れたつもりなのだろうが、傍から見ると関係が悪化させてるようにしか見えない。

「今回も撃たれたのは一発だけ。ペテルブルグから88kmの地点の雪原地中に潜んでの超長距離ピンポイント砲撃」

人類側に88km以上も遠くを狙えるような砲はない。80cm列車砲で50km届かないぐらいだ。この世界に存在するかはわからないがパリ砲ならばとどく、が、第一次大戦のころだし、そもそもピンポイント射撃ができない。パリ市内に落ちればいいか…程度のものだ。

「驚いたねえ、こいつは一流の狙撃手だね」

「いくらネウロイと言えども、これだけの長距離からピンポイントに狙うのは不可能です。ですが…」

クルピンスキー中尉が言ったことを曹長が肯定する。戦争初期の頃、ネウロイの色がまだ銀色で、実弾で攻撃していたころは長距離を曲射してくることがあったらしいがそんな超精度の砲撃はしてこなかったそうだ。現在は光線が主流になり、曲射は減っている。

「観測班から、攻撃の標的となった施設からは微弱な電波が発信されている」との報告が上がっている」

「ええ!?!」「どういうことですか!?!」

発言を引き継いだ少佐の言葉に動揺が走る。

「砲撃を誘導するマーカー役のネウロイがいるということよ」

「じゃあー町の中に、その、ネウロイが…」

ジョゼさんが不安がちに言い、下原さんと目を合わせる。町中にネウロイが潜んでいるということは、いつでも攻撃を受ける可能性があるということであり、仮にも人類の勢力圏にひそめるとなれば暗殺じみたことが起きるかもしれない。

「そこで、部隊を二つに分ける。エディータ、クルピンスキー、管野、下原、ジヨゼは、砲撃ネウロイを搜索し、発見次第撃破」

「へっ、よっしゃあー！」

「サーシャ、ニパ、雁淵は町に侵入したマーカー役を搜索しこちらも撃破する。二人はオラーシヤとスオムス出身だ。多少は土地勘もあるだろう」

「でも、私は南部の生まれで、この街には…」

大尉が不安そうな顔でそう告げると、

「まあ、お前なら何とかなるだろう」

少佐は腕を組み、なぜかキメ顔でそういった。

「そんな人事みたいに…」

「私がついてますよサーシャさん！一緒に頑張りましょ！」

「、ええ…」

翌日になって、朝からそれぞれ出撃し、こちらの班はペテルブルグ市内を捜す。市内のほかの軍関係施設を中心に巡回していく。また次目標になるであろう施設の周辺を搜索しようということだ。

「隊長にはああ言ったけど、実はこの街に来たのは小さいときに買い物に来た一回きりだけなんだよね」

「実質土地勘ないようなものですねえ、おっと」

「おお、見ないで避けた」

ペテルブルグ市内は高い建造物が多く、ネウロイを搜索しながら飛んでいると時折進路にかぶる。

「はあ…」

「あー…、大尉はこの街詳しいんですか？」

気難しい顔をしていた大尉に空気を紛らわすべく話しかける。

「昨日も言ったとおり私は南部の生まれで、この街には疎開するまで祖母が住んでいたらしいということしか」

「じゃあ大事な街ですね！絶対守らなきゃ！」

「…どうせ無人なのだから街を防衛することに意味はありません」

「うえ!?でもおばあちゃんの家が…」

「私自身は何の思い入れもありません。祖母を訪ねたことありませんから」

（軍人として今のセリフはセーフなんだろうか…?）

「無人の町を守るのではなくネウロイを倒すことがウイツチの責務です」

「そんなあ…」

「くれぐれも余計なことに気をとられてまたユニットを壊すようなことの無いように」

大尉はそう言つて会話を打ち切り、それと同時に通信が入る。

《第二貯蔵庫付近から未確認の電波が発信されていることを観測班がとらえた。至急向かつてくれ》

「了解」

到着した時点で第二貯蔵庫は跡形もなく吹き飛ばされており、黒煙が上がっていた。第二貯蔵庫は高射砲部隊などで使われる砲弾等を含む可燃性の高いものが貯蓄されており、それに引火したのだろう。監視哨よりも被害が大きく、一面焼け野原といった感じだ。

電波が確認された時点で配備部隊を避難させるよう少佐が事前に通達していたことが功を奏し、人命は守られた。

「間に合わなかった…」

「散開して！まだ近くにネウロイがいるかもしれない！」

「はい！」

「うーん…どこだあ…、痛あ！くつそおツイてない、つていたあ！」  
散会した直後、持ち前の不運を発揮したニパが銅像に激突したかと思えば、その銅像がうねり、次の瞬間には足が長い、角ばったタコのような姿のネウロイとなつて逃走した。

「擬態能力を持ったネウロイ!？」

「追いますよ！続いてー！」

「はい！」



ペテルブルグ市内を使った鬼ごっこが始まる。こちらは三機がかりだが、相手は地表を滑るようにして逃げ回り、慣性の法則を無視するかのようなターンを見せてこちらを巻こうとする。

なお、大尉はかなり容赦が無く、機銃をあたりかまわずばらまく。それを追う形になっているこちらの二人は大尉が射線に入ってしまうこともあつてほとんど撃てていない。加えて、二パは不運が足を引っぱり、看板に頭をぶついたり木箱に突っ込んだりで無茶苦茶だ。「もう！なにをやっているの！」

実はこちらもついていけてなかったりする。町中をすごいスピードで追いかけてこする大尉を一瞬見逃した時にはもう影も形もなかった。短い間隔でカーブを繰り返すものだから死角に入られると次どつちに行つたか分からない。

「ひかり！ネウロイは、サーシャさんは!?!」

「私も見失っちゃつて、一回上に上がりましょう！」

「わかった！」

上に上がるとしばらくして大尉自身も上がってきた。下を見まわしているようだが、どこか上の空だ。

「ごめんサーシャさん遅れた！ネウロイは!?!」

「私…この街を知っている…?」

結局この日は砲台、マーカーどちらも発見破壊が出来ないままに日が暮れてしまい、全機帰投することとなった。ネウロイは自分の身を削って砲弾を生成しているらしく、日に3発が限界らしい。解析班がそう結論付けたとか。

「そつちもダメでしたか」

「ああ、出てから引つ込むまでが早すぎる。砲撃音がしてから撃つたんじや間に合わねえ」

夕食の席で砲台攻撃班と会話する。今日だけで三度の砲撃があつたがネウロイは撃つたびに大きく移動するらしく、かといって散開して索敵範囲を広くとれば、火力が分散し撃破できない。

「そつちは?出くわしたつて聞いたぜ?」

「相手の能力と場所が悪すぎます。ペテルブルグの街中は入り組んで一度見失ったらおしまいな上、擬態能力を持つてるとかもう…」  
「なんだそりゃ」

「奴さん、大胆不敵に第二貯蔵庫近くで銅像に化けてこつちをやり過ぎそうとしてたんですよ。ニパさんが不運にも衝突しなかったら絶対わからなかったです」

「なんとまあそれはニパ君が不運なのかネウロイが不運なのか」

「どつちもじゃねえか？」

「バツサリですね管野さん…、あつはいこれジョゼ。おかわり」

「ありがとう定ちゃん」

「こつちはあまり打つ手がなさそうな気がしてねえ。これ以上の被害を抑えられるかどうかはそつちの撃破にかかっているよ？」

「いらぬプレッシャーを…」

翌日。

今日も午前から全機出撃し捜索に当たる。マーカー側に増員する案もあったが、同じように振り回されるだけだろうとのことで、それならば砲台側で発射を妨害するほうが目があるとの判断だ。

「大尉が別行動な理由って何か聞いてますか？」

「え？ああ、うん。サーシャさんね。一人で街の地形を覚えるのに集中したいんだってさ」

ニパはどうも今朝からボーっとしており、ちらちら大尉の方をみていた。

正直気になることが多く、被害が大きいことから”記憶メモ”を頼ったりもしたがあのメモ、憑依からしばらくたってから書いたことあつて参考になることは書いていない。いらぬ雑学がほとんどという有様だ。

「…この街全部ですか？」

「さすがにそれはないよ。次に狙われそうな施設の周辺を記憶してあぶりだすんだって」

「なるほど…厄介な擬態能力を封じるわけですか…つて、ニパさん

前！」

「ぐえっ！ってこんなところに銅像が…？」

「あたりですよニパさん！この銅像ネウロイです！」

塔の屋根から突き出すように銅像が生えているという珍妙な光景に写輪眼を向けてみれば、ネウロイは擬態を解いて逃走する。

擬態中のネウロイは銅像と何も変わらず、”円”にも反応しなかった。写輪眼で見れば力の流れともいふべきものが見える。加えて、擬態していた銅像は昨日ニパが激突した銅像と同じものだ。

「大尉！ネウロイ発見です！ポイントH-14！あー、またニパさんが事故って、こっちで後を追います！」

単騎で後を追っているとすぐに大尉が追い付いてくる。追い付かれたかと思えば、角を曲がるたびに徐々に追い抜かれ、大尉の後を追う形になる。

ネウロイが曲がった直後に大尉が後を追うと、光に目がくらんだのかそのまま街路樹に突っ込んでしまいバランスを失ってしまった。

「きやあー！」

「大尉！」

ストライカーも脱げ、倒れ伏す大尉に近づいてみれば、大したケガもしなかったようですよと立ち上がる。

「大尉大丈夫ですか。大尉？」

声をかけても反応せず、あたりを見回している。

ニパも後から追いついてきたが困惑している。

途端、走り出したかと思えば民家へと入って行ってしまい慌てて後を追う。追い付いてみれば何やら写真立てを抱きしめてほほ笑んでいた。

（正直さっぱり状況が分からん…）

まあ、おそらくアニメの演出的な奴なんだろうが登場人物からだとなんもわからん。

「サーシャさん…？」

「…ごめんなさい。任務に戻ります」

ニパがためらいがちに聞けば、大尉は写真立てを戻し、こちらに向

きなおった。

やっぱりわからん。

「さつき、カンノから連絡があったよ。砲台型を見つけて交戦中だつて」

「そう、早く私たちもマーカーネウロイを見つけたいところだけども……」

民家から出て、ストライカーを履く。管野達の方は、砲台型の装甲が固いうえに本体の火力もなかなからしく、ビームの乱射に攻めあぐねているらしい。

「くっそー……。あの辺に通信所があるってことはこのあたりが次の目標なのかも」

そう言つてニパが見上げた先にはこのあたりでも随一の高さを誇る建物があり、おそらくはそれをアンテナ塔として使っているのだろう。

「……ちがう」

「え？」

「あの塔に尖塔は無い！」

そう言つて飛び出した大尉は寺院の屋根にあつた串のように伸びた部分を攻撃した。どうやら“俺”がアンテナ塔に使っているのだと思つていた部分はネウロイの擬態だつたらしい。

「しまったー！」

大尉の攻撃でネウロイは消滅したが、消滅直前にネウロイの一部が奇妙な点滅を繰り返し、それはネウロイがマーカーとしての役割を果たしたと実感させるものだった。

《すみません！撃たれました！》

《あと50秒でそちらに着弾します！》

「了解！至急退避します。このまま巻き込まれれば私たちも無事ではすみません」

「で、でもここにはサーシャさんの、」

「言つたはずです。無人の町を防衛する必要はないとこれは命令で

す」

指示通りに退避する。途中、大きな鉄塔が併設された近代的な建物があつたがおそらくそちらが通信施設なのだろう。

”俺”が通信施設が破壊された場合被害は他よりも大きいだろうしどうするのだろうと考えていると、

「な、ニパさん!？」

「はい?えっ」

大尉の驚く声に目を向けてみればニパが隊列を離れ、ネウロイの砲弾に突っ込んでいくところだった。

「うおおおおお」

ニパが気合と共にそれをシールドで受け止めたかと思えば数瞬の拮抗のうちに大爆発。吹き飛ばされていくニパを慌てて大尉が受け止め、地上へ下していった。

しばらく呆然としてしまい、ハツとして合流してみると大尉がニパさんに抱き着いて泣きじやくつていた。

「うわー!ひかりいー、見てないで助けてよオ!」

(蚊帳の外感凄いな今回…)

とりあえず思ったのは、今回の主人公はおそらく大尉とニパなんだろうなっということである。

原作第7話　　くサトウルヌス祭（クリスマス）　　く

「ついに川まで凍ったか…」

ペテルブルグはさらなる寒気に襲われるようになりだし、基地内でも改めて注意事項が周知された。金属製のものに触るときはよく確認してから触るようにだとか頭上氷柱注意などだ。

「おーい、ひかりー…こっちこっちー!」

今朝はニパに呼び出されており、約束の場所へ来てみればニパと管野の二人がソリを用意して待っていた。

「管野さん重装備ですねぇ」

”纏” 覚えてからは余裕そうだったじゃないか

管野は分厚い生地のできた何とも動きにくそうなコートを身に着けたうえでいつものマフラーを巻いていた。ポケットに突っ込まれた手にも出撃中に使う手袋もはめられているようでガタガタ震えていることも併せて見ているだけで寒さが伝わってくる。その割に下は何もつけておらず、ももをこすり合わせている

「慣れたら寝ながらでもできるってお前言っただろ…」

「ああ…、寝てる間に解けてたわけですか」

「お、おう。しかも寝る前は余裕だったから薄着でな…。そのタイミングで川が凍りだすレベルの寒波が来るとはついてねぇ」

寒さに耐えることで精一杯なのかいつもの覇気が微塵も感じられない。下原さんに見られたら帰ってこれなくなりそうだ。

「ラヴァア川は12月の初めには凍り始めるんだよ? 今年も暖冬かなあ」

「どこが暖冬だ! これだからスオムス人はあああ」

「まあまあ、それでソリがあるってことはこれで遊ぶってことですか?」

「そ! せっかく川が凍ったんだしね」

「意味わかんねぇ…」

「お、ようやく日が昇り始めたか」

「今のペテルブルグは10時日の出の16時日没だからね。スオムスだと一日中日が昇らない極夜になったりもするよ」

日中がどんどん短くなり、それに合わせて勤務時間も変化があったりもした。実は一番影響が出ているのが下原さんで、唯一の夜戦要員であるため睡眠時間をずらしたりで食事を作る回数が減って本人も、そして何よりもジョゼのストレスがたまりにたまっていった。

なぜか扶桑式が定着しているじゃんけんの結果ニパ管野がソリに乗り、”俺”が押す。

「やばいやばいやばい」「寒い寒い寒い」

「そんなおおげさな」

”纏”を貫通してくる冷気に全身が痛い。

スオムス生まれのニパはソリの前側にいるにもかかわらず、笑顔で気持ちいいーねー、などと言っている。

ソリにある程度勢いがついた時点で飛び乗り、慣性の法則で滑っていくのを楽しむ。日が出てからは氷の表面が溶け出し、さらに滑る距離が延びだした。

「お、次は私が押す番だね」

「うーし、じゃあどっちが前に座るかだ」

「絶対負けないです」

写輪眼使つてでも勝ちにかかったがさすがにずるいと言い寄られ使用を禁止されてしまった。

互いに空戦で鍛えた動体視力であいこを続けたが、振り下ろす右手ではなく後ろ手に隠した左手を出す”スイッチ必勝法”で勝利をもぎ取り管野を風よけに使うことに成功した。

「日が出たらそこまでもなくなっただな」

「あそこまでムキになることなかったね」

「なんだろう…この敗北感」

ソリで滑るのもすでに何回か繰り返しておりそのたびに方向を変えていた。

「あっ」

「どうした?」

突然ニパが声を上げ、前を指さした。

「……こころ辺氷が薄い気がする」

「お前の不運に巻き込んでんじゃねー!」

「脱出!」

ここで逃げられるようならニパは不運と言われていない。三人そろって川へと落ちる。

「まあ、今回は特に備品も壊していませんし大目に見ますか……」

(大尉感覚おかしくなっていないか?)

冷えた体をサウナで温めた後、朝食の席で大尉からお叱りを受ける。

軍人が朝から遊んだあげく被服を川の水でぐしゃぐしゃにしてくるのは大目に見ていいのだろうか。

「お食事ができましたよー」

下原が朝食を持ってきた。台車に大鍋が乗せられており、そこから全員に取り分けられる。現在の下原は朝と夜のみ食事を作っており、昼は各自で用意するか用意してもらおうかだ。

「あー……、下原ちゃん。なんだい?これ」

「ニヨツキに似てるわねえ。これちゃんと煮えてる?」

「ん?んー……んう?」

「ピエロギ……じゃないよねこれ」

「具の無いペリメニ?」

「んー……。あむつ。……んう?んえー……」

「これ、すいとんか?」

「味噌も醤油もなしだと一瞬わかりませんねえ」

「すいません。今ある食材だとこれが限界で」

今日の朝食は味の薄い汁に入ったすいとんで、欧州勢には不人気だった。これがもつと味付けが濃ければ普通においしかったように思うのだが、他に具も入っておらずただ薄いスープに練った小麦粉の塊が浮いているだけでは受けも悪いのだろう。



「現在、ムルマン港からの補給が途絶えているうえに、先日の砲撃事件で備蓄のほとんどを焼失してしまっていますから…」

朝食後、ブリーフィングを行うために会議室へと移動する。そこで、現状に関する説明がされた。

現在のペテルブルグは陸の孤島ともいえる状況にある。

近隣の港は巢が近いこともあって使用できず、少し離れたところから陸路で送ってくるしかない。その陸路も線路は防衛しきれないことから使用されず、車両を用いて輸送するしかないが非常に効率が悪く、加えて一度襲われれば一瞬でせん滅されてしまうことからある程度の護衛を張り付ける必要がありおいそれと行えるものではない。

「スオムス側からの補給は」

「要請はしていますがあちらも残る補給線は北方からの陸路のみで余裕があるわけでは無いそうです」

「補給線の奪還作戦自体は立案中ですが、今の我々はその日の食料すら…」

「しばらくはずっとあれ食べることになるのかあ…。えつと…ちんとん？」

「すいとんな」

「現状改善策は無し、か。現状維持しかないわけだな」

結局こちらからうてる手はなく、最悪の場合一時撤退すらもあり得るとの結論を出した。

「明日は基地恒例のサトゥルヌス祭がありますが…」

「今年は中止だな」

「ええ〜!!」

「なくにがええ〜!だ。物資も補給もないのにどうしろってんだ」

「燃料不足で暖房停止。食料補給のめど立たず。あるのは武器弾薬だけ、それも基地にある分だけで余裕があるわけでもなし」

「武器弾薬じゃ祭りは出来ねえよ」

会議後、ニパ管野の二人と基地内を歩く。ニパが会議の最後に声を上げてしまったことを管野がいじるので乗ってみる。

ニパはサトウルヌス祭に強い思い入れがあるらしく悔しそうだ。

「うぐぐ…わたしは諦めないよ！何もごちそうや豪華な飾りつけがなきゃ祝えないわけじゃないんだ！つつましかでも祝えればそれでいいんだ！」

「祝わないのが嫌ってことですかね」ヒソヒソ

「ああなるほど。なんでもいいからとにかくこの時期に祝いたいてわけか」ヒソヒソ

いろんな人に相談してみる！というニパに付き合ひ、基地の人間たちを声をかけに行くことにする。

「とうわけなんだサーシャさん」

「うーん、確かに一理ありますね…」

最初に尋ねたのは格納庫にいた大尉。いつ見ても格納庫にいる気がする。

「確かにつつましやかでも何かを祝うという気持ちは大切かもしれませんが。できることはあるでしょう」

「今更だがサトウルヌス祭に欠かせないもんでなんだ？」

「本場のサトウルヌス祭を知らないの何とも」

そう言っているとは何か思いついたようで、

「小さいころ、木彫りの人形が枕元に置いてあったことがあります。木材なら自由に使える物が十分にありますし、全員が送りあうのではなく回す形にしましょう」

「輪になって隣の人間に送るってことか。手間もかからなさそうだしいいな」

「あとは、へそくりがある人はそれを出してくるかもしれないね」

「ガリアではブツシュ・ド・ノエルって丸太みたいな見た目のケーキを食べるんだけど…」

「探してはいるけどやっぱり無いですねえ」

「丸太…」

「食えんのか？それ」

「あくまで見た目だから…」

祝いの場、パーティーをする以上やっぱり何か食べる物は欲しいという管野の意見で今度は厨房組に声をかけた。

下原さんは柵に頭から突っ込んで何かないか探しているがやはり何もなさそう。

「ペテルブルグの町にまだ人がいたころなら買いに行けたのだけど」

「最寄りの町まで買い出しに…いや駄目か」

ストライカー用の燃料も節約したがっている少佐は許可しないだろう。

「いつもニパさんが採ってくるキノコは？」

「ジョゼがそう言う。」

「なるほど、それなら任せておいて！」

「なら、今晚中にレシピを考えておきます」

ニパが採ってくるキノコは基地の周りにある森や少し離れたところにある公園にあつたもので自生している。

出汁も取れて体も温まるキノコはまさにうってつけと言えるだろう。

「あとは、クルピンスキーさんにも聞いてみようか」

「アイツかあ…」

「ふーん。じゃあいい話をしてあげよう」

自室で私物だろうコーヒーを飲んでいた中尉は、サトウルヌス祭に關して何か知恵はないかと尋ねるとまずは快く部屋に入れてくれた。

「実はこの基地ではサトウルヌス祭の夜、銀髪の狐女が現れるんだ」

「狐女？」

「身長は151cm、本人は19歳と言っているが実際はサバを読んでいるバアさん狐で夜な夜な若いウィッチの生き血をすすりに来るんだよ…」

「う、うええ。生き血を…」

「ん、んなのいるわけねえ」

(151cmで狐で19歳って答え言ってるようなもんじゃない)

「ほら！後ろに！」

「うわああああああ」

「え!?行くんですか、置いてかないでくださいよ！」

「あっははははは」

ダッシュで部屋を出ていく二人を追って部屋を出る。明らかに特定個人を示すような特徴ばかりで怪しくもなんともなかったはずなのだが

ウワアアアアアア

後ろから聞こえてきた悲鳴は、きつと悪事がばれたということなのだろう。

サトウルヌス祭当日。

格納庫で木彫りにいそしんでいるとゲートからモミの木を抱えたクルピンスキー中尉が入ってくる。

「いやー、やっと運んでこれたよオ。いっちばんでつかいのを持ってきたからねえ、おーい！」

「おおー、いいの持ってきたね」

「こんだけ立派なの持ってくれば先生も許してくれるでしょ」

例の狐女呼ばわりの罰として木こりの真似事をやらされていたらしい。

「ああ、そのことなんだけど」

「ん？何か聞いているのかい？」

「私の代わりにキノコをとってくるようにだって。その間に私たちはツリーの飾りつけてしてるから」

「そりゃないよお…」

「ロスマン先生も一緒に行くってさ」

「え、それほんと？急にやる気出てきた」

そう言つて中尉は中へ曹長を捜しに行つた。その場に残つた組はツリーを立てた状態で固定することから始めた。

「そろそろ厨房に行つてみようか。おなかすいたし」

ツリーを立て、急ごしらえの飾りで飾り立てた後、良い時間になつたので昼食をとりに行くことにした。

夜に出す本番の前にスープを作ってくれるらしいと聞いた。

厨房に入るとそこには曹長と下原・ジヨゼ組がいたのだが様子がおかしい。

「プクツヒヒ」「グツ、ウイヒ、ヒ」「ウツククククク」

「えつなにこれ怖い…」

「ど、どうしたの皆!?!」

三人は机に突つ伏して口を押えていた。顔は真っ赤で肩は震え、時折噴き出すと手の隙間から汁が飛び出す。ホラーか何かを見せられているような気分だ。

「このキノコを料理にしたら、ブツ、ククク」

曹長がそう言つて器を差し出してくる。ニパが受け取つたそれは湯気の立つた濃い色のスープにキノコが入っており、においも相まってとてもおいしそうだ。

しかし、それを見るニパの顔は引きつっており信じられないものを見たような顔をしている。

「これって”ワライタケ”じゃん!なんでこんなのだ!?!」

どうやら毒キノコの類だったらしい。器にはまだ結構な量が入っており、実際に口にしたのはそこまで多くないのかもしれない。

「クルピンスキーさんが絶対おいしいって、ぷっ、くひひひ」

「ええー…」

(下原さんのこんな顔はレアかもしれない)

そんなことを考えていると食堂の方からクルピンスキーが入ってくる。一人だけそちらで食事していたらしい。

「ニパ君ごめん、せっかくの祭りを台無しにして。ぐっひゃっはっはっはっはっはっはっ!」

(うわあ…)

前半のセリフをかつこつけて言つてた分、後半の爆笑が凄いやばい奴にしか見えなくて正直引く。ニパも顔を暗くして「これじゃ祭が…」と言っている。周囲との温度差が凄い。

どう慰めたものかと悩んでいると突然、辺りにブザーと警報が鳴り響いた。

《中型ネウロイ1機が基地北方より接近中!》

「こんな時にネウロイだなんて!」

格納庫まで連れ立って走る。補給の問題で哨戒に出る回数まで減らさざるを得なくなっており、ペテルブルグの防衛は監視所だよりとなっていた。

「カンノー!サーシャさん!つてこつちもかよお!」

「うわあ大尉が爆笑してる」

さつきまで木彫りをしていたであろうテーブルの上には器とスプ、それに入った例のキノコ。机に突っ伏して何とか顔が見られないよう隠しているのが大尉で思いつき背をのけぞらせているのが管野だ。

《ニパ、雁淵聞こえているな?今出られるのはお前たちだけだ》

「りよ、了解」「了解!」

ニパの後に続いて空に上がる。上がる直前のタイミングでネウロイの攻撃が始まり、基地周辺にビームが放たれる。

格納庫のすぐ近くにもはなたれ、ツリーに引火する。そのままツリーが吹き飛ばされて炎が格納庫をふさぐがシールドで強引に突き破る。

「くっそーよくもお!」

《敵の発見が遅れたのは何らかの能力によると思われる。十分に注意しろ》

「了解!隊長はまともで良かった」

「少佐はキノコ食わずに済んだんですね」

方向指示どなりに飛翔してすぐに目標を見つける。ニパは急上昇して上方から射撃を浴びせ、こちらは真後ろについて射撃する。

「ニパさん！コアは中央線と翼前側の付け根の交点！」

「わかった！」

ニパが加速しネウロイの前半分火力を集中する。少しでも足を遅らせるためであり、その間にこちらも上方へ移り20mmの火力を活かして装甲を削ると同時に弾痕でコアの位置を示す。

こちらが射撃を開始した瞬間、ネウロイは空気に溶け込むようにして姿を消す。

「カモフラージュ!?」

「こつちの射撃に危機感を覚えたからか…」

とはいえ、写輪眼にはまだ見えているので、射撃ができるのが”俺”一人になってしまったが攻撃は続けられる。

射撃を続けているとカモフラージュが無駄と悟ったのか解除して今度は火力でこちらを抑えようとしてきた。

「見えるようになった！私も攻撃するってうわあ！詰まった！」

「このタイミングで!?!」

見ればニパのMG42は弾を発射しておらず、それに気づいたネウロイがニパに火力を集中する。

「…ニパさんそのまま引き付けておいてくれませんか」

「早く墜としてひかりー！」

返事を聞く前に飛び出し、射撃を続ける。途端、後ろからロケット弾が飛んできてネウロイの後部で炸裂した。

「え!?!誰?！」

《よオお前、コアはそこでないんだナ?》

こちらが返事をする前に後ろから伸びた☒火線はコアを撃ちぬきネウロイを撃墜した。振り返ってみてみるとそこには派手な真っ赤な衣装を着たウィッチが二人いて片方はニパと話していた。

「サトウルヌスの贈り物を持ってきました」

「いい子にしてたカゝニパ」

「イッル!どうして!?!」

話を聞くに第501統合戦闘航空団所属のウィッチらしく、つまりは原作主人公の同僚ということだ。既に顔も声も忘れて久しいが久しぶりの新規原作キャラクターだ。

サトウルヌスの贈り物というのはスオムス空軍からの補給物資らしく、ニパの古巣の人間がニパの窮乏を聞いて掻き集めたものを送り届けに来てくれたらしい。

「わあ、ハムだー！」

「こつちにはリンゴジャムも！」

「ひかり見てこれ！」

「おおーミニチュアのツリー！」

サトウルヌス祭用ということで用意された大量の蝋燭に火が灯され、並んだ火が作る光景は何とも幻想的だ。

「よお、イツル」

「ねーちゃん！」

下原さんの即興料理を手伝いながら声のほうを見てみれば陸戦部隊の隊長とユーティライネン少尉が話していた。苗字が同じということは姉妹なのだろう。

陸戦部隊は少佐がスオムスから引き抜いてきた部隊で、墜落の多いニパ達を戦場から回収してくることを目的としている。ニパと同郷のため会話しているとこを見たことがある。

サトウルヌス祭は一般的な行事でもあるため各部隊が基地内のあちこちで集まって騒いでいるらしい。この場にはウィッチが集まっており陸戦ウィッチ隊もいる。

「しばらくこつちにいるのか」

「何日かダケナ」

「よしよし積もる話もあるだろう、後で聞かせろ。ニパも一緒にな」

「皆さん料理が出来ましたよー！」

「ああ、なら運びましょう」

補給物資を使った料理は祭りにふさわしい豪勢なもので、持ち込まれた酒も相まってとても盛り上がった。普段かかわりの少ない陸戦ウィッチとの交流の機会もあり、いろいろなことを聞いた。



料理そつちのけであちこちのウイツチたちの写真を撮っていたデ  
ビーさんの提案で、最後に全員で写真を撮ることになった。

一枚は502隊員のもの、もう一枚は陸戦ウイツチたちのもの、最  
後の一枚は全員の入った20人近くが収まった写真となり、サトウル  
ヌス祭の良い記念ができた。家族や友人に送る写真にいいかもしれ  
ない。

## 閑話2 くおまけで設定まとめであるく

・短編その1／米

「米食いてえな…」

管野がそうこぼしたのは昼食後の時間。

物資の不足はまだまだ続いており、サトウルヌスの時の補給も長くはもたなかった。以前に比べれば食事の質もよくなってはいるが、それでも育ちざかりな年齢の上に戦場に立つ兵士でもあるウィッチからすれば物足りない。特に最近は量にも少しずつ影響が出始めており、夕食が少し減らされ、その分出撃前になる朝と昼に回されるようになった。

「…数少ない補給、扶桑からのなんてめつきり来なくなりましたからね」

下原さんがこぼした通り一応少ないながらも補給は来ている。ただし陸上をスオムス側から延々とトラックで送られてくる補給は心もとない量で、しかもペテルブルグには1500人からなる部隊が詰めておりそちらへと回されるのがほとんどだ。

ウィッチはもともと、ネウロイに対して明確に有効である貴重な航空戦力として待遇がよく、嗜好品の類も多く支給されていたのだがそれも途絶えて久しい。リベリオン製の明らかにしばらく備蓄されていた物を放出したであろう缶詰やレーションがテーブルに並ぶ事もあった。現在の食事は味気ない保存食品で腹を満たし、数少ないまともな食材、具体的にはニパが採ってくるキノコなどで舌を満足させることを繰り返している。

そんな状態で扶桑米など望むべくもなく、最後に食べたのは一月近く前だったりする。”俺達以外は”。

そう、管野が知らない米が基地内にはある。具体的には扶桑産の缶詰の中にあつたものだ。基地の補給が途切れる前に消費されなかつたものをとつといた物であり、その中には”俺”が持ち込んだものもある。

そして、そのうちのいくつかを先日こっそり消費してしまったので

ある。事の発端は食堂に隠されていた缶詰を目ざとく発見したジョゼさんで、どうしても頼みこまれてしまった下原さんが開けた。

問題はその際に一緒に開けたのが下原さん、ジョゼさん”俺”の三人のみでその場に管野はいなかったことと缶詰の残りは多くないということだ。

数少ない米をできれば自分たちで楽しみたいという気持ちは下原さんも同じらしく、先ほどもしれつとごまかしにかかったことから明らかだ。今も話の途中でこちらに視線を向け、しきりに合図してくる。なんとなく話をそらしたいことは伝わってくるのでこちらもそれに乗ることにした。

「補給といえば武器弾薬の類は大丈夫なんでしょうか。ここは零式が3機もありますし」

「ああ…、できるところは欧州産の部品で入れ替えたりもしてるらしいが限界はあるだろうな」

「武器はいざとなればなんとかありますがストライカーはさすがにおいそれと乗り換えることはできませんものね」

「いまからメルスを追加で3機調達しろっていわれても無理だろうしな」

話題を食料から武装の方へとシフトさせる。管野自身そういうのにも気を遣う質なのですぐに乗ってくれる。下原さんもそれに話を合わせる。お互い撤退戦の中で厳しい戦いを潜り抜けてきただけあって話が合うらしく弾みが出てきたところに、

「定ちゃん大変！」

そういつて入ってきたのはジョゼさん。話を聞いてみれば今新しく着いた補給の中に502向けのちよつといい食料があったらしい。

「おい、ジョゼ！その中に米はあったか！」

「お米？あったかな…。でも、お米だったら…なら！せつかくだもの久しぶりに腕を振って何か作りましょうか！」さ、定ちゃん？」

即座に下原さんが割って入る。缶詰のことを口に出しそうな雰囲気を感じ取っての即座の行動だった。誤魔化すことができたかと胸を撫で卸す気持ちしていると、また扉が開き、入ってきた人物がしゃべ

る。

「残念だが、今回の補給にも扶桑からのものはない」

入ってきたのは少佐で、その手には補給品が書かれていると思わしきリスト。

「今後も扶桑からの食料品の補給はしばらくないだろう」

「食料品の、ってそれ以外はあるのかよ!？」

「ああ、扶桑からの補給は全てストライカーや武器に関連した物に限っている」

管野が食って掛ければ少佐はすました顔でそう言い返す。どうも補給品には全体のうちの割り当てがあるらしく、扶桑からの物品は戦闘用で粋一杯とのことだ。

「二応、扶桑からの補給ということで管野にも直接確認してほしいのだが」

「ああ、なんで俺が!」

「二応この場の扶桑軍人では最高階級なのでな」

そう言われた管野がこちらを見るがあいにくここにいるのは任官したての軍曹と下士官上がりの少尉だ。しびしびといった様子で納得した管野は部屋を出ていった。

それを見送った少佐は、今度はこちらに向きなおり口を開いた。

「基地内の備蓄リストに数の合わない部分があつてな?」

(!?)

思わず顔がこわばる。こちらの反応を見てか、少佐の口がうつすらと笑う。それを見てこちらも”しまった!”と思った。

「そ、そうなんですか」

「ああ。食料品の項目でそれも扶桑からの補給で備蓄に充てられていたものだった」

完全にばれてる。扶桑からの食料品と明確に言及されてしまっている以上はそうだろう。

「ここ最近の調理の中で使ってしまったかも…」

「と、思つてサーシャに確認したが”米”を使ったものは記憶にな

いそうだ。：素直に自白するならお目こぼししてやらんでもないが？」

ささやかな抵抗を凶っていたが、少佐の言葉を聞いた時点でもはやごまかせないと悟ったのか下原さんがほつりほつりと言葉をこぼした。ぶつちやけ物資の横領なのは事実なので、お目こぼししてくれると言ってくれている間に負けを認めてしまえばいいと思っただけ、こちらと一緒に食べたこと、まだ隠してあることを告げる。

そのことを聞いた少佐は見逃すことの対価として自分にも缶詰を渡すように言ってきたので素直に渡す。ただ、これはいわば少佐も共犯ということであり、基地の最高権力者を味方につけたともいえるので否やは無かった。

缶詰を受け取った少佐は部屋を出ていこうとし、ふと立ち止まり、「ああ、それと最後に一つ」

振り返った少佐の顔はいつか見たような顔で、

「サーシャが食事中にわざわざ固有魔法を使っているとおもうか？」

「えっ、あつ……」

(嵌められた……)

またも手の上で転がされていたらしい。

・短編その2／念×系統別修行×水見式 (原作13話の後の話を想定しています)

平時に何も無い時、隊員の多くは談話室で過ごす。少佐は執務室にすることが多くあまり顔を出さないが、曹長は時折顔を出す。大尉は格納庫か談話室か執務室で曹長よりも来る頻度は低い。それ以外の隊員は談話室を多く活用する。

過ごし方にもそれぞれの特徴があり、本を読むものや談笑するものなど様々だ。

その中で、最近の”俺”は新しい念の修行方法を考えていた。

内容は”操作系”の系統別修行について。強化系が操作系を覚えるのは非常に効率が悪く、生粋の操作系の60%しか極められないら

しい。が、それはそれとしてせっかく写輪眼を模した能力なのだからできるだけ再現したいという思いは強い。

（操作、操作……。 ”オーラ” を介して何かを ”操作” する修行……）  
例によって例のごとく操作系の系統別修行は原作に描写されていないため自分で考えなくてはいけない。

操作系の能力は人間を操作するものが多いが一部無機物や犬などの人間以外の生物を操作するものもある。どれも発動に当たって条件を設けることで制約と誓約としていることが多い。例えば ”アンテナや針のようなものを相手に突き刺す” ”対象と口づけを交わす” ”操作できるのは死体に限る” などで、条件が厳しいほどに効果は強まる。口づけだけで相手を操作できる” 180分の恋奴隷” はその名前の通り時間制限があるのだろう。

写輪眼を用いて行う幻術は ”目を合わせる” ”ことを条件に発動し、相手を操作する。条件としてはあまり強くないので理想に近づけるにはまた別の制約が必要になるだろう。

（まずは操りやすい物、人間は……ダメだろうか）  
人間なんて複雑な物、いきなり操作できるとは思えない。訓練につきあうのを頼みづらいというのものもある。

また、いずれはある程度対象と離れていても操作できるようになる必要があるだろうが、まずは手で触れた状態で何かを操作することから始めるべきだろうという考えもある。

「んー、下原さーん！」

「はーい！ なんでしよう？」

「糸か紐か、何かそういういた物はありますか？」  
隣の給湯室にいる下原さんに声をかける。

操りやすいであろう小さく軽い物として、糸は最適なものではないかと考えたのだ。自在に曲げたり編んだりできる柔軟性と操作系の修行前でも操作できそうな軽量を併せ持つからだ。

「糸ですか？ お肉を縛ってあった紐で良ければありますけど……」

「大丈夫です。使わないのであればください」

「二応、お湯で洗ってからにしますね。でも何に使うんですか？ 編

み物をするってわけでもなさそうですし」

「ちよつと念の修行に使おうかと…」

そう下原さんと会話していると、本を読んでいたはずの管野が食いついてきた。

「なんだ？新しい奴やんなら俺にもやらせろ」

「まだ”絶”終わってないでしょうに。それにこれは系統別の修行だからまだ先の話ですよ」

系統別修行は基本4種を終えてから行うが基本を終えている隊員はまだいない。

「系統別って要は固有魔法を強化できるって奴だろ？いいじゃねえかよ別に。他を疎かにするってわけじゃねえんだ、それに何時でかい戦いがあるかわかんねえのにちんたらしてられっかよ」

「むう…」

実際戦いが迫っていることを知っている身としてはうなり声しか出ない。

固有魔法を強化できるというのは”念”について説明するとき为例えとして写輪眼と接触魔眼について話したからだろう。

原作最終話における単の攻略作戦はもうしばらく先となるだろうが、半年先というほどでもないだろう。恐らくは後三、四ヶ月。

あれだけの大軍同士のぶつかり合いとなれば生き残れるのだろうかという不安はぬぐえない。

そう考えると管野の少しでも早く力をつけたいという考えも理解できてしまう。

「うーん、でもなあ」

「ね、せめて少しでも先のこともできないかな」

「なんかないかい？僕らも少しでも強くなっておきたいという気持ちはあるんだ」

ふと頭を上げてみれば、管野の横には二パと中尉もいて、ジヨゼもこちらをちらちら見ている。

実戦で大規模な作戦を経験してきた身としては現状に何か感じる物でもあるのだろうか。

(…水見式だけなら”練”の修行にもなるしいいか)  
少しでも戦力を強化しておくことが部隊全員の生存率を上げることも確かなのでこちらとしても譲歩しようという気持ちはある。

”練”の修行を兼ねるやり方は佐世保にいたころの自分もやってきたことなので構わないかという考えもあった。

その場にいた下原ジョゼ組とブレイクウィッチーズで順番に水見式を行うこととし、準備をした。

既に冬に入って長いペテルブルグで葉っぱを入手するのが難しかったので針葉樹の葉で代用したのだが大丈夫だろうか。

「まずは俺からいいいな？」

「まー、時間がかかるわけでもないし直ちゃんに譲ってあげよう」

「一番にやりたいかって言われるとあれだしね」

一番手は管野。

両手をグラスの横に差し出すように指示し、”練”をさせる。

「おお!？」

「事前に聞いてはいたけどこれは…」

「不思議…」

管野の両手に挟まれたグラス内は滲み出すかのようにうつすらと橙色が拡がっていく。

「これは放出系ってことでいいんですよね？ということとは」

「ええ、魔力を飛ばすことが得意ってことになります」

「放出？固有魔法的に絶対強化系だと思ってたぜ」

”グラス内の水の色が変わる”のは放出系の傾向だ。

管野的には意外だったようだが嫌というわけでもないらしい。

「じゃ、そろそろ代ってもらおうかな」

二番手は中尉、同じように”練”を試してみれば今度は水に変化がなく、不審に思ったのかしばらく”練”を続けていたが、やがてそれを終えてグラスを持ち上げ、中の水を口に含んだ

「お、なんか酸っぱい気がする」

「水の味が変わるのは変化系だったな」



「中尉も強化系だと思ってたのに…。じゃあ、次私ね！」

その後は二パ、ジョゼさん、下原さんの順で水見式を行い、それぞれ強化系・具現化系・操作系だった。三人共特に不満があるといった風でもなく、むしろこの結果をどう自分の固有魔法や戦い方に絡めようか考えたり意見を交換したりしていた。なんとも見事にばらばらの系統になったものだ。

「じゃあ、後は皆さんそれぞれでしばらくこれが続けてもらう形で…」

「ええ、今まで”練”を行っていた時間にやればいいんですよね。ところでひかりさんなぜドアを開けたんです？どこか行くんですか？」

「少佐たちにもやってもらわないといけないので…」

結果は、大尉と曹長はどちらも具現化系で、少佐は特質系だった。

・短編／設定『これがひかりちゃん(?)の全てだ!』

身長160cm／体重48kg(原作よりも大きく重い)

1930年5月26日生まれ／1936年6月憑依(もしくは覚

醒)

1942年4月航空学校入学／1944年8月欧州派遣(現在14

歳)

所属：扶桑皇国海軍第337航空隊欧州支隊

階級：軍曹

装備：零式二二型甲／零式練戦

使い魔：扶桑リス

固有魔法：接触魔眼／写輪眼

特殊技能：念

扶桑皇国は九州佐世保生まれ。

原作知識から、将来戦うことになるだろうと予測し、それに備えて魔力の操作訓練を始める。訓練の参考にHUNTER×HUNTERに登場する”念”を採用したところ、”魔力”と”オーラ”の性質が同質であることに気づいてしまう。

”念”の訓練を経て、生まれ持つての固有魔法”接触魔眼”をもとに発として”写輪眼”を再現した。

航空学校入学後は扶桑海事変に参加した元ウィッチ北郷章香校長に師事を受け、空戦と剣術を学ぶ。

欧州派遣の際、負傷した姉に成り代わる形で502に参加、ロスマン曹長の教育の元に欧州の実戦を経験する。502内での立ち位置は最低階級兼新兵。

戦闘の時は中、大型ネウロイ戦において、他の隊員の攻撃で敵機を損傷させ火線を減らしたうえで呐喊、”円”の射程に入れることで接触魔眼を起動させコアを特定し部隊内に共有するといった役目。

念について

基礎は全て修め、応用は一部を切り捨てた上で修行している。

系統は強化系。発は”写輪眼”、動体視力や観察眼を強化する形で再現しているため、現在幻術の使用などはできない。あくまで”写輪眼を再現しようとしたもの”どまり。操作系の系統修行を行うことで将来的な再現を目指す。

原作との差異について

肉体・魔力的には念とその修行の影響により、筋肉が付き背が少し高い。

人間関係では、姉・孝美との接し方がドライになったために孝美は原作よりもシスコンをこじらせている。

502の人間に対しては軍人としての意識が強い上位3人にはあくまで上官として接することを心がけ、そのほかは管野に対して一応の敬意を払っている、原作ほどジョゼと打ち解けていない点などが違う。

彼／彼女にとっての人生とはロールプレイのようなものだ。あくまで”雁淵ひかり”のポジションにいる存在であり、彼女の名誉を汚すようなことはできない。彼／彼女にとってはあくまで”雁淵ひかり”の代わりなのだから。

原作第13話　　正直間空きすぎて設定覚えてない

サトウルヌス祭の翌日。

祭りが終わって解散した後も飲んでいた一部を除いて、多くのウィッチは部屋へと戻った。スオムス空軍からの出向扱いである501の2人も基地内に部屋を用意されしばらくこの基地にとどまららしい。

なんでもスオムスへほど近いペテルブルグまで来たのには補給任務以外にも個人的な目的があつてのことらしい。

朝食をもとめて食堂へ来てみれば少佐や曹長と一緒にお客さんの二人も入つていくところだった。食堂に入つてみればジョゼさんを除いた隊員たちが席についていた。話しかけてきた下原曰く、ジョゼは朝一で基地内の掃除に向かったらしい。掃除好きな彼女にとつて年末のこの時期は何としてでも基地内全てを綺麗にしたいらしく、一分一秒を惜しんで動き回っているそうだ。とはいえ彼女のことなので食事が出される頃には一度戻ってくるだろう。

お客様の2人も含めて全員が集まつたところで食事を始める。

下原さんの作る食事は万人受けするらしく、ユートイライネン少尉もリトビヤク中尉も舌鼓を打つ様子だった。

食事中の会話の中で”ここでも扶桑のウィッチが厨房に立つのか”という言葉があつた。原作一期主人公である宮藤芳香のことだろう。彼女もよく食事を作っている描写があつたはずだ。下原としても気になるらしく話題に食いついたので”俺”もそれに乗る。

「501にいた時も宮藤つてのが厨房でいつも作ってくれててな」

話を聞くに原作との目立った違いがあるようには感じられなかったが、いちウィッチとして話を聞いていると驚かされる逸話ばかりで、訓練なしで初めてストライカーを履くと同時に実戦に参加した、

だとかその後も実戦で強くなったり実績を残したといった話が聞けた。人材マニアの気がある少佐は案の定引き抜きを考え出し、最初は興味なさそうにしていた管野も耳を傾けているようだった。

食事が終わり、午前のミーティングが始まる。その場で少佐からユーティライネン少尉に教練をお願いしたいという”要望”があった。最初、少尉は渋る様子だったが少佐が耳打ちすると顔を渋くしてうなつたかと思えばしぶしぶ了承した。またぞろ少佐お得意の後ろ暗い取引があつたのだろうが、歴戦のウィッチに教えを乞えるともすればその動きを”視れる”となれば願ってもない。なお、訓練は大尉からの強いプッシュがあつたらしい。

お客さんの2人は午前のうちにやっておくことがあるらしく教練は午後からということになりその場は解散した。

午前の”俺”のシフトは哨戒任務で、ニパと一緒に飛んだ。見てわかるくらいに機嫌がよく、昨晚はかなり話し込んだらしい。

「ユーティライネン少尉って具体的にどう凄いエースとかあるんですか？」

ニパにそう聞いてみる。

最初のエース集団501に国の代表として送り出される以上スーパーエースであるのは当然と言える。が、薄れ切った原作知識ではもはや細かいことは思い出せないため教練の前に何が学べそうかを聞いておきたかった。

「イッルは飛ぶのがうまいんだ」

「戦い方は言っちゃえば固有魔法だよりだけど、その固有魔法を活かすのがうまいっていうのかな…」

「たとえ同じ固有魔法を持ってたってイッルと同じ動きができるかって言われたら無理だね」

まあ、これ以上は教練を楽しみにしなよ、そう言われてしまうとそれ以上の追求はできない。素直に諦めて哨戒を続けた。

帰投中に向こうの哨戒機とかち合うも難なく撃破して帰投する。

今日のニパの不運は機銃の弾詰まりだったため、大尉から小言を言われることもなくすんだ。

「そろそろ昼食の時間ですが大尉はどうされるんですか？」

「一緒に行かせてもらおうかしら。もうやることは済んだもの」

大尉を含む3人で食堂へ向かう。格納庫にはストライカーが普段よりも増えていることから、大尉はそちらの整備の手伝いも申し出たらしい。Bf-109もMiG-60も大尉からすればなれた機体であり大した手間ではなかったと言った。502のパッチワークともいえる機体群と違い純正パーツの割合が多いことを羨ましがっていたが、ニパ曰くスオムスでも部品の現地調達などは頻繁に行われているらしく、つまりはそれほど502の機体がひどい有様ということを理解してしまい”もしや自分の機体のパーツも”などと考えてしまい思わず体が震える。

昼食はつつがなく終わり、そのまま講堂に移動した。

「だ・か・ら！」

「グイツと飛んでスツと避けてスパツとまくればネウロイの攻撃なんか当たらないってえ！なんでわかんないかな…」

「わかんないっての！」

講堂に集まったのは”俺”とブレイクウィッチーズの3人、それと監督役の大尉と主役のユーティライネン少尉。

あと窓の外でストライカーを履いたジョゼさんが窓を拭いている。天才肌というべきか、ユーティライネン少尉の説明は感覚的なものを無理に口で説明しているような様子で、一応の身振り手振りこそあるものの、そこから読み取れというのも無理な話だ。同じく受講している管野は不満をあらわにしている。ニパは最初からあきらめていた様子で頬杖をついてだらけた姿勢だ。そんな中で隣に座っていたクルピンスキー中尉だけがしきりに頷いていた。

「うんうん。なるほど」

「クルピンスキー中尉わかるんですか？」

「いやあー教鞭をとるエイラ君も可愛いなあーって思ってたさ！」

真面目に聞いていないという点では二パと変わらなかった。頷いていたのを見て解説が期待できるかとみていた大尉が崩れ落ち大きなため息をついた。「俺は俺で擬音が出てきたあたりから理解するのをやめていたので結局この講義をものにできた者は一人もいなかった。」

その場は結局得るものなしということと講義は終了した。菅野は機嫌悪そうに鼻を鳴らしながら出ていった。請われてやった自分の講義が途中で取りやめになってしまった少尉が教卓で何をすることもなくただ膨れていたの声をかけに行く。

「ユーティライネン少尉、お話聞かせてもらえませんか？」

「ああ？理解できないってんで今おわっちゃまっただろ」

「個人授業ってことで、少尉の戦歴に興味があるんですよ」

そう言えば少尉は眉を顰め、

「話してやってもいいが：サーニヤを迎えに行ってからでもいいか？私の戦いが聞きたいってんなら一緒に飛んでたサーニヤがいてもいいだろ」

と言った。

こちらとしてもより多くの話が聞けるわけで好都合であり、加えてリトビヤク中尉なら擬音ばかりで理解しがたい解説などしないだろう。

二人が宿泊している部屋へと向かい、中尉に事情を話す。快く快諾してくれたので今度はどこで話すかという話になる。二人のお部屋にお邪魔するのもあれなので、自分の部屋へとくるように促す。茶と菓子があることも併せて伝えれば乗り気になった。

自室へと案内し、そのまま炬燵へ誘導する。2人が足を入れている間にお湯を沸かし菓子を用意する。ペテルブルグ向け補給物資の中からちよろまかした軍用チョコレートを下原さん協力のもと味を再調整したもので、甘く舌触りも改善されたがその分保存に難があり、早くに消費してしまいたかったものだ。

「それで？どんな話が聞きたいんだ？」

お茶とチョコレートで一息ついたところで向こうから切り出される。

「んーと、そうですね。いままで出くわしたネウロイとどう立ち会ったか…?」

「んだよそれ。そんなの回数が多すぎてなに言ったらいいかわかんねーぞ」

いざ聞くときになって自分が何を聞きたいのかいまいちまとめられず口ごもる。ネウロイに立ち向かうときの動きについてなわけだが何からきけばいいのだろうか。

「なにか、エイラだから聞きたい事とかってあるかしら。例えば避けるときに気をつけることとか」

リトビヤク中尉が助け船を出してくれる。少尉にだから聞きたい事、と考えたところで思い当たることがあった。

「そうだ、少尉って戦う時にほとんどシールドを使わない避ける事を主体にした戦い方をするらしいじゃないですか」

「ん? おお、私にいわせりやシールドに頼るような奴は二流だな。それと”ほとんど使わない”じゃない、”全く使わない”だ」

固有魔法の未来予知によって死角からの攻撃もすべて事前に回避する戦い方。それは、魔眼の動体視力で攻撃を見切る、相手の動きから数瞬先の動きを予知する写輪眼の完成系ともいえる。

「私の固有魔法は優れた動体視力でもって相手の動きを見切ることで」

「ああ、なるほど。似てるっちゃ似てるか」

途中まで言ったところで察したらしくさえぎられてしまった。腕を組んで頷いた後口を開き、

「なら、明日直接飛んで鍛えてやる」

そう言った。

「いいんですか!」

そう聞けば少尉は笑って肯定する。

「許可してくれるかしら?」

「講義してくれて言ってくるんだ、訓練つけてやるって言ったら



ことわりやしないだろ」

中尉の懸念も問題ないだろうということで、明日は訓練をつけてくれることになった。

夕食の席で少尉から少佐たちにその話をすると、許可してくれたが注文も付けられた。夜間戦闘の訓練も付けてほしいとのことので曰く、夜戦のエキスパートであるリトビヤク中尉がいるならば余裕をもって教導ができるだろうということらしい。現在の502における夜戦要員が下原さんしかいない上、僚機も固有魔法を持たないロスマン先生がやらざるを得ない状況を打破したいということらしい。

リトビヤク中尉はそれを快く引き受けた。中尉としても自分のできる仕事があるのはうれしいらしい。

「んじゃ、軽く模擬戦といくか」

許可が下りた次の日、朝食を食べてすぐに空へ上がった。今飛んでいるのは少尉と”俺”の二人だけで中尉や観戦にきたニパなんかは下から見上げている。模擬戦はペテルブルグ市の上空で行われ、一発でも被弾したらその時点で終了ということになった。

少尉は模擬戦の開始を宣言したあと、手に持った銃の銃口を上げようとはしなかった。

「先手はくれてやるよ。どーせあてらんないから」

未来予知を覆す方法なんて思いつきはしませんがカチンときた。

「じゃあ、お言葉に甘えましてー」

言いながら弾をばらまく。こちらが銃口を上げきる前に向こうが動き出し、まさに紙一重で弾丸を避ける。

わかり切っていたことなのでこちらもばらまきながら動きはじめる。

この模擬戦で大切なのはこちらが相手に当てることではなくこちらがいかに相手の弾を避け続けるかだろう。

弾丸は相手の鼻先にあえて当たらないようばらまくことで相手の出足をつぶし、その隙にこちらは上昇する。向こうもこちらを見て上

昇してくる。ばらまいた弾とはいえずべてすり抜けた上で一発も撃たずに上昇してくる様は不気味の一言だ。

未来が予知できると言うことは相手の弾に当たらないだけでなく自分の弾が当たるかどうかともわかるということだ。故に当たるとわかっているたましか撃たないということ。

こちらがそれを避け続けるにはただ飛ぶだけではすぐにでも限界が来るだろう。よけ続けるには”写輪眼”で相手の動きを見切り続けるしかないだろう。互いが互いの動きを見て予知しあい、それに合わせて動きを変える、つまりは千日手の形に持ち込むしかない。

ある程度上昇し高度を稼いだところであえて単純な軌道をとり相手の動きを誘う。向こうも誘われているのは気づいているだろうがそれでも銃口を上げる。向こうの銃口が定まったところで一気に切り返し、大きく動く。こちらは最初に弾をばらまいたのでしばらくは節約を意識して撃たない。

”俺”の履いている零式二二型は機動性が売りだが向こうは頑丈な機体に大馬力のDB605エンジンを積んだbf109G、急降下、急上昇では勝ち目がないので緩降下と水平機動で勝負する。

《新米って聞いてたんだがよく動くじゃないか》

「そう簡単にはやらせませんよ……！」

通信を打ち切り、また少し高度を上げる。少尉が後ろについたのを見計らって進路を太陽に向けて一気に切り返す。目がくらむのを期待したが案の定平気などころかこちらの陰に入り続けることで無効化してきた。

機体の性能差により徐々に差が詰められてきたところでつばめ返しを仕掛ける。一瞬で機体を沈ませ、またその次の瞬間には機体を浮き上がらせる。相手の射線を切ると同時に、上下に大きく銃を動かすことを相手に強要することで隙を作る。

機体が浮かび上がる位置を相手の後ろになるように調整し、一気に仕掛ける。予定位置についたのを認識する前に引き金を引く。

「はいおつかれ」

こちらが引き金を絞り切る前に後ろから通信越しではない肉声が

聞こえ、それと同時に背中に激痛。

「いいい痛っつー！」

「じゃ、反省会すつぞー」

地上へと降り、着替える間もなく反省会が開かれる。ニパや中尉から声をかけられるが激痛に意識を持っていかれて聞こえていなかった。いかにペイント弾と言えども火薬で打ち出す約8mmの高速の物体は当たれば激痛が走りその場でのたうち回りたくなる。

見かねたニパがジョゼさんを連れてきてくれたので治療を受けながら反省会を聞く。

「まあ、ぶつちやけ今回は相手が悪かったな」

「そんなぶつちやけられても…」

「あの最後の機動、腕のいい奴ならあれで仕留めきれないってことはあるだろうがあそこで真後ろから背中撃てんのは私くらいだろ」

「で、しいて言うならあの機動を使ったことが間違い」

「そんなにダメでしたか」

「相手を目で見て先読みしてんに機動戦で逃げに回ってたら隙が増えるにきまつてんだろ」

「相手が悪かった、のその2、私に誘われてたんだよ」

「単純に後ろについて徐々に距離を詰める。これ繰り返されたらいずれは対処しきれないと悟って反撃に転じる。で、これが最大の隙となるわけだ。普段は時間もかかるしあんまりやらないんだが今回は持久戦になるって分ってたし」

「しいて言うならこんな早く反撃に転じてくるとは私も思ってたなかった。よほど自信あったんだなお前」

「ぐう…」

「まー私を墜とす気にはまだ早いつてこつた」

いいように飛ばされ、隙を作るつもり動き自体が隙そのものにされていたことを実感させられうなることしかできなかった。

「前に言つたら飛ぶのがうまいって。当てられるように相手を追い込む飛び方もうまいんだよ」

ニパがそう言った。言われた側の少尉は鼻高々といった感じでも顔を上げていた。

「それで、訓練はどうするの?」

やれやれといった顔をしたリトビヤク中尉が少尉に問う。問われた少尉は悩むそぶりを見せる。

「今何が足りてないかっていうと状況ごとの判断くらいでなあ」

「なら、そこを中心に鍛えるのはだめなの?」

中尉が続けて問えば少尉は悩むそぶりを強めついにはうなりだす。

「ぐうう、確かに教えるとは言ったがこれ以上はサーニヤとの時間が…、だがここで切り上げたりしたらそれこそサーニヤにどんな目で見られるか、でも…」

質問にも答えずにうなる少尉に見かねたのかリトビヤク中尉が声をかける。

「エイラ?」

「うー…、あー、もうわかったよ! 鍛えてやる! マンツーマンでみっちりとな! 貴重な時間を使ってやるんだから感謝しろよ!」

つぶやくような中尉の声に反応してか跳ね上がるようにして顔を上げた少尉からは改めて訓練をつけてやることを告げられた。次いで、訓練はとにかく実際に戦う中でしか培えない判断力を鍛えると言われ、そのためにはただひたすらに飛び続けるしかないそうさ。

つまり、これからしばらく毎日日がな一日今のような互いに読みあひながらの空戦を延々続けるのだ。

「そうと決まったらとつと飛ぶぞ! お前が早くものになればその分私たちの時間も増えるんだ!」

「りよ、了解!」

「ごこんとご毎日そんなんだな、お前」

「ぐへえ…」

どこかあきれたような視線をこちらに向けてくるのは管野。

マンツーマンでの訓練を始めてしばらくたった頃。今日の訓練の終了後、夕食前にサウナで汗を流しているところだ。

管野は偶然居合わせたただけだが、この場にはニパとユーティライネン少尉もいる。二段になっていく座席部分の下側に“俺”ニパ管野が座り、上の段で少尉が寝っ転がって肘をついている。

「お前も体力には自信あった口だろ。毎日どんだけ振り回されたんだ」

「あー…、燃料切れるまで空戦？」

「うわぁ」

ストライカーは往復数時間飛んだうえで空戦ができるだけの燃料が積むことができる。今回は訓練ということで燃料を満載していたわけではなかったが、それでも燃料が尽きるまでの数時間の間、互いに相手の思考を読みあい射線を交わしあう飛行を続けたのだ。

ただし、その相手役だったユーティライネン少尉はといえば、

「んー、小！」「ぎやあー！」

「大！」「うぎやあぁ」

「ふんぬうー！」「おお、そこまでして避けるか。まあ小だろうし別にいいか」

こちらが会話している間にこっそりと起き上がった少尉は管野から順に胸を揉んでその反応で遊びだした。揉まれた二人が絶叫を上げる。前二人が犠牲になってくれたおかげで事前に気づけたので無理やり倒れこむことで回避する。揉まれるのは嫌なので避けたが、からさまに興味ない発言は釈然としないものがある。

「はあ…、つまんないなあ…」

「テメエ人の乳揉んどいて何言つてやがるっ！」

管野が噛みつくが歯牙にもかけない様子。

「んねえイツル？まさかサーニヤさんにもこんなことしてんの!？」

「ハア!?!何言つてんだお前！そんな気持ちでサーニヤを触つていいわけないだろ!?!」

「俺達ならいいのかよ…」

何とも失礼極まりない発言をした少尉はニパの冷たい視線も気にせず再び横になる。

「ああ…、サーニヤ…。うう、サーニヤとの時間が足りない…」

「こいつ本当にスオムスのスーパーエースでガリア開放の英雄なのかよ?」

「イツルはサーニヤさんが絡むとちよつと面倒なんだ…」

「ちよつとどころじゃねえだろ!」

ぎゃあのぎゃあの騒ぎ立てる2人と自由な一人を眺めていると、サウナの入り口が開かれ1人が入ってきた。

「ずいぶんにぎやかですね」

入ってきたのはポクルイーシキン大尉だった。毎日格納庫で機械をいじる事の多い大尉はサウナを利用することが多いので鉢合わせすることも多い。本人もサウナには慣れているので長く入り浸りがちだ。

「あー、静かなほうがお好きですか?」

「いいえ。サウナには親しい者と複数人で入ることもある物です。騒がしいのも自然な在り方と言えるでしょう」

そう言う大尉は部屋の隅に積まれていた焼石に水をかけ、少し離れたところに座る。腰を落ち着けたところでこちらへと顔を向け、口を開いた。

「ああ、そうだ雁淵さん」

「もうすぐ年越しですが何か、扶桑流の過ごし方と言いますか?」

大尉がそういうと他の三人も反応する。管野に曰く、欧州での基本的な年越しはサトウルヌス祭の時と大差ないらしく、親しい者同士で集まり夜通し酌み交わすのだそうだ。とはいえ未成年ゆえ酒を苦手とするものも多いためウィッチ部隊では酒盛りの前段階、豪勢な夕食こそが本番らしい。502でも既に下原さんが用意を始めているらしく大尉も先ほどまで手伝っていたらしい。

「正直今年はできないだろうと思っていたのですが」

「補給持ってきてくれたイツルたちのおかげだね」

お礼を言われた本人は腕を上げるだけの返事だったがこちらに顔を向けないのは照れからだろうか。

ふと、ニパが顔を上げてこちらへ振り返る。何かと思えばサトウル

又ス祭とも違う点があるという。

「スオムスでは年越しの瞬間に花火を上げるんだ！」

「花火ですか？」

「それに、年越しの花火を二人で見ながら過ごすことができるその二人は幸せになれるって言い伝えがあつてさ！」

「ロマンチックって言うんですかねえこういうの」

「そうそうその通り！」

「…二人で年越しできるんならその二人はもう幸せなんじゃねえか？」

思わず、と言った口調で管野が話に入ってくる。

「わかってないなあカンノはさあ！ロマンチックなのが大切なんじゃないか、シチュエーションだよシチュエーション！」

「それだあ！」

「は？」「？」

突然跳ね起きたユーティライネン少尉が大声を上げたかと思えば、ぶつぶつ独り言をつぶやいた後ニパに抱き着きその頭をなでる。

「うえええ！」

「よくやったぞニパ。お手柄だ！」

そうして一通り名で繰り返し回した後、こうしちやいられない！とだけ言い残し、走ってサウナを出ていった。

「なんだったんだろ…」

「知るかよ」「急にテンション上がりましたね」

「よくわかんないけど…イッルに褒められた。えへへ」

ユーティライネン少尉が出ていったことにより、残った面々も大尉を除いてサウナを出ることにした。大尉は入ったばかりということでもう少しあつたまりたいらしい。とはいえ夕食も近いので今日はすぐに出てくるだろう。

三人で連れ立って歩いているとユーティライネン少尉に撫でられたニパがニヤケ面のままふらふらと歩くものだから案の定不運に見舞われたりもしたが、閑話休題。

身なりを整えて食堂へ行く。厨房ではまだ用意の途中であつたが

調理は終わったものがさらに盛り付けられ置かれている。

「何か手伝うことはありませんか？」

「ああ、ひかりさん！お二人もいるんですか？」

「おう、いるぜ」

厨房には下原さんのほかにリトビヤク中尉と曹長、ジヨゼさんがいた。4人いてもなお慌ただしく走り回るのを見かねて声をかける。声に反応した下原さんの指示に従い食堂側の机に並べていく。

そうしてうちに食堂に少佐やクルピンスキー中尉も現れ、最後に大尉が来た。少佐と一緒に来たユーティライネン少尉はどこか不機嫌そうだった。

全員がそろったところで少佐がしゃべりだす。

「諸君らの活躍によって今年もネウロイの侵攻を阻止、ペテルブルグを守ることができた」

「そして来年こそ奴らへの反攻の年とする。いいな！」

「「はい！」「ハイツ、モグモグ……」

全員の返答が終わったか終わらないかのタイミングで真つ先に食事に飛びついた者もいるが、おおよそ全員少佐の言葉で士気を上げ食事に手を付け始める。

「おいしー！」

「懐かしいオラーシヤの味です」

料理はオラーシヤのものが中心で、舌鼓を打つ。個人的にはパンをボルシチにつけて食べるのが気に入った。

「今日の味付けはほとんどサーニヤさんがやってくれたんですよ？」

「さすがサーニヤ！すごすぎですサーニヤさん！」ちよつ

下原の発言を聞いたジヨゼが駆け寄り、そのまま頭をこすりつけるような距離で話し出す。下原さんに聞くと食糧庫を荒らしていたネズミを捕まえたことと食事の腕で一気に懐いたらしい。

「……ちなみに何か思うところは？」

「いいえなにも？ジヨゼが彼女のオラーシヤ料理をおいしいと思つたのも事実ですが、ジヨゼの好きな味はそれだけじゃありませんから



…」

「やるじゃねえかお前」

「もうずっとここに居てください！」

「うぐぐぐぐ…お前らサーニヤにつ《ウウウウー!!》」

「警報?!」「ネウロイ!」「んもー…空気読んでよ」

警報を聞いた隊員達は即座に意識を切り替え、少佐の指示を待つ。

「食事は中断、出撃準備!」

「誰を上げますか?」

時刻は既に1900を回っており、辺りは暗くなってしまっている。502内で夜間戦闘ができるのは夜間視の力がある下原さんだけ。他は精々飛ぶのが限度だ。

「相変わらず弾薬と燃料も心もとないままです」

「さて…」

少佐の決断は502から夜間視の下原さん、ベテランで飛行時間の長いロスマン曹長、経験はないが魔眼があるため他の面子よりはマシンな“俺”、そして501での夜戦担当だったリトビャク中尉と、中尉と共に飛ぶこともあったユーティライネン少尉の5人を出すというものだった。

「夜空は自機の位置を見失いやすいの。だから、常に自分だけでなく仲間の位置も把握するように」

「了解」

「夜間戦闘の経験を積むために来てるのだから教えたことはすべて体に叩き込みなさい!」

「了解!」

「前方三千!ネウロイを視認!」

最初に敵機を補足したのは下原さん。続いて反応し行動に移ったのは501の二人。エンジンを吹かし一気に先行した。

「よく見ておきなさい。彼女が無傷のエースと言われる訳、演習

じゃない実戦でね」

「…はい！」

「いっくぞー！」

そういつて飛び出したのはユーティライネン少尉。MG42をばらまきながら突っ込む、が即座に切り返し高度をとる。

発射された7・92mm弾は全てがはじかれてしまい、反撃に光線が幾条も飛んでくる。

それを見た下原さんが突っ込むのにあわせてこちらも飛び出す。今度は12・7mmと20mmを浴びせるがこれもはじかれる。

「装甲が固い！」

「けど、”射程”には入った！」

「下がって！」

次いで放たれたのはリトビヤク中尉のフリーガーハマーでこれは唯一敵の装甲に目に見える損害を与えた。

しかし、大きな罅こそ入ったものの欠損を与えるには至らず、コアも見えない。

「攻撃が効かないわけじゃない、防御特化型のネウロイよ！」

曹長の分析は装甲を固めて防御に特化した代わりにその他の性能は突出したものは無いという。現に飛行型でありながら速度は大したことなく、動きも緩慢だ。

「それで雁淵さん？」

「はい、相手のコアは機体上面、パネル部分の中央です！」

「なら、そうと決まれば！」

「コアが出るまで攻撃し続けるだけ！」

「ようするにいつもと同じってことだ」

ネウロイは攻撃対象をこちらに定めたらしく、距離をとって反転し攻撃を仕掛けてくる。

火力のあるリトビヤク中尉とロスマン曹長が正面に、”俺”とユーティライネン少尉が上昇、下原さんが下降しそれぞれ狙う。

「全体！こっちで相手の攻撃は引き付ける！おいひかり」

そういつて少尉はこちらに顔を向ける。

「実弾じゃないネウロイの攻撃の避け方を見せてやる、よく見て覚えろ！」

少尉はそのまま緩降下で加速し、ネウロイの真上からは急降下する。当然迎撃に数えるのもおつくうになるだけの光線が浴びせられる。少尉はその中を機首を上げずに横にスライドするような動きのみで、シールドを一切使わずにすり抜けていく。

ある程度接近したところから射撃を開始し、そのまま相手の横を通り過ぎる。その後は相手に付きまとうように相手の周りを飛び回る。その動きは素早く、また相手の攻撃が発生するより早く切り返すため当たる気配がない。

しばらく飛び回ったところで相手の機首を誘導し、火力役の二人の前へとおびき出す。

計6発のフリーガーハマーの弾頭が相手の上面で炸裂する。

「コアが見えたー！けど…」

「再生が早い…」

曹長の見込みは外れたらしく、相手は硬い装甲に加え高い再生能力も兼ね備えているらしい。

即座に再生を終えたネウロイはこちらを無視し、まっすぐに飛び去る。

「な、逃げた!?!」

「いえ…違います！向こうには基地が！」

「まずいわ！基地に今夜間に戦えるウィッチは…！」

「追います！」

こちらが慌てて飛び出そうとすると、リトビャク中尉がそれを呼び止める。

「大丈夫です」

「えっ…」

「どうしてですか！」

そう問いかけると、中尉は笑って視線で示す。

その先にはユーティライネン少尉が空中で停止しており、ネウロイ

を待ち構えていた。少尉はネウロイがすれ違う瞬間に一斉射だけ引き金を絞り、射撃する。ネウロイはしばらくとんだ先で砕け、光になって降り注ぐ。

「さすがだわユーティライネン少尉…」

「どうやって7・92mmあの装甲抜いたんでしょう」

「さあ…?」

夜間の戦いから数日。年越しを502で迎えた501の二人がスオムスへと戻る日が来た。ペテルブルグまで二人には迎えが来ている。

「ユーティライネン少尉、リトビャク中尉。改めて二人の行動に感謝を」

「ああーいいっていいって」

少佐は最後まで引き抜きに努めたらしいが二人は断り続けたようだ。

「サーニャさん…!」

「あの、ジョゼさん。その、ごめんなさい」

引き抜きを考えていたのはもう一人いたらしい。

隊員のそれぞれと一言二言ずつ交し合い最後にこっちにも来た。

「私の教えたこと忘れんなよ?」

「教えたといっても座学じゃなくて実機でしたし忘れませんとも」

「雁淵さんも気を付けてね」

「ええ、まだまだ新米の意識でやらせてもらいますよ。リトビャク中尉もユーティライネン少尉もお気をつけて。戦いだけじゃなく健康にも」

そう言うとうーティライネン少尉は渋い顔をしてこちらを鋭い目で見る。

「なーんか堅苦しいんだよなお前。イツル…は言いにくいんだっけ、じゃあエイラでいいよ」

「私もリトビャク中尉よりはサーニャって呼んで?」

「…じゃあ、サーニヤさんも私のこと”ひかり”って呼んでください。エイラさんはもとからひかり呼びなので」

「なら、ひかりちゃん、でいいかしら」

サーニヤさんと改めて名前の交換をしたところで迎えの人から急ぐように言われる。

雪上車に二人が乗り込むと瞬く間に加速し、二人の姿が小さくなる。

「じゃーなー!」

「お元気で!」

「またなイツル!サーニヤさんも!元気なままでいろよー!」

「騒がしい奴ら…騒がしいとは違うか?」

「いたのは一週間程度だったのにもう違和感あるのも凄いですね」

「まあ、存在感はありましたものね」

「うう…サーニヤさん…」

「貴重な夜戦ウィッチのあてだったのだがな」

「結局ユーティライネン少尉の教えを理解できた人は、実機で飛んだ雁淵さんだけですか…」

「ブレイクウィッチーズ解決にはなりませんでしたね」

「睨まないでくれよ先生」

原作第8話      冬の北極海つて血の池地獄とかと  
同義だよね〜

「おーい、下原君たち終わったってさ」

1月のある日。

談話室で過ごしていると、入ってきたクルピンスキー中尉が声をかけてきた。

現在下原・ジヨゼ組はラドガ湖の東、ペトロザヴォーツク周辺の確保のために出撃している。今までの502部隊への補給はオラーシャのノヴォホルノゴレイ、もしくはアルハンゲリスクと呼ばれる街にて揚げられ、陸路で送られてきていた。だが、そのすぐそばに最新のネウロイの巢“グレゴリー”ができてしまい、街の人間は避難を強いられることとなったため、502への補給も途絶えてしまった。その後はスオムス軍からの補給を新たに受けていたが、もともといらん子中隊を抱えているうえそもそもが小国なのでそこまでの余裕はなく、502への補給は従来の半分以下となってしまう。その活動を大幅に縮小せざるをえなくなっていた。

そのために今回、補給線強化のため、コラ半島の上部、ムルマンスクから直接補給を受け取るべくペテルブルグとの間の敵兵力の排除を行ったというわけだ。

もともと北方戦線における補給はムルマンスクとアルハンゲリスクで5:5ずつだったのをアルハンゲリスク使用不可になったことからムルマンスクに集中することになったのだが、いきなり2倍の物資を揚陸されても処理するのは不可能であるため、港湾機能の強化から始めることになった。結果、グレゴリー発生から今日までたつてようやく使えるようになったというわけだ。

「これでよーやく前の生活に戻れるってわけか」

「いやー、どうだろうね。ノヴォホルノゴレイとムルマンスクじゃあ2倍近い距離の差があるっていうよ？」

「安定して食料が来るだけでもありがたいですよ」

今、この談話室には管野と”俺”、今入ってきた中尉の三人しかない。上官3人はいざという時に備えて執務室兼作戦指令室だ。

ニパはというと、

《シリリリ》

「んあ？はい、談話室」

《あつ、管野？格納庫までこいよ！イッルたちの持つてきた補給物資に開けてないのがあったんだ！》

どうやら格納庫にいたらしい。

「まじか！おい！」

「もちろんいくとも。あの時の補給品ならまだ見ぬぶどうジュースちゃんを僕を待っているかもしれない！」

「いきますいきます。嗜好品の類は私も欲しいですし。あつ、少佐たちには黙ってましようよ」

「お前もここに染まつてきたじゃねえか。おうニパ、2人釣れたしすぐに行く！」

「これだよ！」

「とりあえず邪魔って押し込まれてた感じだねえ。結構大きい木箱じゃないか」

格納庫についたところで、ニパに隅の方へと引つ張り込まれる。そこにあったのは胸元くらいの高さで縦横2m近くある木箱だった。

「早く開けてみようぜ…ふん！」

「ぶどうジュース入ってるかなー♪」

管野がボールで板を引きはがしていく。半分もはがしたところで見えたのは、おがくずのようなものに包まれた鈍色に光る銃器の数々。

「なんだ武器かあ…」

「しかもstg—44、うちで使ってるの中尉だけですよね」

「うわ、リベレーターまでありやがる…。しかも弾無しって」

そういつて管野が持ち上げたのは手のひらと同じか少し大きい

らしい銃。それには見覚えがあった。

「うわぁこれが噂の”自殺用拳銃”ですか」

「なんだそりゃ」

「扶桑にいたところに欧州で使われる武器について教わったんですけどね？その中であつたんですよ」

そういつてリベレーターを手に取る。

「一発撃つたらおしまいな上にその一発すら距離をとつたら当たらない。だから自殺以外に使いようのない拳銃って」

マガジンが内蔵されない以上一発撃つたびに再装填が必要、銃身にライフリングがないため狙ったところに飛ばない、おまけに薬莖は銃口から棒を突っ込んで押し出すしかないという最凶の省力拳銃。それがこいつなのだ。佐世保にいたころの放課後特別授業で教えてくれた教官もドン引きだった一品。

「ああ…なるほどそりゃ言えてる」

「ひどい言われようだけど擁護のしようもないっていうのが凄いな」

現場の人間からも評価は低いらしい。元の世界ではレジスタンス用に作られた物のはずだがネウロイ相手のこの世界。戦うのは軍人のみである中で何に使うんだこれは。

「つままないなあ、もっとほかになにか話のネタになるようなものはないのかい？」

「といわれても、ん？これなんだ？」

「クルピンスキー宛って書いてあるぞこいつ」

そういつてニパが箱から持ち上げてきたのは、他とは雰囲気の違い紙製の箱。表面に張られた紙には手書きで文字が書かれているが、中尉宛ということはカールスラント語か。

「おお！てことはスペシャルなぶどうジュースかな！開けてみて」

「どれどれ、わぁ、お菓子だー！」

中に入っていたのは色とりどりのお砂糖菓子。マカロンという奴だろう、なかなかの量が入っている。



「ちえ、違ったガッ！なんだこれ！」

つまんだマカロンを中尉が口に含んだ瞬間、悲鳴を上げる。吐き出されたマカロンの中からは写真を入れるロケットのようなもののがぞいでいる。

「は？どういうこった」

「お菓子の中になんでそんなものを」

「わあ…中尉そこまで嫌われるようなことした相手がいるんですか」

「ひかり君さすがにそれはひどくないかな？」

流石にそんな言われようは不服だったのか鋭い目でこちらを見た中尉がロケットをいじりだす。

「ん、ああこれは…」

「どうした、なんか入ってたのか」

「これは隊長案件かな、ちよつと行ってくるよ」

まるで隠すかのように拳のうちへとロケットを隠し、中尉は歩き去る。どこか早歩きのようにも感じる。

「菓子の中から隊長案件だあ？」

「厄ネタのおいがしますよこれは」

「うわ、かかわらないでおこ」

そのまま格納庫で、出てきた銃器を整備班に引き渡したり、伯爵宛の菓子を三人で勝手にむさぼっていると出撃していた二人が帰ってきた。マカロンのおいを嗅ぎつけてきたジヨゼさんに残りを渡すと大喜びで去っていった。下原がそのまま、昼食づくりを始めるというので手伝いを申し出る。渋る管野とニパも巻き込み、厨房へと向かう道すがら今日のメニューを聞くとトナカイ肉のシチューであるらしい。

「しつものはらちゃん♪今日のお昼は何かなー！」

配膳を終え、席に着こうというタイミングで中尉が食堂に入ってくる。メニューを聞いた中尉はぶどうジュースがないと物足りない

か言い出した。年末からこっち、中尉のアル中化が進んでいる気がしてならない。

会話を交えつつシチューを食べていると、この場にいなかった少佐たちが紙束を抱えて入ってきた。

「全員、食べながらでいいから耳だけ傾けろ。502の新たな任務が決まった」

少佐が喋る後ろで、大尉と曹長が協力して北欧や北海の書かれた地図を吊るしている。解説を担当するのは曹長らしい。

「現在、ブリタニアを出航した大規模な船団がムルマンを目指して北海を航行中。我々の任務はこれの護衛です」

そう言って曹長が指し示した地図には輸送艦を示すマークを軍艦のマークが囲って作られる大きな円が描かれていた。

「安全な航路ではありませんが気を抜かないように」

「今回の作戦に502からは4名を派遣する。現場指揮はクルピンスキーお前がとれ」

「うええ!?!ちよつとまってよボクがいくのおく?」

少佐に名指しされたクルピンスキー中尉は不満を隠そうともせずにいる。

「…今回の船団には方が一に備えてブリタニア海軍からウィッチが一名派遣されています」

そう言って曹長は中尉へ写真を差し出した。

「か、かわいい…!行きます」

声色まで変わる変わり身を見せた中尉を見て曹長は頭が痛そうにしている。なんとなく少佐の仕込みなんだろうなあと思った。

「残りの三名は中尉の権限で選出せよ。また、船団には502の一部隊員向けの新型ユニットが積まれている。出撃する4名うち該当するものはムルマンにて船団の到着から出航までの間に一度慣熟訓練を済ませておけ」

「新型!行く行く俺が行く!行かせろ!」

新型の一言に食いついた管野が椅子を倒す勢いで立ち上がり、そのまま中尉に詰め寄る。

「じゃあ、残りの三人は直ちゃん、ニパ君、ひかりちゃんで」

「え、私ですか」

「ムルマンか… 遠いなー…」

「扶桑の新型ってことは紫電の新しい奴だろ？楽しみだぜ」

「お前またエンジンが変なせき込みしてるじゃねえか…」

「うう…大丈夫かなあ。保ってくれよ1,000キロ…」

翌日、格納庫では出撃に備えた準備を行っていた。既にストラライカーユニットを装着し背中にはそれぞれの背嚢を背負っている。ムルマンでの滞在中に使う日用品などが入っている。とはいえ戦闘中には邪魔になるためいざという時に投棄しやすいようにあまりきつくは固定していない。

「むう…」

「指揮官に選ばれたともなれば流石にクルピンスキー中尉も真剣になるんですねえ」

「お前、なんか最近中尉に対してあたり強いな…」

唯一一人だけストラライカーユニットをつけず、机で資料とにらめっこしているのは今回の隊長である中尉。ここ数分ずっとあのままだ。

「ほんとに作戦について考えてんのかなあ…」

「まあ、どうせろくでもないこと考えてんだろ」

「なんだ…？君の瞳に…大輪のバラは違うか、ねえーひかりちゃんちよつと…」

「は・く・しゃ・く・さ・ま・？」

「うひい！先生、あの、これは、その…」

〈ギャア！

「あーあ」

「口説き文句考えてやがったか」

「あの人やっぱダメなのでは？」

予定時刻となったため、出撃する。長距離の飛行はウィッチにとつても負担となるため300kmごとに最寄りの基地で休憩をはさむ。

途中、基地要員を中尉がくどいたりあつたこともないブリタニアウィッチの写真だけで惚れけられたりしながら4機は北海まで進出した。

「海を見るのは久しぶりだなあ」

「少し、急ごうか」

つぶやくような声に振り替えるとそこには真剣な顔をした中尉が。

「なぜですか？」

「ちよつとここからは見えないけどね、あの水平線の向こうにはネウロイの巢、グリゴリー」がある。ここは安全な海域らしいけどね」  
そういつて指さした先は一見何もないように見えたが言っている通りならそちらの陸地が原作最終決戦の地となるのだろう。

「くつそー、このままいつて何とかしてやりたいぜ」

逸る管野を中尉がたしなめる。

「慌てない慌てない。あつちは最終目標、今は船団が優先さ」

日も暮れたころ、4機はムルマンへと到達した。途中、ニパのユニットが黒煙を吐き出し停止するといったトラブルもあったが何とかたどり着いた。

「いやあー、遠かった」

「やっぱり1,000キロは遠かった」

格納庫にてケージにユニットを固定し移動する。どうやらニパのユニットは分解整備の必要があるくらいに壊れてしまっているらしい。自分たちにどうすることができなくてもないので当初の予定通り新型を受領しに行く。

「いやー、凄い量の物資だ」

「まだまだこれから来るんでしょう？」

「まだ陸揚げされてるのはほんの一部だけだからね」

基地内にはあちこちにカバーのかけられた木箱が山積みになっており、広いはずの基地が狭く見えるほどだ。港湾の外にはまだ多くの輸送船が待機しており、荷揚げの順番待ちをしている。港湾能力が強

化されても処理が追い付かないほどの船団が来ているのだ。

「うーわ、なんだありゃ」

「うお、戦艦でも作ってんのか」

ニパの驚く声にそちらへ顔を向ければそこには巨大な砲身がカパーから顔をのぞかせていた。扶桑にいたころ戦艦を見かけることもあったが比較にもならないような口径と砲身長だ。

「むむっ！」

「中尉も何か見つけました？」

今度は中尉がうなり声をあげたためそちらを見れば、

「陸戦ウィッチのかわいい子発見！いいねえいいねえ！」

「うわっ…」「またかよ」「そのキツシヨイ動き今すぐやめてくれません？」

目的地の倉庫は基地の中心を少し外れたところにあり、照明も少ないため薄暗かった。

「んー、ストライカーはこのあたりのはずなんだけど、おっ！あったあつた」

倉庫のさらに端、壁際に置かれたケージには「三機」のユニットが固定されていた。一機は水冷の角ばった機体で黒十字が描かれていた。残りの二期は日月旗の描かれた見覚えのある機体だった。

「やったぜ紫電改だ！ひかり、おまえの分もあるぞ！」

「ぴかぴかだあー！」

「こっちのK型は僕のだね」

管野の言う通り、そこにあつたのは山西航空製紫電二一型だった。姉・孝美が試験を行っていた機体の正式量産モデルだ。

姉と同じ機体ということに何とも言えない感情が沸き上がり、口を閉じているとニパが近くにあつた別の木箱に反応する。

「こっちは何だろう」

「えーと、ラル隊長にロスマン先生、それにこっちはー…」

「扶桑の字だ。てことは下原の分の紫電改だろ」

おかれていた木箱は3つ。二人の言う通りなら、502内で新型が

配備されなかったのはジョゼさん、ポクルイーシキン大尉、そしてニパということになる。

「いいなあー、新しいユニット。スオムスは貧乏だからなあ」

こぼすようにニパが言う。スオムス側に余裕がない以上仮に新型が手元にあっても配備先はエイラのところかスオムスのエースのもたろう。

それを見た伯爵は

「なら、これはニパ君が使うといい」

そういつて別の木箱のほうへと歩いて行ってしまった。

「ええ！でもこれクルピンスキーさんの…」

「ニパ君のユニットは壊れちゃったんだから仕方ないよね、それより僕はこつちの、つとー！ふふん♪」

ニパの声に反応を返すも未練などは感じさせず、代わりに興味が言っているのはこじ開けた木箱の中にあつたワインのようだった。

受領手続きを終え、慣熟訓練に入る。原作において”雁淵ひかり”はその魔力量の少なさから紫電改の性能をまともに発揮することができず、シールドの分の魔力まで回すことでようやく飛行していた。そのことから不安があつたが、いざ飛んでみれば特に出力の不足を感じさせることもなく飛ぶことができた。

よくよく考えてみれば、次期主力機である以上”雁淵ひかり”のように低魔力のウィッチが使用することだつて当然あるだろう。正式量産型である以上そのような欠点は改善されているに決まっている、原作で飛べなかつたのは試作機で魔力の多い姉が使用していた紫電改だつたせいでもあるのではないだろうか。

海に面した飛行場に三機で並ぶ。

「管野 一番出る！」

「カタヤイネン行きます！」

「雁淵ひかり、紫電改発進！」

飛び経つてすぐに零式とはあまりに違う速度性能に驚く。今日のところはあくまで確認に留めるようにムルマン基地司令部から言わ

れているため、模擬戦形式での空戦訓練はまた後日となるだろう。

一通り試し終わり、地上へ降り立つと管制を担当してくれていた基地の人間がサウナがあることを教えてくれた。複数あるらしくそのうちの一つをウィッチ部隊用に割り当ててくれているらしい。

ペテルブルグのサウナと同じくらいの小屋サイズのサウナはとても気持ちがよく、長距離の移動に加え、慣れない機体まで使った疲れが汗と共に流れ出るようだった。

「あのK型本当に使っちゃっていいんですか？」

隣に座るニパが伯爵に問いかける。K型はこれまで使っていたG型以上に洗練されて、良くなっていると実感できるものだったらしい。それだけにこれほどのものを譲られてしまったのを気に病んでいるらしい。

「いーのいーのおーいやー、仕事の後のぶどうジュースは最高だねえー！」

「おめーは何もしてねえだろー！」

一応ここまで飛んできているのだから何もしていないわけではないと思うのだがまあ置いておく。

格納庫で箱一杯の瓶入りぶどうジュースを見つけてからというものずっと飲み続けている中尉の顔はサウナに入ってからというものよりいっそう赤みを増しており、異様に高いテンションと呂律の回らない舌は酔っ払い以外の何物でもない。

「なあ、あれってもしかして」ヒソヒソ

「明らかに発酵の過程を踏んでるぶどうジュースですよ」ヒソヒソ

「あゝあゝー、！殴りてえー！」

案の定酔いつぶれたのか消灯時間になっても部屋に帰ってくることはなく、管野とニパも探しに行くのはめんどくさいとそのまま寝息をたて始める。

穏やかな寝息が二人分聞こえだしたころ、こっそりベッドを抜け出

し背囊を持つて部屋を出る。今回の任務は比較的長期に渡る上、その  
特異性から絶対に原作において一話割り当てられている話だろうと  
思っていた。しかし、突然出撃するように言われたために記憶メモを  
確認する暇がなかったためとつきに背囊に突っ込んできたのだ。

記憶メモに書かれている内容は念以上に人に知られてはいけない  
ため他の三人がいらないこの瞬間にしか読めなかったのだ。

(えーと?なんで7話の次が13話なんだこれ、でもエイラとサー  
ニヤについて書いてあるってことは多分あってるんだな。で、8話  
はー、護衛任務ってことはビンゴかな)

原作の話について書かれているページの中では比較的書いてある  
ことが多い。基本的に終盤に近付くほどメモの内容も増えるのだが。

ちなみに、メモの内容はある程度話の流れが書いてあることもあれ  
ば単語が書きなぐられているだけであつたりもする。両方のことも  
多く、今回はそのパターンだった。

(えー、さすがに地名なんかはあやふやだな、港としか書いてねえ  
や。メンツは変わらないのか、それから当然戦闘もある、と。:は?)  
読み進めていく中で目に留まった一文。その一文を見た瞬間、はる  
か昔の見たはずの、とうに薄れて消えた記憶の一シーンが脳裏によみ  
がえる。

”クルピンスキー撃墜、リベレーターがみがり?になつて生き残  
る”

原作第八話。

二日酔いで不調なクルピンスキー。

気遣ったひかりから渡されるお守り。

ありがちな胸元に入れておいた○○のおかげで生き残ったの実演。

(やばい、やばいやばいやばいやばいやばい!)

原作ひかりがクルピンスキーに渡したお守り。

原作ひかりが可愛いと言い、クルピンスキーがお守りと言ってだま  
して渡した物。

傍からみればお守りなどでは決してなく、無用の長物とすらいえる  
物。



（“リベレーター”なんて持つてきてねえ…）

ひ弱な拳銃弾を一発しか撃てないゴミ、そんな会話を自分から振り、切つて捨てた記憶がよみがえる。自分の呼吸が早くなり、目の前が真っ暗になる。気づけばあれだけ修行した”纏”まで乱れている。取り返しのつかないことをしてしまったという意識が強くなる。

（クソツ、クルピンスキーがピンチになるのは何となく覚えてたが今回の任務だったなんて！なんでもっと普段からノート全体に目を通しておかなかつたんだ！）

思考が過去の自分を責め立て始めるが、それを無駄と切り捨て先のことを考えるように意識する。恐怖を必死に抑え込みながら。

（なんだ、もっとよく思い出せ！クソツ、クルピンスキーの被弾原因は何だった!?誰かをかばった？いや、違う、ブリタニアの追加ウィッチはほとんど噛ませだったし残りは普通に飛んでいた。クルピンスキーは単独で飛んでいた覚えがある）

8話の内容はクルピンスキーの見せ場回であり、前に出まくつていたはずだ。となれば単独で動いていたというのも納得がいく。

（俺がかばうしかない…何時クルピンスキーが被弾するかわからない以上、注意を促したところであまり意味はないだろう。ああもう、せめて酒を二日酔いにならない程度に抑えられてればもう少しまじだったかもしれないのに…）

それてしまった思考を再び元に戻す。

（かばうためには常に近くにいななくちゃならない、そうなると分かれて行動するであろうクルピンスキーについていかなくちやならぬい…。問題はどうかやってついていくか、ついていつて構わないのか…。原作だとつまりクルピンスキーが相手していた奴との三人で相手をしていた相手の二手に分かれているはず…戦力配分を変えて大丈夫なのかどうか…）

結局、考えは纏まることはなくその日はベッドに戻ることになった。自分が考えたところで記憶が思い出せない以上打開策が思い浮かぶわけではないのだから。

「そろそろ時間だというのに…」

「遅いな…」

翌日、船団護衛に向け出撃する予定時刻になってもクルピンスキーは格納庫に現れていなかった。不安と焦燥感が募っていく。

「お？来たみたいだぜ」

「ううううう、おえ。きもちわるい…」

現れたクルピンスキーは見てわかる体調の悪さで、異様に青い顔とおぼつかない足取りがさらなる不安を誘う。

「ああ、やつぱりな…」

「二日酔い、ですか」

「やあ…、ひかりちゃんは今日も可愛いねえ〜」

お決まりの挨拶にも力がなく、正に弱まっているという表現がぴったりだった。もはや見ていられず、口を出す。

「あの、出撃をやめてください。そんな体調じゃ戦闘以前の問題です。基地で休んでください」

「いや…、僕は行くんだ。ブリタニアの可愛いこちゃんを迎えに行かないと…」

最後の望みとしてのこの発言も軽くあしらわれてしまう。この後の戦いのことを知っているのが自分一人な上、そのことを言うこともできないのがもどかしい。

「こいつ…なんも反省してねえ。海に捨てようぜ」

「この人はさあ…」

(…なんとかしなくちゃ)

飛び立った後もクルピンスキーの動きはひどく、まっすぐ飛ぶこともできない始末だった。管野も心配し、基地に戻るよう促すが頑固で、首を縦に振ろうともしない。逆に、不慣れな機体からくる操縦の粗さを指摘される始末だった。

「！緊急入電！艦隊にネウロイ接近！」

「出ちまったか…前情報なんてあてになんねえもんだな」

直後、編隊の後ろを飛んでいたクルピンスキーが飛び出し、”俺”達をおいて飛び去ってしまう。

「わああ、急にどうしたの!?!」

「出遅れた…!?!行かないきや!」

「ああ!?!、おいひかり!?!ったく、俺達も行くぞ!」

途中、艦隊所属のウィッチが撃墜されたという連絡も入り、艦隊の損耗がひどくなっているという。

船団についたときには、クルピンスキーが船団護衛艦隊旗艦をシールドでかばっているところで、見上げる先には巡洋艦並みに大きな球状のネウロイが空中に鎮座していた。

こちらがその大きさに圧倒され動きを止めたその瞬間、球状のネウロイは二つに分かれ、その内側から数えきれないほどの小型ネウロイが戦場にぶちまけられた。

「ニパ君直ちゃんでロツテを組んで右翼を、ひかりちゃんは僕についてきて」

先手として放たれた敵の初段をクルピンスキーが防ぐ。背負っていた銃を構えて指示を出してくる。

「ひかりちゃん、背中には任せたから絶対に離れちゃダメだよ!」

「はい!絶対!」

放出された小型ネウロイは耐久も低く光線も放つてこないため墜とすのはたやすい。しかしとにかく数が多く倒しても倒してもきりがない。加えて、ある程度数を減らすと大型のネウロイからの補充があり、戦局は一進一退が続いている。

「ひかりちゃんそっちお願い!」

「はい!」

ウィッチが戦線を支えている隙に船団は護衛の艦艇を残し輸送船だけをムルマンへと急がせたようだ。

戦闘が続いているとネウロイ側にも限界が見え始め、”俺”達の担当していたほうの大型ネウロイからは一時増援が発生しなくなった。

「ふう、どうやらひと段落だね」

「あとは大型だけ……」

《《やべえ！こっちの大型に抜かれた！》》

《《子機が邪魔で追いつけないよ！》》

管野達の通信は鬼気迫る声色であり、余裕のなさを感じさせた。

その通信を聞いたクルピンスキーは何事もないような朗らかな顔で振り返り、こういった。

「ひかりちゃん、ちよつと直ちゃん達手伝ってきってくれるかな」

ついに来てしまった。

そう思った。

ここまでの戦いはむしろ順調であり、クルピンスキーが戦闘となった瞬間に調子を取り戻したのも相まってもしかしたら大丈夫なのではないかとすら感じさせていた。

しかし、そうではなかった。

クルピンスキーは一人で残る意思を決め、“俺”一人に手伝いに行くよう促した。

「……駄目、です。クルピンスキーをひとりになんて」

「おや？階級じゃない上にひかりちゃんに呼び捨てだなんて新鮮だなあ」

「茶化さないでください！」

「なあに大丈夫大丈夫。なんとかなるさ」

何となくわかる。お守りを渡すなら今だったのだと。だがそれはできない、手元にあるべきお守りがないのだから。悩んだ末に、脳裏に閃くものがあった。

「……じゃあ、お願いがあります」

「なんだいなんだい今日は珍しいねえ。言っごらん」

「……こいつの撃墜スコア私にください」

「へえ！」

”俺”の渾身の策。

「ひかりちゃんが向こうに行って戻ってくるまで持たせろって？流石にそれは聞けないなあ」

「まさか、もつと単純ですよ。今からこっちの大型に私が突っ込ん

で、写輪眼で相手を見ます。もしこちらにコアがあったなら私が墜とすのを手伝ってください。なかつたらいつそこいつを無視して二人でもう一つに突っ込んで墜としましょう」

クルピンスキーを一人にさせず、かつ危険な大型ネウロイへの接近をさせない策。

「へえ…」

そう言うときクルピンスキーはにやりと笑い、

「いいよ？でも、言うからには絶対にやれる自信があるんだよね」

「はい！あれは私が墜とす、墜として見せます！」

「ごめん、直ちゃんニパ君もう少しだけ持ちこたえてくれるかな」

《ああ!?…持ちこたえりゃいいんだな?》

《あまり長くつてわけにはいかないけどね…！カンノ！雑魚はこつちでやる、大型に少しでも追いついて！》

《任せろオ！》

通信が切れ、静かになる。

「二人のためにも、じゃあやろうか」

「行きまあすっ！」

大型ネウロイからは先ほどまでと打って変わって多くの光線が降り注ぎ、特に大型ゆえの極太の光線が厄介だ。言わずともクルピンスキーが盾になってくれ、道を切り開いてくれる。

「ここからは一人で行きます！クルピンスキーは陽動を！」

「オツケー、気を付けるんだよ」

二手に分かれる。クルピンスキーは大型の注意を引きながらあえて小型の中を飛ぶことでうまく敵のヘイトを稼ぐ。

対してこちらは大型に向けて一直線に突っ込みコアを探りにかかると。問題は対象があまりに大きいため写輪眼の射程では一度にすべてを精査することができない。なのでまとわりつくように飛びながら探すしかない。

「見つけた！」

コアは基本、機体の中心線上にあることが多い中このネウロイは少

し外れたところにあつたため先入観が邪魔をして遠回りをしてしまつた。

「クルピンスキー！」

「そのまま行くんだ！君がやるって言つたんだろう！」

銃を放り捨て、刀を握る。”周”で魔力を刀身に纏わせ、大きく振りかぶる。

「はあああああ！」

気合一閃。振り下ろした刀身をコアへと差し込みそのまま振りぬく。その瞬間に纏わせた魔力を散らすことで少しでもコアに影響を及ぼすように。

「はあー…」

墜とした大型ネウロイが弾け、光の断片が降り注ぐ。同時にクルピンスキーも気を吐き、銃を下ろす。

瞬間、墜とし損ねていた小型ネウロイがその身を崩壊させながらクルピンスキーに特攻する。

「しまっ」「うわあああああああ！」

すんでのところで割って入るのが間に合う。刀を構えるのも間に合わず、クルピンスキーに体当たりするような形となつたのだが。

「…私、撃墜初体験です」

「ブレイクウィッチーズ入りおめでとう、ひかりちゃん」

二人並んで波間を漂う。

「あの、呼び捨てにしてしまつていた件についてなんですけど」

「あー、個人的には年下の子から呼び捨てにされるのもクるものがあつただけど」

「上官ですからね」

「なら、なんか呼びたいのとかあるかい？」

「じゃあ、伯爵で」

「おや意外なのが」

「今日の伯爵はかつこよかつたので呼び方もそれらしくしようと

思って」

後日のムルマン港、海軍病院にて。

「あーんな、強いネウロイを倒すなんてすごいです！」

「いやあー！君のためならどんな時にだって駆けつけるよ？」

「あれ、二人ともいつの間にな？」

「せっかくお見舞いに来てあげたのにこのエセ伯爵ときたら…」

「やっぱ殴りてえ…。つかひかりはどこ行つたし」

「ああ、なんか電話かけてくるとかって。扶桑まで連絡するならペテルブルグじゃ無理だしね」

## 原作第9話　くブレイブウィッチーズの設定とところどころガバくない？く

ペテルブルグの冬は去る気配を未だ見せず、殺意を感じる冷氣と雪と太陽による意地でも目をつぶしてやると言わんばかりのコンボがここを人の暮らしていい土地ではないのではないかとすら感じさせる朝。

扶桑の中でも南の方の生まれであるひかりには厳しい世界だがそれでも数か月もここで暮らしていれば嫌でも慣れてしまう。

規律の緩い502でも一応は軍隊なので起床時間は比較的早いのだが、もろもろの修行をやる時間を作りたいひかりは起床時間よりも早くに起きるようにしている。

最近の修行の中でひかりは、じぶんは円の成長が速いのではないかと思うようになった。

H×Hの原作で”円”を使用した能力者が少ないので一概には言えないが、502に来てからも範囲が広がっているのがひかりには実感できている。そもそもの原作キャラで明確な半径が出ているのはノブナガの4mとカイトの45m、微妙なのがゼノ・ゾルディックの何百mかとピトーのkm単位なのだが、ひかりの円の半径は既に7く80mを超えている。

微妙組の二人を除いて残りの二人と比較してみると、ノブナガは強化系であり明確に苦手と言っている。ひかりと数値の近いカイトとの違いを考えてみると、カイトが念を修めてどれぐらいなのかはわからないのがネックとなる。ジンがまだそこまで歳が行ってない事とゴンに出会った頃にはジンからの最終試練を受けていることを考えるとまだ10年いったか言っていないかくらいだろう。そう考えると、始めた年齢こそ違うものの念だけのキャリアでいえば実はひかりと同じくらいだったりする。

ならばなぜそんなにもひかりとカイトで差が出るのかといえればお



そらく”系統”の違いではないだろうか。

カイトの系統は原作で描写されていなかったはずだが十中八九具現化系だと思われる。六性図的に近い変化形やほかの系統ということもあるかもしれないが、ジンに師事したカイトが自分の系統から外れた能力にするということもないだろう。性格別診断的にも具現化系で神経質というのはカイトっぽくもある。原作において”系統”が”円”のような応用に影響があるという明確な描写はない。しかし、そう考えると六性図的に放出系の真逆にいるカイトが同じキヤリアで半分近いというのは納得できる。

そうなつてくると逆に気になるのはゼノ・ゾルディックのほうだ。龍頭戯画はあれで変化系らしいがどう見てもそこまで得意じゃないはずのオーラの放出と変化の複合能力だとしか思えない。龍星群などその最たる例のように思えるし、飛ばすのが苦手だから落とすという形にしたのかもしれない。

能力が放出も含むことからもし、変化形ながら半径三ケタmの円が使えたと仮定するなら強化系の自分の場合はどれくらい伸びるのだろうか。

ひかりがそんなことを考えながらルーチン化した修行を行っていると、日が昇り起床時間を知らせる喇叭が響き渡る。修行の時間は終わり、今日の業務が始まる。なお、念のうち基礎的なことは日常生活を送りながらもできることが多いので、ひかりは応用や系統別、剣の修行は起床後と就寝前にしている。

本日の業務のうちには新しく受領したユニットの慣熟訓練が含まれており、ユニット交換組のうち管野・ニパ・ひかりでラドガ湖の周囲を回ってくることになっていた。

「やっぱり紫電改はいいな！零戦とは段違いだ、特にメルス並みに速いのがいい」

管野はすっかり紫電改に惚れこんだようでありとあらゆる軌道を試しては満足そうにしている。

ニパもK型の動きには慣れたようだ。本人曰くG型とは大違いら

しい。零式の運動性能は紫電改にはないのだが管野的には問題ないらしい。

三人で軽く背の取り合いなどしていると、ニパが不意に動きを止めた。

「ねえ二人とも、あつちのあれ見える?」

そう言つて指さした先には、雲と地平線の間の青空に黒いシミのような影。

「ネウロイか!」

「こつちは補給線に近いからつて制圧したばつかですよ!」

そう、今いるラドガ湖東側はペトロザヴォーツクの近く、ムルマンスクからの補給線が通るということで制圧が行われたところなのだ。

「やべえ!墜とすぞお前ら!」

「カンノ、一人で突つ込むなよ!ひかり、基地への連絡お願い!」

「了解!」

普段通り一番槍は管野でひかりとニパはそれに続く形で突つ込む。相手はどうやら最近増えだした攻撃能力よりも防御にリソースを振つたタイプらしく、ニパの7.92mmや管野の13mmはおろかひかりの20mmすらもはじく。普段なら20mmともなれば相手を削るくらいならできるのだがこのネウロイは全体が流線形になっており、弾を弾き飛ばしてしまう。

「ひかり!援護するからコア見に行け!」

言うが早いか管野は速度を上げて相手の比較的前部を攻撃し始める。それを受けてニパが右翼に回つたのを見たひかりは下から回り込む。後ろからまつすぐ中心線をなぞつて行き半分を超えたところでコアを感知する。

「管野さん!この先8m前後、ほぼ中央です!」

「ツシヤア、よくやった!あとは俺の仕事だ!」

このネウロイには銃が効かず、加えてフリーガーハマー持ちもない以上、この場において有効的な攻撃は管野の固有魔法のみ。

相手の側面をかすめるようにして急上昇した管野は身をひるがえして急降下、そのままネウロイの中へと突つ込んでいった。

ひかりはというと下手に撃って管野に当てるわけにはいかないの  
で、管野が投げ捨てた99式改をキャッチしてニパと合流していた。  
しばらくするとネウロイは前触れもなく碎けて散り、中からは管野  
が飛び出してくる

「どおーだ！紫電改を履いた俺に敵はいねえぜ！あつ、と、うお、お  
お、わあ！」

管野が振り返って決め台詞をきめたと同時にストライカーからは  
黒煙が噴き出し、そのまま体勢を大きく崩す。そしてそのまま、

「マ、マジかよ！うわあああああああ」

「カ、カンノオー!?」「管野さーん!?!」

頭からオネガ湖へと突っ込み盛大な水柱をあげた。

落ちた管野はニパが背負い、ストライカーはこっちで担ぐ形で基地  
へと帰投した。管野の墜落は連絡してあったため、格納庫に戻ってす  
ぐに大尉が駆け込んできて管野に正座を言い渡す。

「管野さんも中尉になったのですからもっとユニットを大切に扱っ  
てくださいー!」

実はユニットの受領時に辞令を受け取っていた管野は昇進して中  
尉になっていたりする。その一方でひかりはというと、任官したてな  
上に扶桑側の書類上では後方基地であるカウハバ基地の非戦闘要員  
勤務扱いだったりするのでそういう話は一切なかったりする。

「今日はニパさんストライカーも銃も壊れてませんね!」

「うんうんそーなんだよ!これは今日の私はかなりラッキーかもね  
!」

られる菅野を後目にひかりとニパはヒソヒソと声を伏せて会話  
する。

じゃあなんで紫電改がひかりの分もあつたのかと疑問に思うかも  
しれないが、北欧方面配備の扶桑ウィッチの補給一元化のためにとス  
オムスのカウハバ基地の部隊の名前で(勝手に)ラルが強請ったから  
だ。

「ひかりさん！」

「うえ?!、はい?!」

突然話を振られたひかりが思わずどもる。口に手を翳して中腰で話し合っていた姿勢から一変、背筋を伸ばして顎を上げて目線は上に。ニパも隣で同様になっている。

「あなたはこの人たちみたいなのブレイクウィッチーズになってはいけませんよ。既に一機やらかしてるんですから」

「あつははは…。気を付けまーす…」

輸送船護衛の際に海に落ちた紫電改はエンジンをさっそく予備のものとの交換する羽目となってしまった。まだブレイクウィッチーズの三人のように頻繁に壊すようなことはしていないが新型を速攻で落としたことからひかりも警戒されているらしい。

突然槍玉に挙げられたニパが思わず反論したり、管野は戦果上げてるんだからブレイク上等と言ったりで反省の色が見えないと感じた大尉が二人にキレたり、整備の人がうっとおしいなあという目で見えてきたりでその場に居づらくなつたひかりは、一言お疲れさまでしたとだけ言って逃げるようにその場を離れた。

その日の夜。

消灯後に部屋を抜け出したひかりは格納庫へと行く。ここ最近寝つきが悪く、こうして抜け出しては体を動かしてから床に就くようにしていた。もっぱら校長謹製ぶつとい鉄心入り木刀を使った”練りモドキ”、つまりは剣を振っている。そうなるとある程度広い空間が必要となるため、ひかりは格納庫を選んだのだ。

今日も同じように剣を振るつもりでいると格納庫についたところで後ろから声をかけられた。

「何してんだお前」

「ひゃあ! 管野さん?! 脅かさないてくださいよ…」

「お、おお、悪いな」

月明かりが差し込む以外で明かりの無い格納庫で後ろから声をかけられれば驚かないはずがない。一方で管野もド深夜に見るからに

異様に太くて重たそうな木刀を片手で握りしめて出歩く姿に若干引いていた。

「で、なにしてたんだ」

「その、寝付けなかったんで、少し体を動かそうかなと…。そういう管野さんは？」

「ああ、俺も寝付けねえんだ。足のしびれが引かなくてな…」

「今日は長かったですものね！」

管野が格納庫の隅にある椅子に腰かけたので、ひかりは机をはさんだ反対側にある椅子に座る。しばらく互いに無言の時間が続くも、管野の方から口を開いた。

「なあ、孝美のこと何か連絡あったか？」

ためらいがちに口を開いて聞いてきたのはここへ来る前に墜とされたひかりの姉、孝美のことだった。

「ムルマンスクで恩師に電話した時に、少し。容体は落ち着いてるし傷はもうふさがったそうなんですけど、まだ目は覚めてないそうです」

扶桑でも有数のエースウィッチである孝美の撃墜と本国送還、入院は騒ぎになったらしく、特に地元である佐世保ではそれが大きかったらしい。そのこともあって入院先には離れたところにある舞鶴が選ばれたらしい。

「そうか…。なに、心配すんな。孝美はそう簡単にくたばるわけがねえ、あいつはずごいんだ」

無事に扶桑で入院できたと聞いて管野としても人心地ついたのか、表情がすこし柔らかくなる。

「アイツはとんでもなくつえーからな。呉の海軍学校で一目見た時から、俺の相棒はコイツしかいねえと思っただもんだぜ」

” 管野の相棒”

それは原作のひかりにとっても重要なキーワードであった。身近な先輩ウィッチで熟練のエース。原作ひかりのその言葉への執着心ははたして姉への対抗心もあつてのことだったのだろうか。

なら、同じようにその言葉へと惹かれたひかり自身の理由はなんな

のだろうか。

「管野さん、管野さんの相棒って私じゃいけませんか？」

「はあ？おめえが？」

ひかりの思い、それは強くなりたいたいという思いだった。

ウィッチになることを決めた理由こそ原作ひかりとは違うものの、それでもこの思いは同じであり、それは管野もまた同じだ。そのことを知ってから、一緒に強くなればと同じ空を飛んでそう思った。

ただ一人がむしやらに、修行するのは大変だった。

佐世保の山で一人、一日中成果が出るともしれない念の修行に打ち込むのはつらくひかりも幾度となく思い悩んだ。

だが二人でならば、身近な目標でもあったといえる管野の隣に並び立てるようになれば、前より確実に強くなったと言えるだろう。そのまま二人で強くなれば、原作よりも強くなったウィッチ二人でならより確実により良い未来が迎えられるんじゃないか？念能力がある以上決して妄想どまりの話じゃない。ひかりの頭の中ではそんな内容がグルグルとめぐっていた。

「まあ、百年はええだろお前じゃ」

「それなりには飛べます！魔眼もあります！」

管野の反応は芳しくないものだったが、それでもひかりは食い下が  
る。

「だめだだめだ。まだよええ、なりたきや孝美みたいに強くなけ  
りやな」

管野の中で理想は孝美で固定されてしまっているようだった。  
それでもひかりは食い下がる。

管野と二人でならもつと強くなれると信じて。

「なら、強くなつて見せます。姉よりも管野さんよりも！」

「は、おめえなんぞに負けてたまるか。俺だつて強くなる。もつと、  
もつとな！今のままじゃクルピンスキーとかのがもつとつええ。だ  
がいつか、俺は強くなつてネウロイの奴らを全滅させてやるんだ一分  
一秒でも早くな！」

「じゃあ、私も一緒に全滅させます！一緒に強くなつて！」

「…まあ、強くなったら考えてやるよ」  
そう言って管野は立ち上がり、ゆっくりとした足取りで自分の部屋へと戻っていった。

502に軍司令部から新たな任務が下った。

オネガ湖北東部にグリゴリーから大型の飛行型ネウロイが出現し補給線を脅かしている。目標はペトロザヴォーツクへと向かっているらしく早急な対処が求められるらしい。

出撃に当たったのはウィッチは7機。クルピンスキーは未だ退院できず、ラルは動けない。

最初にネウロイを察知したのは遠隔視の魔眼を持つ下原だった。

「ネウロイ確認！まだ動きはありません！」

下原からの報告を聞いてからしばらくして、他の面子の視界にも入る。

いわゆる大型に分類される大きさだが、一目見て全員が警戒を強める。このあたりのネウロイの多くはそこまで複雑な形をしていないものが多い。対してこいつは四方八方に体が伸びており、こういう形状が特殊なネウロイは何か隠し玉を持っているがちだからだ。

「管野！一番突撃する！」

下手に散開すれば互いが互いの邪魔となりかねない。全機一斉に密集体系で突撃する。その中で管野だけが突出して前に出ている。サーシャが離れないようにと声をかけるが無視して前に出続けている。

幾分距離を詰めた段階で相手のネウロイはゆっくりとひかり達の方へと向きを変え、正対した瞬間、濃密な弾幕を浴びせかけてきた。通常のものよりも強力な光線が視界を埋め尽くし何も見えなくなる。部隊の多くはその場で足を止めて防御に徹さざるをえなくなり、魔力量の関係でシールドに不安のあったひかりとロスマンだけが咄嗟に高度を下げ、雲に紛れる選択をしたことでそれを回避する。

途切れることなくぶちまけられる光線に防御を選択した面々はその場から動くこともできなくなり、打開策を打てるのは弾幕から逃れることのできたひかりたち二人だけだった。

「この攻撃パターンは…、もしかしたら！」

冷静に敵の観察に集中していた曹長はそうつぶやくと高度を上げ、部隊とは別の方角からロケット弾での攻撃を始める。

三発放たれたうちの二発がカーブを描きながら敵の側面をすり抜け、背面を吹き飛ばす。大きく砕けた装甲の中からはコアがのぞいていた。

「やっぱりこの攻撃パターンはコアを守るためのモノだったのね」

「さっすがロスマン先生！」

この中で最も長いキャリアを持つロスマンは扶桑海事変よりもさらに前、ヒスパニアにネウロイが現れたところから戦い続けているベテランだ。その中で培われた観察眼がコアの位置を見抜かせたと言える。

「なるほど、管野さん！」

「おうー！」

コアがむき出しになったことで敵が動きを止めている隙について管野とサーシャが飛び出し、一気に距離を詰める。前に出た管野をサーシャがフォローする形だ。

ネウロイの方もすぐに再起動し、弾幕でけん制。初見ではないため、2機は光線の雨の中をすり抜けて近づき続けるが、逆に反応が遅れたニパ達3人がそれに捕らわれ、シールドを張ったまま動けなくなる。

そして、ひかり達もまた、身動きが取れなくなっていた。突撃した二人とネウロイの距離が近すぎて火器を使った援護ができないのである。

突然、ネウロイの攻撃がやむ。かと思えばまた、パネルから光線を打ち出す。ただし、攻撃組の接近が看過できない距離になったのか、また新たな攻撃パターンをとり始めた。自分の前方に光線を収束さ



せ、さらに巨大かつ弾速の速い光線を撃ちだしたのだ。

管野はそれに反応しきれず、ギリギリのところまでシールドが間に合ったものの弾き飛ばされてしまい、そこに次弾が迫る。

これはまずいと飛び出すが間に合うはずもなく、誰かが墜とされる。墜とされたのは管野をかばったサーシャで、地表に落ちる前に下に滑り込むことに成功したロスマンが受け止める。

「大尉！」「サーシャ！サーシャ！」

頭からの出血がぼたぼたと垂れ、うめき声をあげる。その姿を見た管野がひどく取り乱す様子を見せる。

「撤退します！ニパさんが先導、下原・ジョゼ組が後ろです！」

サーシャが指揮をとれる状態にないと判断したロスマンが全体に指示を出し、それを聞いて動き出したニパの後ろにつくようにして徐々に高度を上げる。

事実上、補給路を再び諦めることとなってしまった。

ペテルブルグに戻った部隊はサーシャを軍病院へと搬送した。道中、敵との距離が開いてからはジョゼの治癒魔法で応急処置を行いつつだったものの、意識は戻らないまま、入院という形となった。

部隊内の空気は沈み、食堂での食事は皆口数も少なく食器の立てる音だけが響いていた。

「管野さん？」

その中で管野は食事に手をつけることなくうなだれていた。

自分が無茶をしたせいでサーシャが墜とされたのだと気に病んでいるようで、ニパが慰めるもさらに気が沈むだけのようなだった。

空気が変わりはいらないと考えたのか、ラルが明日に再度の攻略作戦を行うことを告げ、その場は解散となった。

食後、管野の様子が気になったひかりが基地内を捜して回ると、サーシャの病室にいるところを見つけた。声をかけると、顔を下に向けたままつぶやくように返事を返した。

「ひかりか……。……。なんだ」

「……。いえ、休むよう言われていたので」

すると、管野が反応を返すよりも前にベッドに横たわっていたサーシャが目覚まし、口を開いた。管野が無事だったことに安堵したようだったが、対する管野は自分をかばったせいだと悔やむ。サーシャは自分のカバーが甘かったせいだという姿勢を崩さず、管野には突っ込むことこそが持ち味なのだと言い、最後にあのネウロイを必ず墜とすようにと言った。

「ああ、必ず俺が墜としてやるぜ！」

「ひかりさんもお願いなね」

「はい！」

その後はサーシャが目覚めたことを看護師に伝えた二人は、宿舎に戻る。

「でしやばんなよ」

それぞれの部屋へと別れる前にひかりは管野にそう、声をかけられる。

「管野さんこそまた向う見ずに突っ込んだりしないでくださいね！」

「んの…！少しでも遅れるようなら置いていくからな！」

「絶対ついていきますよ！相棒ですからね！」

まだ認めてねえ！などという声を聴きながらひかりは自分の部屋へ入る。まだ、ということはあるということなのかと思いがら。

翌日の管野は朝から士気旺盛といった感じで走り込みには気合が入り作戦ブリーフィングでもいつも以上に真剣な表情だった。

ブリーフィングにおいて、地上班からの観測では敵の火力は前方への火力の集中砲火に特化しておりそれ以外の角度は口ほどにもないとのことだった。そのため部隊を二つに分け、おとり役のロスマン班と攻撃役の管野班に分かれて作戦を行うこととなった。管野班にはひかりとニパが下につく。現地での作戦指揮はロスマンが執ることとなった。

出撃してから発見はすぐだった。

下原が敵を発見した時点で二手に分かれ、攻撃班は低高度から進攻する。囃班は右から迂回する形でひきつけ、攻撃班が背面へ突撃しやすくする。

「ほんとに全然撃ってこない!」

「コアの位置もわかってるしこれならいけるね!」

急上昇し側面につくと同時に3機で火力を集中する。装甲が剥がれ落ち、このまま攻撃を継続しようというところで、

「な、なに!」

「分離ですって!」

攻撃を担当していた前半分とコアのある後ろ半分に分かれ、さらに前部は5つの部分へと分かれ多方向から囃班に対して猛攻を仕掛ける。

「落ち着け、コアをつぶしやあいだけだ!」

「でもカンノあれ!」

「へ、変形してこつちも攻撃側に…!」

後半部分の形が変わり、今まで火力を担当していた前半部分と同じ形になったかと思えばひかり達にも猛烈な弾幕を浴びせかけてきた。ネウロイはそのまま東へ向けて動き出し、巢のあるであろう方向へと逃げ出した。

「コアだ!コアを見つける!ひかりイ!」

「はい!」

管野の指示で三機一塊になって突っ込む。距離が近づくにつれ弾幕は濃くなり回避が間に合わず、やむなくシールドではじくことも出てくる。魔力をストライカーに回しがちでシールドが弱いひかりにはつらい状況だ。

「お、おい、ひかり…」 「カンノ!危ない!」

一度に距離を縮めすぎたのかネウロイは突然攻撃パターンを切り替え、サーシャを撃墜した収束光線を放ってきた。またも管野は反応が遅れ、ニパがカバーに入る。幸い、逃げの態勢から放たれた光線の威力は落ちており、防御に定評があるニパは難なく防ぎ切り、振り

返って管野に注意を促すがなぜか管野はその場から動こうとしない。

「おいどうしたカンノ!」「足止めてる余裕はありませんよ!?!」

「お、俺には無理だ。作戦は中止にする」

そういった管野の体は震え、顔はこわばっていた。こちらを見る目も弱弱しく思える。

「どうしちゃったんだよカンノ!」

「俺じゃお前らを守れねえ…、クルピンスキーやサーシャみたいに強くねえから…」

その情けない姿を見たひかりは、激情を覚えた。

「……じゃあー私とニパさんだけで行きます。管野さんはそこで縮こまつててください」

ひかりがそう言うと言管野は顔を上げるが、それでも何も言わない。

「あのネウロイを倒すんだってあんなに言ってたのに。強くなるんだって言ってたのに」

「いいです。私だけ強くなりますから、ニパさんとコンビを組んだ方がもつと強くなれるかもしれないですし」

「弱い人にお姉ちゃんの相棒は務まんないでしょうし!ここでビビるような奴がこの先生き残れるとも思いませんから!」

矢継ぎ早にまくしたてられるが、管野は顔をゆがめこそすれ反論すらしてこない。

ひかりは、一緒に強くなりたいと思った相手の縮み上がった姿を見ていたくなくなり、逃げるように背を向け、敵ネウロイへと向かう。

「おい、ひかり!ああ、クソツ!」

悪態をつきながらもニパが追い付いてきた。何も言わず、加速しながらロツテを組む。

「なんであんな敵しく言っただよ」

横についたニパに声をかけられるひかりだったが、感情のままにぶちまけただけなのでうまく言葉にできなかった。腑抜けた姿が嫌だった、そんなところだろうか。

「お姉ちゃんの相棒になるって言ったのに、強くなるって言ったのに、なのにあの様。思わずカチンときた、そんなところですよ」

「カンノだつて中尉で分隊長で命を預かる立場なんだ。それはわかってあげなよ……」

「……」

ひかりはニパのその言葉に答えることなく、そのままやがて敵の射程ギリギリまで接近する。

「作戦はあるの？」

「ニパさんを盾に突っ込んで、魔眼の射程まで入って、それで斬る！」

「嘘でしょお……カンノ並みの脳筋じゃん……」

ならば代案があるのかとひかりが問えば渋い顔をして無い、とニパは言う。雨あられと降り注ぐ光線を避けるのは慣れたもので、ある程度まで距離を詰めるのは決して不可能ではなかった。

問題は、

「ひかり、またあれだ！しかもでかいのが来る！」

すべての光線を束ねてはなつてくる収束光線であり、これの対処方法が確立できていなかった。先ほどニパがはじいたものはサーシャを墜とした物よりもずっと格下だったが、今放たれようとしているこれは強力なほうだ。

強力な物もニパが防げると信じて任せるか、あるいは501のもつさんよろしく両断しにかかるか、理想は回避だが接近する以上いつかはあれに相對することになるのに変わりはない。

これ以上悩んでいては何もできず手遅れになる。そう考えたひかりは、いた仕方なく対処法は後回しに回避を選択しようとして口を開いた時、ひかり達を追い越して正面から光線にぶつかっていく影を見た。

「うおおおおりやああああー！」

それは固有魔法を拳に纏った菅野であり、わずかな拮抗ののち徐々に押し返していき最後にはそれを突き破った。

「菅野さん!？」

振り返った菅野はこちらに近づくとそのままひかりに拳骨を落と

す。戦闘中も常に”纏”をしている以上ひかりからすれば大して痛くもないが、それでも管野は満足そうな顔をした。

「散つ々、ふざけたこと抜かしやがってくれたなコノヤロウ。そこまでデカイ口叩いたんだ。ぜってー死ぬなよ！」

そう言った彼女は自信に満ちた笑みを浮かべており、いつもの頼れる管野の姿だった。ひかりはそのことが無性にうれしくなり思わず口角が吊り上がる。

「菅野さんこそまたビビって動けなくなっても今度は誰も助けてあげられませんからね！」

「はっ、言ってる！じゃあ行くぜ！俺の後ろにピッタリ付いてろ！」

陣形を管野、ひかり、ニパへと組み直し、再度突っ込む。魔眼の射程に入るまでは管野が光線を防ぎ、ニパが相手の光線パネルを射撃でつぶして圧力を減らす。

「くるよカンノー！」

「おおっしやああ！」

再び固有魔法でぶつかり、突き破る。紫電改の性能もあって一度抜ければもう射程内だった。

「ー、あそこです！」

位置を示すべく、ひかりは20mmでコアを覆う部分の装甲を砕く。しかし、相手は最後のあがきと言わんばかりに分離し、残りのパーツでコアをかばいつつコアを持つ本体だけが逃げようとする。

「へっ、コアの場所がわかればこっちのもんだあ！」

管野はコアへと向けて一直線に加速し、その右手に固有魔法を展開する。

ニパの援護で障害となるパーツが一つ砕ける。残るパーツの間をすり抜けた後、コアのある本体の前へとたどり着く。

「見てろひかりィー！これが本邦初公開のおお！」

そう言っただけで管野は固有魔法を纏わせた右腕を引き絞り、それを思いつき突き出した。

「紫電ツ、一閃！」

声があたりに響くと同時にネウロイが空間ごと歪んで見えたと  
思えば、次の瞬間にはコアを持った本体が半分消し飛んでおり、遅れ  
て爆音が大気を揺らす。

「な、なに!?!」

「まさか!?!」

どうだと言わんばかりの顔をしている管野へと詰め寄り問う。

”発”を作ったんですか!?!”

「おうよ。どんなもんだ」

さながら、普段の剣一閃を複数束ねて一度にはなったかのような威  
力であったとひかりは思う。同時に、いったいどうしたらそんな威力  
が出せるのだろうかとも思う。”発”とはいつでも無尽蔵に力が湧  
き出るわけではないのだから。

「あの威力はなんですか!?!」

「溜めてたんだよ、何日分か。ただ剣一閃を飛ばすだけじゃそこま  
で意味がねえ。だからあらかじめ溜めめといた魔力を何回かに分けて  
ぶっ放してんだ」

ひかりが聞くと管野がネタをばらしてくれる。何日もかければ今  
程度のものなら3回分は溜めれるのだそうだ。説明だけ聞いている  
と某アルター能力のようだとかひかりは思った。

話を聞いているとニパが近づいてきた。

「やったねカンノ！でもいきなり実戦で使う必要あった？」

「どうやらニパは管野の”発”の修行に付き合っていたらしく、二人  
で試行錯誤した結果が事前に魔力を貯めておくことだったらしい。  
放出系の系統別修行は以前から伝えられていたため、魔力を溜めると  
いう感覚を掴むのに時間がかかったそうだが去年のうちから既に手  
を付けていたらしい。」

「言ってくれてもよかったのに!」

「私もそう言ったんだけどカンノがさあ」

「あーうるせえうるせえ!」

『『バスンツ』』

「「えっ」」

「三人ともそこに正座あ！」

囃組の三人につるされるようにして基地へとストライカーを壊した3人が基地へと戻ると、格納庫には頭に包帯を巻いたサーシャが目の笑っていない笑顔で待ち構えていた。

管野が聞けば、これで紫電改の撃墜は2回目、管野機も複数回の撃墜を経験しており、早くも予備部品に不安を覚えるのだという。

「いやあ、これでひかり君も立派に502の、ブレイクウィッチーズの仲間入りだねえ」

「ほんとですか？いやあ、私もついに仲間入りかあ〜」

未だ松葉杖をつきながらだが、基地へと戻ってきていたクルピンスキーも茶化すように言い、ひかりも同じく茶化すようにそれに返す。

「なにちよつとうれしそうにしてるんですか!?クルピンスキーさんもそこに正座あ！」

「ええっ、僕足折れてるんだけどお!？」

騒ぐ二人を横目に管野の方へにじり寄る。

「管野さん管野さん」

「あんだよ」

「これで、相棒だつて認めてくれますか？」

「はあ?!こんなんじやまだまだ認めるわけにはいかねえな！」

「でもでも、今回かなりいい感じだったじゃないですか!特訓したら絶対もつと強くなれますよ!私たち相性いいですって!」

「むむむ……仮、つてことなら認めてやる。ただし、少しでも情けねえ真似したらそつこークビだかな！」

「いいやつたあー!」

「ちよつとそこの二人!」



## 久しぶりの修行編　　季節感くるいそう

### ジョイント能力編

「今の私たちの連携についてまずはまとめようと思うんですよ」  
仮とはいえ管野にコンビとして認めて貰ってからしばらく。日頃の訓練でも僚機として固定されたことで一緒に飛ぶ機会が増え、連携訓練にも力を入れて取り組んでいる。

今日は午前中のシフトがスクランブル要員としての待機なため、格納庫とに併設された搭乗員待機所にいる。待機所は簡素な作りで、これと言った娯楽もなく互いに手持無沙汰になってしまう。この際にと話題を振った。内容はコンビとして飛んだ時の連携についてだ。

「私たちってどっちも機関銃を使う前衛タイプじゃないですか」

「まあ、そうだな。どっちかが援護に徹するって感じでもねえし」

前衛が比較的小口径の機関銃で近距離からかく乱、大口径の対装甲ライフルやフリーガーハマーを装備した後衛が装甲を砕き、露出したコアを前衛が破壊する。これはこの世界でのネウロイ相手の空戦における基本戦術であり、そのためこの部隊も火力のある後衛を混ぜたこの編成と言っている。

戦争最初期の頃は機関銃で十分撃墜可能な程度のネウロイばかりだったのに対し、現在では装甲に優れたタイプが珍しくなくなってしまう火力を持った後衛が必須となった。ただし、高火力の武装は重く、大きく、装弾数が少なく、何よりお値段が高いため配備数が限られてしまうのが欠点だ。

「そうになると二人とも初手から突っ込むことになるわけじゃないですか」

「まず、私がコアを見つける。そしたら二人で装甲を削って、どちらかがコアを叩く。場合によっては装甲を削る段階から管野さんが殴りに行く可能性もあるわけですけど、言ってしまうえばこれだけです」

実はこの戦術自体は既存の戦術を焼き直しているだけだったりす

る。

常に相手に張り付きながら早期にコアを見つけ、短期決戦で済ませるこの戦術は、ネウロイの装甲が比較的薄かったネウロイ大戦初期の戦い方だ。現在でもその基本は変わらないが、重装甲の敵が増えたことで短期決戦ではなく入れ代わり立ち代わり四方八方から攻撃し続けることで時間をかけてコアを捜すのが一般的となった。

扶桑には魔眼持ちが多く、その中にはコアの位置を知れるものも多かったこと、近接格闘を好む気風が合わさったことから、短期決戦戦術が現在でも一部で残っていたりもする。

「ただ、この連携で改善しておきたいところがあるんですよ」

「コアを見つけても、相手に伝えられるかどうかだろ？」

そう、この戦術の最大の欠点がそこだ。補足したコアの位置を伝える方法が、撃って伝えるか口頭で伝えるかのどちらかしかないのだ。

この方法はどちらも問題があり、まず撃って伝える方法は確実に位置を伝えられるが、防御砲火の激しい相手だとすれ違いざまにコアを補足する形でしか接近できず、銃撃する余裕が無かったりする。対して口頭で伝える方法では正確な位置を伝えづらいし、激しい攻撃の前では同じように通信する余裕がない。

熟練のペアの場合、空戦の最中でも互いの挙動に気を払い続け、片方が見つけた事をもう片方の側で察する事で戦術を成り立たせる。言い換えればそんな阿吽の呼吸ができるようなレベルのロットテしか使っていないのがこの戦術だ。

「んー、実戦でなら他の隊員もいるし、そこまで切羽詰まった状況になりはしないと思うが…、どうにかできればってのは賛成だな」

ウィッチの最小単位は2機一組のロットテである。それと同時に最も重視されるのが二機連携<sup>ロットテ</sup>である。

軍隊である以上、空中であっても集団戦が前提であるが、ウィッチの数自体が少ないため通常の航空機のように何十機で一部隊みたいな編成はできないため一部隊の構成人数は少ない。

だが、それ以外にも少数で編成するには理由があり、ウィッチの戦闘距離が非常に近距離であることがあげられる。使用する武器が小口径であることも相まって至近距離からの射撃が戦闘のほとんどを占めるウィッチの空戦。そうになると、ネウロイに集団戦を仕掛けた際にフレンドリーファイアや空中衝突が起こりやすくなってしまうのだ。同時に接近して攻撃できるウィッチの数は多くて4機程度、そのためロット編隊二個で4機編成シユバルムが基本となるのだ。

これらはネウロイ相手の空戦を一早く経験したカールスラント空軍にて確立された物であり、今次戦争初期の戦いの中で洗練され、欧州から人類が撤退した後は常に前線にいた彼女たちから世界の軍隊へと伝わっていった。

「で、銃もダメ。口頭で伝えるのもダメ。一流の連携は望むべくも無くってなわけだが」

「念をつかいます」

「そうなるわな。しかしよ、念つてのはそんなにいくつも作れるものなのか？」

「あー、それはですね。メモリって呼んでるものがありました」

容量と書いてメモリと読んだこれは、人が覚えられる念の量というか限界を指すものとして使われる。

念能力者には複数の技を持つものが多いのだが、おおむね二種類に分けることができる。一つの能力を工夫して複数の技として使うパターンと、能力自体を複数持っているパターンがある。前者は電撃を使うキルアや、煙に対し自在に形を与えることで多くの使い道があるモラウ等が、後者にはヒソカやゲンスルー、クラピカ等が該当する。今回の場合は複数の能力を作ろうとしているため後者に該当する。

「私の”発”はもともと持っていた魔眼に魔力自体の性質の応用である”円”や単純な肉体機能の強化という単純な形で作ってますから消費しているメモリ自体は少なくなるよう意識しています」

「そういうことなら俺のも…、あー、魔力をため込むってのはどうな

んだ？一から作ってるしな」

写輪眼自体は単純なものの組み合わせに誓約<sup>制約</sup>で縛ることで意識的に容量を小さくしてある。もともと、後から能力を新たに作る余裕を残していたのだ。先ほど例として挙げたキャラたちは精々2、3個しか能力を作っていないが、彼らの能力は容量を多く消費しそうな複雑なものが多かった。そのため、シンプルでオーラそのものの基本性質から大きく外れないものとすれば複数の能力が作れるのではないかと考えたのだ。

対して、管野はどうだろう。”紫電一閃”自体は”剣一閃”の魔力を増やしたただだが、魔力を貯め込むという能力は一から作ったものだ。やっていることはシンプルだが、魔力本来の性質に無いものを能力としている以上容量はそれなりに消費しているのだろうか。

「いや、俺のはあとでいいか。それよか新しい能力だ。なるべく単純な能力にするべきなんだろう？どうすんだ？」

「今考えているのは私が見たものを管野さんに共有するって感じですよ」

発想のもととは写輪眼と同じ出典の”NARUTO”に登場した”輪廻眼”と、H×H原作に登場した”淋しい深海魚”。輪廻眼は、劇中に登場した複数のキャラが持っていた眼なのだが、持っていた全員の世界を共有しており、誰かが見ていれば自分もその光景を見ることができるといふものだ。”淋しい深海魚”の方は右目だけで見た者という条件で最大三人までその周囲を、さながら千里眼のごとく第三者視点から遠隔視出来るという能力。

「それシンプルなのか？魔力の性質を利用してるってわけじゃねえだろ」

管野の懸念道理、一から作る上に自分で完結するのでは無く他人にも影響を与える能力である以上消費容量は多くなることだろう。

「二応、誓約でガチガチに縛って消費容量を小さくできれば作れる  
と思っていまけど、どうなるかは作ってからじゃないと……」

この、制約で縛れば消費する容量を小さくできるのではないかと  
いう考えはH×H原作キャラのヒソカが使う”薄っぺらな嘘”とい  
う能力から得た発想だ。

能力の内容は紙や布のような薄っぺらい物の上限定で、鉄や木など  
ありとあらゆるものの色や質感を再現できるというもの。

注目するのは薄っぺらいもの限定という部分。ヒソカはこれのほ  
かにメインで使っている能力があるのだが、かなり汎用性の高い物  
で、おそらく容量を多くは無いが少なくともない程度消費するのではな  
いだろうか。そうなると”薄っぺらな嘘” 自身の消費容量はなるべ  
く小さくなるよう考えられているはずである。

念の容量という概念はヒソカが劇中で言及したのが初出であり、そ  
の本人が限界まで容量を使うような能力の作り方はしないだろう。  
そう考えると、二つ目に作ったであろう”薄っぺらな嘘”に使い道の  
限定される誓約を作ったのはある程度容量に余裕を持ったためなので  
はないかと考えたのだ。

「なるほどな……、誓約ってのは”発” 自体を強くするってだけ  
じゃねえんだな。俺のも後付けできねえかな……。ああ、いや、それで  
だ。そこまで決まってるんだしたら作り始めればいいんじゃないか？」  
「二応、管野さんにも意見を聞いてからにしようと思って」

能力自体はコアの位置を共有するというもので決まっているため、  
あとはそれをどのような形で伝えるか、発動条件、制約と誓約につい  
てだ。

今回もなるべく消費する容量は小さくしたいのでしつかりと縛っ  
ておきたい。

「……なあ、視界の共有ってお前の視界だけなのか？」

管野は少し考えこむそぶりをした後、不意に顔を上げ、つぶやくように聞いてきた。

「?、どういうことですか?」

「俺が見たもんもお前に見せることも出来るように、つまり双方向で見せられるようにならないかってことだ」

元々、俺が考えていたのは俺が見たものを一方的に相手へ送るというもので、一方通行のつもりだった。その上、俺の視界をそのまま管野に見せるのではなく、管野の視界にコアの位置だけを表示するようにすることで低コスト化しようかと思っていた。ようするにFPSなんかでいうピンを刺す感じが近いだろうか。

それを、参考元の輪廻眼っぽい仕様にはできないかということらしい。

「でも、そうなると誓約で縛っても消費する容量は結構大きくなると思いますよ?」

「限界まで誓約で縛っても駄目か?」

「難しいんじゃないかな……、縛りすぎると使いにくくなっちゃうかも」

恐らく実用出来るレベルでの縛りではそこまで意味はないだろう、縛りを設けすぎれば使いにくい微妙なものになる。

かといってこれほどの能力となると、誓約が少なければ以降新たな能力を作るだけの容量は残らなくなるような気もする。

容量消費を少なく、かつ十分使える程度の誓約に留める方法。そんな裏技のようなのがあるのか、と考えれば思い当たらないでもなかった。

「容量をあんまり消費しないで実用レベルの誓約に留める方法、無いこともないかもです」

「相互協力型…:ジョイントタイプと呼ばれる “発” なら」

相互協力型

H×H原作で、わりかし新しい方の話になって登場したタイプの  
発。

相互協力型ジョイントタイプと一言で言っても、また幾つかの種類に分けられると  
思っている。複数人で一つの能力を作るタイプと能力を発動する者  
とそれを使う者に分かれるというものだ。

前者は明言されているわけでは無いが、グリードアイランド編に出  
てきたゲンスルー達、カキン編の王子にもそれらしき描写がある者が  
いる。対して後者は、相互協力型ジョイントタイプが原作で登場したときに出たパワ  
ドスーツと銃を具現化するというもの。発射される念弾に射手側の  
オーラを用いる事で具現化担当と射手兼オーラ供給係で役割を分担  
しているようだった。

また、グリードアイランド編のカードなども同じようにゲームマス  
ターが分散して担当しているのでは無いだろうか。

菅野には原作云々を省いてそのことを説明する。

「念つてのはマジで何でもありだな」

「ただ、ちよつと問題が…。これって具現化系がよくやる手法でし  
て…」

そう、先の例にも挙げたとおり相互協力型ジョイントタイプというのは具現化系ばか  
りなのだ。例外は王子とその護衛達のものくらいだろうか。

恐らくは具現化するのに多くのオーラを使う分、使用するに当たっ  
てのオーラを他人に依存するという方法で解決するための手法なの  
では無いだろうか。

「俺らどつちも強化系と放出系だぞ！ダメじゃねえか！」

「いや、出来ないってことも無いと思うんですよ」

参考となるのはグリードアイランド編に登場した、ゲンスルー達の  
カウントダウン  
”命の音”という念能力。

作中の描写からどうやら3人で行う相互協力型らしいのだが、具現  
化、放出、操作の三系統の複合なのだ。

他の相互協力型と違う点として、メインであるゲンスルー以外の二  
人が発を使えなくなるらしいところと、能力が影響を及ぼす点が第三

者である点がある。

つまり、誓約<sup>制約</sup>を複数人で分担した上、相互協力型でありながらオーラの消費を発動者側に依存するため対象を選ばない能力なのだ。

これを参考にできないだろうかと考えた。しかしそれでも問題は多く残る。

「二回まとめておくのですよ？ 私たちに必要なのは私の見たコアの位置を伝える能力、ひいては相互に見たものを共有しあえる能力です。決めなくちやいけないのは”発”を作るにあたっての能力自体の制約と誓約、そして消費容量を減らすための制約と誓約です。なら、物を具現化する必要はないと思うんです。」

相互協力型の例として挙げた能力には具現化したもの自体が銃弾や爆弾として影響を及ぼすものが多かった。しかし、”視たもの”という実体のない物を影響させあうなら物理的に影響するためのモノを具現化する必要はないだろう。

具現化せずに、念能力の影響を人に与える方法、

「いわゆる、魔力のこもった一品つてあるじゃないですか？」

”呪いの品”<sup>マジックアイテム</sup>を創ってやろうじゃないか。

発動条件、使うにあたっての制限を決めるのに、互いに多くの意見を出し合い、最終的にはこうなった。

能力 : 一組の髪留めをつけた二人の視界を共有する。

発動条件 : 一組の髪留めを二人が互いの髪に付けた場合。

誓約 : 視界を共有できる時間に制限時間を設ける。

共有できる時間は髪留めを髪以外に身に付けていた時間の半分のみ。最大12時間。

使用中の魔力の消費は身に着ける側が負う。

使用する髪留めは既存のものに念を込めることで自作する。

発動条件をもう少し詳しくすると、普段から髪留めを互いに身にけ



ておき必要に応じて交換するというもの。また、着けていた時間は24時間が最大値であり、自分の体を離れた瞬間から2倍速で使用時間が減ることとしている。

相互協力型である点はこの念具を作る工程を二人で分割している点だ。管野は既存の髪留めに魔力を込め、基本となる素体を作り出す。そこに俺が”視界を共有する”という能力を付与するという仕組みだ。

これにより、髪留めの素体を流用し、後々新たな能力を作る際の素材にもなるという優れもの。

つまりこの能力、厳密には視界を共有する能力ではない。視界を共有する”念具”を創る能力としたのだ。

本来ならこういったものは具現化系能力として作るモノだが、普通の品に念を込めるのは具現化系よりも放出系の領分なのではないかという想像からこの能力となった。原作でもG Iのゲームソフト等々原作でも能力ともいえる物を纏った品は登場する。

この世界においても、アニメ二期の頃には原作キャラが魔力のこもった妖刀ともいえる物を自作している。

「なにより、”念具”を創る能力であることからこの髪留めを使うことで他の隊員間であっても視界の共有が可能になった。

「いいんじゃないか？もうなにも思いつかねえし」

「じゃ、あとは私が手探りでこれを形にするだけですわね…」

「おう、ちなみに俺の魔力をためるやつはスゲー苦労したぞ。どんなにかかるかわかんねえから少佐にも言っとくか」

この日から暇さえあれば髪飾りをいじり、念を込める時間ができるようになった。具現化系の修行を参考に、どういう能力かを頭の中で考えながら髪留めをいじり、写生し、眺めて等々を幾日にもかけて行った上で、それを止める。頭がおかしくなるような日々二人して周囲からも不安の目で見られたが、ある日目が覚めるような感覚と共に互いの持っていた髪留めが魔力を帯びていることに気づいたことで完成した。

原作でクラピカが修行している描写を見た時もあったが髪留めをしゃぶっている二人の少女はひどい絵面だっただろう。

完成したのなら試してみろということでも互いにつけてみる。

「うわ、なんだこりゃ」

「口で言い表すのも難しい光景が広がっている・・・」

無理やり例えるのなら一つの画面に二つの動画を再生している感じだろうか。

また、あくまで自分の視界がメインであり共有しているほうの視界は意識していなければそこまで気にならないため酔ったりはしない。

「ふむ。これは使い道が多そうだな」

「さしあたっては下原さんの遠隔視を試してみたいところですね」

このことを報告すると、いろいろ試してみるところのお達しで部隊内で代わる代わる様々な組み合わせで視界の共有を試した。

身に着けた時間の半分という誓約から、一回の時間は短かったものの結果から、最終的に扶桑魔眼組の二人以外は意味がないこと、元々の目的などから特に理由がない限りは俺たちのコンビでの運用をされることとなった。

原作第10話　　く姉VS妹　　頭蛮族の戦い！く

「ひかり、パスー」

「パスで」

ラドガ湖北方、その上空にて。

監視哨からの通報を受け、502は襲来した大型航空ネウロイの迎撃に上がった。近頃のネウロイは以前までの活発な動きが減り、空戦の機会も幾分減った。これも数日振りの出撃で、以前までの日に数回の交戦ということはなくなった。

今回の敵も特徴のない航空型で弾幕で相手を近づけないようにするタイプだった。セオリー通り、距離をとつての射ちあいから始めた。大型であるため通用する火力が限られる上、コアの搜索範囲が広いことからこのまま攻めるのではなく、コアを見つけることを優先するように指示された。

少佐を中心とした集団が敵上方から徐々に圧力を強めて相手の気を惹き、その隙にブレイクウィッチーズで下方から距離を詰める。薄くではあるが雲が出ていることからそれに紛れ、接近する。敵火力の多くが少佐たちのチームへと集中しているが、下方にも砲台パネルはあり、近づいて気付かれればそこから攻撃を受けることになる。そこで、途中から更にチームを分割し、突入の援護としてニパ・伯爵組が突入方向にある相手の砲台パネルをつぶしてもらおう。

エンジン全開で急上昇。4機の一斉射で相手の一点を制圧することで弾幕に穴が開くようにする。前側に突入組、その後ろに援護組の順で進む。突入組はシールドを頼りに前へと進むことに集中し、援護組はその陰から進行方向に近いパネルから潰していく。

途中、援護組が離れることで相手の火力をさらに分散させる。

そうして相手の抵抗が貧弱になったタイミングで管野の陰に隠れながら突破することで、ようやく“円”の範囲に相手を捉える。”円”が触れると同時に”写輪眼”がコアを捉える。相手の体が透け、その中に一点の光る場所。俺の眼がそれを認識すると同時にそれは相棒の管野にも伝わった。

「いづくぜええええ！」

機関銃をこちらにぶん投げて渡した管野は、コアに向かつて真つすぐ突っ込んでいく。その右手は見てわかるほどにピツカピカに光輝いていてどれだけの魔力が込められているのか。

その拳がネウロイに触れたかと思えば、管野の勢いは止まることなく掘り進むように相手の中へと潜っていく。管野の姿が見えなくなった次の瞬間、ネウロイの動きが止まったかと思えばその内側から破裂するように砕け、辺りにはガラスのようになった破片が舞った。

「カンノー、ひかりー、お疲れー」

「いやー、さすがの威力だ」

ネウロイのコアを殴り砕いてそのまま飛び出してきた管野を見つければ、合流しようとしたところで援護組も追い付いてきた。特に怪我などはしていないようで、今のところはニパも特に不運は起きていないらしい。

「へっ、今月のスコアは俺が一番だな」

「大型は共同撃墜で私らにも半機分入るんでまだそこまで差はないですよ？」

「最近は数で攻めてくることがないからスコアがいまいち伸びないんだよねえ」

「全機に告ぐ！直ちに基地へ帰投しろ！」

突然、少佐がそう言ったかと思えば、他の隊員たちも基地へ向けて移動し始めた。慌てて話を打ち切り、その後ろについて飛ぶ。近くにはいつの間にか3発の輸送機がぴったりとついて飛んでいた。

「マンシユタイン元帥に敬礼！」

基地へと戻ると着替えもそこそこにすぐにブリーフィングルームへと集められた。自分の席についてすぐ、入ってきたのはカールスラントの陸軍元帥だった。

「本日はどういったご用件で」

「うむ、以前から一部の者には内々に話していたペテルブルグ軍集

団によるグリゴリー攻略作戦である”フレイヤ作戦”についてだ」

北方方面軍はもともとヨーロッパ本土から北歐へと侵攻してくるネウロイに対する防波堤であると同時に、いずれ来る反攻作戦における一翼を担うという存在だった。しかし、反抗作戦が何時になるかわからないという状況で補給路の貧弱な北歐に大戦力をとどめておくことはできないため、その規模は守りに徹するには十分といったものでしかなかった。

ところが、グリゴリーの出現により補給路がほぼ完全に寸断され、このままでは北方戦線そのものを放棄しなくてはならない段階にまで来てしまった。よって、大陸反攻以前に北方を維持するために戦力の再編と集結が行われ、グリゴリーを撃破のための部隊”ペテルブルグ軍集団”が編成されたらしい。

今回のマンシユタイン来訪の要件は、この作戦への502への参加要請とのことらしい。要請することは拒否権でもあるのだろうか？20歳にもなっていない小娘の集団といっても軍属なのでは？

「その作戦ですが、501がガリアを開放した例に倣う物なのですか？だとすればあまりに危険すぎるかと思われませんが」

「ムッ……、ウィッチは耳も早いな。安心したまえ、ネウロイのテクノロジ―は人の手には余るものだ」

少佐の言うネウロイの巢の破壊事例とは原作一期主人公様達501が半年ほど前にドーバー海峡でやったときのものだ。あまりに危険というのはその方法が”ネウロイのコアを流用した兵器が案の定暴走したから、撃墜したところ、倒しきれてなくて味方の空母を沈めたあげくその空母に取り付いて再生したので、撃破したら何故か海に向こうの巢が消滅した”という、報告書を上げられた上層部としても”は?”の一言しか出ないようなわけのわからない事例だったためだ。やろうと思っても再現できないでしょこれ。途中途中の関係が意味不明すぎる。

当然連合軍としても巢の破壊は正攻法で行うつもりらしく、ペテルブルグ軍集団他連合軍の勢力でネウロイ相手にドンパチ派手にやってネウロイの戦力を減らしたのち無防備になった巢を80cm列車砲

の直射でぶち抜くつもりらしい。

力技もいいところだが確実性は高いらしい。まるでどこぞのエロゲのハイブ攻略戦みたいだ。そして、列車砲という巨大なものをグリーゴリーの近くまで護衛するのに腕っこきのウィッチが必要というわけだ。そういうえばムルマンに紫電改を取りに行つたときでつかい砲身を見たような覚えがある。

「なお、グリーゴリーに対する列車砲での直射を行うにあたってコア発見の役割を担う魔眼持ちのウィッチもすでに選定済みである」

「んなら？」

「それって!？」

この場の魔眼持ちといえば俺しかいない。502の隊員たちからすれば巢の攻略という一大作戦における重要な役割を新米に任せようとしていると思うかもしれない。

けれど、この先を知っている身には別の意味がある。”ノート”に書き記しておいた原作知識にははつきり誰が来るのかが書かれていた。

「あの、担当するウィッチというのは誰なのでしょうか!」

「ああ、雁淵軍曹だったか?無論、今作戦における大役故その役を担うものもそれ相応の者が選定された。……まだ少し早いけど、もう間もなく見えてくるだろう。ムルマンはどっちだね?」

「左手側の窓ですが……」

元帥が左手側の窓を気にしだすと他の隊員たちもそちらを向く。ところどころに雲のある青い空に、白く輝く物体が一筋の線を描きながらこちらへと向かって伸びてきているのが見えた。

「ああ、あれだな。うむ……、ちょうど時間通りといえよう。少佐、私はこれで失礼する」

「はっ」

後ろでは元帥が部屋を出ていくところだったが、そちらを見ているのは少佐だけだ。元帥が退室したことで規律が緩んだというのか、ウィッチ達は走り寄るようにして窓際へ集まった。

しばらくの間まったく伸びていた一筋の線はやがて降下したか

と思えば、勢いそのままにブリーフィングルームのある塔をかすめるようにして今度は急上昇していった。

「今のウィッチだよね？」

「でも一体……？」

「管野さん！」

「ひかつ、グエツ」

窓際に寄った隊員たちが口々に過ぎ去っていったウィッチの後を追うように視線を左右に振っていた。

そんな中で俺は即座に横にいた管野を担ぎ上げ、オーラで足を強化して走り出した。

「あつ、あの、時代遅れのクソでか対戦車銃は！」

「おい、ひかり、やめ、グエ、降ろせエ！」

基地からネヴァア川の方へと延びるウィッチ用の単距離滑走路。肩から聞こえるうめき声を無視しながら追いつくが、先導するかのようには飛んでいたそのウィッチは徐々に速度を落とし、こちらへ背を向けるようにしてその先端へと降り立った。

純白の第二種軍装にほとんど身長と同じ長さの対戦車銃を担いだ彼女は紛れもなく、あの日北極海で墜ちた姉・孝美だった。

振り返ってこちらを見た姉は病み上がりのようなそぶりを一切見せない墜ちる前の彼女そのままだった。

あと、管野は振り返る前に落とした。

「……け、怪我はもう大丈夫なの？」

これまで、あまり自分から進んで話かけに行くことがなかったため、どこか気恥ずかしく感じてしまう。つい、どう話しかけたらいいかわからなくなってしまう声が固くなってしまった。

対して声をかけた姉の表情は真顔、というかどこか冷たいものを感じさせるものだった。

「ひかり」

「どうしてあなたがここに居るの」

「、えっ……？」

姉が口を開いて最初に出た言葉はこちらを責めるような言葉だった。目つきは険しくなり、苛立ちを感じさせる。記憶の中にある姉の姿からの豹変ぶりに、思わず息を漏らすことでしか反応できなかった。

「あなたの任地はカウハバだったはず。……ひかり、ここは貴女の居ていい場所じゃない。今すぐ荷物をまとめてカウハバへ行きなさい。これは正式な辞令です」

こちらが反応できないでいるうちに、畳みかけるようにしてそう姉は言った。思わず凍り付いたこちらをしり目に、ストライカーのエンジン音を少し吹かした姉はそのまま横を通り過ぎていこうとした。

「お、おい。孝美！」

ここまで空気を読んでか何も反応がなかった菅野が起き上がって声をかけた。無視されていたのか、それとも姿勢が低かったので見えていなかったのか姉も菅野には何も言及していなかった。

「あら、菅野さん。お久しぶりですね」

「ああ、お前も元気そうだな。って、ひかりが移動ってどういうことだよ!？」

声をかけられて気づいた、といった風に顔を向けて返事する。菅野も元気そうだという言葉もそこそこに移動について確かめるように声を上げる。

「どうもこうも、もともとカウハバに配属されるはずだったのがなぜか北方司令部についた時点で指令が変更され、しかもそれが大本営に届いていなかったんです。それが正されるというだけです」

そう言い切った姉はもう言うことはないとはかりにこちらへ背を向け、格納庫へ向けて加速して行ってしまった。

その日のうちに、姉・孝美は病み上がりということでの今の実力が見たいという少佐の要望で伯爵との模擬空戦を行った。機動で振り回そうとする伯爵に対し、要所要所で弾丸を叩き込むことでそのペースを乱し凌ぐ孝美との間で持久戦の様相を呈したが、最終的に本気を出した伯爵に同じく本気を出した孝美が合わせることで互いに銃口を



向けあう形での引き分けとなった。怪我による後遺症や長いこと寝たきりだったブランク等を感じさせない実力は部隊の皆にも歓迎されたらしい。こちらは部隊員たちとは離れたところから眺めていたためどのような会話をしていたかはわからないが。

部屋に戻って、原作知識を書き出したノートを改めて見る。ここに書かれているのは大まかに”孝美の復帰”と”姉妹勝負”そして”ひかりの敗北”だった。続くページを見れば502の一時離脱と途中からの合流、最終決戦での断片的な様子があることから、辞令通りにこのままカウハバへと送られるということはないのだろうとは思っていた。しかし、ああも強く出ていけと言われるとは思わなかった。

有無を言わさないというような強い語気には逆らい難いものを感じさせ、このままでは本当にカウハバへと送られてしまうのではないかと考えてしまう。

このままカウハバへ行けば、フレイヤ作戦には参加せずに終わるだろう。けれど、それは原作の展開から大きく外れるということになる。そうなれば、作戦に参加する502の皆がどうなるかわからない。この身が主人公のそれである以上、必ず作戦成功へのキーとなったであろう活躍があったはずだ。それが無くなる、ひいては作戦の失敗にまで繋がるのかもしれない。

もともと、ウィッチになったのはそういった原作を外れたことによつて起きる悲劇を恐れての事だった。なにより、自分のこれまでの努力を、備えを否定されたように感じ、そのことに対する苛立ちも覚えた。

夕食を食堂で取らず、自室の備蓄で済ませる。

窓にはカーテンをし、明かりを灯すこともなく床の上で座禅を組んで息を整える。そのまま苛立ちを、気を抑えるように”纏”を行う。

考えたところで軍部からの正式な辞令をはねのける方法は思いつかないだろう。ただ静かに、これまで修めた”念”を反芻するかのようには繰り返す。水面が凜々ようにオーラをとどめ”纏”い暫く、今度は”練”り上げたオーラを一度に全身から振り絞り、そしてそれをと

どめる。そのオーラを体の末端へ”流”し”凝”らしたり衣服へ”周”わせたり。

そうして頭を空に、ただ夜が明けるのを待つ。

朝日を迎えるのと時を同じくして、ネヴァ川の堤防へと上がる。先生からもらった剣を振り、今度は静かに闘志を燃やす。『闇雲になるな、腹を立てるな、手は綺麗に、心は熱く、頭は冷静に』とはどこぞの眼帯をした先生の教え。その通りに、ただ目的意識だけを高める。

狙いはノートに書かれていた”姉妹勝負”。薄れた記憶をもとに書かれた断片的な記述ではあるが、読み解くに”姉妹勝負”に”ひかりが敗北”したから”502から一時離脱”し”作戦に途中参加”したのだろう。途中参加の方法がわからない以上、作戦には最初から参加することを目指す。そのためには孝美との”姉妹勝負”に勝つしかない。ならば、今できることはそのために己を高めることだけだ。

「ひかりー」

一連の動作を振り終わり、鞘へ納めたところで声をかけられる。肩越しに見れば、まだ薄暗い中城壁をこちらへ向けて歩いてくる姉の姿。パリツとした軍服をまとった姿は寝起きといった様子ではなく、あちらも起きてからしばらくたつのだろう。

「こんな無駄なことはやめて早くカウハバへ行く支度をなさい」

その言葉に思わず頭に血が上る感覚がしたが、それを抑えるように息を吐く。顔を上げ、正面から相手を見据えて口を開く。

「無駄かどうかは私が決めることにするよ。私はまだ502で戦いたいし戦えるだけの力を身に着けたと思ってる」

なんだか煽りっぽくなったが、決意を口にするというのは”燃”における”舌”にある通り心を強くする。孝美にはこちらを502から出ていかせたいという思惑があるようだがこちらもそれに対抗する自らの意思をぶつける。

一瞬、驚くように目を広げたがすぐに眉間にしわを寄せた硬い表情に戻った。

「ここは貴女の居場所じゃない、あなたはここに居てはいけないの

！」

そう言つてまた、こちらに背を向け堤防を下りていく。滑走路の時と違うのは、あの時がただ言われるまま言い返せなかったのに対し今度ははつきりと向こうの意思に反するということを書いたことだろう。これで明確に姉と、孝美と対立することとなつたわけだ。

勝負のチャンスはその日のうちに訪れた。

朝食をとつてすぐに招集がかかり、ブリーフィングルームへと集められた。進行役を務めたロスマン先生曰く、バレンツ海にて伯爵以下4名で討伐した球体型の大型ネウロイが再生したらしい。グリゴリーの監視を行つていた部隊を殲滅し、そのまま北へと移動を開始したとか。

どうやら少佐は自ら出てこれを撃破するつもりらしい。普段は空に上がることはあまりないのだが、クルピンスキーが撃ち漏らしたのであれば少佐が出るしかないとの判断らしい。また、その相方に孝美を選んだ。伯爵との模擬戦だけではなく実戦でもその実力を確かめておきたいらしい。

そう話す少佐たちの会話に横から割り込む。

「そのネウロイ、私にやらせてください！」

「なっ！あなたには無理よ！」

即座に孝美が反応し、こちらの言葉に反発してくる。相変わらずの強い口調だ。それに対し、城壁の時と同じように正面から反攻する。

「無理かどうかはやってみないとわからない！第一、孝美ねえさんが私の何を知つてゐるっていうのさ！」

真つ向からの睨み合う形になる。「本気」で「勝つ」という感情を込めるように「オーラ」に攻撃的な「意思」を込めて「出す」。

それに反応したのは姉の方ではなく少佐だった。

「フツ、いいだろう」

「そんなーラル隊長!？」

姉の方が焦つたような声を上げるがそれに構わず少佐は言葉を続ける。口には笑みを浮かべどこか楽しそうな表情をしている。周囲の隊員たちは口をはさむのをためらつているのか、椅子から腰を浮か

した者、手をアワアワ動かすだけのものなど様々だがそれ以上動こうとはしない。

「雁淵、あー、軍曹。お前の魔眼が孝美のそれを上回ると証明できたのならどんな手を使ってでもお前を502に置いてやろう」

「ほんとですか!？」

「ただし……」

少しの溜めの後、一度目を閉じてから少し語気を強めたうえで続きを話し始めた。

「その場合、お前に代わってカウハバには孝美に「やります!」行って、いいのか?」

「私は!502で戦いたいんです!誰であろうと譲るつもりはありません!」

食い気味に、そしてはつきりと告げる。漏れ出たオーラからもその意思が伝わっている事だろう。

「ほう…、良いだろう上等だ。孝美はどうする?」

問われた孝美はといえば下唇を噛み、悩むようなそぶりを見せたがやがて顔を上げ、こちらを見据え、

「良いわ。どちらがこの502にふさわしいか勝負しましょう!」

そう言い放ってきた。

出撃は502の全員でとなった。

勝負の方法はコアの位置を探り、それを少佐に伝えるというものであった。あくまでコアの位置を探るまでであり、コアの破壊自体は少佐が行う。より早く、より正確に伝えたほうが勝ちだという。

今回の戦い、例の髪留めは使ってはいけないことになっている。そもそもこの勝負で勝った方は、グリゴリーのコアの位置を列車砲の砲手に対して伝える必要があるのだ。念をなるべく秘匿するつもりである以上少しでも疑われるようなものは表に出せない。

「11時の方向、ネウロイです!」

最初の発見はいつも道理、下原さんの遠視の魔眼だった。天気は雲が多い物の晴れているため視界は明るい。対象は雲よりも低く、いつ

もより低い高度を飛行していた。狙いがムルマンに集結しているペテルブルグ軍集団だというのなら対地攻撃を意識しているということでの高度だろう。

空戦に突入した時の陣形は、俺達雁淵姉妹をツートップにその後ろに他の隊員が扇状に並ぶ。

ある程度接近したところで、ネウロイからは迎撃の光線が照射される。火力そのものは大したことはないが数が多い。その☒火線の中で、一歩先んじたのは孝美の方だった。豊富な魔力から成るシールドを頼りに最短距離をまっすぐに飛び、コアを視界へ納めた。対してこちらはシールドに頼らない、回避主体の飛び方だ。攻撃に対していちいち動きを加えて射線から逃れる分、余計な距離を飛ぶことになる。加えて俺は、コアを視界に入れた時、報告をためらった。

「隊長！距離1610、グリッドG7デルター1風力無！」

「早いな、さすがだ！」

孝美の報告を受けた少佐が即座に狙い撃つ。固有魔法の偏差射撃だろう、銃を持ち上げてから狙いを定めて撃つまでが早撃ちとでもいうべき速度で行われ、報告された場所を射抜く。

が、

「こ、コアが再生した!?!」

撃ちぬかれ、砕けたように見えたコアは逆再生のようにもとの形へと再生した。外装も一瞬力尽きたかのようにずり落ちたが即座に浮かび上がり、元のままのネウロイがそこにあった。

再生したコアを見続けていた姉の報告ではコアと思っていたモノの中に不規則な軌道を描いて動き回るものが見えるらしい。

「なるほどな、そういうカラクリか！」

少佐の判断はコアの中に”真のコア”とでもいうべきものがあってそれを倒しきれていなかったからこそこのネウロイは再生したのだという。

俺が報告をためらった理由もそれを裏付けるのではないかと思っただ。単純にコアが異様に大きいのだ。大型のネウロイとはいえコアのサイズはおおよそ一定だ。だということにあのネウロイは通常の何

倍も大きなコアが見えたのだ。内部に通常のコアを収容し、かつ動き回るだけの空間を確保しているとすればその大きさも当然だろう。

俺がこの真コアの位置を見抜くにはより近くへと近づき視る必要があるだろう。

再生したネウロイは光線での攻撃を止めると、その球状の体を真っ二つに割り、かと思えばボウルのようになったその内側から鉛筆か口ケツト弾のような子弹を雨あられと飛ばしてきた。

「な、くうー！」

子弹は光線とは違いシールドにはじかれることなく、さながら鏢迫り合いのようにぶつかり合ったかと思えば数瞬の後自爆する。そんなものが数えるのも嫌になる数飛んできているとなればさしもの佐世保のエース様も足を止めて守りに徹して数を減らさない事には迂闊に動けない。そこに勝機を見た。

「うおおあああああー！」

「、ひかり!？」

飛んでくる子弹を写輪眼で見切り、燕返しで避け、堅で弾き、紫電改の限界までエンジンを吹かして前へと進む。

孝美の魔眼よりも近づかなくては真コアが捕捉できない以上、ここで距離を詰められなければ勝ち目はない。だが同時に、ここで距離を詰められれば後ろで動けない孝美としても勝ち目がないと言える。

少しでも時間を稼ぐため、飛んでくる子弹はなるべく避けて姉の方へと誘導し、弾いたモノもそちらへ流す。

「っ、このー！ひかりイー！」

無線からは余裕の消えた孝美の吠えるような声が聞こえるが、そんなものは無視だ無視。というか余裕がなくなってきたのはこちらと同じ。相手に近づくとつれて飛んでくる子弹の密度は増え、そのすべてを見切る必要がある。両の眼はグルグルとせわしなく動き回り、視界は子弹の未来予測位置で埋まる。その中を針の穴を縫うようにしてジグザグと飛び回り徐々に距離を詰める。

「くっ、このおー！」

「あ、おい孝美イー！」

「中尉!？」

無線がまた騒がしくなる。恐らく孝美がネウロイの包囲を強引に突破したのだろう。その皺寄せが一気にほかの隊員に向かったことによる悲鳴か。

バレルロールをするついでに肩越しに姉の姿を見る。どうやら立ち止まってシールドの陰に隠れながら捕捉するのでは無理があると判断したのか、こちらと同じように機動力任せに強引に接近しコアを補足するつもりらしい。

「右、左、下、中央、また右、ぐうおおおお！」

「いけ! ひかりい！」

「目標、捕捉を……！」

「中尉無茶です! 数が多すぎます！」

距離を詰め、視界に移るコアにうつすらと違う色の点が見えてきた。

「距離1410、グリッドG7デルタ12風力無！」

「よしっ！」

空中機動の連続で体を捻りながら、顔だけはネウロイに向け続ける。見て取ったコアの位置を少佐の位置からのものに直し、口早に座標を伝える。ここ最近は見ただけで共有できていたうえ、座標で伝えるなんて真似は初めてやった。それが悪かったのだろうか。

「ああ！」

「再生しちやってる……ってことは」

「隊長が外すはずがない、ひかりさんが間違えたのね……」

弾丸は僅かに目標地点をそれ、偽コアを砕くに終わった。

打ち砕かれたコアは先ほどの焼き直しのように再び一つとなり、外殻もそのままだ。違いを上げるとすれば、先ほどは出ていなかった子弾だ。コアに近いものは再生すると同時に再び浮かび上がり飛んできたが、502の隊員たちの近くにあったモノは再生が間に合わなかったのか落ちて砕けるものもあった。

「そんな！」

思わず動揺してしまい集中が途切れた隙についてか、近くまで来た

姉が今度は座標を告げる。

「距離1400、グリッドG8デルタ7風力無！」

まずい、そう思うと同時に体が動いた。少佐に座標が伝わるより早く、動いた腕は今まさにネウロイから飛び出たばかりの子弾に弾丸を浴びせた。

数体を巻き込んで弾けた爆風がネウロイをも削り、その余波なのか、それとも、もともと座標が外れていたのか。少佐の放った弾丸はまたも真コアを外し、偽コア部分を砕くに終わった。

「な、ひかりあなた！」

「勝敗はあくまで正確に伝えたほうでしょ？本番でも妨害はあるかもしれないしダメとはいわれてないね！」

「いいんですか隊長？妨害、になったかもしれません！」

「どうしたものか、とは思うがさと言っていることも間違っていない」

孝美は非難するような声を上げるが少佐は思案顔だ。

少佐は悩むそぶりを見せたがすぐに顔を上げ、

「よし、ひとまずこの場はあれを落とすまで続けてみる。その結果如何で私が判断する」

と言つて再び銃を構えた。

「よしつ、距離1356、グリッドG8デルタ8風力東に3！」

「このおー！」

こちらが言い切るが早いかというタイミングで相手のコアギリギリの外装を弾丸が叩き割る。砕けた破片が少佐の銃弾に当たって軌道がそれる。

銃弾はまたもコアを砕くに終わる。

「そつちがそのつもりならこつちだつて！距離1396、グリッドG9デルタ9風力無！」

近くを飛んでいた孝美が妨害したのだ。

二人ともが妨害を始めてしまったため、もはや勝負は互いの妨害をすり抜けながら少佐に狙い撃たせるか、妨害を読んでその先を撃たせるかの変則的な形となつてしまった。



放たれた弾丸の通るであろう軌道の前をかすめるように飛び、こちらを狙っていた子弾を射線上に飛び込ませる。案の定炸裂した子弾の爆風により弾丸はあらぬ方へと飛んでいく。

「距離1400、グリッドG8デルタ7風力東へ2！」

少佐の弾丸が届くよりも早く孝美の弾丸が偽コアを砕く。真コアが重力に引かれて一瞬落ちたことで銃弾がその上をかすめていく。

「距離1401、グリッドG4デルタ6風力無！」

放たれた弾丸にオーラを纏わせた銃弾をかすめさせ、オーラで弾丸を絡め捕り軌道を変える。また、ネウロイが崩れては巻き戻る。

「距離1400、グリッドG6デルタ5風力無！」

孝美はネウロイをはさんで向こう側にいた子弾に弾丸をかすらせ、こちらへ向かわせた。孝美へ向かって突進する子弾は道半ばにてその身を横合いから撃ち抜かれ、慣性を無視した動きをするそれはネウロイへと衝突しコア事その外殻を砕く。

「距離1496、グリッドG8デルタ5風力東3！」

「距離1403、グリッドG6デルタ13風力無！」

「距離1398、グリッドG9デルタ4風力東1！」

「距離1401、グリッドG11デルタ7風力東1！」

ラル隊長の撃った7.92×57mm弾に弾切れの九九式が叩きつけられる。

上官の手元から放たれた弾丸に直接別の弾丸がぶつけられる。

少佐の放ったその弾頭が真っ向から唐竹割に両断される。

部隊長のFG42が火を噴くが敵へと届く前に半ばで発生したストライカーの気流で軌道がブレる。

ネウロイのコアが砕け、外装が落ちるが、またすぐに浮き上がり元の形へと戻る。

フェイクコアが粉碎され、外装が色を無くして崩れるがやがて元の姿を再び形作る。

最も重要な場所が破壊され、外装が罅われその欠片を大地へと落とすが元のとおり。

砕かれてはいけない所に被弾、外装が力なく地面を目指すが徐々に

元の形状を復元する。

「アイツ、なんか再生速度落ちてねえか？」

もう何度同じ光景を見ただろうか。重力に引かれた光る破片が動きを止め、浮かび上がったかと思えば忌々しいネウロイの姿をとる。数秒後にはそのコアを撃ち抜かれ、その身を光る破片へと変える。

数えるのも億劫になってきた頃、その光景を眺めていた菅野がポツリとこぼすように言った。菅野達502の隊員達がいる少し離れた場所では、子弹がやってくることもなくなり手持無沙汰になった者達がネウロイの碎ける様を見ていた。

「あ、直ちゃんもそう思う？明らかに破片が浮かび上がってくるのが遅くなったよね」

「そ、それだけじゃないと思います。破片が元の形をとってからネウロイになるまでも遅くなっています」

「装甲自体も薄くなってるみたいです。最初の頃なら弾いていただろう位置への弾丸でもかなり大きく削れています」

安定した姿勢からじつくりと観察できる状況にある彼女たちだからこそ気づけた光景だった。ネウロイのありとあらゆる動作が徐々に遅くなっている。

唯一の例外は矢継早に飛んでくる座標に合わせて腕を動かしては引き金を引く機械と化しているグンドユラ・ラルカールスラント陸軍少佐にして502JFWの隊長だ。不規則なインターバルでかけられる声に答えるために常の集中を強いられ、その姿勢を崩すことも出来ない。カールスラント撤退戦ではこの何十倍もの時間を連続で戦ったものだが、デスクワークに慣れた体は鈍ったことを感じさせ、何より自由からほど遠い戦い方が彼女を苦しめていた。

「……」

「ラル隊長も大変だよ、表情は余裕って感じだけど」

「多分ですけどやせ我慢してますよね」

「プライド、なのかしらね」

その時ふと、少佐の動きが止まった。

周囲の隊員達が何事かとそちらを見るとラル少佐は無線に手をやり告げた。

「すまん。弾切れだ」

続けて、

「倒せるようならお前たちで倒してしまえ。この場の者たちを向かわせてもいいが？」

そう言った。

言い終えた時、彼女の視界にはネウロイに向けて突っ込む2つの紫電改が見えていたが。

銃を背中に背負い、腕を下したラル少佐にクルピンスキー中尉が近づく。

「ボクたちのモーゼル弾マガジンに詰めなおします？」

「やめろ」

どことなく色がくすみ、表面に欠片の形が残るネウロイの上では二つの戦いが繰り広げられていた。

一つは当然、ネウロイのコアを砕く競争。ひかりの方は弾切れを起こした九九式を妨害のために投げつけてしまったため、今は両手に持ったその刀を振るってコアを狙う。対して孝美の方も残弾に余裕があるとはいいがたい。単発で、しかし再生するよりも早く、同一の点を撃ち続けることで確実にその装甲を砕こうとしている。

ではもう一つの戦いとは何か。互いの妨害がまだ続いているのである。体当たり、かすめる、わざと相手の軌道に割って入る、子弾を殴り飛ばして相手にぶつける等々ネウロイ相手以上に激しい戦いが繰り広げられていた。

状況的に妨害合戦で不利なのはひかりの方だが、真コアに近いのもひかりであった。

刀という近接武器である以上、どうしてもネウロイに張り付いて戦う必要がある。つまりあまり動けないのだ。すれ違いざまに切る、という方法では妨害や子弾をかくぐる間に再生してしまう。そのため張り付くようにして飛びながら相手の装甲を切り裂き、砕いている

のだが孝美からすれば妨害し放題だった。

その孝美はと言えば内心では焦っていた。時折飛ばされてくる子弹は自由に動き回っている孝美には当たるはずもなく、それを除けばひかりの方に妨害の手段はなく一方的に攻撃できる。しかし、残弾は心もとなく、加えて動き回る真コアを狙い撃つのは簡単ではない。対して高い動体視力を持つというひかりの魔眼と刀の組み合わせなら距離の関係もあつて真コアを捉えるのは容易だろう。

互いに同じ結論に至りながらも劇的な打開策はないまま時は過ぎ、最初に訪れた変化は孝美の方だった。九九式の弾が尽きたのである。残るはせいぜいが護身どまりの十四年式拳銃だけ。即座に、これではコア以前に装甲すらも砕けないと判断した。故に、次に孝美のしたことは武器の確保だった。ネウロイから一定の距離をとってランダムに子弹を避ける軌道から一転、コアがあるのであろう位置、ひかりのいる場所へと向けて加速した。ひかりも”円”でそれを感知し即座に振り向くが視界に入ったのは姉との間、自分へと投げつけられた九九式機関銃だった。

とつきに切り払うが九九式の陰に隠れて投擲された十四年式に対する対処が間に合わず、加えてそれが顔面への直撃コースだったことから思わず目をつむってしまった。

瞬間、左腕に激痛が走り、極められていると悟る。握力の抜けた腕から滑り落ちた越前守助広を持っていかれる。こちらが怯んだ隙に、こちらの左手をとった孝美がそのまま捻じり上げたのだ。

「私は士官学校の出だもの、当然こういった物の扱いにも慣れているのよ？ 貴女の講導館剣道と私の海軍高山流抜刀術。どちらが上かの勝負と行きましようか、ひかり！」

「人の名を！ ずいぶん気やすく呼んでくれるじゃあないか！ 一刀での講導館剣道も私は視て写させてもらった！ 二刀でなくなつたからと言って弱くなつたとは思わないでもらう！」

「うわあ、なにあれ何時の時代の人？」

「扶桑の魔女はおかしいとミーナが言っていたのを思い出すな」

頭鎌倉武士と頭平安武士がバチバチにやりあうその遙か後方にて。高みの見物と言わんばかりにもはやリラックスした姿勢の者もいる中で、クルピンスキーとラルが溢した。ラルはもはや取り繕うのも面倒になったのかジョゼに回復魔法を当ててもらっている。

「いやいやいや」

「私たちも同じくくりにされるのはちよつと……」

それに反応して文句を言ってきたのはおかしい奴と一括りにされた管野と下原。真剣同士で斬り合い、その片手間に装甲を剥いでは偽コアを砕き、再生するまでの余暇でまた斬り合う姉妹と同じ分類にされるのは困ると言う。

「ていうかあれ大丈夫なの？真剣同士なんてやっぱり危ないよ！今からでも止めなきや！」

純粹に二人のことを心配し、そう意見するニパ。サーシャも同意するように首を縦に振る。

「見てて怖いですよ。実の姉妹同士で斬り合いだなんて」

「んー、だがなあ」

ニパに続くように言ったサーシャに管野が反応する。

「いや、あれはむしろ息があっているから大丈夫というか……」

「ええ、びつくりするくらい息があっています。あそこまでのレベルとなると相当な実力者同士、それもお互いのことをよく理解していないとできない芸当ですね。見事な立ち合いです」

管野に同意したのは下原。下原は学者の家の出で、扶桑の文化というものを大切にしており文化そのものへの造詣も深い。下原自身、弓術を修めていることもあり、そういった立ち合いに理解もある。管野も孝美と同じで海軍兵学校の出で剣術には慣れ親しんだ身だ。

「あれに理解を示すのかあ、そっかあ……」

「やはり扶桑のウィッチはおかしいのでは？」

「そんな、定ちゃん……」

「ええ!？」「いや待て！一回話し合おう！」

慣れ親しんだ文化なのは扶桑出身の二人だけだったので、結局周囲の理解は得られなかったのだが。

切る、斬る、伐る。

互いに既に幾度となく刃を交えたが、戦況は互角と言えよう。自ら練り上げた剣と師の練り上げた剣の写しという違いはあれど、互いの多くを考慮すれば互角という結果になる。

ひかりの剣はズルをしているともいえるが、成熟した成人女性の振る剣を14歳が写し取ったところでそのままでは使い物にならない。ひかりが振るに当たって使いやすいように改めている。それ故どこか歪なところもある。

対して孝美は、剣を振る事事態が士官学校以来な上、空中で振ることなどありはしなかった。それでもリバウを経て扶桑皇国欧州派遣艦隊として転戦するにあたって剣を使う扶桑ウィッチは多く見てきた。ウィッチとして天才ともいえる彼女は過去の記憶を頼りに自分だけの空中剣術を編みだし始めていた。

互いに∞を描くように飛んでは互いの剣をぶつけあう。紫電改の推力と重力加速度を組み合わせて生み出された運動エネルギーを最大限ぶつけ合ううちに両者は自然と同じ動きをしていた。

時に相手の剣に、時にネウロイにと攻撃をぶつけあっていたが、何時しか二人は互いの剣にしかぶつけていないことに気づいた。

「あっなんか気づいたっばいですね」

「やっとか……」

「じゃあ、行きますか」

傍から見ている者たちにとっては一目瞭然もいいたこだった。

何度目かのネウロイ攻撃の後、再生したはずの装甲が自然と砕けコアがむき出しとなった。次の打ち合いでついにコアが切断され、何とも弱弱い断末魔のような物を上げてネウロイは消滅した。

最初の頃はネウロイ、剣、ネウロイ、剣と交互にぶつけあっていた彼女らもいつしか加速しすぎてネウロイ、剣、剣、ネウロイ、剣、剣、と剣同士で連続して撃ち合う回数が増えていったからか気づかなかったのだらう。最終的にネウロイが消えた後も互いに剣をぶつけ

あい、勝負のことなど頭から消えた壮絶なただの姉妹喧嘩となつてしまつていた。

無線が聞こえていないのか声をかけても止まらない上、加速してもはや残像が見える2人に割つて入ることも出来ず自然と止まるのを待つしかなくなつていた。

ネウロイが姿を消したことに気づいた二人はその動きを止め、互いに正面から相對していた。

「……ここで終わりにしましょうって言つたら納得できる?」

最初に口を開いたのは孝美。口ではそう言いながらも構えは刀を顔の横で立てた八相。

「逆に聞くけど……出来る? ああ、中断じゃなくて勝敗を決めるつて意味なら納得」

対するひかりは刀を右後ろへ向け、斜めに倒す。刀の長さを分かりにくくする脇構えの構えだ。

「中断? まさか、ええ、

——決着をつけましょう」

「ああ、

——決着をつけよう」

「やめんか馬鹿ども」

両者飛び出す前に他の隊員たちによつて拘束された。

羽交い絞めだったりストライカーに抱き着いたりと方法は様々だったが、とうに限界を超え気力で戦つていた二人はそれだけで力が抜け、倒れこむように動きを止めた。

刀もそれぞれについた扶桑組が回収し鞘に納めたが、納得できないというように二人が呻く。それに対し、ラルは厳とした声で、

「ネウロイの撃墜という任務はもう果たした。貴様らの私情でこれ以上燃料もストライカーも損耗するのは看過できん。なにより既に帰投するのでギリギリの分の燃料しかない者も多い」

自分たちだけでなく、周りの者たちまで含む問題となると流石にわがままを通そうとは出来ないよう姉妹そろつて黙つてうなだれた。

「では帰投する。念のためその二人は離して常に誰か張り付けよ」

「了解しました。——燃料持ちますか？隊長」

「む、メルスは足が短すぎるな。——アウロラを呼び出せ」

最終的に、基地まで帰れるだけの燃料が残っていたのは管野と下原だけとなり、それ以外の者たちは誰も墜落したわけでもないのに呼び出されたアウロラ達ユニット回収班の世話になることになった。

「さて、今回の勝負の結果についてだが」

基地の端にある塔状の部分。その中のブリーフィングルームにて。外は日が暮れ、全てを赤く染め上げる時間帯。夕食をとる前に部隊全員がそこに集められた。内容は当然、雁淵姉妹のどちらが502に残るのかの勝負、その行方である。

「どちらもネウロイのコアを特定するという意味では十分な結果を残したと言える。が、もう面倒なのでぶっちゃけるがどちらも502以前に軍人として問題ありだ」

「いや、それはその……」

「絶対に負けられない戦いがそこにはあったっていうか……」

「黙れ馬鹿ども。はあー、ロスマン。あとは任せる」

腕をさすりながら部屋を出ていくラルは如何にも早く寝たいという雰囲気を駄々洩れにしておりそのまま部屋を出ていった。残された隊員も仕方ないだろうといった反応のものが大半だ。そうでないのは申し訳なさから顔を向けられない雁淵姉妹。

「さて、あなたたちについてだけ」

退出したラルに代わって前に立つのはロスマン曹長。こちらを見る目はかわいそうなものを見るような目だった。

「命令無視、備品の私的使用、私的な乱闘、あげく破損、損失、紛失……。正直つけようと思えば幾らでも罪状がつけられるのだけど……」

頭が痛いともいうように目頭を押さえ、溜息を吐くその姿に申し訳なさから涙が出そうになるひかり。これまで品行方正で通ってき



た孝美は自分の経歴に残る傷の数々に既に気を亡くしそうだ。

「諸々ひつくるめてとりあえず二人とも営倉入りね」

「あゝあゝあゝあゝあゝ」

突きつけられた実刑に思わず声が漏れる孝美。一方のひかり的には『ブレイクウィッチーズ的には入つといたほうが良いのかもしれない』とか考えていた。本職軍人、それも士官として勤めてきた孝美と軍隊に入るのは手段でしかなかったひかりの意識の差だろう。

「ひとまずだいたい一週間かしら。ああそれと、」

そう言つて言葉を一度切つたロスマンは置かれていた映写機を起動し、部屋の電気を消す。すると、部屋の隅に待機していたサーシャがカーテンを引く。暗くなった部屋でスクリーンにはフレイヤ作戦のものであろう作戦概要図が映し出された。

「二週間後のフレイヤ作戦において我々502は作戦決行日数日前に当基地から発進。作戦に参加することになっています。その際、孝美中尉にはグリゴリーのコア発見の任を担ってもらいますが……」

「ひかりさんに関してはカウハバには今回の件を送付し、”度重なる問題行動により営倉にいれざるを得なかった”という風にしておきます」

「それって……!」

「おいマジかよ!」

それは、つまり”作戦に参加する502の魔眼ウィッチは孝美だがひかりも参加できる位置に留め置く”というもの。どうするつもりなのかはわからないがひかりも作戦に参加させようというものだった。

「ひかりさんの移動命令を出したマンシュタイン元帥はペテルブルグ軍集団の指令として新しく連合軍から派遣されてきた人間よ。従来の北方方面司令部長官とは別の人物なの。それ以前に502は元々東部方面統合軍総司令部の指揮下にあるからグリゴリー討伐戦が終わればまた元の命令系統に帰順することでしょう」

「グリゴリーが倒されればペテルブルグ軍集団は解散。戦力自体は北方方面軍に入るかもしれないけど司令部要員は確実に何処かへ配

置換されるでしょう。そうなってしまえば現地にはいない人間の古い命令書の一枚ぐらいどうとでもしてみせるって隊長が」

既に部屋を出ていった隊長の背を追うように出入口を見る。苛立って出ていったように思ったが実際は気づかいをしたことが気恥ずかしくて出ていったのではあるまいか、なんてことをひかりは考える。

「ただし、問題行動は確かなので営倉入りとその他作戦後には何かしらの罰を受けてもらいますからね！」

「とりあえずは営倉に入っている間は床で正座でもしてもらおうかしら。歴史を感じられる素敵なお石畳よ？」

未だ雪が残るペテルブルグの石畳など想像を絶する冷たさだろう。ひかりが剣術の一環で正座に慣れていることから罰にならないということを知っているサーシャだからこそそのチョイスだろう。姉妹そろって顔をゆがめ、嫌という感情が言葉にならずとも伝わってくる。

「営倉、営倉かぁー」

「思いだすねえ、ペテルブルグにきた最初の日を」

「スオムススキー駅で暴れたカンノの巻き添え食らって留置所入れられた時でしょ？懐かしー」

そうやって囃し立てるのはここまでおとなしくしていた問題児三人組。普段は自分たちが怒られる側だが今回は何の落ち度もなく終わり、しかもいじれる相手が目の前にいる。隊長の采配にテンションが上がったニパも悪乗りしだした。

「孝美、ひかり！これでお前らも俺らの仲間入りだな！」

「ヒューー！ブレイクウィッチーズもなかなかの陣容になってきたじゃない？」

「プツ、くく、ようこそっていいばいかな？アハハハハ」

「嫌ああブレイクウィッチーズ入りなんて……」

「ああ、姉さんあての手紙にあったんだっけ問題児三人組が居るって」

「問題児5人組は勘弁してほしいのだけど……」

原作11話　くフレイヤ作戦・原作崩壊の本格化く

502基地は17世紀に建てられた古い城砦を改修したもののだが、一応は居住施設だけあって暖房は気が使われているほうだ。そのため、約一週間の独房入りではあったが、ひかり的に独房での生活自体は悪いというほどのものではなかった。

ひかりに不満があるとすれば、暖房用ストーブの燃料である薪がもったいないからという理由で孝美と二人同じ部屋に入れられたことだった。佐世保で久しぶりに会えたかと思えば負傷で再び離れ離れになってしまったこと、ペテルブルグで再開したかと思えば仲違いを起こしてしまったこと等から孝美の”妹にかまいたい病”が発症していたのだ。

本人からしてみれば、まだ未熟な妹が世界有数の激戦区に放り込まれていたのだから心配するのも当然といったところだろう。だがそのノリで構われ続ける身としてはたまったものじゃなかった。

姉として心配する気持ちもわかる。しかし、人生二週目の人間としては、幼子のごとく身の回りの世話までされては耐え切れずに反抗的にもなろうというもの。

結果として、作戦開始の数日前、独房を出るころにはひかりはプチ反抗期に突入していた。

「フーンダ」

「隊長……、ひかりが、ひかりが相手してくれないんです……」

「……ああ、うん。そうか」

フレイヤ作戦参加に当たって、502内での独自ブリーフィングが行われる。遅れて会議室へと入った瞬間、ラルは自身が呼び寄せたエースに泣きつかれていた。うわ面倒な……、とは思えど口には出さず。孝美に感づかれないよう意識しつつも押し付けられる相手がないか部屋を見回す。

「機嫌直せってひかり。ほら、もう部屋は別々なわけだし、な？中尉もなんか言っただげよ」

「ひかりちゃんは甘やかすプレイは苦手つと……」

「おい、その不純な情報の詰まったメモ帳こつちに寄越せ。ぜつて俺達のもなんか書いてあるだろ」

ブレイクウィッチーズはブスツつとした表情で不貞腐れるひかりにかまっている。いや、それ以前にこいつらではまともに相手できないだろう。候補から外す。

次に目に入った定子・ジョゼ組は完全に目をそらしてこちらにはかわりたくないぞの姿勢だ。こちらが視線を向けた途端に会話が弾み始めた。こちらも駄目だろう。

内心舌打ちしたい気分になりつつも、それならいっそこちらを無視できない奴らに振るだけだとラルは考える。502部隊の残った二人、部隊のまとめ役でこの会議の進行役であるエディータとサーシャはこのひつつきむしを、隊長たるこの身から引きはがさない事には会議を始められないのだから……！

案の定、視線を向ければ、溜息と共に二人がこちらへと歩いて来た。

「あの、孝美さん。ひかりさんだつて、」

「でも、ひかりは」

「勝負には引き分けたじゃないですか。お姉さんなのですから妹のことを信じてあげてください」

「うう、そう、そうですね…。お姉ちゃんですものね」

目論見通り、押しつけた二人は孝美をうまくいなしたようで、内心ホツと一息ついた。

あとは、押しつけられた二人に恨みがましい目で見られる前にこのことを有耶無耶にしてしまえば完璧だ。そう考えたラルは珍しく自らブリーフィングを切りだす決断をした。

「ブリーフィングの終了後1300をもってひかりを除いた502は全機発進。戦力集結地にて作戦開始まで待機だ」

ブリーフィングにて話される内容はさほど多くは無い。今後502がどう動くか、それ自体は隊長たち三人の間で既に決まっており、それを全体に周知するだけなのだから。

「そして雁淵軍曹」

「はい！」

「お前は我々の発進後、明日1000をもつて当基地を発進。作戦開始後、シレットと戦闘に混ざれるような距離を維持してもらおう。専用の無線帯域を確保してある。当日はロスマンとつないでおくから指示に従え」

フレイヤ作戦にひかりが参加する理由。本人的には原作の大筋を変えないことだが、それとは別に隊長達としての思惑もある。ひかりを502に留め置くことだ。

激戦区である502は元々、各国から腕利きを集めている。しかしながらラルとしては未だ十分だとは思っていない。その上、既にあちこちから余り口には出せない手段も用いて人材を集めていることもあつてこれ以上の増員は難しくなっていた。

そのタイミングで転がり込んできた魔眼持ち。その上、本人の経歴は訓練校を卒業もしていないため、部隊に取り込んだところで文句を言ってくるのもほとんど無い。唯一の障害が本来の配属先であるスオムスはカウハバであるが、より直接の問題はそれを言ってきたカールスラントのマンシユタイン元帥。そのマンシユタイン元帥はグリゴリー討滅に当たってやってきた人間だ。

つまり、フレイヤ作戦の完遂によってマンシユタイン元帥を本国に送り返し、502を北方方面司令部から東部方面統合軍司令部に戻すことでその影響下から完全に抜け出す。そのうえで孝美も部隊に留め置くために、大規模な作戦に502の隊員として姉妹両方とも参加したという既成事実を作ってしまうおうというのだ。

「質問いいですか！」

「なんだ」

「ペテルブルグから作戦集結地まではだいたい一日です。一日早く着くことになります！」

ひかりは自身の動きを聞いて、疑問に思った。他の隊員達が早くに出るのはわかる。現地での配置等もあるからだろう。しかし、ひかりは飛び入りで参加するのだ。早くに参加しては万一も見咎められた

時にいいわけが効かない。ひかりが作戦に参加したことがわかるのは502が東部方面統合軍司令部傘下に戻った後の方が都合がいいのだ。

「うむ、作戦予定地の近くに廃棄された民家を確保してある。お前が独房に入っていた数日の間に物資を運び込んでおいた。当基地から直接飛んだ場合、戦闘中の燃料に余裕が持てない可能性があるから、そこで補給していけ」

「付け加えるなら、そこに集積しておいた予備の弾薬等もなるべく持ってきてほしいのです。現地ではひかりさんがいることを見咎められた際のいいわけにも使いますから」

「あとは単純にそこそこの距離を飛行してからそのまま巢の攻略に参加させることへの不安もあるわね。一晩体を休めてから作戦に参加しなさいということよ」

作戦中の弾薬欠乏によってやむ負えずひかりに補給を持ってこさせた、という言い訳も用意しておこうというものだ。言い訳の準備はあるだけ良いとのこと。

物資の運び込みには他の隊員達が哨戒の名目で飛ぶたびに少しずつ運び込んでいた物だ。詰まるところこの計画は502全体がグルになって行っているのである。

いつの間にか502は司令部からの命令を全員で無視するともない不良部隊となっていた。

ブリーフィングの終了後、つまむ程度に昼食をとった隊員たちは装備を調べ、出撃した。空中で集合し、編隊を組んで北東へ飛んでいく姿を滑走路で見上げる。

「軍曹」

話しかけてきたのは502基地で管制官をやっている兵だ。

「軍曹宛の電報はやはり届いてませんでした」

「そうですか……。わかりましたありがとうございます」

期待していた電報が来ない。

やはり無理があったのだろうか、そう思いつつひかりは明日に備え

て部屋に戻ることにした。

1945年2月10日 08:56 フレイヤ作戦重砲兵部隊  
上空・502部隊

白海にほど近く、比較的開けた土地がある。

グリゴリーが動き出す以前から攻略戦に際しての戦力の集結地とみられていたその土地は、当初の予定を遥かに超えた陣地構築が行われていた。

本来ならばそこはあくまで戦力の集結地に過ぎず、また、その戦力も航空機が主力のはずだった。なぜならグリゴリーは洋上に発生したからだ。しかし、突如としてそれがスカンジナビア半島へと動き出したこと、その進路上にこの地が存在したことにより、ブリタニアや周辺国に配置されていた陸軍戦力などもかき集められ、この地が決戦の場とされた。

凍り付いた大地をリベリオン製の重機力で強引に掘り返し、塹壕を作り、砲を配した。北方のムルマンスクからは既存の線路とはまた別の規格で新たな線路が何本も走り、数日前までは日に何本もの貨車が長蛇の列を作っては行き来していた。

その線路の上を、今は黒い鋼の塊が2つ縦に並んでゆつくりと進んでいた。

「デケえ……」

「あれがグスタフとドーラかあ……」

管野とニパがそう声を漏らす。

視線の先にある、口径800mmの化け物大砲を抱えた超巨大列車砲“グスタフ”と“ドーラ”はフレイヤ作戦に当たって投入された人々の切り札。カールスラントの技術力を結集して作られたこの巨砲がこの作戦の要となる。前方を曳かれるグスタフに積まれた”超爆風弾”はネウロイの巢を覆う暗雲を文字通りの爆風で消し飛ばし、そうして露わになった本体の更にそのコアをドーラに積まれた”魔導徹甲弾”でぶち抜くという作戦だ。この魔導徹甲弾には何人ものウィッチが魔力を込めており、巢に対しても効果が見込めるとされて

いるものだった。

この作戦における502の役割はこの“グスタフ”と“ドーラ”の護衛、そしてドーラが狙うグリゴリーのコアの特定となる。502以外のウィッチ隊や通常戦力から成る部隊は彼女たちの露払いとして敵戦力の誘因と撃滅を行うことで援護を行う。そのため、通常戦力から成る部隊は502や列車砲とは別の方面に展開している。カールスラントやオラーシャの陸軍部隊を主力にリベリオン・ブリタニア・扶桑の連合による空母機動艦隊や周辺国からのウィッチが支援に当たっている。

「隊長、バルトラント軍の偵察ウィッチ隊が戻ったそうです。作戦開始予定に変更は無しとのこと」

「そうか」

線路に沿うように飛ぶ編隊、502部隊は作戦開始を目前にしても過度に緊張するような者はいなかった。この場にいる隊員は誰もが欧州撤退戦の頃からのベテランだ。近距離での乱戦を想定して機関銃を装備した隊員が多く、隊長のラルも普段使いのMG42ではなく取り回しのいいMP43を持っている。孝美もまた、いつもの対物ライフルではなく菅野や下原と同じ九九式改を持っていた。唯一、ロスマンはフリーガーハマーを装備していたが、もし重装甲の相手が来たときに打つ手無しでは不味いという理由からだ。その破壊力は小型ならば数機巻き込むこともできる。

「総員に告ぐ。フレイヤ作戦の開始がもう間もなくだ」

作戦開始の直前、ラルは部隊全体に無線を送る。

「難しいことは何もない。我々の道をふさぐハエどもを叩き落とし、ついでにその巣を焼き払うだけだ。繰り返しだが何も難しいことはない。黙って私についてこい。命令はそれだけだ」

ラルの言葉に声で返す者はいない。ただ、誰もが己のうちに闘志を宿し、彼方に見えるグリゴリーをにらみつけることによってその意思を示した。

「よし、サーシャ」

「はい、フレイヤ作戦開始まであと、30、29、28……」



事前に合わせられた時計により、作戦の開始時刻のカウントダウンが始まる。

「……3、2、1！」

「作戦開始！」

1945年2月10日 09:00 同上

作戦は、航空隊による敵の誘因から始まった。洋上の扶桑第三航空戦隊、ブリタニア本国艦隊から発艦した戦闘機隊による第一波。別方向から侵入する陸上基地からのオラーシャ陸軍航空隊による第二波など多数の航空機が巣を丸裸にするべく戦闘を始める。

雲龍、葛城、レンジャー、ヴェクトリアス、フューリアス、その他護衛・軽空母数隻と複数の陸上基地からの総数は500を優に超え、1000にも届こうかという数になり、白海の空は黒煙と火球、砕けたガラスのような物が乱舞する。

他方、陸上では多脚のネウロイの進行に対してダグインした戦車や榴弾砲等による戦闘が行われていた。素早く、左右にも動くネウロイに対して人類側は飽和火力によって万遍なく砲弾をばらまくことによつて対峙。こちらは比較的損害が少なく、しかし陸戦故戦局に影響は与えていなかった。

本命である列車砲とその護衛である502部隊もまた、ネウロイの脅威にさらされていた。味方航空機隊や高射砲部隊を越えてなお数えるのも億劫になる数の小、中様々なネウロイが彼女らを襲つていった。

他の戦場では全滅する部隊も出てきた頃、遂に列車砲はその射程にグリゴリーを捉え、射撃態勢へと移行を開始する。

先に放たれたのはグスタフの超爆風弾。魔道シリンダーにて発生した魔力の嵐をその砲身でもつて指向性を持たせ、砲身の先に発生させた魔方陣で再加速させる。

その魔力嵐はさながら光線のごとく付き進み、進路上のネウロイを掻き消しながら目論見通りにグリゴリーを覆う暗雲をかき消した。護衛につく502のウィッチ達もその余波に吹き飛ばされそうにな

りながらもそれを見届け、思わず歓声を漏らす。しかし、それも長くは続かなかつた。

その姿を現したグリゴリー。それは余りに大きく、その装甲はフリーガーハマーも寄せ付けない。幾本もの触手はその先端から強力な光線を放ち大地を灼く。そのグリゴリーのコアを破壊するにはドーラの魔導徹甲弾が必要であり、502はその狙いを付けるべく孝美にコアを補足させなくてはならない。そのためにはコアを捕捉できる距離まで孝美を送り届け無くてはならない。それと同時に列車砲もネウロイの攻撃から守らなくてはならない。

各員がそれぞれの役割を全うする中、ラルは別の焦燥感に駆られていた。本来ならばもう戦闘に参加していて良いはずのひかりが戦場に見えないのだ。

「エディータ、雁淵軍曹はまだか？」

「ええ、無線も入れてきません。何かあったのでしょうか……」

「くっ、確認することも出来ないか……!」

これだけ多くのネウロイが戦場を舞っているのだ、もしかすれば誰の眼にもつかないような場所で撃ち落とされているのかもしれない。だがそれでも、今の502に確認に行かせられる余裕は無い。今一人でも抜ければ、作戦自体が失敗しかねないのだから。

1945年2月9日 11:06 ラドガ湖上空・雁淵ひかり

作戦開始の前日。

予定通りにペテルブルグを出て、ひかりは物資を隠した民家へと向かっていった。

風に煽られて方向を見失ったがラドガ湖を越えるところまで来た。

(下に見える島、岸にほど近いということはサルミのあたりまで流された? 思ったより南東に来てる……)

本来なら一直線に向かうはずだったのが余計な道草を食わされてしまった。現在地がわかった以上、進路を修正しなくてはならない。

本来の進路上にロイモラという土地がある。数年前までの前線で

あり、時折戦いの跡であろう倒木やクレーターがある。サルミから元の進路に戻る目印として目指していた、丁度その上空にさしかかったあたり。

高度を落としていたのが不味かった。地上、森の中から一条の光線が放たれた。幸い、寸前で気づきシールドで弾いたことによつて致命的なダメージを受けることは無く、姿勢を崩す程度に終わった。

「な!?この辺りはとつくに制圧されて……!」

今の高度を保てばいいだろう。追撃を避けるべく高度を落とし、森の木よりも低く飛んで見えたのは木々の間から覗くネウロイ。

数は多くない、哨戒だろうか。いや、違う。ここは補給線確保の一环で他ならぬ502が制圧した土地なのだ。ここは奴らにとつての敵地なのだ。

「哨戒、じゃない斥候!ネウロイがまた侵攻しようとしてるつ!」

思わず口から漏れた言葉で脳が事実を再認識して愕然とする。ネウロイの攻勢、それに気づいただけなら話は早かった。しかし、今の地の連合軍は大規模な作戦でその兵力を集めている。もちろん前線から兵を引き抜くようなことはしていない。ならば今日の前にいるこいつらは前線を抜け、哨戒線を越えてここに居ることになる。前線は今挟み撃ちにされていて、しかもそのことに気づいていない。

すぐに無線を使って周囲に呼びかける。帰ってきたのは雑音ばかり。

(通信妨害!ネウロイが!?)

本格的に、ネウロイが秘密裏に前線を制圧しようとしている、いや、或いはもう何処かでは戦闘が始まっているのかもしれない。しかしそれを、北方方面司令部やフレイヤ作戦司令部は未だ察知していないのだ。

即座に、基地へ向けて引き返すことに決めた。前線に一番近い基地はペテルブルグであり、あそこなら有線で他の戦線とつながっている。特に後方のヘルシンキとつながっていることが大きい。

途中経路にラドガ湖を含ませることで陸戦型ネウロイからの追撃を防ぐ。冬季で凍結しているとはいえ、迂闊に渡れば氷が砕けるかも

しれない。縦横無尽に動き回るネウロイといえども大群で渡れば水の底だろう。

逃げるこちらに対し、追撃は少ない。どうやら、航空型そのものがないか少ないらしい。前線を突破するのに航空型は目立ちすぎるといふ判断だろうか。ネウロイに判断だなんて、そう思った瞬間、円に光線が接触したことを感じ取る。航空型はいない、そう思った矢先に上からの光線を察知したのだ。

体を左にスライドさせることで光線を回避する。光線の数は少なく、同時では無くある程度の間隔を置いて放たれていた。隠密行動である以上多くを連れてくることは出来なかったのだろうか、と思いつつ、相手を確認するべく体をロールさせる。小型が数機だろうとあたりをつけていた視界に入ったのは輝く銀。そして首と頭のような物が着いたネウロイ。

(ひ、人型の、ネウロイ……?)

ラドガ湖を越えて戻り、ラオトウの上にさしかかった辺りで交戦する。人型を振り切ることが出来ず、かなり接近されてしまったことからやむを得ない。

人型は右腕のような部分の先から棒状の物を伸ばし、そこから光線を放ってくる。下に短い円筒のような物をつけたそれは何処か九九式20mmのようにも見える。こちらは追われる形となるため、何とか相手にオーバーシュートさせ、後ろに着こうと繰り返す。互いに機首を右へ左へと振り合い徐々に高度が落ちていく。

これは不味いと感じ、早めに勝負に出ることにする。左に試製を傾け機体を縦に、エンジン出力を左右で変えて行う変則的な燕返し。高度が下がりすぎれば使えなくなる、その前に手札を切る。どうやら人型ただけあって外部を頭部でのみ認識していたらしく、こちらを見失ったネウロイの動きが硬直する。ほんの数秒であろうと真っ直ぐ飛ぶ相手などの動的にもならない。格闘戦こそ厄介な相手だったものこちらの動きが変化した途端に反応がお粗末な物になる。なんともちぐはぐな印象を受ける。

——とつとつと片して基地へ戻らなくては

そう思いながら引き金を引く。手中の九九式が撃針を開放し雷管を叩く、装薬が弾けて産まれる反動を肩に感じるのとはほぼ同時に下から来た光線が九九式の銃身を消し飛ばす。銃身内を邁進中だった20mm弾が半ばで掻き消され、中の炸薬が熱に耐えきれずに炸裂、その威力はそのまま弾倉内の弾薬にまで届き、誘爆を起こす。

(——もう1機?)

咄嗟に右手をグリップから離しそのままシールドを空との間に割り込ませる。九九式の燃える煙の向こう側、既にかかなりの低空を飛んでいるが、その更に下。先ほどの陸戦型と同じく木々の間からその姿を覗かせる黒の人型。先ほどの物よりもスマートな足つきをし、腕から生える棒状の、銃のような物が短い。

息つく間もなく此方へ突っ込んでくるそれは最初の機体よりも明らかに動きがいい。こちらの回避に合わせた攻撃にシールドで対処せざるを得ない。

(こいつ、こっちの動きをずっと観察してたな!?)

もともとシールドが頑丈な質では無いため、使えば思うように飛べず、体が弾かれる。徐々に自分の心が焦っていくのがわかる。銃を喪失し、残る獲物は腰から下げた二振りのみ。新たに出てきた黒い方はなかなか近寄らせて貰えず、動きの悪い方のフォローまでしてくる。

さらに速度が落ち、このままではなぶり殺しにされると感じた。

二機のネウロイは刀の間合いに決して入らず、やがて徐々に距離を詰めてきた。撃つまでもないと判断したのだろうか、光線も減り、牽制する程度。しかしこちらは反撃も満足に出来ない。

疲労からだろうか? 体の動きが鈍い。いや、思ったような動きが出来ない。振り切ることも出し抜くことも出来ず、段々と太刀筋は鈍り、頭がぼんやりとしてくる。いよいよ瞼が落ちそうになるのに逆らえなくなり、これはダメか、という思考を最後に意識が途切れる。

霞む視界の中で、最後に銀の鈍い反射光が1つから3つに増えた気がした。

フレイヤ作戦参加部隊は今まさに窮地に陥っていた。

作戦の要、超巨大列車砲ドーラに敵の攻撃が当たってしまった、トドメの魔導徹甲弾が撃てなくなってしまったのだ。複数のビームを束ねた一射が護衛についていたウィッチのシールドを貫通。そのまま砲身をかすめてしまったことによりバターのようにとろけた砲身は、もう砲弾は撃てなくなっていた。

これにより、グリゴリーはその場にもはや脅威はないと判断したのか周囲にいるウィッチ達への攻撃も打ち切り、悠々と移動を再開した。

「ドーラは後退させろ！グスタフに予備の魔導徹甲弾を装填！」

これに対し、司令部は超爆風弾を撃ったグスタフに予備の魔導徹甲弾を装填することでトドメ役を代替させようとしていた。

《司令部！グリゴリーの進路が変化！予想進路の先にはペテルブルグです！》

「なに!?」

前線にてグリゴリーの観測を担っていた部隊からの報告。移動を開始したグリゴリーは当初の進路をやや南に逸れ、その先にあるのは人類の最前線拠点の一つ、ペテルブルグ。なぜ、ペテルブルグに向かうのか、それは今の司令部の人間にはわかるはずも無い事であったが確実なことは、急ぎグリゴリーを破壊しなくては人類の版面は再び大きく狭まり、数年前の欧州撤退戦のような悪夢が繰り返されるということだけだった。

「グスタフへの装填はどれだけの時間がかかる!?!」

《再照準も含めて一時間はかかります》

「そ、それでは間に合わないか、射程の外に出られたら終わりののだぞ……」

マンネルヘイム元帥の問いに対し、返ってきた答えは覆しようのない数字。作戦参謀も思わず声をこぼす。

司令部に言いしれない絶望感が漂い始めた。

1945年2月10日 10:20 フレイヤ作戦重砲兵部隊上

「どうしよう、このままじゃ逃げられちゃう」

「けど、俺たちの武器じゃ歯が立たねえ」

彼女たちもまた、呆然とグリゴリーを眺めることしか出来ずにいた。

列車砲が破壊された時点で攻撃がやんだ事、手持ちの武装では最大の火力を持つフリーガーhammerですら傷もつけられない事から何もすることが出来ずただその場にとどまることしかできなかった。

その中で、孝美の目線は撃破されたドーラに向いていた。下方に見えるドーラはこれ以上の損害を防ぐべく、連結された機関車に兵が乗りこみ動き出そうとしていた。線路にはドーラ、グスタフの順で並んでいるためドーラは前進することでグリゴリーの射程から逃れるつもりだ。その先は別の路線から北へ戻るのだろう。

孝美の目に映ったのはドーラの損害状況。砲身に光線がかすめたという報告の通りどろりと溶けた鉄の塊が地面へと垂れ落ちている。だがそれだけだ。それ以外は無事なのだ。つまり、魔導徹甲弾は誘爆をおこしていない、装填されたままなのだ。

「あつ、おい！孝美どこに行く！」

管野の叫びを背に受けながら、孝美は真っ直ぐ降下する。ドーラの上までくると手に持った機銃を投げ捨てる。ドーラの上にいた兵が驚くような顔をしているがお構いなしに尾栓を腕力で強引に開放する。解放された薬室からは3, 4 mもある巨大な砲弾が滑り落ちあたりに轟音を響かせる。それを見た孝美は砲弾の下に腕を突っ込み、力を込める。

「魔導徹甲弾……まさか！」

「弾を持ち上げようとしています！」「直接ぶつけようというのか!?!」「魔導徹甲弾の重量は数トンもあるのに無茶です！」

上空からそれを見ていた他の隊員達が口々に止めるようにというも、

「諦めるわけにはいかないの！」

何と言われようと孝美は持ち上げるのを止めようとはせず、より一

層力を込めるばかりだった。そうして孝美が力を込めていると、その指先の隣に別の指が挿し添えられる。

「二人じゃ無理だろ」

「管野さん！」

ムスツとした顔で言う管野とは逆の側にも手が添えられる。砲弾を挟んだ向かい側にも続々とウィッチ達が降りてくる。

「そうそう。こういうのは皆でやらなくちゃね」

「私もお手伝いさせてください」

「ニパさん、ジョゼさん、皆さんも！」

ウィッチ達が集まり、皆が砲弾を持ち上げようとする。その中に混ざらず、空にとどまるものが二人。ラルとロスマンだ。

彼女たちは悩んでいた。グリゴリーからの攻撃が止み、手隙となった今なら連絡の取れないひかりを捜しに行けるのでは、と。しかし、今グリゴリーを逃がせばまた重大な被害が出る。孝美が持ち上げようとした魔導徹甲弾はそれを未然に防ぐ最後のチャンスでもあるのだ。

「隊長……」

ロスマンも自分に納得がいく決意を固めきれず、ラルの意見を求める。

見つめる先のラルの顔は、何処か何時もよりも険しく思えた。

「……行くぞ、私たちもあれを持ち上げる」

「よろしいのですか？」

「私の見通しが甘かった。責は負う」

ラルはそこで会話を打ち切り降下に入る。ロスマンも黙って後に続いた。

1945年2月9日 11:34 作戦前日 ラドガ湖西岸、オレ

ホヴオ郊外・雁淵ひかり

目を覚ましたひかりはしばらくの放心の後、何処か違和感を感じていた。最初は自分がなぜ雪に埋もれているのか、眠っていたのかをボンヤリとした頭で考えていた。そう思っただけで自分に飛んでいた



ことを思い出す。すると新しい疑問が沸く。体を打ったような痛みはあるものの、空中から落ちてこの程度で済むだろうか。そもそも、何故自分は落ちたのか。

そこまで思考が回った後、弾かれるようにして上を見る。あの敵はどこだ、あの人型のネウロイは。なぜ、自分は殺されていないのか。瞬間、突然耳に音が飛び込んできた、認識できるようになった。今まで無意識のうちに音をシャットアウトしていたのだろうか。聞こえたのは光線の飛び去る音と当たった地面がそれで炸裂する音、そして慣れ親しんだ栄エンジンの音。

見上げた先の空ではマフラーを巻いた見知らぬウィッチが戦っていた。

1945年2月10日 10:20 フレイヤ作戦空域・502部隊

「せえーのー！」

下原の掛け声で一斉に力を籠める。一度持ち上がってしまえば持ちやすいように姿勢を変えることができた。指先だけで持ち上げていた姿勢から掌や肩に乗せられるようになったのだ。

「いくぞー！」

ラルの掛け声でウィッチたちは一斉に魔道エンジンの出力を上げる。機種もエンジンも多種多様なストライカー9機であってもふらつくことなくまっすぐに上昇できたのは彼女たちの練度の高さが故だろう。作戦司令部も、もはや他にとれる手段はないとして、彼女たちの判断を追認することにした。

「まさかこんな抱えて突撃することになるとはね」

「むこうはまだこっちに気づいてないよ！」

「余裕ごきやがって、今に見てろよ」

何処か間抜けな光景だが、たしかに何トンもある砲弾を上空まで持ち上げることには成功していた。眼下にはうねらせていた触手を一つにまとめ、ゆっくりと飛ぶグリゴリーの姿。

「敵の直上600m、目標地点です！」

「コアの位置変わらず、直上今です！」

「降下ア！」

サーシャの判断した位置で502全機は突撃に移る。砲弾を上に乗せたまま、より威力をつけるべく加速をつけようとさらにエンジンを吹かす。

「隊長！」

「全機！私を残して離脱！あとの誘導は私の固有魔法でやる」

ラルの固有魔法は偏差射撃。自らの放つ物の動きを予測する力。砲弾に取り付き、ネウロイに向けての最終誘導を担当する。

「全機、隊長の援護を！」

「了解！」

突入するラルは身動きが取れず、また、砲弾の大きさからシールドを張ることも出来ない。そのため、戦闘隊長であるサーシャはシールドでの防御とグリゴリーの触手自体への攻撃を隊員たちに命じた。

「いくぞ、3, 2, 1, 行けエ！」

そうして援護のもと、投下された一弾は敵の妨害をすり抜け、敵のど真ん中へと突き刺さる。数トンの重量とおまけ付きの速度の合成体はその装甲をたたき割り、半ばまでコアに突き刺さった段階で派手に炸裂。その身をバラバラに引き裂き破片の雨を降らせる。

その結果は、

《グリゴリー健在、再生しています！》

無情なものだった。光の粒子となり完全に終わったかと思われたそれは、さながらテープの巻き戻しのように元の形を取り戻す。喜びの声を上げた誰もが裏切られ、歓喜の雄叫びとともに振り上げたその腕を力なく下す。

「どういうことだ!？」

現場の誰もが呆然とし、やがて疑問の声を上げる中、ただ一人現状を把握していた者がいた。グリゴリーがその身を巻き戻す瞬間、その中心を見ていた者が。コアの位置を見る魔眼を持つ孝美だ。

「し、真コアです……！」

「っ、こいつも真コア持ちか！」

以前のネウロイの件から事情を知るラルを通じて、孝美の見た真コアの情報に司令部へと伝えられた。同時に、再生した偽コアの外殻がシールドとなり真コアが見えなくなっていることも。

《司令部より502へ》

「( )ちら502」

《敵の狙いが変化した。奴ら、グスタフに魔導徹甲弾が装填された瞬間そちらに狙いを変えおった!》

「なんですって!?!」

真コアに関する報告に対し、司令部から返ってきたのはグリゴリーの狙いが変わったという連絡。連絡を受け取ったラルが見やると、グリゴリーの触手が再展開されグスタフとの間に居る部隊に対して攻撃を始めたところだった。高射砲や対空戦車も反撃を行うが聞かないかそもそも届かないかのどちらかで反撃の光線で蒸発・爆発していく。

咄嗟に、ラルが部隊に対しグスタフの守りにつくよう命じようと口を開きかけた瞬間、その脇を抜け、孝美がグリゴリーへ向けて飛翔した。

「雁淵中尉が本体に向かっていきます」

「おい孝美イ!」

サーシャと管野が声をかけるも意に介さない。

「早まるな孝美!」

「発動、絶対魔眼」

一言つぶやいたかと思えば孝美の髪は毛先から徐々に朱く変色し、その体は魔力に覆われる。孝美の固有魔法を知る者みなは何をするつもりなのかを悟った。絶対魔眼による多数の目標に対する同時捕捉。あるいは重捕捉とも呼ぶそれを使って外殻に覆われた真コアの位置を把握しようというのだろう。

《フレ……作戦に参……する全軍に通達、…方主防…線にてネウ…イの大規……より、全軍…退……へ》

グスタフを守るべきか、いや、ここは絶対魔眼の発動中は無防備に

なる孝美を、いくつかの考えがラルの頭をよぎるが耳に入った無線でそれらの考えは霧散した。

「っ！待て孝美、撤退命令だ！」

「、何故です?!今落とさなければペテルブルグが！」

朱く染めた髪を振りながら孝美が振り返る。視界に写る、振り返った先にいたラルの顔は感情を表に出した、見たことの無いような顔。悔しそうに歪んだ口元、何処を見るでも無く睨みつけた眼。

「主防衛線が、破られたそうだ」

主防衛線

ペテルブルグの南、セルトロヴォの北・メドノエオセロのあたりをスオムス湾からラドガ湖までを結ぶように位置する防衛線。1941年、まだ欧州撤退がなされていなかったところに築かれたそれはスオムスとオラーシャの陸軍を主力に欧州各国からの連合軍によって守られていた。それが破られたのだ。

「主防衛線が……!?!」

「そうだ。敵は既にVT線目前まで迫っているらしい」

「そんな！ペテルブルグはどうなって、速く向かわないと！」

そう、主防衛線。北方司令部がそう定義した場所はペテルブルグの後方約40kmの地点にあるのだ。それが破られたということは彼女たちの帰る場所であるペテルブルグは疾うに敵の支配地域ということになる。ペテルブルグにはまだ基地要員や動員されなかった歩兵部隊や集積された物資がある。孝美は思う。急げばまだ、助けられるかもしれない、生き残っているかもしれない。それに動員されるのはウィッチ隊である自分たちを於いてほかにない。

「……いや、我々はムルマンスク港へ向けて後退する」

しかし、ラルの言葉は孝美の予想を裏切るものだった。

「なぜ!?!」

「グスタフの護衛がある。今、残り一発の魔導徹甲弾を失うわけにはいかん。主防衛線の後方、VT線には戦略予備になっていたスオムス軍が防衛に入った」

それはつまり、ペテルブルグを見捨てるという判断。孝美の中ではそんな判断を下した司令部への怒りやグリゴリーを倒せずに終わってしまった自分への無力感などが渦巻き、ぐちゃぐちゃになった脳はやがてこれまで気づかずになっていたことに気づいてしまった。

「……ひかりは？ひかりはどこにいるんです？」

作戦途中に合流するとブリーフィングでは言っていた。なのに、それらしき姿はない。上にも下にも、他の隊員たちの中に紛れているといった風でもない。脳裏によぎる予感を必死に考えないようになら、救いを求めるかのような顔で眼前のラルに詰め寄る。詰め寄せられたラルが一瞬、背けるような目の動きをしてからじっと見つめてきたことに背筋を冷たいものが走るような感じがした。

「合流予定は、とつくに過ぎてている。無線も入っていない」

そう告げられた言葉を脳が理解するまでに数瞬。同じ話を聞いていた管野やニパ、クルピンスキーが何かを探るように頭をあらゆる方向に向けているのが視界に入る。胸の前で手を押さえるジョゼとその肩を抱く下原。目をつむり、心を落ち着けるかのように息をするサーシャと深い悲しみを湛えるような目をしたロスマンを見て、彼女の、孝美の感情は噴出する。

「ああ、ああ、ああああ。そんな、なんで……、どうしてよお!!」

オラーシャの二月の寒空に、身の毛もよだつ禍禍しさのグリゴリーを背にして顔を覆った孝美の空を裂くような悲鳴が響く。

1945/2/10~11 ペテルブルグ包囲戦の  
開始

雪原に寝転ぶひかりの頭上で戦うウィッチ。相手の動きに合わせて常に一定の距離を保ちながら相手の死角を突こうとするその動きは502の誰とも航空学校の先生たちとも違う独特な飛び方だった。

しかし、対する相手のネウロイも次第にそれに対応しはじめている。ネウロイにとって致命傷にならない程度の深さの傷しか負っていない。その上、傷を負う場所も手足の末端など余り問題にならないような部位ばかりのようで、暫くすればそれも再生しきってしまう。ある程度の余裕をもったまま立ち回れている証拠だ。

いくらあのウィッチでもこのまま長引けばまずいかもしいない。ひかりはそう思った。何か状況を打開できる一手はないかとあたりを見回す。足の紫電改は調子が悪く浮かび上がるのがやっとなだろう、戦闘機など望むべくもない。銃は喪失、ユニット無しの状態では空中を飛び回る相手に扶桑刀で挑むのは無謀。なら、相手をこっちの領域に引きずり込む、そう考えたひかりはユニットを脱ぎ、背後の茂みに突っ込む。自らが突っ込んだ跡のある雪を簡単に均してカモフラージュとし、必要最低限の物として刀だけを持って森に駆け込む。

陰から、鼻より上だけを出すようにして空を確認すると、戦いの様子に変化はないように見えた。ウィッチは手に持った扶桑刀での攻撃に切り替えており、銃は背中に回している。どうやら弾切れか弾詰まりでも起こしたらしい。

よく、漫画の表現として戦いの様子を踊っているかのようだ、などと表現することがあるが空の様子は正にその通りだとひかりは思った。互いの攻撃に合わせて回るように体を滑らせ、次の己の攻撃につなげる。途切れることなく続けられる一連の動きは容易には成しえない物だろう。

ひかりは刀を鞘から少しだけ抜き出した。そのままじっと戦いの様子を観察する。一人と一体の戦いはとても高度なものだがひかり

の”眼”ならば見切ることは可能だ。格闘戦の中、ネウロイがこちらに背を向け、ウィッチがこちらに正面を向ける瞬間、その瞬間にのみ刀身に日光を反射させる。ウィッチがこちらに気が付くように願いながら。

ひかりの見つめる先、斬った撃ったの戦いの中で突然ウィッチが突然大振りの一撃を放った。予備動作のあったそれは、黒いネウロイからすれば避けられないはずもない一撃。案の定、後ろに下がるだけでネウロイはそれを躲してしまったが、ウィッチは止まることなくそのままぐるりと半回転し背を向ける。よく見ればほんの少しずつ回転しながらネウロイへ向き直ろうとしている。

戦いの中で、突然相手が背をむけたことに対して、ヒトはどう反応するだろうか。あつけにとられるか警戒して動きを止めるか、距離をとるか。もしくは何もさせまいと打って出るか。

人型ネウロイは打って出た。果たして何か考えがあったのか、ネウロイ相手には無駄な考えかもしれないがとにかく打って出た。その時点でネウロイはウィッチの誘いに乗せられていた。打って出たのだ、つまり前進した。ここまで延々至近距離でやりあってきたその感覚のままに、再び距離を詰めにかかったのだ。その結果、その動きを讀んでいたウィッチの動きが急加速。そのままの勢いで距離を詰め、振りぬかれた刃はネウロイの向けた銃身事その右腕を二つに裂いた。互いに仕留め損ねた。ウィッチはそれを見て即座に勢いのまま降下することを選ぶ。

腕を斬られたネウロイは再生よりもウィッチを追うことを優先、ウィッチの後を追ってネウロイも加速する。

ひかりは抜身の刀を手にじつと息をひそめて待つ。”絶”でその気配を絶ち耳を澄ませる。ひかりの隠れる木の裏は他の場所よりも木々の間隔が若干広く、ウィッチ程度の大きさでなら地表近い高さでも飛べる。

空中のウィッチが降下し始めたのを見た時点でひかりはその身を

隠したが、間をおかずしてエンジン音が近づいて来たのを感じる。地面には目印として不自然にならない程度に枝が向きをそろえておいてある。根元から分かれた枝を矢印代わりに置いたのだ。ネウロイに矢印が理解できるかはわからないが、高速で森の中に突っ込んでしまえばもう後戻りはきかない。

ひかりにとって零式の栄魔道エンジンの音は訓練時代から慣れ親しんできた。目で見ずに感覚で編隊を組んだりもしたのだ、音でどれだけの距離かを掴むことくらいは容易い。

ひかりの潜む木の裏をウィッチが通り過ぎた。その瞬間にひかりは“絶”を“円”に切り替え、ネウロイの位置を掴みにかかる。

予想外だったのはネウロイが思っていた以上に降下で速度をつけていたことだった。“円”に引つかかると同時にコアを狙って刀を振り抜く。しかしその刀身は相手のコアのある胴を捉えることはかなわず、その右足を斬り飛ばしたに過ぎなかった。

「——ッ!!」

耳障りな、金属がすれるような悲鳴を出したネウロイ。ウィッチの姿を模していることから片足とはいえ切り落とせばバランスを崩す、とひかりは予想したが、もともと物理法則が通用するのかわからない相手。バランスを崩すことなくそのまま急角度で上昇した。

「逃げる気?」

反撃するそぶりも見せず、即座に撤退の意思を見せたネウロイにひかりは思わず叫ぶ。

何も出来ないひかりの目の前をネウロイは上昇していく。

そのまま木々の高さを超えたその瞬間、

「てやあああー!」

突然横合いからウィッチが斬りかかる。

過ぎ去った後、木々のてっぺんそのギリギリに潜んでいたのだ。狙いは一度切りつけ、今なお再生中の右腕。結果、半ばから切り落とせばすれど、相手は腕を犠牲に胴体までは刃をとどかせなかった。腕を落とされたネウロイはなお、こちらに目もくれず東へ向けて飛び去った。



「あっちゃー、逃がしちやっただかあ」

そう言つて降りてきたウィッチ。扶桑海軍の飛行服に白マフラー、扶桑刀を装備した彼女はひかりに目を向けた。

「や！大丈夫だった？」

「はい！助けていただきありがとうございます」

「いいよいいよ偶然通りがかっただけだし」

そう言つて彼女は手をひらひらと振るが、ひかりは通りがかった、という言葉がひかりは気になった。

「通りがかった、つてもしかしてフレイヤ作戦に参加するつもりだったんですか？」

「そうそう！じゅんじゅん、つて友達がねー？デカイ作戦があるつて言うからさ、参加したらうまい物食わせてもらえるかなーつて」

ひかりはそれを聞いて内心ヨシッ！つと言つていた。以前、ムルマンに任務で行つた際にうまく行つたら儲けもの程度に考えて校長にお願いしたこと。まさかほぼドンピシャりのタイミングで来てくれるとは思わなかったが。

扶桑海軍の遣欧艦隊はブリタニアを中心に世界のあちこちに戦力を派遣している。その中でも名のあるウィッチと言えば両手の指の数ほどいるが、その中でも特筆すべき二人。”零戦虎徹”と”リバウの魔王”と呼ばれた二人だが、どちらも師である北郷校長とその弟子経由で連絡が取れるのではないかと思つたのだ。

「ん？でも君もこんなところ飛んでたつてことはもしかして？」

「はい、ペテルブルグ502部隊の一人として参加するつもりでした。あと、私は海軍337航空隊特設欧州支隊雁淵ひかり軍曹です」

「そっか！アタシ西沢！よろしく碇」

「ひかりです！」

ひかりと西沢のふたりはペテルブルグへ戻ることにした。ひかりが見たラドガ湖東岸に浸透していたネウロイ、なにより二人の交戦し

た人型ネウロイのことがあるからだ。加えて、気になることもあった。切り落とした黒い人型の右足、確認しに行つたそこにはひかりにとつて見覚えのあるストライカーが落ちていたからだ。

「ネウロイがストライカーを履いていた…ねえ。知ってる人の？」  
「同じ部隊のクルピンスキーさんの機体です。ほら、ここにエンブレムが」

「おお、ほんとだ。あの、そのクルピンスキーさんっていうのは…」  
「生きてますよ!?!もしかしたら、洋上に落ちたときに投棄した奴かも」

ブレイクウィッチーズは装備の一部を損傷・紛失・破壊することを繰り返していたがストライカーそのものを紛失することはまずない。もともと撤退戦を経験した三人は戦地で動けなくなれば死に直結すること、ストライカーは他のどの装備よりも替えが利かないことを知っている。

それ以前に502部隊には専属のストライカー回収班が存在し、スオムスから腕つききの陸戦ウィッチを隊長がその悪名高い手腕で引き抜いて編成している。

よつてストライカーそのものを紛失した事例、まして新型のK型メスを丸々紛失した機会などあの洋上護衛の時だけだ。

「おお、なんだ生きてたのか…。じゃあ、あつちは誰のなんだ？」  
「あつち?..」

触れるべきではない話題だったかと心配していた西沢がふと思つた疑問を投げかけるもひかりには何のことだかわからなかった。

「あー、そう言えば見てなかったのかな? ほら、銀色の方もいたじゃん? アタシが墜としたけど」

「あ、っ」  
ぶつちやけひかりは忘れていた。

西沢が先導し、銀色が落ちたであろう辺りを捜してみる。上から見ると枝がバキバキに折れている場所があり、木々の間に引っかかっていたそれは。

「私の紫電改です……」

「ええ、ネウロイに自分のストライカー使われてたの？」

「そうみたいです…」

「わあ……」

ペテルブルグへの帰路。ペテルブルグの空域に入る前に管制塔へ連絡を入れようとする。紫電改は飛ぶのがやっとなとあったところなため回収したK型と紫電改は西沢さんが持っている。

「あれ、繋がらない」

「ありや、壊しちやった？アタシ無線機は置いてきちやったからさあ」

ひかりの無線機からはノイズが流れるばかりで声が返ってこない。西沢は一度ペテルブルグに寄ってから向かっていたらしく、そこで自分の荷物を置いてから来たらしい。普段はラバか何かに乗って欧州のあちこちをふらついているらしく、通常の野戦無線機をそれに積んでいる使っているようだ。ラバか何かというのは自分でもよくわかってないらしい。

「しよーがないしこのままいくしかないさ」

「いきなり撃たれたりしませんかね」

「あー、慎重にいこっか」

ペテルブルグまであと少しといったところまで来た所で西沢が気づいた。

「なあ、あれ……」

「対空砲が、上がってる…!!」

ペテルブルグの南側から東側にかけての方面で対空砲火が上がっているのが見えた。高射砲弾が時限信管で弾ける黒煙や曳光弾の帯が伸びては空中で消える。よく耳を澄ませば大口径の野砲特有の響きも聞こえる。さらに南側では航空隊に寄る空戦も行われているらしく、それは東側も同じらしい。

「何が!？」

「敵が来てるってことでしょ！石狩はこれもって先に降りな！私は飛んでる奴だけでも切ってくる！」

そう言つて西沢は例のストライカーをひかりに押し付けると、東側の航空戦に参加しに行つた。

ストライカー自体が不調なこともあつてひかりは素直に指示に従い、ペテロパブロフスク要塞へ戻つた。

調子の悪いストライカーでふらつきながら滑走路へと強引に降り立ち、そのまま格納庫の中へ飛び込むと中では整備員たちが慌ただしく走り回つていた。

「使えるストライカーは何かありますか！」

「雁淵軍曹?！」

声を張り上げるひかりを見た整備兵が叫ぶ。格納庫内の整備兵たちの眼が一斉にひかりを向き、その顔に喜色の笑みが浮かぶ。が、すぐにどこかの整備班長に怒鳴られて仕事に戻つた。

「軍曹!」

周囲の整備班から代表してひかりに話しかけていたのは扶桑から来た整備班の班長で特務大尉の人だつた。

502の整備班は扶桑・カールスラント・オラーシヤの3カ国から来ている。そのうちカールスラントは自国のウィツチに加えてニパのを、オラーシヤの整備班はジョゼのストライカーを見ていて、規模もそれに応じた人数となつている。

「フレイヤ作戦に参加しに行つたんじゃないのか?！」

「道中でネウロイと遭遇して、や!それどころじゃない!戦況は?何が起きてるです?！」

そう問われた大尉も何から話せば良いか判らないようで、口をつぐむ。その間に周囲にいた整備班に使えるストライカーが無いかと武器を二挺持つてくるよう伝える。ストライカーについての返答は、紫電改は使える物が無いそうで管野とひかりの予備機はひかりが一晚を過ごす予定だった廃屋に運び込んでしまったらしい。ニパと伯爵の分も運び込んでしまったそうで、予備機を使わない下原の分は半ば梱包されたままですぐには使えないらしい。

ひかりは下原が以前使つていた零式を借りることにし、すぐにいじれる範囲でセッティングを変えさせる。

そこまで行ってようやく大尉が口を開く。

「我々ペテルブルグの者も現状を把握できているとは言いがたい……。確実なのはネウロイの攻撃を受けていることと、最初南側だけだったのが東側にも戦線が拡がりつつあるということだけだ。何処の部隊が交戦しているかとかまでは判らない」

「そんな、連絡はつかないのですか？」

「信じがたい事だが、電波が妨害されているらしい……。そのせいで前線との通信はおろか、電探や航空機の管制もままならないらしい」

「軍曹！零式、準備出来ました！九九式もとりあえず20mmを二挺用意しましたが何故2挺も？」

「途中でウィッチと遭遇してね、西沢さんって1度ここに寄っているはずなんだけど今一人で防空戦に参加してて。ああ、そこにある予備の通信機とって！このまま出ます！発進促進装置の前開けて！」

矢次早にかけられるひかりの声に慌てて掃ける整備士達。ゲートが半ばまで開かれた段階で、ひかりは待ちきれずに発進。零式の翼面加重からくる上昇力を活かして滑走路の半分までも行かずに滑走から上昇にきりかえる。

ひとまずは西沢との合流を目指して東側へ飛ぶ。

東の空には西沢どころかネウロイすらも見えず、戦いは陸上でのみ行われていた。マジで一人で制圧したのか……？と戦きつつペテルブルグの外周に沿って飛ぶ。さっきの東側もそうだが、どうやら1度持ち直した後らしく所々崩壊した塹壕からオラーシヤの陸軍が射撃しているのが見える。また、地上攻撃機もちらほら空に見えるあたり、西沢は本当に制圧してから南の方へと移ったらしい。

南へ向けて飛ぶと、地上で戦っている者たちの中に見覚えのある制服を見つける。

空色に染め上げられたそれをまとう者たちは足に陸戦型のストライカーを嵌めており、ひかりはそれがスオムス軍の陸戦ウィッチ、502に派遣されているユニット回収班であると悟る。咄嗟に無線の周波数を回収班との物に合わせてコールする。

《んん？誰だ？航空ウィッチとの回線だぞ》

「502、雁淵軍曹です！」

《おおー、新人。こうして話すのはサトウルヌス以来か？いや、回収の時にはよく話すからそうでも無いか》

通信に出たのは回収部隊の隊長。ひかりはブレイクウィッチーズとよく飛ぶこともあつて無線でのやりとりは何回かしたことがある。サトウルヌス祭の時にも話していた。

「ユーティライネン大尉、扶桑の航空ウィッチを見てませんか？」

《ああ、扶桑かは知らんが航空ウィッチを見たとかいう報告は聞いたな。てつきり飲み過ぎた奴がのたまつたんだろうと思つてたんだが本当だったのか》

無線からほらー、だから言つたじゃないすかー！などという野次も聞こえてきたが大尉が黙らせていた。

《ああと、今のが見たつて言つてたのだ。そいつから聞きな》

《よ、軍曹！刀持つてマフラーしてた奴だろ？それなら24番砲陣地の先で飛んでんじゃ無いか。森があつてこつからじゃよく見えなくつてさ》

「それです！ありがとうございます！」

《良いつて事よ。それよか私らの頭の上頼むよー？》

「だーいじょうぶです！まーかせて！」

そう返事をしたひかりはすぐに進路を変える。

ひかりが西沢を見つけた時には彼女は10を超えるネウロイの中にいた。周囲にはオラーシャの戦闘機も見えるが、そうこうしている間にも黒煙を吐いて落ちていく機体がある。

そんな状況でも西沢は口元に笑みを携えながら周囲のネウロイを切つては捨てていた。あれなら大丈夫だろうと判断したひかりは西沢から少し離れたところを飛んでいる小型に狙いをつけ撃つ。発砲した時の音でひかりに気づいたらしく西沢が距離を詰める。

「おおー、今井。戻つてきたか。結構結構」

「ですからひかりだつて……、やつそれより」

ひかりは背負っていた九九式を投げ渡し、制服のポケットに入れていた無線機を手渡す。

「いやー助かる。流石に小型にいちいち近づくのも大変でさ」

「そんなそぶり全然見せてなかった癖に……」

「あ、ばれた？わはは、まいつか！それよかいくぞ日巻、敵はたくさんいるぞ！」

また名前を間違えられたことにひかりが反応するよりも早く飛び出し、西沢は空戦の中に飛び込んでいく。

その日の空戦は6時間以上続き、燃料が尽きた方から基地に戻っては再出撃、を繰り返した。最後に二人が帰ってきた頃には日もとっぷり暮れ、辺りは真っ暗になっていた。滑走路の誘導灯の光を頼りに着陸する。格納庫へ戻れば整備士達からの喝采を浴びることになった。

「軍曹、飛曹長。よくやってくれた！」

特務大尉がそう言って水の入ったカップを二人に手渡す。二人並んでそれを飲み干しカップを返す。ユニットを発進促進装置に固定し降り立つとひかりのほうはふらつき膝をつく。対して西沢の方は余裕の表情で整備士と会話している。

二人の下にコートをまとった比較的年配の軍人が近づいてくる。

「両名ともご苦労だったな」

そう語りかけてきた彼の階級章は大佐だった。西沢が敬礼する横でひかりも何とか立ち上がり敬礼をする。苦笑した大佐が整備士に椅子を持ってこさせた。

二人が席に着いたのを見て大佐が話し始める。

「マルティン・プロホノウだ。ここの高射連隊を率いている。そして、今現在このペテルブルグに存在する全部隊の指揮もな」

全部隊、というところに驚いたひかり達が事情を聴くとなんともな事情であった。ペテルブルグの部隊は最前線の後方ということもあってフレイヤ作戦にいくらかの部隊が引き抜かれており、士官が減っていたこと。そしてペテルブルグ守備を担当するオラーシャ陸軍の将官級が今日の最初の襲撃で戦死していたこと。

「昔、ペテルブルグがまだネウロイの勢力圏にあったころにだ、解放したオラーシャの将軍が前線に自ら立って指揮したという戦場伝説があつてな。それに肖つたのだろう」

という理由で死亡。また、塹壕にいる前線の佐官級も固辞したため最終的にお鉢が回つてきたらしい。

「君たちはどうやら詳しい状況を聞いていないようだからな。さて、なにかから伝えるべきか……」

大佐が悩むそぶりを見せると代わりに西沢が口を開いた。

「包囲されてるんでしょう？上から見てたんですからわかりますって」

「むっ、そうか」

どうやら大佐が言いよどんでいたのはこのことらしかった。既にペテルブルグ北方側でもネウロイが確認され、ペテルブルグに駐留する方に近い部隊は完全に取り残された形になるらしい。これが春以降ならばフィンランド湾から脱出する手段もあつたのだが2月の凍り付いた海をペテルブルグに残された船で脱出するのは不可能とのこと。

そんな絶望的な状況にあることを伝えることをためらつたそうだ。

「まあ、アタシは前にもこんなことあつたから平気だけどさ罷は新米だろ？大丈夫か？」

「502じゃいろんなことがありました、だから今度もきつと何とかなると信じてますよ。あとひかりです。熊じゃ無いです」

二人の言葉を聞いた大佐は強いな、つとだけつぶやいて立ち上がった。

「現在502の大部分が出払っておりペテルブルグに残された航空ウィッチは君たち二人だけだ。何かと頼ることも増えるだろう。よろしく頼む」

「おっけーまかせて！」

「了解！」

格納庫で整備班とストライカーや装備についての相談をしている



と、ゲートから陸戦ウィッチが6人入ってくる。カールスラント製Ⅲ号戦闘脚を履いた彼女らは日中みかけたストライカー回収班だ。

「ん？よお新人、ひかりだったか？」

「ユーティライネン大尉！」

煤で汚れてはいるものの怪我をした者たちはいないようだがやがやと騒がしい。

「アウロラでいい。お前らも大変だったな」

「アウロラ大尉たちだって今帰りじゃないですか」

「ああ、市内の部隊を巡ってきたんだ。電話が使えなくなつて孤立しているところもあってな」

曰く、市内の部隊の再配置の伝達と電話線の敷設に倉庫の物資運び出しと便利に使われていたらしい。

「昔を思い出す一日だった。問題はこれが後どれだけ続くかわからないってことだ」

「回収班の方は大丈夫なんですか？」

「私らは元からスオムスで戦ってたんだ。言つたら？昔を思い出すって」

そう言うときアウロラはひかりから離れ、部隊の方へ行く。部隊の方では既に酒瓶をもって顔を赤くした者もいた。

「ま、長い戦いになるのは確かなんだ。ひかりも早いところ寝ちまいな」

そう言つて背を向けた彼女はまだ21でありながらひかりが今日に見たどの軍人よりも頼りがいのある大人のように見えた。

翌日、ひかりはサイレンで目を覚ました。薄暮の時間帯からネウロイが出たため空に上がったのだ。まだ完全には日が昇っていないというのにひかりも西沢も既に一度補給に戻らされる有様であり、ユニット回収班の面々も出撃したまま二人と顔を合わせていない。

南側の戦いに1度ある程度のケリがついたころ、地上部隊を經由して管制塔から次の目標についての指示が二人に下される。

「えっ？西ですか？」

《スオムス湾上空から接近する機影がおよそ10機。2機先行している模様です》

「急がなきゃまずいかもな。菱刈よ続けい」

「いい加減覚えてくれませんか!？」

ペテルブルグを襲う敵はこれまで南から来て、徐々に北へと浸透していった。結果包囲されたのだが西側から敵が来たのは初めてだった。氷に覆われた海上は人類にとってもネウロイにとっても危険だったからだ。

ペテルブルグからフィンランド湾に入っただけなのに、空に黒点がぼつりぼつりと見え始める。ところが、

「なーんか変な動きしてんね。あれ」

「もしかしなくても戦ってますかね。あれ」

ほとんど一つに重なり合った点を他の点が追っかけ回しさらには光線まで放っている始末。だが、避ける方には一発も当たっていない。

「おおー、すつご。何であれ避けれんの？後ろに目でもついてんのかな、あのウィッチ」

「やっぱりウィッチですよねあれ。しかも見覚えある動きなんですけど」

「え、なに。知り合い？」

ウィッチを追いかけまわす集団の内、一番手近にいた2機を二人が同時に墜とす。それによってできた包囲の穴に目ざとく気付いたウィッチが抜けてくる。ひかりと西沢は追われていたウィッチを先に行かせ、追ってくるネウロイを墜として回る。西沢が最後の1機を墜としたところでウィッチを見れば、片方に背負われて一つになっていた二人のウィッチ。

「こんなところでなにしてるんですかエイラさん」

「よー、ひかり。元気にしてたか？」

そこにいたのはサトウルヌス祭にスオムスから支援物資を届けに来て以来のエイラ、サーニヤの二人だった。

どちらも大荷物を背負っており、エイラの方に至っては自分が履いているものに加え両脇にストライカーらしきものを抱えている始末。サーニヤがエイラにしがみつき、予知の固有魔法でここまで来たのだろう。

「ペテルブルグが包囲されたって聞いて、居ても立つてもいられなくなっちゃって」

「んで、一晩で詰め込めるだけ詰め込んで夜間哨戒にかこつけて来たってわけだ！」

そう言つてエイラは指を立てるが脇に抱えているのもあつて大変そうだな。

「おー、無茶するねえ」

西沢が茶化すように言うのでエイラが答える。

「だってよー。502はフレイヤ作戦でいないんだろ？でも私らスオムス軍は戦略予備ってんで出られないし。それどころかフレイヤ作戦の司令部とも連絡が取れないとかでもうどこもてんやわんやデ」「フレイヤ作戦司令部の方も繋がらないんですか？」

ひかりが聞くと今度はサーニヤが答える。

「ええ。無線が通じないからって連絡機も出したらしいんだけど帰つてこないらしくて。そっちにはカウハバの507が向かうそうだから私たちはペテルブルグにつてエイラが」

「ま、ねーちゃんもいるし大丈夫かなとは思ってたんだけど航空ウィッチがいらないなと思ってサ。そういやなんでひかりはここにいるんだ？作戦は？」

その質問にひかりの肩が跳ねる。ひかり502残留作戦はあまり表に出せない。その上目の前の二人はスオムスに滞在してる身でカウハバともつながりがあるかもしれない。何より完全な部外者も横にいる。

「本当は参加の予定だったんですけど……」

「道中でピンチになってさー。墜ちかけたのをアタシが助けたのさ」

「そーいや誰だ？」

エイラが問いかけると、西沢はお決まりのポーズをとって口上を述べる。ひかりは話がそれてほっと一息。

「ふふん。人呼んでさすらいのウィッチ！西沢義子とはアタシのことさー。」

「さすらいのウィッチく？」

胡散臭いようなものを見るような目でエイラが見るが、対するサーニヤの方はその目を少し見開いている。

「もしかして、リバウの魔王？」

「そうともいうー！」

「ノリは軽いですけど本物ですよ？腕の良さはさつき見た通り」

「サーニヤ知ってるのか？」

初めて知りましと言わんばかりの態度にサーニヤが驚く。

「欧州の初戦で活躍した人よ？エイラ。わかりやすく言うなら坂本少佐の戦友の方でもう一人と併せてリバウの三羽鳥とも呼ばれた人なの」

「いやあー、アタシってば最強？みたいな？」

ホントかー？などと言って疑うエイラにどう説明したものかとひかりが頭を捻っていたところに無線が入る。また、別の戦線にネウロイが出たことにより迎撃するよう命令が来たのだ。

「んじゃー、私らは先にペテロパブロフスク要塞の方に降りてから行くから。じゃーなー」

「またね、ひかりちゃん」

そういつてスオムス組と扶桑組は別れ、それぞれの目的地へ向かう。

航空ウィッチが2組になったことから、ペテルブルグの制空権は局所的になら優勢を作れるようになり、地上攻撃機が使えるようになった事もあってペテルブルグの防衛線はなんとかギリギリのところまで維持できていた。

その日の夜、格納庫に戻ってきたひかりたちは同じく戻ってきていたユニット回収班と出会った。

「イツル！」

「ねーちゃん！」

姉妹の感動の再開。周囲で作業していた整備班も思わず一瞬手を止めてしまいが他の陸戦ウィッチは囃し立てる。二人はそれを意に介さない。

「なんでここにいる？」

「ねーちゃん達がいるところが襲われてるって聞いてさ。しかも航空ウィッチがいなくて話だったから」

「まったく、よくできた妹だよお前は」

そんな姉妹の会話を横目にひかりと西沢、サーニヤの三人は各国整備班の班長を集めた会議を行っていた。

議題はストライカーユニットについて。

ペテルブルグ脱出の目処は立たないまま、出撃を繰り返している現状。補給も見込めないまま、今のペースで出撃を続けた場合、いずれ何かしらの問題が生じる事だろう。状況の打開がいつになるか判らない為、今のうちから出来る対策をしておこうという会議だ。

話の主題は扶桑組から。基地に残されたストライカーのうち扶桑組が使えるのは西沢の零戦21型とひかりの紫電改。そこに下原の使っていた21型と孝美の予備機の紫電改。そして扶桑からひかりが持ち込んだまま忘れ去られていた零式練戦が一機。ひかりと管野の零式はムルマンスクで紫電改を受け取ったときに扶桑へ送り返されてしまった上、予備機は例の小屋に運び込まれてしまった。

「私が紫電改を、西沢さんが零式を使うのがいいんですかね？」

「我々整備班としては西沢飛曹長にも紫電改に乗ってもらいたいですかね」

「えー、アタシは零式がいいんですけど」

機種の転換自体はそう難しいことでは無い。現場判断でストライカーを乗り換えるウィッチもいるし、その中には他国のストライカーに乗り換えた者もいる。しかし、長く同じストライカーで戦ってきたものの中にはそれにこだわるものもまた多い。

「紫電改には余裕があるんですよ。使用者が4人もいるだけあつて

部品も豊富な上、梱包されていた下原少尉と雁淵中尉の予備機も出して来たんで、完品のユニットだけで3機もある」

整備班としては使うユニットはなるべく統一したいのだろう。

「しょーがないかあ。でもなあ、速いのは確かに魅力的なんだけど斬り合うってなるとやっぱり零戦なのよ。ピカリもそう思うでしょう？」

「そう…なんですかね？」

名前を間違えられることについてはもう諦めたひかり。言われたことについては特に実感は無かった。

「んん、自覚ないの？ほら、例の銀と黒にいいように振り回されてた時のこと思い出してみ？」

そう言われて思い返す。ひかりの脳裏に思い浮かんだのは必死に切ろうと動くこちらの内を常に飛ぶ忌々しい黒。

「あれってさ要するに零式とか九六式とかでやるような動きを紫電改でやろうとするもんだからうまくいかなくてふらふらだったわけだよ。全部そのせいって訳じゃ無いけどね？なんて言うかなー。機体にあつた動きじゃ無かつたんだ」

ひかりの剣術は2人の人物の動きが基になっている。映画から写しとった物と直接師事した物。前者は九七式を履いていて後者は現役時代は九五や九六式だ。

直系といえる一式や零式ならともかく紫電改はその性格が余りに違う。旧式機の機動性ありきの剣術そのままではちぐはぐなのだ。

「だからさ、ひかりも剣つかうなら零式のほうが良いんじゃない？少なくともあの太刀筋なら」

「……」

思っても無い指摘にひかりは口をつぐむ。

扶桑組の会話が途切れたところで話は他の2国の整備に移る。

「MIGもbf-109も、どちらもうちで使ってるユニットですから部品も整備も問題ないでしょう」

「ええ、ただ問題は…」

そう言つてカールスラント勢の整備班長が目を向けた先にあるの

は見慣れないユニット。ユーティライネン少尉が小脇に抱えて持ち込んだそれを。

「あー、リトヴァク中尉？」

「それは、エイラがあつた方が良さだろうって持ってきたもので……。その場にあつたのを持ってきたからってつきり24戦隊の機体だ……」

24戦隊はエイラの古巣。スオムスにいる間、エイラとサーニヤはそこでお世話になっていたのだ。

「スオムスの機体ってことは輸入品か？見た目は殆どbf-109だが？」

「ぱつと見そう思ったんだがよく見たら一部が木製なんだよ……。全体で見ればこれはメルスじゃあない」

カールスラント整備班長の結論にじゃあなんなんだこいつ……。という目が注がれる。わからない物はバラすに限ると分解してみれば。

「エンジンはカールスラント純正のDB605エンジンですね」

「なんかピカピカの機体に対して年季入ってんな……。中古か？」

「そもそもこれ旧式の、K型じゃなくてG型のエンジンじゃ……」

さらに訳のわからないことに。

ああでもないこうでもない話し合われていた。やがて、その輪の中にいつの間にか混ざっていたユーティライネン少尉の一言に視線が集中する。

「そういや、なんか国産で作った機体がどうかって話ラウラから聞いたナ」

スオムス⇨輸入品と考えていた整備班の間に微妙な空気が漂った。

「で？結局こいつはどうすんだ？」

「貴重なユニットに変わりは無いので……。予備機、ですか」

結論、正体の怪しいユニットも含め概ねのユニットや装備の纏めが出された。

燃料を抜きに部品交換のみで考えれば現状のストックで戦えるのは二ヶ月に満たない。二ヶ月後にはウィッチによるエアカバーには期待出来なくなる。

また、その事を伝えられた。ペテルブルグ防衛軍の臨時指揮官たちは別の見方もしていた。その頃には気温も上がりだしネウロイにとってより動きやすくなるだろうということ。

二ヶ月、それがペテルブルグに残された将兵達にとってのタイムリミットであると言ふことを。



1945/2/13~15 解放準備作戦のそのま  
た準備作戦

1945/02/13 ムルマンスク港 基地司令部

グリゴリ攻略を目的としたフレイヤ作戦が失敗に終わり、参加部隊はその多くがムルマンスク鉄道を伝って北方へと後退した。陸路を走る歩兵や機甲部隊はこれから数日をかけてムルマンスク港へと向かうことになる。

それに先行する、優先して退避を命じられた部隊。生き残った列車砲グスタフとそれを護衛する502部隊だ。複数の線路にまたがるグスタフは撤退するに当たって他の部隊の邪魔になると言うこともあり、まず最初に戦場を離脱した。追撃を警戒して502の殆どがその護衛についた。極一部、隊長であるラルとその副官としてロスマンだけが先行してムルマンスクへと向かっていた。

「此方になります」

「ああ、ご苦労」

ムルマンスク港の基地司令部。その内にある会議室の一室へとラル達は向かっていた。案内を担当した兵士がそのまま歩哨についたことを確認したラルはノックの後に室内へと入る。中には4人の少女がいた。

「502のラルだ。君たちが例の？」

「ハースオムス空軍飛行26戦隊です。私は当時分遣隊を率いるラウラ・オラヴィ・シヴォ中尉です」

入ってきたラルたちの姿を見て、椅子から立ち上がって敬礼する4人。所属を答えたのは薄いグレーの髪をした士官。空色の制服を着込んだ彼女らはスオムス空軍に所属するウィッチだ。フレイヤ作戦においては戦略予備として後方に控えていた。

しかし、前線が突然攻撃を受けたこと、そして他方面に通信が通じないことがわかったことで直接情報を伝える連絡員として出動した。

直接作戦地へと向かった連絡機が戻らなかったこともあって第二派にはウィッチが出されたのだ。以降、スオムス軍司令部との間における連絡のやりとりも彼女たちが行っている。

「いろいろと聞きたいことは多いが……、まずは戦況についてと、ペテルブルグについて聞きたい」

ラル達は彼女達に会いに来た。そのわけは、自分たちで直接情報を得るため。軍から回ってくるのを待つのでは果たしていつになるかわからない。その上、欲しい情報が省かれている可能性もある。なにより、こうしてより多くの情報を得てこそ最も最適な行動がとれるものだ。ラルは考えていた。

「はい。戦況についてですが……」

「そうか……。攻勢は広い範囲でか」

「ペテルブルグですが良くは無いですが最悪でも無いかと。前線の奥に取り残される形となってはいますが抵抗は続いているそうです」

「抵抗が？ 彼処の守備隊で対応できる規模とは思えないが……」

ラルの考えた通り、ペテルブルグの守備隊は数こそそれなりではあるが、直接の最前線よりは後ろだ。戦力こそあれど、航空ネウロイを相手取るとなれば厳しい以上のもがある。前線を飲み込んだ敵の群れに抵抗と言えただけの状況に持ち込めるとは、ラルは勿論ロスマも思っていないなかった。防空の要が502である以上、それが出払ってしまったては残るはオマケ程度の航空隊と高射砲部隊だ。航空ネウロイ相手では螻蛄の斧にも等しい。

「どうも航空ウィッチが守りについてはいるようです。これはバルトランドの偵察機が撮影した航空写真です」

そう言つてシヴォ中尉が取り出した何枚かの写真。戦闘中のペテルブルグに近づくわけにはいかなかったのかかなり距離をとって撮影されている。

白黒のそれには雲を引いて飛ぶ何かが写っている。別の写真にはそれが複数写っているものもある。よくよく見ればその中には種類があり、広い主翼が見える物や陰影に差があるのが航空機だろうとわかる。それとは別に、明らかに異質なシルエット。小さく、影で殆ど

塗りつぶされるような黒いシルエットは凹凸が少ないからだろう。注視してみれば人型が明確に判る瞬間の写された者やさらに詳しく判りそうな写真もある。

「なるほど。確かにウィッチだ」

「こっちの降下しているのは攻撃機でしょうか。と言うことはある程度制空権がとれているということでしょうか」

「極一時的なものだろうがな」

制空権がとれていなくては地上攻撃機は上げられない。爆弾や装甲を抱えて飛ぶ以上鈍重にならざるを得ない地上攻撃機は航空ネウロイに襲われれば無力だからだ。しかし、ペテルブルグにある戦闘機隊の規模ではこの規模のネウロイ相手では制空権をとる前に全滅だろう。ある程度ネウロイ相手に有利に立ち向かえるウィッチがいないくはこの写真のようにはならない。

「実は、スオムス空軍からもペテルブルグに向かったウィッチがいるそうでした。無断で飛び出した、と言うのが正しいようですが」

「ほう。素晴らしい戦闘精神だ、名前が知りたいな」

「またですか隊長……」

「ユーティライネン少尉と連れのリトヴァク中尉だそうです」

「なるほどな。ちつ、ミーナがキープしているから……」

「言っておきますけどもうブリタニアからの電話は取りませんからね?」

「甘いな。今のミーナはマーストリヒト・アーヘンだ。一応カールスラントだぞ?」

「それから、ペテルブルグのウィッチですが先の2人を含めて4人はいるそうです」

「そんなに?」

「スオムス軍の監視がそう言ってきたそうです。明らかに航空機では無い動きをするものが恐らく4機以上と」

それを聞いた二人が手元の写真に目を落とす。目を皿のようにして見ていたロスマンが何かに気づいてに口を開く。

「隊長、こっちの、この陰。腕にしては長いし角度がついて……。何

か持っています、両手、ソードでは？」

そう言われてラルがロスマンの手元をのぞき込む。指で指示された先に写る影は歪な大の字をしている。下ろされた両腕は確かにどちらも異様に長く細い。その上反っているようにも思えた。

「ひかりか？」

「だと思えます。扶桑でも二刀流は珍しいそうですから」

「…そうか。来たかいがあったな。孝美に良い報告ができる」

珍しく明確に口元を緩めるラル。ギョツとしたロスマンを見て引き締め直すと、シヴオ中尉達に向き直る。

「それで、反攻作戦については」

「そこまでは……、我々もまだ知らされてはいません」

「作戦となると軍令部の管轄か」

「我々は現場ですから、現場の情報は持つても上の決めることまではわかりません」

「そうだな。ありがとう。世話になったが、無理を言ったな。こんなもので良ければ持つて行ってくれ」

そう言っラルはポーチからリベリオン製のチョコレートバーを出し、シヴオ中尉に手渡す。

情報を運ぶのが仕事の彼女等が他の部隊にそれを流すのは本来任務外である上、軍紀違反であると言える。そこをどうにかしたのはラルだ。無線が使えない以上、使える手段が限られている中でどうかこの場をセッティングした。そして、情報を渡す側である彼女等だつて危ない橋を渡っているのだ。その事に対する対価を渡すのは当然だろう。

対価にとラルが出したりベリオン製のチョコレート。ウィッチ達にも大人達にも大人気の品。特に、スオムスやオラーシャの者たちに対してはかなり喜ばれる。何故なら彼らは自国の防衛についているからだ。当然、支給されるものは自国の製品が多いから。そんな彼女等にとって舶来品の品質の良い菓子等涎の的だ。多国籍部隊だからこそ安定して供給される502の強みでもある。

これがブリタニアに駐留するウィッチ隊や他国から海を渡って派

遣された部隊の場合、自国から送らせるよりもリベリオンが大量に送りつけた物資の中から調達した方が早く安い。ため食べなれておりそこまで喜ばれない。甘い物と言うだけで年頃の女の子にとっては、まして自由にものを手に入れられない軍属となれば貴重品なのだが。そう言う派遣部隊には逆にそれぞれの自国の物のほうが喜ばれる傾向にある。それだけ入手が難しいと言うことでもあるが。

「隊長、どうされますか？」

26 戦隊の四人が部屋を出て行った後、ロスマンが問うた。傍から聞けば言葉足らずではあるがラルには伝わった。ラルが、ひいては502が、今後どう動くかを問うているのだ。

「正直、出来ることこそあれど明確な方針はあまり選択肢が無いな」  
「ですね。それに、最終的な目標をどうするにしても上からの命令待ちであることに変わりはありません」

「だな」

軍属である以上、その行動には制限がかかる。502 独力で動くことなど出来ないのだ。出来ることも限られる。比較的独立性の高い統合戦闘航空団と言えど受け身になって命令を待たざるをえないこともある。

しばらく口を手を置いて考えていたラルだが、やがてそれを外し視線のみをロスマンに向けて話し出す。

「ならばいつそ、思いつくままに動いてみるのもありか」

「思いつくままに、ですか？」

「感情のままに行動することは人間として正しい生き方だぞ曹長」

「……そうですね。感情のままに行動してその被害は何時もこっちに押しつきますからね、隊長は」

「……」

ムルマンスク鉄道。

半島の付け根まで伸びる鉄道は戦前と違う点として各地の駅が整備され直し、ある程度の兵力が屯することが出来るようになってい

ことがあげられる。撤退中の502部隊も夜間は駅沿いに建てられた兵舎を転々とし利用している。

割り当てられた今日の部屋にて、やることも無い、さっさと寝てしまおうと考えていた管野。薄く硬いベッドへと身を投じる直前で扉を叩く音に動きを止められた。

「ちっ、誰だ」

「ボクだよ直ちゃん」

「ワタシもいるよ」

不機嫌を滲ませながら戸を開ける。戸を開けた向こうに立つのはクルピンスキーとニパの二人。互いにこの数日の行軍ですっかり草臥れた制服と油の固まった髪。航空ウイツチ故、地を這う兵隊より多少マシとはいえ汚れはつくし落とせない。

「ンの用だ。言つとくがふざけた内容だったらただじゃおかねえ」

「怖い怖い。まあ、用があるのはボク達じゃないんだけど」

「ああ？」

ガンを垂れ、低いうなり声を上げる管野をあしらうクルピンスキー。傍らに立つニパも予想で来ていた反応だと苦笑する。

「集合だよカンノ。隊長達が帰ってきたんだ」

「は？ムルマンに先行したんじゃないのか？」

当初の予定ではムルマンスクでの合流予定となっておりその間の指揮は戦闘隊長であるサーシャがとることになっていた。サーシャの指揮能力は確かだし、燃料を無駄にしてまでわざわざ戻ってくる必要は無い、と管野はそう思った。

「ワタシ達だってそう思ってたよ。でも戻ってきたんだ」

「まあ、集合をかけるってことは何か話があるって事なんだろうし行ってみようよ」

どのみち呼び出しなのだから行かないという選択は無い。持つものも無いと管野はそのまま戸を抜け、後ろ手に閉める。そのまま何も言わず歩き出せば二人もそれに続いた。

「来たか」

502の今日の宿舎として割り振られた建物は他のウィッチ隊とも共用で使っている。元々は宿として作られた建物で、集合をかけられた隊員達が集っているのも食堂として使われる空間の一角だ。

木から削り出された長テーブルには既に他の隊員が着いており、各々の手元には湯気を上げるカップ。とはいえ茶や珈琲などと言った洒落た物は無い。白湯だ。

「これで揃ったな」

場を仕切る、と言うか声を出しているのは上座に当たる、見る者によつてはお誕生日席とも言う席に着いたラルだけだ。他の者は目線を手元にやる者や無言で寄り添い合う者たち等様々だが声を上げる者はいない。

遅れて入ってくる形になった管野達も同じように声を出すことも無く席に着く。

「空気が暗いな」

「判つてて言わないでください。さあ、全員傾注！」

空気を読めていないのか壊しにかかったのか、ラルが茶化すもロスマンがそれを咎める。その声にノロノロと顔を上げた隊員達の顔には疲れと何かが浮かぶ。ロスマン達、と言うかラルを見る目つきは何処か厳しい。

「貴方達がそうなるのは判るから簡潔に行きましょうか。ちよつとした希望を持ってきたわ」

そう言つて手元のファイルを開く。取り出され、机の上へ滑らせるように投げ出されたのは数枚の写真。サーシャがそれに手を伸ばし覗き込めばそれは白黒の世界に写る何か。一目見ただけでは分かり難いこれも、完全記憶能力を持つサーシャには思い当たる光景がある。

「スオムス湾からペテルブルグを見た光景、でしょうか？もしやここ数日の？」

「ああ、つい数十時間前に撮られた物を入手してきた」

それを聞いて、他の者たちも反応する。サーシャに隣り合う者はその手元をのぞき込み、そうでないものは机の上に残された写真を手元

に寄せる。やはりそれも白黒のわかりにくい物だったがペテルブルグの光景と言われてみればわかる物もある。

「空戦ですか？」

航空ウィッチなだけあってやはり同じ結論に至るらしい。一般人や兵卒では大規模な空戦を見る機会も無い、空に幾本も筋が走っている写真など見せられても首を捻るだろう。

「ああ、ペテルブルグでほんの少し前に空戦が行われていた。で、この写真だ」

新たに懐から撮り出した写真を机に弾く。見ればその写真には赤で丸が書き込まれており、その中には一つの影。一目見ただけでは異様なシルエツトとしか言いようのないそれを見て反応する者がいる。

「ひかりだ！」「ひかり……！」

それを聞いて他の者たちも、顔を声を上げた者たちから写真へ戻す。

言われてから見てみれば長さの揃った影は手足の組み合わせに見える。太い方の陰の付け根に括れを見つければそれがストライカーと足の段差だと判る。腕から伸びる影は扶桑刀だろうとも。

「あつ、あー！ホントだひかりだ！」

「間違いない、よく見ればこっちの写真のこれもそうっぽくないかい？」

「ええ、この雲の引き方には覚えがあります」

食堂の空気は途端に明るくなり、隊員達の声が上がるようになる。疲れを感じさせ無い会話はさらに気力を回復させる。

「良かった……無事だったんだ」

「よかったですね孝美さん！……孝美さん？」

喜び合う中で、下原は孝美に声をかける。亡くしたと思った妹が生きていたのだ。作戦中断が伝えられたときの有り様は酷かった、死人のような顔つきで飛ぶ様子は見ていられなかった、きつと彼女も嬉しิดだろうと思つてのことだった。ところが声をかけた先の本人からは反応がない。

「すう、すう」



「寝てる……」

下原が顔を向けた先、片腕だけを机の上に出した姿勢の彼女は手に写真をつかんだまま首をかしげるようにして寝息を立てていた。その顔は険がとれ、穏やかな顔つきだった。

「安心したんだろうね」

「で、気が緩んでそのままぐっすりとってこと？」

「なら、ベッドに移してあげましょうか」

サーシャが立ち上がれば管野やニパも手助けを申し出る。クルピンスキーも勿論立ち上がったが、ロスマンのインターセプトが入った。

どうやら話に一段落がついたことで他の隊員達も眠気を感じだしたようでこの場は解散ということになった。そろそろと食堂を出て行き、最後にラルとロスマンの二人が残る。

「これが思いついた事ですか？」

「そうだ。ムルマンで待っても良かったのだがな、知らせてやりたかった」

そう言うとかップの白湯を一気に飲み干し机に置く。そうして立ち上がったラルはロスマンの方へ顔を向ける。

「エディータ。もう暫くつきあってくれ、そろそろ仕上げておきたい」

「仕上げて、って“発”完成の目処がついたんですか!？」

「なんとなく、だがな。後は数をこなせば何とかなる」

連れだって食堂を出る二人。その足先は他の隊員達とは違い自分達の部屋では無く、外へと続く扉へと向かっていた。

1945年2月15日　ムルマンスク港　司令部

グスタフを護衛してムルマンスクに着いたのは2月も15日となつてからであり、作戦から4日が経過していた。

到着した502部隊の各員は基地の誘導に従い臨時滑走路へと降りた。格納庫代わりの資材倉庫ではどの部隊から来たのかもわからない整備士達が待機しており、ストライカーを預けると言ってくる。それと同時にその場で軍部からの呼び出しを受ける。《502部隊は至急司令部へ出頭せよ》と。

出頭、と言つても呼び出された先は基地指令の執務室でも無ければ軍事裁判所でも無い、ごく普通の会議室。入口の脇には第3会議室とオラーシヤ語で書かれた木板が打ち付けられ、左右には小銃を持ったオラーシヤ兵が歩哨についていた。502の隊員たちはラルを先頭にそのドアをくぐる。大きな長机が縦に2つ並ぶその会議室。そのうちの片方の机には、既に複数の人間が席についていた。

「ラルお姉様ッ！」

部屋に入った瞬間、椅子を蹴り飛ばさん勢いで立ち上がった少女がいた。そのまま駆けだそうとしたところを左右にいた別の少女達によつて止められるが羽交い絞めにされてなお暴れている。

管野は見た。先頭で入ったラルが足を止めた瞬間の表情を、遠い目を。隊長にもやつぱり苦手な奴っているんだなあ、と管野は思った。

それと同時にこいつは苦手になるのも当然な相手か……とも。というのも管野にもその少女に見覚えがあった。

迫水ハルカ。扶桑海軍中尉であるが、悪い意味でスオムスでは有名な人物。39年という戦争の初期も初期からいるベテランだが腕前以上に女好きとして有名。節操なく声をかけては手を出そうとすることでも知られ、所属基地のカウハバは魔境だの背徳の地などと呼ばれるようになってしまった。

「わあ、ハルカちゃん。つてことは……」

「お久しぶりです。ヴァルトルートさん」

「やあヴェスナ。元気してた？」

「はい。そちらもお変わりないようで」

続いて部屋に入ったクルピンスキーも暴れるその少女をみて、その名前を口にする。そのまま目を横に滑らせると思っていた通り、クル

ピンスキーにとって見知った顔もそこにいた。

部屋にいたのはスオムス空軍義勇独立飛行中隊の面々。去年の4月に作戦を共にしたウィッチ達だ。ヴェスナはオストマルクのウィッチだが後にカールスラント空軍JG52にてロスマンの教導を受けたら、クルピンスキーの毒牙にかかったりした子だ。

「どうも、ラル隊長」

「ああ、ウィンド少佐。昇進と507への改編おめでとう」

「ありがとうございます」

ラルに声をかけたのはニパとおそろいのセーターを着たウィッチ。スオムス義勇独立飛行中隊、今の第507統合戦闘航空団の隊長、ハンナ・ウィンド少佐だ。

4月の戦いの後、公にはされていない戦果が元ではあるが義勇独立飛行中隊は7番目の統合戦闘航空団となっていた。ただし、改編は作戦終了から暫く立ってのことであったため、改編後に顔を合わせたのは是が初であった。ウィンド少佐は507への隊長就任に伴ってふさわしい階級をということで大尉から少佐へと昇進した。

「スオムス防衛の507がここにいるということとは」

「ええ、領地奪還のために我々も攻勢に参加するということですよ。ここはそのための作戦について聞かされる場所ですよ」

502がカールスラント奪還を主任務とする攻勢部隊とすれば507はスオムス、ひいては北欧を防衛することを目的に編成された部隊。そのため、作戦によっては基地を大きく移動することもある502と対照的に507は基本基地を動かない。それが、44年4月の作戦のように再び合同で作戦を行うということは、またそれだけの大規模な防衛、領土奪還が行われるということだ。

詳しくは担当の軍人からと言うウィンド少佐の言葉に作戦に関する話はそこで打ち切られる。隊員ごとにそれぞれのグループへと自然に分かれ、話に花を咲かせる。原隊が同じで仲の良いニパはウィンドと。クルピンスキーとロスマンはヴェスナと。また、ラルもそこに

入っていった。そのまま迫水もトレイン。迫水中尉に付き纏われ、逃げようがない、加えて一対一では分が悪いと判断しての事だった。面倒な物まで持ってこられたと思うヴェスナのラルに対する視線がキツくなる。

「ああ、そういやあんなんだったなそつちの戦闘隊長……。忘れたまま思い出したくなかった」

「ええ、相も変わらず節操なく声をかけてますよ。最近はもう自室とかでは無く持ち込めそうなら何処でもやる勢いです」

「どさくさに紛れて後ろから案がかなり真剣に話し合われるぐらいには問題になってるよ」

管野と一緒にいるのは下原にジョゼ。507からは同じアジア圏から来ているシャムロ王国人のプロイ曹長とリベリオン軍所属のアフリカ系リベリオン人であるリー・アンドレア・アーチャー中尉。そして、

「もしかして新人さんですか？」

「扶桑海軍、三隅美也軍曹です！」

佐世保海軍兵学校でひかりと欧州行きを争った相手。三隅美也が新たに507に加わっていた。当然、昨年の作戦に参加していないため502との面識は無い。孝美を除いて。

「三隅さん、元気そうね」

「お久しぶりです、雁淵中尉！」

10月に撃墜された孝美は扶桑に送り返された後、舞鶴で目が覚めました。その後、佐世保を経由して欧州までの道中を三隅と共にしていた。北郷校長の手配でちよつとした指南をして以降の付き合いだ。

「本来ならもつと早くに補充が来るって聞いてたんだけどねー」

「余り表だつては言われなかったがそつちに持って行かれたとか聞きましたよ」

「ああ、ひかりさんは元々カウハバに着任予定でしたっけ……」

「どうせ隊長が書類上は誤魔化したんだろ。書類上は」

元々507への補充要員として、佐世保の航空学校では欧州行の志願者の募集が行われた。カウハバは実際かなりの僻地と言え、前線に

はスオムスの首都ヘルシンキの方が近いくらいだ。507の元になつた義勇独立飛行中隊はある事情から左遷されてそのような場所にいたため、学徒兵であつても問題ない任地と判断されたという経緯がある。ところが、その学徒兵がカウハバに着任していないとなつた。扶桑海軍の人事にどのような形で話を通つたのかは不明だが、カウハバには改めて別の学徒兵として三隅美也が送られる運びとなつたのだ。

「あの、そのひかりさんは何処に？」

「あー……、その、だな」

管野が思わず口を濁していると、それを見かねたのかジョゼが口を開く。下原はともかく孝美が口を開かなかつたのはなぜだろうか。

「ひかりちゃんは今ペテルブルグに取り残されて……」

「ペ、ペテルブルグって今包围されてるって」

取り残されていると聞いて顔色を変える三隅。彼女達も今の前線がどのあたりにあるかは知っている。当然502の拠点であるペテルブルグの位置も、それが既に敵の前線に飲み込まれて敵陣のただ中にあるということも。

「いや、いや！無事らしいのは確認してるから！おいジョゼ！もうちよつと、こう、なんかだなあ！」

「でも、他に言い様もないし」

「だがよお、見ろって顔真つ青だぞ！」

「あの、巻き添え食らつた孝美さんの顔色も……」

「だ、大丈夫。そうよね？ひかりが強いのは知っているもの。だから、だい、大じよ、うう！」

数日前の宿でひかりの写された写真を確認して以降、孝美の精神は持ち直していた。が、時折不安に襲われては呻くようになり、その時その時で近くにいた隊員がフォローするようになっていた。

呻く孝美の制服の内側にはひかりが写された白黒写真が入れられており、そこに手を当てている。その際でうっかり他の目があるところで呻いたせいであらぬ噂がたっている事に孝美は気づいていない。

「収集つかなくなってきたやつた」

「口にはしなかったがミヤもその、ヒカリ？だったか？に会えることを期待していたようだったからな」

にわかに騒がしくなる場。なんだなんだと他の隊員達もよつてくる中で、プロイとリーは自分達ではこの場を取めることは出来ないだろうなと考えた。二人は誰かが空気を変えてくれることを待つことにアイコンタクトで合意し、それまでは三隅のフォローをしておくことにした。

喧噪が止んだのは、部屋の入口の方から咳払いが聞こえてから。即座に気づいた両部隊の隊長が敬礼するのに一拍遅れて他の隊員たちも敬礼をする。咳払いをしたのはカールスラントの大佐。その後ろから会議室へ入ってきたのはスオムス軍のマンネルハイム元帥。フレイヤ作戦においても参謀として参加していた人物だ。

ブリーフィングを始める、という大佐の声に全員が席に着く。部屋の明かりが消され、部屋の前に張られたスクリーンに半島の戦線の様子が投射される。

「現在の北部方面の状況は皆も聞いていることだと思う。前線を突破され、そのまま攻め込まれた。現在はその後方、以前の前線として用いられていたラインを再利用する形で何とか防衛線を張りなおした」

投影される地図には半島の付け根を半ばから断ち切るかのように伸びる線。前線を指し示すそれはスオムス湾から白海までを途中の湖や沼を結びつけるようにして伸びている。

「現在の前線は一度落ち着いたと言ってよかろう。敵の勢力が最も多いのはこの、カレリヤ地峡のVT線を攻める一軍だ。現在ここは戦略予備となっていたスオムス軍を中心とする軍でもって防衛が行われている」

「また、我々には別の問題もある。先のフレイヤ作戦にて奮闘むなしく見逃すこととなった“グリゴリー”のことだ」

写真が切り替わり、グリゴリーが映し出される。それを見たウィッチ達もそれぞれの反応を返すが総じて悔しそうだ。

「作戦終盤の観測通り、”グリゴリー”の進路はペテルブルグに向いているものとされる。到着にはまだあと数週間はかかるだろうとの見方だ」

「グリゴリーを放置することはできない。もしこのままペテルブルグにグリゴリーが到着することとなれば、そう遠くないうちに人類はこの半島からたたき出されることとなるだろう」

ペテルブルグ、そしてそれが存在するカレリヤ地峡は人類軍にとつての重要拠点。なぜならば工業地帯だからだ。戦前からオラーシヤ・スオムス両方にとつての要地であり、その生産力は北方を支える一因でもあった。特に貴重な造船能力のあることがあげられる。ペテルブルグからはスオムス湾をはさんでそう離れていないスオムスの首都ヘルシンキでは既に疎開が始まり、政府機能も移転の用意が始まったという。

「連合軍の最終目標は”グリゴリー”の撃破と戦線を以前の大陸側まで押し戻すことにある。が、しかしだ……」

そこまで言った大佐が言葉を濁す。無理もないことだろう。戦線を押戻すまではこれまでのネウロイ大戦の中で幾度もあった事だ。しかし、”グリゴリー”の、ネウロイの巢の撃破というのはほとんど前例がない。その前例もインチキじみたものであり、まっとうな方法で挑んだフレイヤ作戦の失敗は記憶に新しい。人類がかき集めた戦力はその多くが蹴散らされ、あげく替えの利かない超兵器はその片方を完全に喪失。もう一両も砲身交換と整備には時間がかかる。どのみち、フレイヤ作戦と同じ手は使えなくなってしまった。もはや打てる手は無い。

口をつぐむ大佐に代わってマンネル兵務元帥が口を開く。

「はつきりと言えば、今の人類にグリゴリーがペテルブルグへ行くことを阻止することは不可能だろう。今、我々に残された手札はあまりに少ない。これ以上は援軍を待つほかない。君たちにはそれまでの間、この半島の維持をやってもらいたい」

「発言、よろしいでしょうか」

マンネルヘイム元帥の言葉が切れたところを見計らってか今度は

ラルが口を開く。

「現在ペテルブルグに残された部隊に関してはどのようにするおつもりでしょうか」

「無論、見捨てたりはせん。君たちにはまずそれに従事してもらおうつもりだとも」

再度、写真が切り替わる。写されたのはラドガ湖を中心とした周辺地図。元帥が手に持った棒で指示したのはラドガ湖の東側、東カレリアと呼ばれる一帯。オネガ湖との間に防衛線を示すラインが引かれている。

「今の時期、ペテルブルグへとアクセスするのにスオムス湾側からでは危険だと軍令部は判断した。よって、その反対側。凍り付いたラドガ湖を脱出路として確保するという作戦が持ち上がった」

ラドガ湖の一部を意図的に破壊し陸上型に対する防御として用い、空戦ウィッチを主体に護衛しようという作戦。しかし、凍っているとはいえその厚さは一定ではなく、人類軍にとっても危険な道のりとなる。しかし、南は敵側、北にも敵の前線、西は使えない状況では唯一の活路でもある。

「諸君らにはこれより、東カレリアはペトロザヴォーツクへと向かってもらいそこで、戦線の押上、ひいては脱出作戦へと参加してもらおう。以上！」

「総員、マンネルハイム元帥に敬礼！」



## 2つの統合戦闘航空団

ブリーフィングが終わり、大佐達が退出した。部屋に残されたウィッチ達はそのまま会議へと移っていく。それぞれの部隊で運用する資材や支援人員、機材等の資料を互いに突き合わせ、額がつくような距離で話すのだ。

同じ戦線を共にする者同士、協力できる部分が多い。戦場に絶対はない、お互いの戦場を幾分かでもマシにするためにできる事は何でもやる。戦場においては自然とみられる光景だ。話し合いの中では書類操作やら裏取引を得手とするラルとスオムス軍からの絶大な信頼を得るウィンド少佐はかなり突き詰めたところまで話し合っていた。指揮官として、自分の部隊が前線へと赴く前に出来る細工はしておくというものだ。

そういった話をするのは部隊でも上位の者たち。502からは隊長であるラルに戦闘隊長のサーシャ。加えて、秘書のような立場でもあるロスマンが。507からは同じく隊長であるウィンド少佐と戦闘隊長の迫水中尉。また、それ以外の隊員達も自分達で出来ることを話し合っていた。

どこそこの部隊の物資をちよろまかす。基地の人間の権限で供出させられる物は何かあるか、対価に出せる物はあるかなどだ。

それ以外の隊員たちも集まって会話する。物資の調達は何も上の人間に限られた手段ではない。現場に近い彼女たちだからこそ手に入る物もある。

こういったことは502のウィッチ達にとっては慣れたもの。ちよろまかしから後ろ暗い闇取引まで常に物資に困窮している彼女たちは物資を手に入れられる機会に対する嗅覚が優れている。とはいつてもそんな手段に慣れているのは502の中でも”物資を困窮させる側”の3人くらいで下原やジョゼはそうでもない。なお、ひかりは困窮”させる側”である。

「武器はまだいいとしてもストライカーがまずいかも」

「P-51も隼も507でしか使っていないだろうからな。最悪現地で機種転換訓練をやるしかあるまい」

「マジの最悪は転換するユニットもなくなって地上砲台だな」

「陸戦ストライカーもちよろまかしておく？」

隊長達ほど真面目に話し合われているわけでは無かったその中で、ちよつとした話題が出た。

「んー、でも前線に行くんならその前に旅の埃は落としておきたいよね」

「シャワー位なら借りられないかな……」

プロイの発言に乗ったのはジョゼ。掃除が好きな彼女としても汚れは落としておきたい。下手をすればシャワーを浴びるチャンスなどここを発てばもうないかもしれないと思っていたからだ。

この後、部隊が進出する先は民間人のいなくなって久しい街。せいぜい軍人が駐留する程度、シャワーがろくに使えないだろう事は想像に難くない。ジョゼも元はアフリカで戦った歴戦といえるほどのウィッチ。しかし、他の隊員達のように雪でグズグズの塹壕の中で丸まって寝た経験、まして月単位でお湯で拭う事も無いような生活の経験は無い。落とせる垢は落とせるうちに落としておきたいと思うのも当然だろう。

「風呂入りてえ……」

「あれは？ドラム缶ブロって奴。前にカンノが作ってくれたじゃん」

「ここなら探せばドラム缶くらいあるかもな……」

風呂好きな扶桑人の管野もぼやく。よその統合戦闘航空団では風呂があるところもあるのだがペテルブルグにはない。そういったものがあるのは都市やほかの基地が近くにあるようなところばかりだ。作りたくても基地の移動が前提の攻勢的戦闘航空団の502ではできない。

昔、整備班から手に入れたドラム缶で風呂を作ったことがある管野だが、多大な労力がかかった割にすぐに使えなくしてしまったこともありそれ以降新しく作ったことは無い。精々他の隊員たちと同じよ

うにサウナで汗を流すぐらいだ。

「菅野さんいつの間になんか！」

「言つとくが下原がうちにくる前のことだからな。省いたわけじゃねえ。ドラム缶もネヴァ川の底だ」

ペテルブルグに来て一年以上が経つ下原もドラム缶風呂という単語に反応するが、菅野の言葉を聞いておとなしくなる。ちなみに孝美はまだ欧州に戻ってきて一ヶ月経っていない上、欧州初期の戦いでリバウの地獄と撤退戦を経験しているためまだそこまでの反応はない。

「扶桑の軍艦は風呂がついているとかいう話を聞いたことがあるが」

「ああ、遠くまで出るのが軍艦だからな。扶桑人としちや週一でも入れるつてだけで土気も上がるつてもんだ」

リーの疑問に菅野が答える。

浴槽のついた軍艦など扶桑海軍所属ぐらいだろう。しかし、如何に軍艦と言えどもそんな大量の真水は使えない。入れるのは週に数回。それも引き込んだ海水を温めたものに浸かるというもの。当然そのままではベタ付くため真水で洗い流すのだが、引換券と交換で洗面器に3杯のみといった具合だ。

「ん？いや、そうでは無く、借りられないのか？扶桑の艦隊も来ているのだろうか？」

「そういえばフレイヤ作戦には三航戦が来てたはずですね。来るまでお世話になったわ」

「ていうか入港してなかった？あのでっかいの空母でしょ？」

「「本当か!?!(ですか?!)」」

フレイヤ作戦の失敗後、参加していた各国艦艇は北上し、ムルマンの沖合に停泊していた。そのうち、旗艦となった艦を含め何隻かは港へと艦を近づけている。埠頭には輸送船が優先されるため、沖合に停泊した軍艦と内火艇等が陸地と往き来している。ムルマンスクにも小規模ながら町はある。いかな船乗りとはいってもいつまでも軍艦の中では気がめいつてしまう。時には上陸も必要である。

「菅野さん！私、貸してもらえないか交渉してきます！」

「隊長達は何とかしてみる！シャワーを浴びたいのはあの人達も同じだろ！」

下原が駆け出し、部屋を出て行く。その背に管野は声をかけた。普段、行動をよく共にするジョゼも置いて駆け出すその姿にいつもの下原の姿を知る者たちが驚く。

「おおー、あんなにはしゃいでる下原ちゃんを見たのは……、いや可愛い物を見たときは大体似たような物かも」

「でも、ジョゼさんも置いてくなんて中々無いよ」

「べ、別に何時も一緒にいるわけじゃ無いから」

「隊長！ちよつといいか！」

ほかの隊員たちをしり目に管野がラルに声をかける。ラルたちも会議の最中だったが中断して管野に目を向ける。会議を中断させてしまった上、頭の上がない相手が一齐に目線を向けてきたことに管野がたじろぐ。

「どうした管野。お前がこういう話に混ざりたがるとは思ってもみなかったが」

「あー、そういう会議するような話じゃないんだ。扶桑の艦隊がここに来てるんらしいんだが、風呂を借りてきていいか？」

「風呂？」

ラルが怪訝な顔をする。カールスラント軍人としてはなじみが無いものだからだろう。

「借りられる物なのかしら」

「お風呂！良いですね！」

そもその問題を上げるロスマン。それを遮るようにして声を上げたのは迫水中尉。目を輝かせ、開かれた口からはよだれが飛び散る。横にいたウィンドがそれを見て顔をしかめる。

「あんたもそう思うか迫水中尉、あー……」

「そりゃあもう！皆さんのあんなところやこんなところ！普段はガードの堅いウィンドさんやこんな機会でも無ければ見られないでしょうラルお姉様までいるのですから、これは是非とも皆さんで入るべきです！さあ！さあ！さあ！さあ！」

管野は、同意を得られるかと思い迫水中尉の名前を呼ぶ。が、その途中に相手がどのような人物かを思いだしてしまう。案の定その欲望にまみれたパッションを弾けさせたことに話を振ったことを少し後悔した。

「あー……、下原が交渉しに行ってるがどうなるかはまだわかんねえぞ」

「くっ！なら私もお話してきますー！」

管野がそう言うのと迫水がそう返し、部屋を出ていく。手に持っていた資料も投げ捨てていってしまったが、周囲の反応は特にならない。ウインド少佐がこっさり息を吐いたことから会議の最中も欲望に忠実だったのだろうか。

「あー、それで？どうだ隊長」

「了承がとれたのなら行って構わん。私も行く。私も汚れは落としたいのでな、噂の扶桑の風呂文化を試すのも良いだろう」

「なら下原と迫水中尉の結果待ちか」

一時間もしない頃、使わせてもらえることになりました！という声と共に下原が帰ってきた。いつまでも会議室を占拠しているわけにはいかず、会議室からは既に出た後。隊員たちは司令部の建物の外で待っていた。507も建物を出るところまでは一緒にいたのだが、彼女らは迫水中尉を待つこと無く移動していった。人望のなさが伝わってくるかのようだと言ったと管野は思った。

下原が交渉してきたのは三航戦に所属する空母雲龍。基地内に扶桑海軍の出張所ができていたらしく、そこからつなぎをとってもらったらしい。

今日最後の往来船がもうすぐ出てしまいうらしく、下原が隊員たちを急かしてくる。作戦からこっち手に持つ物も殆ど無い身の502の隊員達はそのまま内火艇の待つ埠頭へと向かって歩き出した。

下原の案内でたどり着いた埠頭に繋がれていたのは扶桑海軍の十七米内火艇。明治設計の古い船だがその堅実な作りから今なお使われ続けている。主に士官が使用する艇で1度に100人近くを運ぶことが出来る。

側面まで来たところで内火艇から出てきた士官が声をかけてくる。

「雲龍まで行くウィッチの方々ですか？」

「はい！お世話になります」

「そうですね、もうすぐに出ますので乗ってしまったら渡し板を引き込みますんですぐに船内へどうぞー！」

最後に渡ったサーシャが船内へと入ったところで扶桑海軍の水平たちが木製の渡し板を引き上げる。ニパが渡る瞬間だけ渡し板が音を上げるといったアクシデントもあつたが無事に乗り越え、出航の用意が始まる。数人の水平が甲板を走り回っており発進に備えたチエックと用意が行われている。

「待った待った待ったー！」

用意が終わり、埠頭へと繋がれた舳いが解かれ内火艇が埠頭を離れ出したその瞬間、埠頭に並び立つ倉庫群の間から飛び出してきた人影が内火艇に向かって声をかけてくる。それに続くようにして倉庫の陰から連なるようにして人が出てくる。

「あれ、507の子たちじゃない？」

船内から窓を通して外を見ていたクルピンスキーの声に他の隊員たちも顔を向ける。

そうこうしている間にも507のウィッチ達はみるみる近づいてくる。全員、何かしら獣の要素が見受けられることから、魔力まで使って本気で走り寄ってきていることが分かる。

しかし、内火艇を操舵している人間は気づいていないようで内火艇は速度をつけ始め、その舳先も徐々に沖合へと向けられている。

「飛び乗れ！」

「とあー！」

ヴェスナの掛け声に先頭から順に大地をけって跳ぶ。常人ならば届かないような距離を超えてウィッチ達が内火艇へと転がり込んでくる。飛び移った者から後続の邪魔にならないようにと船の前側へと身を寄せるがたどり着くと同時に崩れ落ちる。

「ゼエ、ゼエ」

「ま、間に合った……」

「こいつはどういう事だお前ら」

「そうですよ。それに、迫水中尉の姿もないようですが……」

最後にウインドが着地ならぬ着船したあたりからなんだと扶桑海軍の軍人たちも出てくるが、甲板で息を荒げてへたり込むウイツチの集団を見て誰もがギョツとする。異国人ということもあり、彼らでは声をかけにくいだろうと502の中から管野とロスマンが声をかける。

「まさに、その迫水中尉のせいです……」

いち早く息を整えたリーが答える。曰く、迫水も他の軍艦の士官と話をつけたらしい。その時点になって隊員たちは危機感を覚えたのだそうだ。というのも迫水が戻ってくるまでに三隅から扶桑海軍艦艇の風呂がどういう物かの説明を聞いていたのだそうだ。イモ洗いとも称されるような環境の風呂、それを迫水が取り付けてきたとなれば何をしてくるかかわからないと判断。自分が被害にあうのも嫌だし新人を毒牙に掛けられるのをみすみす見ているわけにはいけないとヴェスナが三隅を連れてその場を逃亡。遅れてそのことに気づいた他の隊員たちも後に続いたのだそうだ。

「で、基地に残っていたら逃げられないかもって話になって」

「なら、他の軍艦のお世話になろうって話になったんだ。そしたらこのウンリュウ？の内火艇がもう出るって聞いてさ」

「それで追いかけてきたと」

リーの説明の最中に復活したほかの隊員たちも口々に自分たちの置かれた状況を告げ始める。三隅だけがまだ座り込んでおり、船内から持ってこられた水を受け取っている。

「じゃあ、迫水中尉は……」

「今頃ほかの軍艦の内火艇はまだ私たちを捜しているか」

十七米内火艇は既に陸からは大分離れ雲龍の方が近くなっていた。結局、このまま連れて行ってくれと頼み込まれたのと今更岸に戻ることも出来ないということもあって、507（―1名）は502と一緒に雲龍でお世話になる事になった。

雲龍への乗艦後、艦長への挨拶やら部屋の割り当てやらを終え、一同は艦内風呂へと案内された。運よく入浴日ではあった物の、本来ならば乗組員達が入る時間。その風呂の時間を強引に割って入り、本来の乗組員達に後へずらしてもらったの入浴となったがむしろ兵からは笑顔で譲られた。

風呂の後は、食事の用意ができていくということで士官食堂へと案内される。本来の食事の時間は既に過ぎていくのだが、特別に食事が用意された。

「うお！米に味噌汁、鉄火巻までありやがる！」

「こっちはイカ飯かしら？」

「イカのけんちん蒸しですね」

食堂に用意されていたのは扶桑食を中心ではあったが中には欧州でもなじみのある料理もあった。

欧州からの人員が大半を占める両航空団だが、扶桑勢からの勧めもあつて徐々に扶桑食にも手を付け始めた。502では普段から下原が扶桑食も作っているのだが、ペテルブルグでは用意できない食材も軍艦となれば貯蔵していることもあり、なじみのない食材・料理もあった。中には、気にせず食べ始める者たちもいたし、早々にお代わりを求めて食堂に声をかけに行つたものもいたのだが。

「すみません！お米と後他にも何か残つてるものありませんか？」

「ああ、白米ならすぐによそいます。おい！なにか残つてるか！」

「イカあります！あとすぐ出せるのは漬物くらいです」

「どつちもください！」

ジョゼが渡した茶碗には彼女自身のオーダーによつてこんもりと銀シヤリが盛られ、イカと漬物が乗った皿と共に渡された。

その間に主計科の士官と下原が料理に関して会話をしていた。

「よろしければレシピを交換しませんか？」

「へえ、欧州の食材でアレンジしてるのか。いいでしょう！」

片や本職の料理人、片や長く欧州で腕を振つた身と互いに利のある取引となつた。取引の後も料理という共通の話題がある二人はしば



らく話し込む。

「これ、重巡加古風つてことは元は重巡に乗つてらしたんですか？」  
「ああ、42年の8月にマルタ島で沈んじまつてな。扶桑に戻つてからはこの雲龍に配属されたんだが、どうにか名前を残してやりたくてな」

「いい話ですね」

「だろう？あんたもそれを誰かに伝えるつてときはこの名前のままで頼むぜ」

「あー、うまかった」

夕食を全て平らげた後、食堂では各々が思い思いの姿勢でくつろいでいた。

「これであとは寝るだけだな」

「ワタシ、こんな大きな軍艦で寝るの初めてだよ」

「思ったより揺れるね。寝れるかな」

管野達ブレイクウィッチーズは主計科の好意で出された緑茶を啜っていた。ペテルブルグでもお茶の類はたまに出ていたし、その中には緑茶が出ることもあったためクルピンスキーやニパも慣れていく。緑茶に限らず、お茶は普段の補給にも入っているが、下原が追加で取り寄せたものだったり、ひかりが隠し持っていたのを下原が徴発したものだったり、現地の植物から下原が自作したりと様々だった。そのため比較的余裕があり、かつ消費量を制限できたため、粗食に耐え忍んだ時期の数少ない娯楽でもあった。

「何を言っている。お前たちにはもう一働きしてもらおうぞ」

「「えっ」」

お茶を味わっていた管野達の溢すような発言を聞いたラルが一言告げる。

そのことに他の隊員たちも反応する。502も507もその多くがあとはもう寝るだけだと思っていたようで、皆驚いたような顔をする中でウィンドだけが変わらさずお茶を啜っていた。そのことに気づ

いた三隅が問う。

「何か知っているんですか隊長？」

「うん。今日はかなりお世話になったと思わない？なのに何の対価も出さないのはどうだろうかって話になってさ」

そういうとウィンドは部屋を用意してもらったこと、風呂の順番を譲ってもらったこと、食事を用意してもらったことなどを上げていく。もしこれが前線ならありえないほどの好待遇。比較的余裕のある後方、それも海軍の軍艦だからこそ受けられた好意だが、だからといって無償ではないのもまた事実。かといって着の身着のままの彼女たちには支払えるものはないしそもそも何なら釣り合うのかもよくわからない。

「で、ですが対価といっても我々に持ち合わせは」

「そこはラル少佐がうまくまとめてくれたね」

三隅の反応にウィンドが返す。その言葉に視線がラルに集まる。纏めてくれた、ということは話し合いがあったということ。ラルとウィンドは雲龍へ乗艦した際、他の隊員たちはそれぞれのまとめ役に任せて艦長や艦隊司令官の元への挨拶に行っていた。その時話し合われたのだろうと察しのいい隊員たちは気づく。

「ふむ。戦場では貨幣以外にも取引の材料となるものは多々ある。時に糧食、時に記念品」

視線を向けられたラルが喋りだす。対価として相手に差し出される物として戦場において、軍人同士のやり取りにおいて何があるのか。

「ま、まさか」

「エディータは勘がいいな」

勘がいい、というよりは長く戦場にいたことによる経験だろうと口スマンは思った。19歳、この場の誰よりも長く戦場にいたキャリアをもつロスマンは往々にしてそう言った部隊同士、ひいては軍人同士の取引や物資のやり取りを見てきていた。自身がそれを担ったことだつてある。何となくの察しはついた。

「写真ですか……？」

「そうだな」

ウィッチのブロマイド写真。それは戦場においては下手な貨幣よりも価値を持つ。部隊を率いる将官として、戦場で物資を融通してもらった時、よその部隊や将官とのつながりを取り持ってもらった時など戦場で誰かにちよつとした世話になったときには必ず対価が支払われる。それは時に武器であったり乗船の順番などの形のない物であったり、あるいは嗜好品の類であったりもする。ウェイターに対するチップのような形でも支払われるそれは兵士にとっても求められるものであり戦地の写真屋はよそから仕入れた写真の卸売りすらも行う。

自身が記者兼カメラマンでもあるどこぞの部隊長は部下であるスーパーエースの写真をそれは便利に使っているという。

写真を撮る。つまり、この雲龍にいる者達の為に自分たちが被写体になるということ聞いたウィッチ達。

顔を赤らめる者、しかめる者、余裕な態度を見せる者等、多種多様な反応を返すが、明らかに拒否をする者はいない。自分たちがそれだけの物を享受したという自覚があるしそれを踏み倒せるほど豪胆なものもないかった。

そろそろ行くかというラルに続いて食堂を出る。

格納庫にて行われた撮影会。

偵察機用の現像室の使用許可まで出された大々的なそれは静かな盛り上がりを見せた。盛り上がるうちにただ写真を撮られるだけであつたそれはポーズや小道具などが追加され、最終的に艦載機の主翼やら機銃座やらを使ったグラビアもかくやといった写真まで取られだした結果、艦長からのやんわりとした静止が入るまで続けられた。

## いざ（東）カレリア

朝霧の中を進んできた十七米内火艇が埠頭に横付けされる。

水兵が架けた板をキャビンから出てきたウィッチ達が渡っていく。

「皆さんどうかご武運を」

「ああ、ありがとう」

送り出しを担当した士官の言葉にラルが礼を返す。本来ならば上陸の予定がない日なのだが、彼女たちを送り出すためだけに艇を出してくれたのだ。

ウィッチ達が全員陸に上がったのを確認した士官の一人が号令をかける。それに従い、着いた時の逆回しのように板が片づけられ、手早く撤収の用意が整えられていく。警笛を鳴らした後、ゆつくりと岸を離れていく。

「いよいよ野戦地行かあ」

「しばらくはお布団もシャワーもお預けだね」

離れていく内火艇を見てニパが溢した言葉にクルピンスキーが反応する。

これから彼女たち502と507は東カレリア地方は湖畔の町ペテロザヴォーツクへと向かう。ネウロイ大戦がはじまって以降、一度は完全にネウロイの占領下となった街であり残された設備は少ない。奪還後はそのまま前線が押し上げられたことから軍が展開することも駐屯することもなく荒れるがままにされていた。しかし、数か月前”冷氣放成型ネウロイ”の影響で町全体が完全に凍り付いたことから少数の監視部隊が屯するようになっていた。しかし、その程度ではこの人数のウィッチ達がまっとうな生活ができるような状態ではないだろう。

加えて、彼女たちがその地に駐屯する期間は決まっていない。主な任務はペテルブルグに取り残された将兵や工員などの非戦闘員を脱出させること。そのためにラドガ湖上とその周囲の確保、ペテルブルグを取り囲むネウロイへの攻撃が求められる。しかし、東カレリアは現在もその南側でネウロイの侵攻軍と戦闘を続けておりそちらへの

対応も求められる上、北東の白海からは“グリゴリー”がペテルブルグを指している。

場合によってはペテルブルグ奪還後も東カレリアの防衛とグリゴリーから湧き出るネウロイの対処に留め置かれるかもしれない。

「さて、これより我々は任地へと向かうわけだが……下原」

「はい？」

「その荷物は何だ」

さあ移動しようというところでラルが指摘したのは下原の両手や背中には大きな布でくるまれた荷物。内火艇から出るときに水兵が数人がかりで運び出してきたそれがそのまま下原の装備へとジョブチエンジしていた。

キャンパス地のそれはハンモックで包んであるのだろうか。引越しか、あるいは夏冬<sup>コ</sup>年二回<sup>ミ</sup>の祭<sup>ケ</sup>りの帰りのような恰好になっている。

フレイヤ作戦からそのままの状態で乗艦した彼女らは何も荷物を持っていなかったたので、この荷物は雲龍で手に入れたものということになる。

「色々ですけど、大体は食料ですわね」

そう言つて下原は手に持った荷物を前に出す。包んだ布の結び目の隙間からは扶桑語の書かれた缶詰。漢字で内容の書かれたそれはラルには読めなかったが『牛肉の大和煮』と印字されていた。ほかにも色とりどりの缶詰や袋がのぞいている。

「雲龍の主計科からか？」

「からも貰いましたけど缶詰の方は色々なところからです」

機関、被服、航空……と指折り数えながら上げていく。缶詰などはそれぞれの部署で隠し持たれていた物や銀蠅されたものであり、主計科からは主計科しか持つていないであろう調味料なんかを貰い受けてきたらしい。

「どうやったんだ？ウィッチだからってこんなにくれるもんでもねえだろ」

「ジョゼ用に持つてたこっちの缶詰とかと交換したのよ」

どこに隠し持っていたのか、管野には全く分からなかったが下原は取引材料にできるようなものを持っていたらしい。

突然出た自分の名前に驚くような顔をしたジョゼが続く言葉に絶望したような顔をしたが、明らかに隠し持っていただろう缶詰以上の量の食料を持っているのを見て気を落ち着けた。それでもどこか惜しそうにしているが。

「数個の缶詰で交換してもらえる量ではないのでは？」

サーシャが聞く。確かに、制服に入れて持てるような缶詰は精々数個だろう。こっちの缶詰は扶桑から来た将兵にとつては物珍しいものかもしれないが、それでも隠し持っていていける量でこれほどの量と交換してくれるわけがない。それ以前に、欧州にいる以上補給も欧州の食材となるためこちらの缶詰が珍しいのは今の内ではない。

疑問を向けられた下原が答える。

「あとは、写真撮影の時にちよつとおまけをつけてその代わりに……」

「おまけってなに?！」

「ちよつとお話しただけよ? 普段の502の様子とか」

「下原さん? 友軍とはいっても機密とかありますからね? 割とアウトな情報もありますよ!！」

焦ったようなジョゼの言葉に、誤解だと言わんばかりに軽く手を振りながら弁解する下原。誤解が解かれる代わりに余罪がついたが。

基地の普段の様子程度ならいいのではと思うかもしれないがどこにまずい情報が隠れているかはわからないものだ。出撃のサイクルや消費される物資の量などから隠してる事実なんてものが出てくるかもしれない。どこぞの<sup>発進</sup>世界線の如く出撃数の水増しなんてほどではないが損失扱いのストライカーの員数外装備やペテルブルグ市街から回収してきたどつかの誰かさん家の家具、水増しされた補給品など知れたらちよつとまずいかな? 程度の話題には事欠かない。

「下原、話したのは問題ないと判断した範囲なんだな?」

「ええ、日常での皆さんの絡みですとか、後、前にデビーさんが撮ってた写真や記事の載った雑誌なんかの情報です。ちよつと話盛りま

したけど」

「よし、なら問題ない。よくやった」

「し、下原が隊長みたいになっちまった」

「ウチでもまともな方にいたのに……」

「いやそれはどうだろう?」

サーシャの問い詰める声に割って入ったラルの質問に下原が答える。問題ないと判断したのか褒めるようなことを言ったが、周囲の隊員達は戦々恐々としていた。ロスマンが常識人が……と嘆く一方で、クルピンスキーはんん?といった顔をしていた。先生は自分が管野と共に下原被害者の会、小さくてかわいいと抱き着かれ、抵抗空しくなるまで可愛がられていたのを忘れているのだろうか?とか思っていた。また、微妙に話題についていけない孝美は、管野の発言やその後の周囲の反応から自然と流されているけど隊長も貶されてない?とか考えていた。

周囲からその変化を嘆かれる下原だったが管野の方を向いてなにやら語りだしていた。

「良いですか管野さん。人は食べなきゃ戦えないんです。そして食べるものが美味しいほど力を発揮できるんです。ウィッチともなればより多くを食べなくてははいけません」

「お、おう。そうだな」

「そしてジョゼは人一倍食べるんです」

「ん!?まあ固有魔法の特性的に仕方ねえからな」

ジョゼの固有魔法は治癒。出力はそこまでもないが燃費が悪く、使用後は強い空腹感に襲われる。

「いえ、使って無い時でも食べます」

「おい!?!」

ジョゼの趣味は掃除と味見と称したつまみ食い。小皿くらいの量は普通に味見として言い張る、やせの大食いである。

「これからの戦地、毎日頑張るジョゼには少しでもおいしいものを食べさせてあげたいんです!だからこれは必要なことだったんです!仕方がなかったんです!」

「定ちゃん……そんなに私のことを……!」

「おま、あれいいこと言ってる風だけど直前にお前、食い意地張ってる扱いされてるからな?」

「向こうの隊員さんすごいね」

「私たちも見習うべきなのかもしれないな。これまではずっとカウハバの基地にいたから、少なくとも食事の心配はしなくてもよかったが……。今から行くのは最前線だ」

「まあ、ご飯の味は正直変わらないような気もするけどね」

502の喧噪を傍から見ている507の面々。国土のほとんどが森林と湖に覆われたスオムスでは補給の滞る冬場ともなれば支給される食事は侘しい。味気ない麦粥にはもう慣れたというものも多い。

「扶桑海軍はどこか癖があるのがスタンダードな士官だったりするんでしょか。もう一人はブレイクウィッチーズですしうちのもアレですし……」

「風評被害です!それに、雁淵大尉はまつとうです!」

会う士官がどれも色物なことに言葉をこぼしたヴェスナに三隅が反応する。なお、ヴェスナにとつて管野・下原は昨年の作戦時に、迫水はヴェスナが507のに来てからの付き合いであるためその性格も知るところがある。が、雁淵は司令部の会議室で一言二言言葉を交わしただけであるため、実は少し疑っていたりする。

「む……、そうですね。偶然出会った士官がそうだったというだけでしよう。……ところでミヤ?その後ろ手に抱えた荷物は何です?」

「えーあの、その……。下原少尉がちよつと協力してくれませんか、それで……」

下原の大荷物が目立って気にする者がいなかったが、内火艇から降ろされた荷物の一部は三隅の元へと渡り今もその腕に抱えられている。ヴェスナの問う声に507からの視線が集まる中、三隅が広げたキャンパス地の中には缶詰。

「ここを逃したらもう扶桑の味はしばらく味わえない、ちよつと写



真と部隊についてお話しするだけだからって、だから……」

「……ああ」

「わああしつかり、傷は浅いぞヴェスナ！」

自分が面倒を見ている子がちよつと目を離した隙に道を踏み外していたことに気が遠くなるヴェスナ。思わずよろけたところをブロイに支えられるが立ち上がる気力も沸かない。クツタリと脱力した姿をみてわたわたしながらつたない弁明をする三隅。

ウインドとリーはそれを見ているだけだった。

「うーん、こつちも負けず劣らずかもしれないな」

「これは、張り合うようなものなのですか……？」

「どこ行つてたんですかあー！」

移動のための所定の手続きが終わっていることを確認した一同が自分たちのストライカーユニットのある倉庫へと向かったところ、そこで待ち受けていたのは輝く第二種軍装にタヌキの耳尻尾。部隊員たちに撒かれ、一人所在が分からなくなっていた迫水ハルカ中尉だった。

曰く、三航戦内の艦艇に一晩の滞在の約束を取り付けてきた後、港に戻ってみれば誰もいなかったと。探そうにも時間はなく、かといって士官として約束した以上それをたがえることも出来ないと一人でその艦に泊まってきたのだそうだ。

「お風呂楽しみにしてたのにいー！」

その艦は巡洋艦だったらしく、ウィッチなど乗り組んでいるはずもなく出会う相手すべてがムサイいおっさんだらけの夜を過ごしたらしい。

とはいえ、置いていった側としても言い分はあるわけで。日ごろから被害にあっている以上、それ以上のことがあるとなれば当然それ相応の対処をするというもの。507も502も同情的なウィッチはいなかった。誰だつてやけどはしたくないのだ。着任時からあそばれてきた隊員たちは成長し、後輩を守るようになり、隊長は元から受け流せる力を身に着けていた。

「全機異常はないな？」

「はい。あと、管制塔から現地の天気は良好とのことですよ」

迫水の抗議を受け流し、両部隊ともストライカーのチェックを終える。倉庫から出て502、507の順で滑走路に侵入する。一応はオラーシャ領のためオラーシャに展開する502が先導する形だ。

ウィッチ達は全員が最低限の装備や荷物を身につけてはいるものの、その大きさはせいぜいが背囊くらいの大きさだ。山のような物資を持っていた下原も背負うのは抱えられるくらいの大きさの物のみ。大きな荷物や食料などの消耗品はトラックや鉄道といった陸路で送られる。そのほかにもストライカーを運用するうえで替えが利かない整備士等も、スオムスから来た507付きの部隊や企業やら周辺部隊から引き抜かれた人材やらで構成された整備中隊やその他の支援部隊として送られている。

「総員、行くぞ！——502部隊、発進！」

「さあ出撃だ、行くよ！——507、発進！」

オラーシャの凍空に伸びる15本の軌跡。世界で初めて、二つの統合戦闘航空団が一つになって戦いへと望む、その証左であった。

「ひっ、ぷし」

「どーしたひかり。風邪か？リベリオンので良ければウイスキーがあるが」

「原液はちよつと……」

「そうか？」

ペテロパブロフスク要塞に建設された格納庫の中。ひかりとアウロラは何をするでもなく、時折一言二言言葉を交わすというのを繰り返していた。周囲では整備の人間がストライカーや機銃、どこから持ち込まれたのかわからない装置なんかをいじる音が響いている。

今朝からペテルブルグには少し時期を外れた猛吹雪が到来している。本来なら12月あたりに吹くような強さで、2月も後半に入ったあたりには珍しい天気だった。

この猛吹雪はネウロイの動きすらも鈍らせた。水を苦手とするネウロイ。大雨となれば完全に動きを止めることから戦場ではしばしば戦況を変える要因ともなり、この猛吹雪は十分に苦手な範疇に入らしかつた。当然人類側の動きも鈍る。ペテルブルグ外周の防御陣地の人間は寒さに耐え切れず市内の建物へと避難し、ウィッチ達も身動きが取れずにいる。ありていに言えば暇なのだ。

「そーいや相方はどうした？」

「西沢さんですか？・レーシヨンが受け付けなかったみたいで寝込んでます。おなか弱いんですって」

さすらいのウィッチを自称し、動物に乗って欧州の戦線をふらついている割に西沢はおなか弱い。食材の鮮度には気を使わないとすぐ痛むのだそうだ。そんな状態でよく回れてたなとひかりは思ったが現地調達の方の鮮度はいいのかもしれないと思いなおした。水は大丈夫なのだろうか。

「なに？・そーいう時こそウォッカだ。酒が消毒してくれる」

「酒飲みの理屈だ。西沢さんがお酒飲んでるイメージないしなあ」

「なに、飲めばわかるさ。どのみちこんな状態じゃ飲むくらいしかやる事が無い。まあ、こんな状態だから体調を崩していられるともいうが」

この吹雪が振りだすまで、空陸問わずウィッチは出撃詰めだった。数十分、時には数分のスパンで空へ上がることもあり、対空対地と大わらわだったのだ。毎日限界ギリギリまで魔力を絞りつくして眠り、警報で起きてまた出撃する。夜間の警戒も受け持つサーニヤは消耗が激しく、体力の問題もあって共に飛んでいるエイラよりも状態は悪かったため、昼の活動は抑えられた。結果的に自然と昼夜専従の区別がつけられることとなり、昼組夜組は昼組にとっての夕食夜組については朝食の時間のみとなっていた。そのため、この吹雪で夜間組が早々

に切り上げて戻り、休みについたことから今日の夜は久しぶりに余裕をもって会話する機会になることだろう。

「しかしレーションで当たるのか。ここにそれ以上に上等な食べ物なんざ残ってはいないだろうな」

食堂の日持ちしない食材は早々に使い切られ、今は残された物資の中から大丈夫なもので食いつないでいる。

「吹雪が止んだ後にどうするかだな」

「……そうですね」

また、元の激戦の日々に戻ったときに西沢が動けないのは不味い。この状況で一人抜ければもう持たないだろう。一人では戦局を維持できず、かといって夜戦組から引き抜くわけにもいかない。

ひかりにできることがあるとするならば西沢にいろんな意味で強くなってもらうことだ。

「……この吹雪の間にどこまでやれるかな。アウロラさん、ちよつと西沢さんの様子見てきますね」

「ん？ああ、そうだな。ゆつくりしてくると良い、だが早く戻れよ？」

ひかりが西沢を見つけた時、西沢は食堂でお茶をもらっていた。スオムスの女性部隊である女性準軍事組織ロツタ・スヴァールドから参加してくれている人が淹れてくれたものだろう。暖かいものを飲んでいるとお腹も落ち着くのか、気の抜けた表情で息を吐いていた。

ひかりが入ってきたのを見て西沢の方から声をかけてくる。

「よおー、ひかの字。お前も飲むか？」

「もらいます。あと、ひかりです」

相変わらず、真面目な時以外まともに名前を呼べない癖は直っていない。ひかりが戸棚からカップを取り出すと西沢がそれにお茶を注ぐ。緑茶でも紅茶でもないあたり、下原が作った謎の葉茶だろうとひかりはあたりをつける。

カップの半分ほどを飲んだぐらいで、今度はひかりから口を開く。

「西沢さん、お腹が弱いのかどうかできるかもって言ったら信じま

す？」

いきなりそう切り出された西沢は驚きからか口に含んでいた分をカップに吹き戻してしまおう。その時に鼻にも入ったのかすこしえづく。

「あー、それホント？薬とか按摩じゃダメそうだったんだけども。薬って言っても正緒丸だけどさ」

「ああ、正露丸モドキ……。いえ、そうじゃなくて魔力で直接内臓を強化するって方法なんです」

「魔力で内臓を？ひかぴの固有魔法とか？ああでも魔眼だけひかひの固有魔法って」

この世界の魔力の運用体系は基本術式か物に魔力を込めるといったものに限られる。他の世界に見られるような体に纏つての強化や魔力そのものの形で扱うような技術は確立されていない。あるいは存在したのかもしれないが古代ウィッチの技法は現代まで続いているものが限られ、あるいは秘伝として隠匿されているのかもしれない。

「訓練で身に着けるん技術ですよ。502で戦力強化についてみんなやってたんですけど、私はもうばっちり使いこなしてるので教えられますよ！」

「まー、することもないしやってみるか！」

教えられるどころか502に持ち込んだのはひかりなのだが。

ひかりは食堂から自分の部屋へと場所を移さないかと提案し、西沢もそれに頷く。部屋にはひかりの持ち込んだこたつがおかれており、おおつ、という声と共に西沢がこたつへと滑り込む。ひかりもそれに続く。

念について、ひかりは手始めに念が魔力を操作する技術であることやこれからそれを扱うために必要なこと、その際に注意しなくてはいけないことなどについてを西沢へと伝えた。強引に精孔を開くがすぐに”纏”を、魔力を纏うように意識しなくては魔力切れで倒れてしまうことを伝えた後、覚悟はいいかと聞くといつでも、と返される。

いざ、実践とばかりにひかりが己の魔力で西沢の精孔をこじ開け

る。

「はあーなるほど。これが魔力か、目で見えるなんて坂本みてえだ。あいつが魔力も見えるのか知らんけど」

眼球の精孔までもが開かれたことにより西沢は自らの魔力を視認できるようになる。

ひかりは魔力の放出をとどめられるようになるまでに西沢ならそこまで苦戦することなく数十分で負えるだろうと思っていた。しかし、西沢の魔力は精孔が開かれた瞬間こそ溢れるように大きく噴き出したが直後に体表から吹き出す量が抑えられた。

精孔を開いた直後はうまく魔力を抑えきれずそのまま消耗でぶっ倒れるか、辛うじて一回で成功しても全身汗まみれになるのが普通なのだ。西沢はそれをほんの一瞬で成功させてしまった。かと思えばその上、

「で、これで内臓を強化すんだっけ。えーと、こう？」

「これ、体の外に出してんの無駄じゃない？ 押さえた方が節約できそう」

西沢は”纏”をすっ飛ばして感覚で”凝”と”絶”までを身に着けてしまったのだ。

本来、精孔を強引に開く方法で念を覚え始めた場合、最初は体から吹き出す魔力を体に纏わせて消費を抑える”纏”を覚える。しかし、西沢は魔力を体表に留めるという過程をすつとばしてそのまま内臓の強化に魔力を振ったのだ。あげく体表から漏れ出る分は不要と考え閉じ切ってしまった。”凝”と”絶”の合わせ技、内臓を魔力で覆っていることも考慮すれば”纏”も使っていると考えると内臓に對して”硬”を行っているようなものだ。”練”が抜けてはいるがそれでも体表の魔力をすべてつぎ込んでいることに変わりはない。

502のメンバーに教えた時の経験からウィッチとしての才能のある者、とりわけ感覚的に戦う面を持つ者は念の覚えが早いのではないかと考えていたひかりも啞然とする結果だった。

なお、502内では四五行でも応用でも感覚的なクルピンスキーか

魔力操作の練度からロスマンの習得が早かった。それ以外の習得の速さは団栗の背比べ、ただしラルのみが何時の間にかサラツと出来るようになっていてタイミングがよくわからず、管野とニパは互いに煽り合い切磋琢磨する関係であった。それでも、開いた直後に何事もなかったかのように”纏”をした者はいない。

「これで腹壊さなくなんの?」

「そ、そうですね。ちよおおと待って下さいね?」

吹雪のこともあり数日かけて”纏”を習得、”練”を覚え始めるくらいを想定していたひかりには完全に予想外の出来事となった。内臓、というか体機能の強化だけなら”纏”だけでも問題ないとひかりは考えていた。そのため、吹雪が止むまでに”纏”を修めてもらい、その間に他の四大行や応用、引いては”発”についてを知ってもらったことでペテルブルグが危機を脱した後も念の修行を続けてもらい、あわよくば502に引き留めてしまおうと考えていた。

「ええつとそう、ですね。あもう西沢さん、西沢さんは念についてはしつかり修める気つてありますか?」

西沢の習得に繋がる動機は弱かったお腹をどうにかできないかというもの。苦戦することなく”纏”を覚えてしまったためその動機がすでに失われてしまい、これ以上覚える必要はないと判断してしまいかもしれない。”纏”を覚えるまでの工程で魔力の操作がどういった物かを実感してもらい、念の魅力も苦労も知ってもらった上で習得したいと自分から言わせる計画がパーになってしまっていた。

「んー、魔力を纏うのも集めるのもできちゃったじゃん?あと何ができんの?」

「いろいろ!いろいろできますから!刀自体を強化するとか!」

「あーそれはなんか聞いたことあるな。陸さんにそんな剣つかうのがいたような」

ひかりが西沢を引き留めるべくさらに言葉を重ねようとする。なお、ひかりは詳しくないのだが魔力を物に込めるのは扶桑のお家芸である。剣やら槍やら人によって物は様々だが、ある者は爪楊枝に魔力を込めて飛ばし壁に大穴を開けダーツボードを粉碎したりもする。

「ああ、ここか」

突然、前触れもなくひかりの部屋のドアが開け放たれ、大きな音を立てる。驚いたひかりが目を向けるとそこには酒瓶を片手に掴んだアウロラ・E・ユートイライネンが立っていた。

「ア、アウロラさん!？」

「言ったら早く戻れって。イツルとあのオラーシヤの娘も呼んどいたぞ」

「???どういう?」

ひかりが聞くとアウロラはニツと笑って答える。

「502でなんかやってたのは元々知ってたんだよ。ちようどいい、私らもこの機会に教えてもらおうじゃないか」

曰く、何時ごろからか502内でそれまでと様子が違うと思うことが多々あったそうデラルやニパに探りを入れてその反応から何かやっているということとは掴んでいたらしい。具体的に何をやっているかは知らないがあこのラルが部隊を上げてやらせようってんだから何かあるのだろうと考えていたそうナ。ポーカーフェイスなラルはうまくごまかしたのだろうがニパの方はそうはいかなかったのだろう。

アウロラに手を引かれる形で格納庫へ連れていかれるひかり。西沢はニコニコ顔で面白そうなものを見る目でそれに着いてくる。格納庫に着くと、端に置かれた作業用の大机が空陸両方のウィッチ達によって占拠されているのが目に入る。アウロラ率いる陸戦ウィッチ隊の6人にエイラとサーニヤ、そこに3人も加えて11人のウィッチが机を囲んでいた。格納庫の窓から差し込む日光は朱く染まり、時刻がすでに夕刻に入っていることがわかる。

「なんだよねーちゃん呼び出しつテ。せつかくネウロイが来ないんだからゆっくりさせてくれたっていいじゃないか」

「そうだー!隊長は部下をいたわろうという精神が足りていない」



「大尉は部下をもっと大事にしろー、戦場で暇を見つけては妹さんの自慢話をしていることを妹さんに暴露するぞー」

「!?!」

格納庫に入ったところでアウロラが口を開く前にその姿を見た隊員やエイラが勝手に騒ぎ出す。

「元気があるようだなによりだお前たち」

「ねーちゃん!?!何を話したんだ?!」

「それはもういろいろだ。そのおかげでうちの隊の連中はすっかりお前のファンだ」

「あつたこともない人間について詳しくなっていく自分が怖かった」

「あれは洗脳教育」

アウロラは会話に混ざりにいくがそのまま話が盛り上がってしまう。本題に移る気配が見えなかったのでひかりは会話の輪から外れていたサーニヤの方へ寄る。

「アウロラさんに呼び出されたって言ってた?」

「うん。起きたところでアウロラさんの部下の人から格納庫に集まるようにって。でも、格納庫に着いてもアウロラさんがいなかったからエイラもむくれちゃって」

「このところ出撃詰めだったところをようやくゆつくりできるといふことで起きた直後は上機嫌だったのが呼び出された先で待たされたのもあって一気に急降下したらしい。」

その後もひそひそ二人で話していると向こうの話がいったん切れたらしくその瞬間にアウロラさんが本題を思い出したらしい。ひかりは名前を呼ばれ、近くの席に戻る。

「そうだそうだ。本題はこっちの方だった」

「ひかりがどうしたんだ?」

「ひかりというか502に関係することなんだがな。こいつらがなんかこそそやってたことを教えてもらおうと思ってな」

そう言った後、ほら、といってひかりの背を叩き話をするように促す。促されたひかりは立ち上がって話始める。

「えーと、502内ですっていうとですね魔力の操作訓練が流行って。"念"っていう技法なんですけど」

そう言って話すのはどういう原理でなるものかと何ができるか。魔力を感覚的に感じ取れるように精孔を開けること、その魔力を制御することで自分自身を強化したり物を強化したりできるということ。

「なんかよくわかんないナ」

「なにか見てわかるようなものはないか？」

簡単な概要の説明が終わったところでユーティライネン姉妹から一言。要は何かデモンストレーションを見せろというもの。ひかりは502に教えた時にもやったようなと考え同じことをすることにしました。

格納庫の端には物資が積まれている。そのなかからひかりは扶桑の弾薬包に使われている紙と何かの缶を見つけける。缶は物資の箱の上に乗せて紙だけをもつて机へと戻ってくる。

「えー、こちらにございませは種も仕掛けもござらんただの油紙にござい」

「なんだって？」

「エイラさん確認してくださいな」

離子言葉のような物を言うが扶桑語なので西沢にしか通じていない。ごまかすようにエイラへと紙を押し付け何の変哲もないただの紙であると確認してもらおう。ちなみに西沢には受けたのか顔を疼かせてくつくつと笑う声があった。

「んまあただの紙ダナ。てゆーか抜き取るとこ見てたシ」

「様式美って奴ですよ。じゃ、見ててください」

紙は長いことそこに置かれていたのかしわくちゃでくたくたになっっている。格好つけに人差し指と中指で挟んで持つと重力に負けて垂れさがる。顔と体は缶に向けたまま視線だけで机の方を見れば全員の視線が紙に集まっているのを確認する。視線を戻し紙に魔力を込める。魔力をどう纏わせるかを意識し実行に移す。途端に紙は起き上がり皺の一切見えないピンツと張った姿になる。

紙というよりはガラス板のようになったそれを見て驚く気配を横

顔に感じながらそれを放る。腕の運動量に見合わない高速で紙が飛び、缶をすり抜けてその奥の壁に突き刺さる。刺さって一拍置いた後、突き刺さったままに紙が再び皺くちやになりへたる。それと同時に缶の端が弾けるように飛んでいき紙の軌道に沿って開かれた断面からは塗料がこぼれ出る。

「あっ」

気づいた時にはもう遅い。缶から流れ出た塗料は全体の1/3程度だったが濃い緑色の液体は缶がおかれていた木箱を緑に染め上げ滴り落ちる。

「何やってんですか軍曹！」

「ちやうねん」

蟬谷に血管を浮かべた整備部隊の人間にひかりがドナドナされていくのを横目に見ながら、残された者たちは視線を見合わせる。

「で、どうだった。あれを見た感想は」

アウロラが切り出すと口々に感想を述べてくる。

「紙が缶を斬っちゃった」

「同じことをやれって言われてもまあ無理ですね」

「正直曲芸の域かなって」

「曲芸ではないだろう。デモンストレーションとしてやったんだ。念とやらが使えりや誰でもできるってことだろうさ」

アウロラなりの見解を述べると、そのまま視線は西沢へとシフトする。ひかりが連れていかれた時、西沢は斬られた缶と斬った紙に駆け寄りそれを検分していた。

「どう思う。西沢」

「うーむ正直予想外だったかな。固有魔法とか専門に訓練していた連中ならともかくこういう芸当ができるようになるってのは」

腕を組みながら答える。魔法を物に込めるのはウィッチなら大なり小なりやっている事だ。それこそ武器や弾薬、ひいてはストライカーユニットだってそうだ。しかし、それらは術式としての補助があるか、なくても出来るように一部の訓練した熟練者だ。何の変哲もない紙きれに殺傷能力を持たせることなどできない。

「それと同じ事、できるか？」

「ん、見たからな。できる」

西沢にとつて、念による魔力の操作がそこまで応用の効くものだということが予想外だっただけだ。蒙が開いた、というかそういうものだど理解した今ならやろうと思えば同じことができるだろう。いきなりそんな芸当ができると言い切れるのも彼女の才能故なのだが。

「西沢さーん。内臓強化を自分の手に使ってみてくださーい」

「雁淵軍曹!もしや話聞いてないんですか!？」

離れたところからひかりの声が飛んでくる。整備班の間でも広まっているのか処罰として正座させられた状態でお叱りを受けているのだがその状態で声をかけてきた。

言われるままに西沢が腕を強化する。右腕に対して弱い”硬”。密度の高まった魔力によってほのかに光るのをみてウィッチ達からも驚くような声上がる。

「そのまま机に手を当ててみてもらえますかー？」

「ごうか？」

西沢が手を机の上に押し当てた瞬間、格納庫中に響き渡る音と共に大机が砕け木片が宙に舞う。

「えっ」

「西沢飛曹長!？」

大音響の炸裂音に格納庫中の眼が集まる。その大机は各国の整備班が共同で作業に使っている机なのだ。それがほぼ中央から砕け散り、足の周りの4つだけが残るのが整備士達の目に映る。

「あ、あんたもかああ!!」

「ちよ、待て、ひかりが言ったの聞いてただろあんたも!」

ところが西沢の訴えは整備士には?という表情で返されてしまう。訳が分からないと否定を続けていると、西沢や他のウィッチの耳にもひかりの声が聞こえてくる。

「ふふ、魔力に指向性を持たせて音を載せるちよつとした小技です。念に習熟すればごう言ったことも出来るのです……!」

「アタシを巻き込む必要なかっただろ?!」

「貴様の魂も一緒に連れていく……」

「道連れかよ!？」

ひかりとおなじようにドナドナされていく西沢とそれを見送るウィッチ達。机が弾けた時、とっさに飛びのきシールドを張ったのは彼女たちが皆歴戦の戦士だからだろう。なお、エイラだけはいち早く机の周りから離れておりサーニャもつれていた。

「バルクホルン大尉と同じ固有魔法ってワケじゃないよナ……」

「多分そのはずだけど……」

彼女たちは501部隊の同僚にいた怪力の固有魔法を持った大尉を思い出していた。しかし、その大尉は普段から自らの肉体もアスリート並みに鍛えていたのに対し西沢にそのそぶりもなく戦闘でも怪力を見せるようなことはなかった。

確かに強力な力になるかもしれないが、それが自分たちの空戦に生かされる光景が想像できずにいた。

「アタシもまだまだ強くなれるってことか……。最後まであがいてみるのもいいかもしれないな!」

西沢は決意を新たに念に対してさらに向き合うことを決め、

「ふふ、なるほど。腕力を鍛えているわけでもない空戦ウィッチがこの力か……。欲しいな」

「ええ。これはどちらかという我々向きの力でしょう」

「決まりだな。整備兵!私の秘蔵のボトルを2, 3本くれてやるからそいつらを寄越してくれ!」

アウロラ達陸戦ウィッチは念を自分たちに向いた強力な力だと判断し、それを取り込むことに決めた。強化された肉体は直接ネウロイを相手に戦うことができる彼女たち向きだろう。

まずは講師を哀れな整備士から取り返さねばなるまい。アウロラは部下を自室へと走らせ、その間に整備士達に話をつけることにした。

## ペトロザヴオーツクにて

オネガ湖湖畔にあるデレエフヤンノイエ飛行場はオラーシャ軍が管理する飛行場である。ペトロザヴオーツク南方に位置するこの基地は最前線のすぐ後ろというその性質から前線が突破されて以降、複数の飛行隊が進出。一大航空拠点と化していた。

しかし、元の規模がさして大きくないこの基地では必要なキャパシティを満たすことが出来なかつた事から、配備されたのはエアカパーを担当する戦闘機隊と必要面積の小さいウィッチ隊が集中していた。地上攻撃機等は北の氷上基地であるコンツポヒヤに、航続距離の長い双発機等はさらに後方のヒルバスに集められていた。

502と507の統合戦闘航空団はその進出地をデレエフヤンノイエ飛行場とし、赴任からしばらくの間はそこから前線のエアカパーと支援攻撃を行っていた。前身である義勇独立飛行中隊の経験から対地攻撃能力を獲得している507を502が空中援護するという形である。

彼女らが前線を維持している間、ペトロザヴオーツクの基地ではペテルブルグの解放策が繰り返し検討されていた。ムルマンスクからの戦力が各前線へと到着し戦況が膠着したことで、ようやくそちらにまで手が回るようになったとも言う。

統合戦闘航空団両部隊の隊長であるラルとハッセ、その副官のロスマンとリーは司令部からの呼び出しによりペトロザヴオーツクまで来ていた。

「すごい数の軍人ですね……」

リーが運転するジープに乗る四人。後部座席から辺りを見回すロスマンが言うとおおり、今のペトロザヴオーツクの街には多くの人間がいた。その殆どが軍服を着ており、また男性ばかりな事も伺え元の町人達が戻ってきたわけではないことが分かる。

「今、この半島で展開されている三つの戦線のうちの一つだからね。戦前にこの街へ来たことがあるけれど、その頃よりも出歩いている人

の数が多いよ」

「最前線に一番近い大規模な拠点ですからね。ただ、少し違和感もあるのですが」

「違和感、とは？」

リーの疑問の声に反応したのは助手席の後ろに座るラル。運転を担当しているのがリーであり、その後ろがロスマン、助手席にハッセ、その後ろにラルという組み合わせで乗っている。

「見かける兵士の多くはオラーシャですがスオムスやバルトランドの兵もいる。現地の国ですからそこまでは納得出来るんですが、よく見ればリベリオンの歩兵やカールスラントの戦車兵も見えます」

リーの言うとおり、通りに出ているのはオラーシャやスオムスなどの北方の国の兵士が殆どだ。しかし、町へと入る車両を整理していたのはカールスラントの兵士だったし積まれた物資にはリベリオン語が書かれている。目につかないだけであつて実際にはもっと多くの国がこの地に関与していることだろう。

「この地にこれだけの戦力が展開していることが違和感つてことかな？」

「はい。主戦場のガリアに大規模な戦力が投入されているという話は耳にしますが、北方のこの辺りは仮に取り返したとしてもそこまでの価値があるかと言われると……」

ネウロイの再占領が始まる前、人類が取り返せていた範囲は人類軍から見てそこまでの戦力的価値は無い。東に比べればまだ、モスクワに近く、西欧にも？がる事から発展自体はしていた。しかし、それも欧州戦の中で破壊し尽くされて久しい。取り返されてからも前線のすぐ後ろと言うこともあり復興は後回しにされた地域だ。

今年の夏に501部隊によってガリアが解放されて以降、各国の戦力はその地へと集中して投入されその地に残るネウロイの排除と復興を行いながら前進を続けていた。その状況でこの北欧州にこれだけの戦力が集中して投入されていることにリーは違和感を抱えていた。

「いや、その逆だよ。価値があるから取り返すんじゃないくて、価値あ

るところまで食い込まれる前に取り返すんだ」

リーの言葉を聞いて助手席に座っていたハッセが言葉を返す。

「確かにネウロイに再占領された地域にそこまでの価値はない。けれど、その先にあるスオムスやバルトランドは小国とはいえ連合軍の一翼を担っている。それを失う事が無いよう、先んじて戦力を集めたというわけさ」

「付け加えると、ガリアの戦線に見込みがついたと言うのもある。あくまでライン川までの進軍と割り切り慎重に進軍していることもあって、まだブリタニアからガリアへと渡る前の戦力が残されていた。その中で動かせるところから投入されているのだろう」

ハッセとラルの講釈に納得がいったようにリーが唸る。それを傍から聞いていたロスマンは、言わなくて良いことは言わずとも良いという判断かと察した。

ロスマンが察した内容。それはガリアが主戦場であり、北方がそうではないというリー自身が言ったことについてだ。詰まるところ連合軍の上層部は本気で北方からの進軍で欧州を奪還するつもりはない。取り取られ、取られて取り返す。そうしてペテルブルグ以南の地域を緩衝地帯とすることでネウロイの戦力を誘引し漸減するつもりなのだ。それをもって欧州の主戦場たるガリア方面、ひいてはベルリン攻略に対する援護とするのだ。

それはその地をさらに荒廃させる事となる作戦であり、決して気分が良い物ではない。知らなくて良いのなら知らなくて良いことだろう。

四人を乗せたジープは歩哨の誰何を抜け、司令部へと入っていた。

司令部として使われている施設は元は教会であった建物で、大勢が同時に話を聞ける空間としてその礼拝堂が使われている。昔に受けた襲撃の跡なのか屋根の一部が吹き飛ばされており、今は雨除けにキャンパス布で塞がれている。

礼拝堂に元あった長椅子は運び出され、中央へ代わりに置かれた



テーブルの回りには雑多な制服や階級章をつけた軍属が立ち並び、それぞれ副官や同行者、或いは見知った周囲の者との歓談で時間をつぶしていた。

ラル達四人が入ったところで、最奥に立っていた人物にその副官であらう者が何やら耳打ちする。それを受けた軍人は咳払いの後、さらに注目させるような声を上げた。

この場に集まっているのはこの東カレリア地方の防衛に着いている部隊の指揮官達だ。ラドガ湖とオネガ湖に挟まれたこの地方にはスヴィリ川が二つの湖をつなぐようにして流れている。その川を防衛戦として活用し戦線を構築している。

「グリゴリーの接近により、もはや猶予は残されていない。ペテルブルグに残された将兵並びに工員を助け出すのは之が最初で最後の機会になる。その事を念頭に置いて話を聞いて欲しい」

この東カレリア戦線には戦線を守る部隊に加え、502連隊ペテルブルグの解放作戦に参加する兵力も展開している。本来ならばあくまで解放作戦開始まで駐留するだけのところを戦力不足故に戦線の一翼を担う存在として展開せざるを得なかった。それがムルマンスクに陸揚げされた増援が到着したことによりようやく動かせるようになった。

彼ら彼女等がペテルブルグに向かうことで再び生じる戦力の穴埋めにどの増援部隊をどう投入するかなどについてもこの場で話し合われるのだ。

現在東カレリアで最高階級となるカールスラントの將軍の話の次はペテルブルグ解放作戦の指揮を執るオラーシャ陸軍中將が話し出す。

従兵達によって地図とマーカーが机に置かれる。作戦に関する物だろう情報が書き込まれた地図は、見る者が見ればその内容を一目で看破出来るであらう代物だった。

「これは、”ベロモルカナル”ですか」

「そうだ！我が帝国の誇る偉業！運河を使ってペテルブルグまでの

補給線並びに退路を確保する！」

”ベルモルカナル”とは、白海から幾つかの湖を経由してペテルブルグ近郊のバルト海までをつなぐ巨大運河である。1930年代に完成したそれは、オラーシヤ帝国によって行われた大規模な工事によつてつくられた長大な人工物である。啓蒙専制君主を自称した時の皇帝によつて強硬されたそのプロジェクトには多くの人命が費やされ、各国からの非難を浴びた。

「偉業ねえ」

「従事した人間はどう思っているのやら」

そのことを知る人間からの反応は当然冷ややかなものとなる。

「もう3月がそこまで近づいている以上ラドガ湖の氷上を渡るのは厳しくなるやもしれん。だが、それは言い換えれば氷は薄くなり破壊しやすくなつていふことでもある！そこで、我が祖国の航空艦隊によつて爆撃を行い之を破壊！その後は砕氷船と合わせて運用していく方針である！」

「そのためにはラドガ湖まで船を持ってこなければならぬ。戦前に放棄されたものから使えそうな物を見繕つてはいるが到底足りん。白海から持つてくる必要がある。そこで、北を守る連中や君達にも戦線を押上げて貰い！一時的な制海権成らぬ制川権を取つて貰いたい！」

ラドガ湖には元々スオムス、オラーシヤ共に小規模ながら艦隊がいたのだが1939年以降の戦いで戦線が下がったときに放棄されている。運良く状態の良かった物のレストアや列車を用いたヴェネツィア海軍水雷艇部隊の輸送などで数を増してはいるが、ペテルブルグに残された万を超える人員を引き上げるには足りない。

そこで、白海から運河を使つて運び込もうというのだが、運河は絶賛防衛戦として活用されている。よつて利用のためには一時的に運河から敵を引き剥がす必要があるわけだ。

「簡単に言つてくれるよ、全く」

「之だからオラーシヤ人は」

無論容易なことではない。古来より渡河作戦は困難極める物であ

りその犠牲となる物は多いのだから。一人でヒートアップするオラーシヤの將軍の様は異様とも言え、会議といった様相ではない。計画を立て、指揮をするのはこの男とその作戦参謀たちだろうが、前線で実際に戦うのは彼に冷ややかな目線を浴びせる彼らなのだから。

二時間もした頃、ウィッチ4人の姿は再び車上にあつた。作戦に関しての情報の共有こそ行われたが、集められた者達はそれが済めばもう用はないと言わんばかりに我先にとその場を離れた。離れた者達がその後、どう動いたのかはそれぞれだが、この4人の場合はその場に集められていたうちの一人であるウィッチと会っていた。

「交代の相手が”ノルマンデイ”だとは思いませんでした」

東カレリアを離れる統合戦闘航空団に代わり、その地の防衛、並びに一時的な戦線の押上を担当する部隊として連合軍から派遣されてきた部隊。そのうちの 하나가ガリア空軍の”ノルマンデイ”と呼ばれる部隊であつた。

”ノルマンデイ”は、欧州撤退により散り散りになつたガリア空軍が自由ガリア空軍として再び再編された際、オラーシヤからの支援をもとに結成された部隊だ。結成にあたってそれこそ戦術の指導レベルからの一からの編成となつたため使用する機材等含めてオラーシヤの色が濃い。

「そういうえば、そちらのジョゼさんの事は何も言わなくてよかったですか？」

ハッセがそう尋ねる。

ノルマンデイは502のジョーゼット・ルマール少尉の原隊でもある。アフリカからリベリオンへと渡り、自由空軍へと所属したのち、オラーシヤの地にて彼女は練成に励んだ。同じ502のサーシヤともそこで出会っており502へもその縁で声をかけられた。

ハッセも507という一つの部隊を率いる身である。当然部下の経歴は把握しているし、戦場を共にするウィッチ、ましてエースのみで編成される統合戦闘航空団の者ともなればその経歴には目を通す。ジョゼのこともそうして知つた。

「いや、その必要はないだろう。私の知っている部隊長と顔が変わっていたからな」

ノルマンディは損耗の多い部隊だ。他国の援助を受けて結成された部隊であることからその国の利益となる形で戦線に投入される。ノルマンディの場合は激戦区となるオラーシヤ国内の戦線へと投入され、既に幾度か隊長が変わっている。無論、広く知られている事ではないが。

「珍しいことではないとはいえ、知らせるようなことでもありませんか」

「まあ、通達を受け取っている可能性はあるのだけど。掘り返すようなことになるかもしれないと言わないに越したことはないわね」

隊員が欠ける、定数割れの部隊、被弾に伴う次席への指揮権移譲からの臨時部隊長。時には部隊ごと消滅するようなこともある。この場にいる4人とてそれぞれの戦場の中で亡くした戦友の数は知れない。

もしかすれば、この作戦の中で新たに戦友を失うかもしれない。戦場にいる以上決してありえない話ではない、いかなエースの集団と言えど絶対はないからだ。

「やっぱロクなモン無かったな」

デレエフヤンノイエ飛行場に併設されるようにして建てられた宿舎。リベリオンから供給される、クオンセット・ハットというかまぼこ型の兵舎を幾つも並べて用意されたその区画の一部が統合戦闘航空団の面々に割り当てられていた。

そのうちの一つ、談話室のように使われている一棟の戸が開かれ管野が入ってくる。普段よりも幾分厚着をしていることから兵舎間の移動程度ではない、外出をしてきたのだからとわかる。管野が戸を離れば続いて下原、ジョゼが入ってくる。

「料理やんねえ俺でもわかるくらいしょっぺえ食材しかなかったぜ」

この3人は自分たちの部隊へと割り当てられる補給物資の確認を

命じられ、飛行場の倉庫へと赴いていたのだ。三人がそこで見た食材はなんとも侘しい物であり、量こそ十分なれど生鮮食品や食材と言えるようなものは質が悪いかそもそもが存在せず、あとは缶詰やレーションの類で補填されていた。

「グリゴリーの通り過ぎた後とはいつでも油断はできませんから仕方がないです」

「護衛に割ける戦力もないって感じがするし……。欧州撤退の頃を思い出しちゃう」

二人の言に付け加えるならば、土地そのものの問題もある。未整備の山林も多い北欧で、その土地に住む人間以上の軍人が展開するという異常事態、加えて補給されるのは食料だけでなく燃料や弾薬もある。道路や線路といったインフラ自体がその補給物資の量に耐えられなくなっているのだ。

そういう意味ではオラーシャの将軍が提起する一時的な戦線押上げとそれに伴う運河の開放が軍司令部によって承認されたわけもわかる。遠くムルマンスクから貧弱なインフラを経由して送るのではなく直接現地に揚陸してしまおうというのだ。 ”ベルモルカナル”は全て手作業で掘られた割に規模が大きく、最初にその川を利用したのは軍艦であつたほどだ。

「しよっぺえ、というのは扶桑の言い回しですか？美也。塩辛いという意味そのままではないように思いましたが」

「えっと、どうなんだろう。私は聞いたことないです……」

管野の発言に反応したのは先んじて兵舎まで戻っていたヴェスナと美也。二人も自分たちの部隊への補給品の確認に出ていた。自分たちへと割り当てられた仕事が終わった事もあり、談話当棟へと戻っていた二人は暇を持て余し雑談に興じていた。管野の発言に対する反応もその話のネタの一つである。

「あー、なんつうか大したことないとかしよばいとかそんな意味だよ」

「語源は相撲からですね。関東圏で使われる方言のようなものだから」

「方言とかよりもさー、お昼はどうするの？補給はあったんでしょ？」

会話を割って入りそう声をかけたのはニパ。菅野が目を向ければ兵舎の中にはほかの隊員たちも集まっていたことに気づく。とはいえそれもそのはずで、ここ以外にいる場所があるとすれば自分の割り当てられた兵舎かユニットのどこぐらいであり行くところが無い。まあ、ペテルブルグやカウハバの基地にいたころと変わらないと言われればその通りでもあるが。

クオンセット・ハットと共に支給された簡素な長椅子。木製の骨に幌を巻き付けたハンモックのようなそれの上に転がるニパはけだるげな様子で自分の腹をさすって空腹をアピールしていた。

「補給ついてもつまんねえレーションばつかだ」

「ええ〜。もうあの紙箱の奴飽きたよ」

「まあまあ。僕たちは一日一品自前の缶詰を足せるだけマシだよ。他の部隊じゃそれも出来ないところも珍しくないだろうし、それに日に三度食べられるだけありがたいと思わなくちゃ」

「そうかもだけどさ〜」

紙製の箱をセロハンで包装したレーションはその手軽さからありとあらゆる戦場で使われている糧食であるがメニュー内容は限られているため即飽きるという欠点があった。502では料理上手な下原の手により他の糧食のセットとの組み合わせや一手間の追加、場合によっては『頂いて来た』調味料で味変したりとよその部隊よりは恵まれた食生活を送っていた。

ちなみに、一時期のペテルブルグと食糧事情はどっこいどっこいだったりする。あのころも貯蓄の缶詰やレーションで補給難を乗り越った。

「そーいや飛行場にまた新しいウィッチ隊が来てたぜ」

「おっそれホント？かわいい子いた？」

ぶー垂れるニパを無視し、菅野が話題の転換を図る。補給を受け取りに行った先の飛行場でまさに到着した直後といった部隊を見たのだった。ウィッチと聞いたクルピンスキーが飛びつくようにやって

きた。

「かわいい子つつーかカールスラント軍だったぜ」

「えっどこだろう」

「あれは第4航空艦隊でした」

管野とクルピンスキーの会話にヴェスナが入る。管野がその飛行隊を見た時、ヴェスナと美也も共にいたのだ。第4航空艦隊はカールスラント空軍の中でも比較的欧州の南側によく派遣されている。それが欧州に来たことに違和感を覚えたクルピンスキー。

「それも装備を見るに爆撃航空団ですからクルピンスキー中尉とはかわりあいの無かった部隊だと思いますよ」

なお、そのことについて詳しく聞こうと考えたところでうつすらと笑みを浮かべながら喋るヴェスナをみて、クルピンスキーはああ、そうなのかい？とだけ返した。それを見たカンノは小声で話しかける。

「中尉まだ微妙な感じなのか」

「先生がいるときなんかはこんな感じじゃないんだよ！先生が居なかつたり顔を向けてないときにだけあんな感じで笑うんだ！」

欧州撤退戦の頃は同じ部隊で生活していたクルピンスキーとヴェスナ、そしてロスマン。そのころは新人だったヴェスナに強い影響を与えたのがクルピンスキーであり、そしてそのころからクルピンスキーの女好きは発揮されていた。

そのこともあって関係をこじらせていた三人だったがスオムスで再会して以降、そのわだかまりは解けた……はずだった、と管野は思っていた。

そのこともあり、気になった管野は直接問うてみることにした。クルピンスキーを遠くへと追いやり、代わりに今度はヴェスナに対して小声で話しかける。

「なあ、ミコヴィツチ曹長。おれはてつきり……」

「私はヴァルトルトさんたちのことを応援すると決めたのです」

「なに？」

「あの時」、クルピンスキーさんにどういう事情があったのかはまだわかりません。けれど、あの二人の関係を壊してまで私がその位

置につこうとは思わない。それだけです」

声は小さいながらもはつきりとした口調。まっすぐと管野を見据えたまま語るように喋るヴェスナに管野は少し気圧される。けれど、言っている事の内容を理解すると気圧されるような感じは消え管野自身もヴェスナの思いに納得するところとなった。

「……そうか。ちなみに、今ちよつと笑ってみてくれるか？」

「はあ、こうですか」

そう言われて彼女の浮かべた『ニゴオ…』とした笑みを見て、管野はああ、単純に不器用なだけじゃんかと思いいれこれ無駄に考えるのをやめた。これ以上は邪推にしかならないと。

彼女に一言礼を言い、元居た座席に戻る。のけ者にされていたクルピンスキーがそばににじり寄ってくるが管野はそれを軽くあしらう。

「何話したんだい直ちゃん」

「うっせえうっせえ。エセ伯爵は黙ってる」

「ねえ、ほんとに何話したんだい！」

作戦当日。日が昇ると同時に全軍が慌ただしく動き始め、一斉に渡河を開始した。気温が上昇し始めたこの季節においても早朝ともなればまだ氷点下を下回ることもある。日中の気温で地面がぬかるむ前に機甲部隊を中心になるべく移動距離を稼いでおきたいという考えからだ。

作戦の開始と同時に陽動を兼ね、バレンツ海側での空母機動部隊による対地攻撃が行われる。バレンツ海からバルト海までを跨ぐ一大作戦が幕を開けた。

この作戦において、502はペテルブルグ突入を担当する最前衛に参加する。対して、507はそれまでの道中における援護並びに退路の確保を行う。少しでも土地勘があるほうが良いだろうという現場判断による振り分けだ。

また、作戦の開始前ブリーフィングでの情報共有の場にて……、



「先日から繰り返して行われていた偵察により、ペテルブルグとの連絡はより一層困難を極めもはや不可能と言える状況にあることが分かった」

ロスマンが機器を操作するとスクリーンに写真が映し出される。数秒ごとに切り替わる数枚の写真、最後に映し出された一枚を見て下原とジョゼが思わず立ち上がる。

「このネウロイはオネガ湖の!」

「私たちが倒したはずなのになんで……」

スターリングエンジン、あるいはレコード盤の再生機やひまわりのような正面を向いた円盤状の物とそれを支える首のついたネウロイ。季節の変化によるネウロイの動向に対する偵察作戦の中で哨戒任務中に下原達が出くわしたそれは、確かに彼女たち自身の手によって撃破された。しかし、写真に写されたそれは記憶の中にあるままの姿で、今度はオネガ湖ではなくペテルブルグの上でその機能を発揮していた。

「こいつ……、確か雪を降らせたとかいう?」

「そうだ。こいつの事は以後“リフリゲーター”と呼称する。下原達3人によって撃破されたこいつは、他ならぬオネガ湖の上空に現れ猛吹雪をおこしペテロザヴォーツクを完全に雪と氷で覆った。その時の影響は私たちがいたペテルブルグにまで及んでいたことは覚えているだろう」

オネガ湖にこのネウロイが出現していた時、このネウロイが起こした寒波は遠くペテルブルグにまで直撃。建物そのものが凍りつくまではないかすとも、その暴風と大雪は当時遭難していた下原達への捜索隊を出すこともかなわない状況を作り出したのだった。

「このネウロイがペテルブルグにいると!?!」

「そうだ下原。現地は暴風の壁に覆われ中を視認することは不可能だそうだ。これにより、救出しようにも脱出はおろか内部との接触も出来ずにいる」

「でも、この吹雪の中ではネウロイだってまともに動くことはできないはず。つまり、この暴風雪はあくまで足止め。本命は……」

言葉を切ったロスマンが再度写真を切り替える。

「グリゴリーの到着」

映し出された写真には幾本もの触手を折り重ね円盤のようにしたものを纏うグリゴリーの写真とそれがどこに示すかを示すしるしをついた地図。日付ごとの位置とその経路が示されているが、一目見ればそれがペテルブルグへ向けて一直線に進んでいることがわかる。

因縁深い相手の写真に502の面々の顔がこわばる。

「通常戦力による削り合いは無駄と判断したのだろう。グリゴリーの圧倒的な戦力でもって一気にすりつぶすつもりらしい」

地図を見るにグリゴリーの接近はあと一週間足らずというところにまで来ており、進路上の住民や部隊は既に避難が済んでいるようだった。また、常に張り付いて様子を報告している部隊がいることによりその動向は全軍に対して共有されている。

「早くひかりさん達を助けに行かないと!」

「そうだ。だからこそペテルブルグへの突入にはあれとの交戦経験のあるお前たち二人を主軸として行こう。そこで502部隊はさらに2つに分ける」

ペテルブルグに展開するネウロイは暴風を発生させるネウロイが出現して以降、それを護衛するように周囲を飛び続けている。一体目が単独で行動していた結果撃破されたことから学習しているのだろう。そのため、それに対するウィッチ達も”リフリゲーター”とそれを護衛するネウロイとを相手にする部隊とで2つに分ける必要がある。

「主目標となる”リフリゲーター”への攻撃は下原・ジヨゼを主軸に戦闘隊長であるサーシャ、コアを視認できる孝美とペアの管野、火力のあるエディータ。ロスマンのペアには臨時でカタヤイネンに入ってもらおう」

「えっワタシがロスマンさんのペアですか?」

普段、ロスマンとはクルピンスキーがペアを組み、サーシャとはニパが組んでいた。ラルが一人浮く形となるが古傷のこともあって出撃を控えめにしているラルに固定のペアはない。

「そうだ。固有魔法の”マジックブースト”で機動力のあるクルピンスキーには護衛機の群れへの対処に当てたい」

「そういうことなら了解です隊長」  
クルピンスキーが答える。

「……隊長」

「わかっている。孝美、”リフリゲーター”撃破後はそのままペテルブルグへ突入し現地の部隊と合流してよい。当初の作戦計画とは少し逸脱する形となるが構わん。あとでどうとでもしてやる」

「ありがとうございます！」

孝美本人も自分の願いが軍機を逸脱する命令違反となることはわかっていた。けれどもし、いざ現場に入ったときに我慢できるかわからない。そうした思いからの発言であったがラルはそれを受け入れ自分の裁量でかばうとまで言ったのだった。

孝美の発言の後、口を開くものがないのを見て、ラルが宣言する。

「よし、ではこれよりペテルブルグ開放作戦”スリウム Heim・スレファ”を開始する。全機発進用意！」

「了解！」

## 登場人物・設定まとめ

雁淵ひかり

↓扶桑皇国海軍第377航空隊特設欧州支隊。軍曹。502へは偽装入隊。

雁淵孝美

↓扶桑皇国海軍第22航空戦隊第253航空隊。中尉。佐世保の英雄。

グンドユラ・ラル

↓カールスラント空軍 第52戦闘航空団 第3飛行隊。空軍少佐。撃墜数世界第三位。

アレクサンドラ・イワーノブナ・ポクルイーシキン

↓オラーシャ陸軍 親衛第16戦闘機連隊隊長。大尉。オラーシャにおける基本戦術の祖。愛称はサーシャ。

エディータ・ロスマン

↓カールスラント空軍 第52戦闘航空団 第4中隊。曹長。最年長の超ベテラン。愛称はエディータ。もしくは先生。

管野直枝

↓扶桑皇国海軍 第343海軍航空隊。現在中尉。DESTROIヤーの異名を持つ。

ニツカ・エドワーディン・カタヤイネン

↓スオムス空軍 第24戦闘機隊 第3中隊。曹長。ツイてないカタヤイネンで知られるエース。

ヴァルトルト・クルピンスキー

↓カールスラント空軍 第52戦闘航空団 第6中隊。中尉。女好きとその手口から伯爵とあだ名されるが爵位は持たない。

下原定子

↓扶桑皇国海軍 遣欧艦隊第24航空戦隊 第288航空隊。少尉。欧州戦初戦からのベテラン。兵卒からの昇進。

ジョーゼット・ルマル

↓自由ガリア空軍戦闘飛行連隊「ノルマンディ」。少尉。趣味はつ

まみ食い。下原に餌付けされている。

・アウロラ・エデイス・ユートイライネン

↓スオムス陸軍大尉。丸太でネウロイと殴り合ったり湖で道連れにしたりしてスオムスの初戦で活躍した人。

部下からも慕われる上官でラルとも気安く会話するし腹芸をしたりもする。ただし、サーシャとは相性が悪い。

酒豪。

・レーヴェシユライホ

ハロネン

ミルヤ・オクサラ

ブルム・クヌーテイネン

レーツタ・ナツテイネン

↓アウロラ率いるユニット回収部隊のウィッチ隊員達。このほかにも一般兵がいる。レーヴェシユライホとハロネンのみ小説に名前が出ていたため名前のみ。他の三人はオリジナルウィッチ。レーヴェシユライホのほうはどうやら副官らしいので階級をつけるとしたら少尉だろうか。

全員酒飲みで、よく格納庫にたむろしては酒瓶を開けている。敵の包囲下でも余裕を忘れないことから皆ベテランであることがわかる。そんな陸戦ウィッチのストライカー付きというスオムスの虎の子をラル少佐はどうやってひばって来たんだろうか。

・西沢義子

↓扶桑にたまにいるすごい強いエース。階級は飛曹長。どのぐらい強いかというと扶桑最強の若本の同期で本人たちもスーパーエースな坂本美緒、竹井醇子に西沢にはかなわないと言わせた。欧州戦序盤から頭角を現し駐留していた土地の名からリバウの魔王とも呼ばれた。豪快かつ奔放な性格とは裏腹にその機動は忍者の如く相手の背後をとる。同じ三羽鳥の坂本、竹井とは唯一師匠筋が違う。

・エイラ・イルマタル・ユートイライネン

アレクサンドラ・ウラジミールロヴナ・リトヴァク

↓元は501部隊に所属していた二人。それぞれ少尉と中尉で

サーニヤの方がえらい。サーニヤというのは実は愛称。どちらもスーパーエースでエイラの方はスオムス最強。未来予知の固有魔法により被弾経験なし、実践でシールドとか使ったことねえわ！というすごい奴。サーニヤの方も夜戦のエキスパートとすごくかわいいということまで有名らしい。

ガリア開放により501部隊の存在意義がなくなったことで解散されたのち、撤退戦の最中に生き別れたというサーニヤの両親の情報を得るべくスオムス軍を頼っていた。その最中に502を訪れたこともあったがペテルブルグが包囲されたという報を聞き突入を敢行した。なお、行くべきかどうかうじうじ悩むエイラをサーニヤが引つ張った形である。

実はどこぞの世界線発進しまっすっ！の如く再結成される501部隊に参加できないかもしれない事態にある。タイムリミットまで一月。

・ハンナ・ヘルツタ・ウインド

↓ニパの元同僚。愛称はハッセ。24戦隊からエイラ、ニパというエースが転出したことで後輩達が不安がると考え自身はスオムスに残る決断をした。507がスオムスの、それも訓練校のあるカウハバに設立されるということで部隊長への就任を承諾した。

ニパとはギクシヤクしたこともあったが、仲直りした今では贈られたセーターを常に着ているくらいに仲良し。特に血縁でも無いのに顔が異様に似ているので二人が一緒に居ると周囲が混乱する。胸の小さい方。

・迫水ハルカ

↓扶桑海軍中尉。507の前身であるスオムス義勇独立飛行中隊の頃からの古参兵。スオムスに名を轟かすレズ。当時の上官である穴拭智子中尉を映画『扶桑海の閃光』で知り、同じスオムス派遣となつてからはことあるごとにセクハラを繰り返した。年齢的な問題からか中尉がスオムスを離れてからはその毒牙は他のウィッチ達へと向かうようになったらしく、今のカウハバは魔境魔窟と呼ばれている。

・ヴェスナ・ミコヴィッチ

↓カールスラント空軍曹長。出身はオストマルクという国なのだ

が陥落後はカールスラント空軍に所属した。ロスマンやクルピンスキー、ラルらと同じJG52という部隊に所属していた。ロスマンの教え子の一人。

ロスマン、クルピンスキーと微妙な関係だったが二人の関係を見て振り切った模様。その後、異国の新人を手取り足取り教えることに。彼女の未来はどっちだ。

・リー・アンドレア・アーチャー

↓リベリオン陸軍中尉。タスキーギ・エアウィッチという部隊に所属していた。同部隊はフリカ系のみで構成された部隊で爆撃機護衛に投入されていた。

507では貴重な常識人枠。ウィンドが来るまではレズ、レズ（予備軍）、新人に囲まれて苦労していた。今は予備軍が落ち着き、ブロイも一人前になり、レズを手玉にとれる隊長が就任されたことにより眉間からしわが消えた。

・クラマース・ブレンガーム

↓シヤムロ王国出身、曹長。エースでも何でも無かったが勉強にと連合軍に出向させられた。5071番の新人の座を三隅に譲った。アジア出身で扶桑以外のウィッチは現状彼女だけ。

小柄褐色黒髪ボクツ子という属性過多。一時期行方不明となるもトナカイに乗って帰還したという伝説を持つ。あだ名のブロイは宝石という意味らしい。

・三隅美也

↓ひかりと同じ佐世保海軍兵学校の同級生。欧州派兵を巡ってひかりと戦う。

ひかりがカウハバに行った筈が何故か現地からは派遣が催促されたことから行われた二次募集にてひかりを追って欧州へ。現地到着後早速ウエルカムネウロイの被害に遭うが迎えに来たヴェスナとともにこれを撃破。以降はヴェスナから指導を受けると同時にレズから守られている。

・502の整備部隊の皆さん

扶桑海軍、カールスラント陸空軍、オラーシヤ陸軍からそれぞれ派

遣されている人たち。それぞれの国に加えオラーシャ部隊はジョゼのユニットをカールスラント部隊はニパのユニットとストライカー回収部隊のユニットを担当している。

クラッシャー共のせいでカールスラントと扶桑の部隊は仕事が多いが元々担当する人数が多い分整備部隊の規模も大きい。1番小規模なのがオラーシャ。

ペテルブルグが包囲されてからはユニットの数が減ったこともあり余ったリソースを戦力維持に当てるべく部品の自作や流用、改造を行っている。

・マルティン・ブロホノウ

ペテルブルグ基地の防空部隊で指揮を執っていた人物。現在はペテルブルグ市に取り残された部隊のまとめ役をしている。彼より上の階級の者が死んだり、拒否したためお鉢が回ってきた。欧州撤退以前からの老兵。

モデルは機動戦士ガンダムMSIGL00のマルティン・ブロホノウ艦長。

・雁淵両親

↓父親は扶桑海軍の電信所勤務。原作よりも母親がはっちゃげぎみ。娘がそろって欧州に行つてから何故か家に高級家具が増えた。

・谷中さん

↓ひかりの周の修行の為に所有する山をあっちこっち掘り返されたかわいそうな人。名前は小学生時代の友人から。

・北郷章香

↓扶桑海事変以前から名の知れたベテランウィッチ。扶桑海事変においても活躍、その後とある事件によって負傷し引退。現在は佐世保海軍航空学校で教鞭をとる。シールドを張れなくなつて久しいが燃費の良いストライカーを回すくらいなら可能。欧州に行つたひかりの後援としていろいろ手回ししている関係でラルともつながりがある。

・国崎教官

↓教官の一人。欧州行に備えた促成訓練でひかりに仕込んだうち



の一人。原作にも名前が出てる。

・目白／秋山／菊田／磯野

↓ひかりと美也の学友たち。欧州行の選考の後は美也も交えた交流があった。飽きるほど『扶桑海の閃光』を見た。

・第三航空戦隊の人たち

↓司令長官は大沢義三郎。艦載ウィッチ隊の隊長は新藤美枝。508の隊長として期待されているが先行きが不透明で困っているうちに三航戦に所属したまま現在欧州はスオムスにて奮戦。502507と絡ませるのを忘れられてたかわいそうな人。史実でもエースで紫電改乗り。

・マンシユタイン元帥

↓カールスラント陸軍のすっごい偉い人。グリゴリー出現により北方戦線が脅かされたことにより、カールスラント本国の奪還が危ぶまれたことにより送り込まれた。そのため、元から展開していた部隊に加え連合軍からの増援や本来指揮系統の違う502を支配下に置く。

雁淵姉妹の配属問題に口出しをしたことにより502の隊員から蛇蝎のごとく嫌われている。グリゴリーの討伐後は本国に戻るため配属問題に口出し出来なくなる事から502はグリゴリーの討伐を急いでいた。R t Bにも一瞬登場。なお今作世界線では出ないことが決定している模様。

・マンネルハイム元帥

↓アニメではちよろつとしか出てなかった人。実際はちよつと引くくらいの経歴を持つすごい人。スオムス軍の所属なのでグリゴリー討伐にもオブザーバーとして関与したが作戦失敗により予備戦力のスオムス軍を動かすため自身の司令部に戻った。

・スオムス空軍第26戦隊

ラウラ・オラヴィ・シヴォ

マツテイ・スカネン

イルマリ・ヨエンスー

ペンテイ・カレルヴォ・テヴァ

↓本作オリジナルウィッチ達。一応名前のモデルとなる人物たち自体は存在するがエースというわけではない。イルマリのモデル以外は全員戦死している。使用機材はファロットG・50だったが24戦隊のおさがりでF2Aバツファローが回ってきた。なお、主力である24、34戦隊はbf109を使っているのだがG型なため前線基準ではこいつも旧型。スオムスで一番いい機材を使っているのはエイラとニパのK型。

#### 抜けの多い用語解説編

・扶桑皇国

↓史実日本に相当する国。扶桑海事変を経てベテランが多く存在したこともあり戦争初期を各地で支えた。フリー素材大名が本能寺で死なずにウィッチに助けられたこともあり史実とだいぶ違う道をたどった。リベリオン大陸に瑞穂国なる国を打ち立てたりブリタニアとばちぼこに殴り合ったりオラーシャと殴り合い宇宙したり太平洋でムー大陸を発見占領したりした。

・ブリタニア

↓大英帝国に位置する国。欧州のほとんどが失陥したことで必然的に地位が上がったがやっぱりブリカス。各国から亡命してきたウィッチを自分のところで抱えて実質的な統合戦闘航空団を複数抱えている。よりにもよって本土防衛の要である空軍大將がやらかしたためでかい面出来なくなってる。ガリア開放後は微妙に影が薄い。

・カールスラント

↓ドイツ担当。第一次世界大戦がネウロイ相手に代わったことから敗戦もなく皇族が続いている。バカみてえな量のエースウィッチを抱えそれを惜しみもなく各地に派遣している。ブリタニアとは大違い。欧州撤退で海軍が消滅している。現在は南米にノイエ・カールスラントを建国し本拠地としている。ガリアとは違うのだよ

ガリアとは。

・ガリア

↓リアルルのフランスに位置する国。なにもいいところなく本土を失陥したあとは世界中に散らばり好き勝手に政府を立ち上げた。統合分裂を繰り返した後、理由もよくわからないままに本土から巢が消えたことでリベリオンとブリタニアの力に頼って逆上陸した。戦後復興に他国の脛をかじる気満々。共和派と王統派が足の引つ張り合いで愉快なことになっている。

・ ロマーニャ／ヴェネツィア

↓1番ややこしい国々。元はイタリアのはずなのだが分裂して。海軍が強いのがヴェネツィア、陸軍とウィッチが強いのがロマーニャらしい。ロマーニャの海軍はヴェネツィアのお下がりを使ってたりする。

・ リベリオン

↓史実アメリカ。ありふれる資源と人間で欧州の戦線をそこから支える。この国が無ければとくに欧州は丸々ネウロイに持っていかれた。ただしこの世界、なによりもウィッチが強力な中で原住民を排除し移民によって打ち立てられたこの国はウィッチの絶対数が少ないため通常戦力が中心。

・ オラーシヤ

↓ロシアっぽい国。史実ではこの頃もうすでにソ連だったがこの世界ではネウロイに粛清されたのか共産主義革命とかは無かった。国土が広い割に人が住んでいる範囲が狭い。それでも世界一の人口からくる陸軍の多さでその広い国土を防衛している。皇族が残っているだけあって長く続く家やウィッチの家系も多い。自国に手いっぱい政治的な動きが鈍い。

・ スオムス

↓フィンランドに当たる国。狭い国土とそれを覆う湖と森の国。典型的な弱小国だがネウロイの侵攻を片っ端から追い散らしたことで名を上げた。ウィッチもパイロットも異能生存体の割合が多い。陸軍も異様に強い。海軍だけ普通の弱小国。

・ バルトランド

↓スウエーデンかな？ スオムスの次はうちだと戦々恐々し、ス

オムスが輸入した兵器を横取りしようとしたりしてたらオムスが普通に追いついてた。

今次大戦では飛行隊の派遣に留めている。

・ストライカーユニット

↓現代版魔法の筈。足に嵌めて魔道エンジンを吹かすことで飛行する。

扶桑海軍は零式艦上戦闘機と紫電改。カールスラント組はbf-109のG型やK型。リベリオンはP-51、F6F、F4F等、他の国は多すぎてよくわからないので各自で調べて欲しい。

オムスでは補給が乏しく、他の地域以上に魔改造が進んでいる。

・固有魔法

↓魔法それぞれの特殊能力。ただし持っていないウィッチが大多数。治療や怪力と言ったシンプルな物から未来予知、魔眼と言ったいかにも魔法といった物まで様々。血縁によって引き継がれたり、遠く離れた国同士で同じ能力を持っていたりと能力の幅は広い。

一人につき必ず一つの能力しか持ち得ない。

・扶桑皇国海軍連合艦隊第一航空艦隊第三航空艦隊

↓扶桑皇国海軍、連合艦隊、第一航空艦隊、第三航空艦隊

”扶桑海軍”において戦時においては明治以来伝統的にすべての艦隊を一つのくくりとし”連合艦隊”と称してきた。”第一航空艦隊”はその中で大型の空母を集中配備した世界初の空母機動部隊であり”第三航空艦隊”はそれに属する1戦隊である。

中核となるのは雲龍型の雲龍と迅龍。

史実では第一航空艦隊はミッドウェー敗戦で42年に解体されたが、この世界では44年になって赤城が沈んだだけのため現存。

・空母雲龍

↓第三航空艦隊を成す空母の一隻。ストライクウィッチーズでは戦艦改装赤城型4隻・蒼龍型4隻・次期主力大鳳型2隻が就役、あるいは建造中であるが欧州の戦局に伴い空母の不足が問題視されたことよって計画された戦時急造艦。

主力空母はどれも建造に3年4年とかかることから計画された中

型空母である。カールスラントから導入された溶接対応鋼材により起工から就役まで1年半という記録を達成した。より大型のリベリオン製エセックス級に比べると船体規模で劣るため搭載数も2/3よりは多い程度。

史実雲龍型をベースに開放型格納庫やギャラリーデッキ等米空母の要素を取り入れることで搭載数を増している。太平洋では微妙に使いにくいともつばらのうわさ。

同型艦をガリアとオラーシヤに売り込んでいる。

・スオムス空軍 飛行第24戦隊

↓スオムスのエース部隊。エースがゴロゴロしている。本作ではニパ・エイラ・ハツセが登場。

・カールスラント空軍 第52戦闘航空団

↓カールスラントのエース部隊。エースがゴロゴロしている。史実でもごろごろしていて撃墜数ランキングの上の方はこいつらが占めている。本作ではラル・ロスマン・クルピンスキー・ヴェスナ、名前だけであるがエーリカ・ハルトマンが登場。

・扶桑皇国海軍 第343海軍航空隊

↓扶桑海軍のエース部隊。エースが何人かいる。史実では孝美や501の坂本、宮藤も所属していた。本作では管野のみが所属。

・第501統合戦闘航空団

↓欧州撤退に伴い欧州圏最後の砦となったブリタニアにおいてその防衛を担う戦力として結成された部隊。現在はガリア開放に伴い解散したため欠番。所属ウィッチは原隊復帰かそれ以外の道をたどった。

原作ストライクウィッチーズ主人公の所属部隊。

・第502統合戦闘航空団

↓来るべき人類反抗作戦のため結成された攻勢的部隊。ベルリンを目標に西欧圏を北方から攻撃する予定。ウラル戦線と並ぶ激戦区であるペテルブルグに駐留。そのこともあり隊長ラル少佐によって各国から名のあるエースがかき集められ定員11名直前。

原作ブレイブウィッチーズ主人公所属部隊にしてひかり(?)の所属する部隊。

・第504統合戦闘航空団

↓ロマーニャ防衛を目的とした部隊。アルプス山脈という天然の要塞に防衛された地中海域ではあるが同時に南東方面の戦線を支える生命線でもあるため結成された。

戦闘隊長である竹井醇子は501の坂本、欧州派遣艦隊の西沢と並んでリバウの三羽鳥と称されたエース。

・第506統合戦闘航空団

↓501によって解放されたガリアを防衛するべく結成することが決定された部隊。必要であることは間違いないのだが、ガリア側の部隊人員は貴族しか認めないという条件により参加人員が限られてしまい結成が507よりも遅れることになる。欧州撤退と扶桑海事変で年頃の貴族が払底していたこともあり、最終的に部隊をABの二つにわけB部隊は貴族以外からの人員で固められることになった。そのB部隊の人員が全てリベリオン人となったのはリベリオンとガリアとの間での裏取引があったなどということもあり結成前から国と政治に振り回されている部隊。

・第507統合戦闘航空団

↓ある意味では一番最初の統合戦闘航空団。欧州戦初期に小国スオムスへの援助として各国から派遣されてきたウィッチを一つの部隊に集中させたことが始まり。以降、年齢的な問題から人員の変遷を経てきた歴戦の部隊。当時の人員で残るのは現戦闘隊長である迫水ハルカと初代中隊長にして現名誉指令のエルマ・レイヴオネン、書類上のみ所属ではあるが現在はカールスラント技術省のウルスラ・ハルトマンのみ。

・第508統合戦闘航空団

↓空母保有国のみで結成される(予定)の最新の統合戦闘航空団。一応の目的は欧州逆侵攻に際しての会場からの援護となっているため攻勢的な部隊。

リベリオン海軍の要求で結成が協議されるようになった、というの

も今次大戦においてリベリオンは出遅れたという意識が存在することによって由来する。直前にヒスパニア戦役を経験していた欧州各国は言わなくても、扶桑海事変をうけて欧州へいち早く派兵を決定した扶桑など他国に対し、リベリオンは欧州が一斉に撤退を決めたところになって参戦した。そのこともあり、ウラル以東の東部戦線は地元であるオラーシヤと扶桑海から扶桑陸軍、欧州側は撤退した各国軍が各々の国を取り戻すことを目的にするために必然的に戦場の主役になるのに対し、必要であることは認められてもリベリオン軍はあくまで増援、援軍として一步引いた眼で見られていた。

海軍はさらに影が薄く、人類反攻の拠点であるブリタニアが防波堤の役割を果たしたことで大西洋における護衛の仕事も重要性が低く、欧州撤退戦以降は艦載機やウィッチを陸に挙げて貢献するも常に一線を張る各国陸軍に対しては一步立ち遅れていた。同じく海をわたって展開している扶桑海軍が戦争初期から展開していたことにより欧州防衛の重要なポジションに最初から組み込まれていることに加え、扶桑海事変からの経験豊富なベテランの多いウィッチは各国から重宝され、統合戦闘航空団の中核を担ったこともリベリオン海軍の焦りを助長させた。

ただし、508は結成に際してリベリオンが影響力を確保するべく太平洋司令部傘下に置かれたりと各国からの反発が強く、また、扶桑側が派遣を目論んでいた中心人員が直前になってどっかの少佐の手引きにより欧州502に所属してしまったりと問題が多くある。

詰まるところラルとひかりのせいで結成が危ぶまれている。

・念

↓漫画『HUNTER×HUNTER』に登場する技法。生命エネルギー『オーラ』を操作することであらゆる効果をもたらす。その本質は固有魔法の自作とも言える『発』で個々人の資質に合わせた特殊能力を発現する。とはいえ技法であるため発現には弛まぬ鍛錬が必要。また、自身の資質に合わない能力を強引に作り出すと色々不都合が発生する。

この世界においてはひかりが持ち込んだ概念。ストライクウィツ

チーズの世界において魔力の活用の幅は狭く、単純な身体能力の向上やシールド等の幾つかの術式のみで、応用は固有魔法や機械を通して使うのがせいぜいだ。

力を求めたひかりにとって、魔力と言えば某龍玉の気や某運命の魔術のような、元となる力を加工して扱うものであった。しかし、それに該当する術式と言うべき物はストライクウィッチーズの世界ではシールド以外直接戦場では用いられない。

魔力量で劣るひかりは原作でも魔力の操作精度を上げることでも魔力消費の多い試製紫電改を扱えるようになった。その事から、原作開始以前から魔力その物を操作することを修練することで原作以上に力をつけようと考えた結果、念の鍛錬を魔力の鍛錬に応用した。

身に纏う『纏』、一時的に出力を増す『練』、体から一切を漏らさない『絶』、体の何処かしらに集める『凝』、集大成にしてオーラその物の操作『発』その他応用編がある。

この世界における念の危険性としてウィッチ以外の男女にも魔力が発現する可能性があることである。銃以上に制御が利かない力がばらまかれることになりかねない。

現在念を知るものは502とそのストライカー回収部隊と西沢飛曹長のみ。502部隊には箝口令が敷かれているが、ラルとひかりは現場判断で制御が利く範囲でならばと考えている。



## 年末 i f

多くの国々が一つの陣営として参加する今次大戦。統合戦闘航空団もその例にもれず多種多様な国籍の人間が集まっている。そうなるに当然発生するのは国家間の文化の違いである。

そんな中で、どの国にも必ず存在する行事が存在する。即ち年越しである。

502が設立されてから迎える年末はこれで2回目。ともなればそれぞれの過ごし方にも予想がつくというもの。

「菅野さん、もう掃除はお済ですか？」

「ああ。つっても荷物を片した程度だが」

「じゃあ、始めちゃいますからその間は談話室にでも」

「頼むぜ」

年末の基地で慌ただしく動くのは3人。扶桑人の菅野と下原、そしてジョゼ。年の終わりはその年の事に整理をつけて新年を迎える準備をするという考え方は扶桑独自の物らしい。二人からその話を聞いたジョゼはその考え方に感銘を受けたのか基地中を徹底的に掃除して回るようになった。

菅野自身もできることから自身の部屋の整理や普段ならやらないようなストライカーの点検などをやって他国の整備班から気味悪がられたりしていた。

「あれ、下原いねえのか？」

菅野が厨房を覗くと、最低限の処理をされた食材がいくつか出っっぱなしになっているのが見えた。部隊一料理が得意な下原は年末と年越しということとでそれのような料理を作っているはずだった。菅野もそれを手伝うつもりで訪れたのだった。

おかれていた胡桃を飴で薄く包んだものをいくつか拝借し、口に放り込みながら基地内を歩く。下原が料理を放置してどこかに行くというのに菅野は違和感を覚えていた。とはいえ何か問題が発生したというわけでもないだろうと思いつつ談話室までくる。

「お、思ったより人がいるな」

中へ顔を出せばそこには4人がいた。それぞれが別の事をしていたがソファやロッキングチェアでくつろいでいることに変わりはない。

「カンノじゃん。今日は遅かったね」

「部屋を整理してたんだよ。お前らの部屋にもジョゼが行ってるんじゃないのか?」

3人掛けのソファを占拠しながら雑誌を読んでいたニパが管野に顔を向けてくる。その声で管野が来たことに気づいたほかの3人もそれぞれの作業を中断して顔を上げる。

「ああ、僕たちのところにも来たよ」

「というか追い出されちゃったわ。掃除の邪魔だつて」

「汚くしていたつもりはないんですけど……」

上から順にクルピンスキー、ロスマン、サーシャの発言である。なお、ジョゼ的にクルピンスキーとサーシャの部屋はアウトだった。大人の葡萄ジュースの空き瓶が捨てられていないままなのと機械油の臭う部屋はNGだった。

「いらぬもんを捨てて気持ちに整理をつけるって意味もあるから追い出したら意味ねえ気もすんだがなあ。ああ、そうだ下原見てねえか?」

「下原さん? 厨房にいるはずじゃ?」

「つて思ったから手伝いに行ったらいねえでやんの。おまけに食材出しっぱなし」

管野が料理を手伝うという発言にギョツとしたようなニパと伯爵が顔を近づけてコソコソ話しているのを横目に見ながら管野が言う。厨房の様子にロスマンとサーシャも違和感を覚えたのか思案顔だ。

「まあ、知らないんじゃないや。隊長とひかりは?」

「隊長なら今年最後の書類仕事よ」

「隊長が年末にまで仕事を残すたあ珍しい。手伝わなくていいのか?」

「部隊長直筆のサインが必要な書類だったから仕方がないわ。あと、仕事自体は余裕をもって終わらせてあったのよ。飛び込みでスオ

ムスから送られてきた補給物資に関する書類だったから仕方がないわ」

白海に出現した新たなネウロイの巢によって扶桑やオラーシヤからの北極海周りのルートが遮断され補給が先細りしていった502。最近になつていよいよ限界かというところでスオムス側から補給の申し出があつた。申し出があつたとは言うが実際は隊長が手を回したのではないかと管野達は噂しあつていたが真偽はともかく補給があつたのは確かで、年末年始にちよつとした料理をといたのもこれが無くてはできなかった。

「じゃあ隊長は仕方ないな。となると後居場所がわかんねえのはひかりだけか」

雁淵ひかりは502の新人である。下原以来一年ぶりの追加人員であつたが、実は本来の配属は姉である雁淵孝美の方であり、ひかりはカウハバにある507へ送られる予定であつた。ところが、アルハングリスク港へと向かう最中の北極海上にて突如出現した新たな巢”グリゴリー”による奇襲を受けた際に負傷し意識不明のまま扶桑へと送り返されてしまった。

そこで、何を考えていたのかひかりは502へ所属したいと居合わせたラルに直談判。ラルも奇襲を受けた際のひかりの動きとにより姉と近い固有魔法から所属を許可した。

繰り上げて飛行学校を卒業したひかりだが、飛行には問題ないことや炬燵を持ち込んだりといったことから部隊に受け入れられ始めていた。

「普段ならもうとつくに起きている時間でしょうし。自室にいるのかしら」

「でも、それだったら私たちのようにジョゼさんに追い出されているはずじゃ?」

伯爵やニパも交じつてあれこれ言っていると、廊下の方から何やら聞こえることにロスマンが気付く。

「……?なにかしら?廊下が騒がしくない?」

「本当だ。何か聞こえるね」

そう言つてクルピンスキーが廊下に面した扉のハンドルに手をかけると、開ききる前につま先がねじ込まれそのままか誰かが体を滑り込ませてくる。欧州派遣の扶桑ウィッチの間でよく使われるようになった陸軍式の行李を抱え、クルピンスキーを押しつけて入ってきたのは今まさに話題になつていたひかりだった。

「菅野さん、窓開けてください窓！」

「んなクソさみいなに何言つて「良いから早く！」ああ？ほらよ」

菅野は自分の横にあつた窓のカギを指先で押し上げる。開けるのくらいは自分でやれ、というつもりでひかりに視線を戻そうとする。その半ばで影が視界をよぎり、ばつと振り向けば開け放たれた窓。「なにしてんのさひかり！ここ二階だよ！」

ニパが窓辺へと駆け寄り、続いて伯爵たちも視線を外に向ける。遅れて菅野もみれば、雪原と化した基地内に足跡だけが残り、しばらくして降り積もる雪に埋もれた。魔力を使ってよく見ようと目を凝らしてみるがそれすらも数秒で消えた。他の者も同じようだ。

「ああ、まあ、ひかりちゃんなら平気なのかも？」

「野生児かあいつは」

無事そうなら良い。それより寒いから早く閉めてと窓を閉めようとしたところでまたも部屋の扉が開け放たれる。勢いよく開いたそれは蝶番の限界まで行ったところで今度は跳ね返って戻っていく。それを手で止める娘。

「に、逃げられた」

それは、菅野がつい先刻まで探していた下原その人だった。制服の上から首からはエプロンをかけ、右手には包丁を逆手に握っていた。

その後ろには三角巾を頭に巻いたジヨゼもいた。

「おいおいおいおい」

「なに？なんなの？」

思わず混乱する隊員達。

見かねたサーシャが切り出す。

「し、下原さん？色々聞きたいことはあるのだけど、とりあえずその包丁はどこかに置いてもらえないかしら」

「えっ、あっ！み、皆さんこれはその違うんです！」  
そう言つて下原は後ろ手に包丁を隠す。

先ほどまでの息を荒げ、迫力のあつた姿とは打つて変わった姿に他の隊員たちもいくらか落ち着く。

「包丁を持つて追い回すだなんてもしかして下原ちゃんとひかりちゃんつてそういう関係だったりするのかい？」

「何言つてんのさ伯爵。きつとあれだよひかりがつまみ食いしちやつたんだ。」

「いや違うね。あれだ、なまはげだ」

「どれも違います！」

またもヒートアップしそうになった下原をサーシャが落ち着かせる。原因となつた三人はロスマンに黙らされその場で正座させられる。

下原が再度落ち着いたところでサーシャが事情を聴く。

「それで、いったいどういうことなんです？いくら何でもやりすぎじゃあ」

「いえ、包丁は手に持つていたからついそのまま持つてきちやつただけで……」

流石に自分の状況がまずいと気づいたのか目が泳ぎ、しどろもどろに答える下原。見かねたのかジョゼが代わりに答える。

「実はひかりさんがまだ食料を隠し持つていたみたいで……」

「なに!？」

管野が反応する。

補給難により日々の食事ですら侘しいものとなつた502。個人が所持していた缶詰や保存食品までもが供出させられたりもしたのだが、その中でひかりはかなりの量の食料を所持していた。欧州では扶桑の食品が貴重になるとわかつていたため持ち込める限界の量、なんなら姉の分のスペースまで活用して保存のきく食材を持ち込んでいた。

供出に当たつて本人の抵抗もあつたが味の濃い缶詰やイワシのオイルサーディンに隊員たちは舌鼓を撃つた。

それがまだ残されていた。かれこれ数年のほとんどを欧州で過ごし、扶桑食に飢えていた菅野からすれば見過ごせない。そしてそれは食べることに大好きジョーゼットちゃんとお料理大好き定子ちゃんも同じだったというわけだ。

「ひかりさんのお部屋をお掃除しようとしたら邪魔はしないからいさせてくれていいの。そしてあの行李を見つけてしまって……」

「ジョゼはそれも整理しようとして開けようとしたところでひかりさんともみ合いになったみたいでその中でふたが開いてしまったそうなの」

「中にはいろんな缶詰が……。文字は読めなかったけどいっぱい種類の……。どんな味なのかしら……」

「ほかにも乾燥した昆布みたいなのもあったみたいで、それを見られたひかりさんはそれを抱えて逃げ出してしまって、それをジョゼが追いかける途中で私もそれに合流したんです……」

曰く、厨房の前を慌ただしく走り去っていったのを追いかける途中でジョゼから中身を聞いたらしい。以前、下原が扱ったことがあったため昆布や他の食材についてもいくつか見当がついたジョゼはそれを下原に伝えたいらしい。

「ふーっ、そういうことなら俺も手伝うぜ」

「だね、水臭いじゃないか頼ってくれてもいいんだよ？」

味に飢えた菅野とお祭りごとも下原の料理も大好きなクルピンスキーがひかり狩りに参加表明。

「そうときままりや追うわけだがどこ行きやがったアイツ」

菅野が窓に目を見やる。外の視界はそこまで悪くないが降り積もる雪によって足跡は当に埋まっている。

「そうね。サーシャさんどっちに行きましたか？」

「えっ、足跡は建物に沿ってそのまま滑走路の方へ向かってましたけど」

「なら早くいくわよ。恐らく格納庫にとどまっているということもないでしょうから」

サーシャに声をかけて行先のめどを立てたのはロスマンだった。

サーシャはひかりの足跡をよく見ようと魔力を使って見ていたことをロスマンは視ていたのだ。

「うえっ！ロスマンさんも参加すんのか!？」

「あら、いけない？どのみち暇を持って余していたし捕まえたら景品まであるなんて参加一択じゃない」

ロスマンはヒスパニア戦役からのベテランであり教導を行うことからもお堅い教官という印象がある。けれど実際の本人の気質は享樂家であり給料を高級キャビア缶につき込んでいたりもする。

「ここまでノリがいい先生が見れるのも年末だからかな」

「かわいそうなひかり……サーシャさんはどうするの?」

「えっ、そうですね。食料類回収令に違反していたってことで何か海産物があったらそれをもらうことにしましょうか」

こうしてペテロパブロフスク要塞を舞台としたひかり狩りが始まった。

格納庫にたどり着いた一行は年末にも拘らず作業着を着た整備班たちと遭遇する。何もしないでいるのはむしろ落ち着かなくなってしまうと語る彼らからひかりが格納庫に入ってきていたことを知る。そのまま基地内へと入る扉を抜けていったとの証言から基地内へと逆戻りする。

「外から来たということは雪でぬれた足跡があるはずよ」

「あつたぜこつちだ!」

足跡が伸びるのは基地の比較的外側を通る廊下。そのまま後を追えば普段は使われていない区画へと入る。

「こつちはあんまこねえからよくわかんねえな」

「元が要塞だからね。複雑なものも仕方ない」

格納庫から距離があるところまで来たことで足跡を作っていた水分が減り、ほとんど用をなさなくなっていた。

基地内は複数階に分かれており、手分けして探そうかと話し合われる中、ふいにロスマンが足を止める。

「どうしたの先生?」

「あの談話室でひかりさんはジョゼさんと下原さんを撒いたと思っ  
たはずよ。外にはいられないから格納庫、格納庫には人がいたからこ  
の区画へと来たはず。逆に言えばこの区画まで来てひかりさんはよ  
うやく腰を落ち着けることができたということ。腰を落ち着けるこ  
とで今後どう動くべきかを考えている、と私は想像したのよ」

「おお、探偵ものみたいだ」

「つまり、どういうことなんですかロスマンさん？」

「つまり、——そこよ！」

突然振り返ったロスマンが普段から持ち歩いている指示棒を縮め  
た状態のまま投げる。

「チィ！」

バシツという音と共に払われたそこにいたのはひかりだった。

「ええっ、そんなところに！」

「忍者じゃないんですから……」

ひかりは上の階を支える梁をアーチ状に塗りがためた部分の裏に  
陰に潜むようにして貼り付いていたのだった。

「私がすでに”円”に手を出していたことは知らなかったでしょう  
！」

指示棒を払いのけたひかりは重力に任せて廊下へと落ちると、ゴム  
ボールが跳ねるかのように足で跳びそのまま菅野達に背を向けて走  
り出した。

「なんで追手が増えてるんですかー！」

「待てー！・ひかりー！俺にも食わせろ！」

「イヤです！」

魔力で足を強化して爆走するひかりに残りの面子も同じように強  
化して走り出す。系統ごとに強化に差が出るため、徐々についてこれ  
ないものが出てくる。

「これは私が買ってもらったから私の物なんです！」

「けち臭いこと言わないでください！私もおいしい物食べたいです  
！」

「食料品供出令は絶対ですよー！私もキャビア出したんですから」



ギヤアのギヤアのと言い合いながら逃げるうちについて最後まで追いつがっていた菅野もひかりを見失う。

「クソっどこ行きやがった!」

「これは参った。完全に見失っちゃったよ」

見わたす範囲には人氣が無くこの先には隊員たちの私室がある宿舎棟しかない。宿舎等はほぼC字状になる基地の片方の端となっておりここから出るには途中で他の階に行くのを見逃してしまったか吹雪の中外に出たかだった。外の吹雪はかなり強まっており、幾ら強化したところで愛をとられて動けないだろう。もしかすれば逆方向に逃げられたかと菅野が踵を返そうとするとロスマンたちが追いついてくる。

「いいえ、ひかりさんはこの先の宿舎にいるはずよ」

「なに? なんか理由でもあんのか?」

「もちろん。強化系のひかりさんに私たちじゃ追いつけないことは最初から分かっていたもの。だから途中からあえて逸れるようサーシャさんたちには言っておいたの。私の”円”を中心に他の道にそれぞれ向かわせてね。だからひかりさんには宿舎しか逃げ場はないってワケ。宿舎から他への通路の内ここ以外の階の防火扉も閉じてもらったわ」

唯一の強化系である二パをそれとなく追手のチームから離脱させ、先回りして宿舎という袋小路を作らせ、同じく向かないサーシャ・ジョゼ・下原とロスマンで網を広げるようにして追い込んだというわけだ。

「僕たち何も知らされてないんだけど」

「聞かれなかったから」

「どうやって聞けっただよ……」

本人は景品付きのイベントと軽い風に言っておきながら披露された本気の追い込み漁に

菅野とクルピンスキーが軽く引いていると他を担当していた三人が集まってきた。

「よし、行きましようか」

「待つてくださいい、ニパさんがまだ……」

「いえ、むしろだからこそよ」

そう言うところスマンは宿舎等へと延びる廊下をにらみつける。

「ニパさんは一番最初にここへたどり着いているはずなの。だから、私たちと合流するのならサーシャさんたちよりもニパさんの方が先。それが来ないということは……」

「合流できない状況にされたってことですか……!」

ニパは誰よりも早くこの宿舎棟に来ている。他の階をふさぐという仕事があつたとしても十分余裕があるはずなのだ。

「まさかひかりがそんな直接的な手段に出てくるなんてな……」

「こりゃあこの先油断しないほうが良いかもしれないよ。いっどこから奇襲を受けるかわからない。幾ら数の利があるとはいっても向こうも必死の抵抗をしてくるだろうからね……!」

正直ノリで食料類供出令違反とか言っていただけでそこまで熱意を持っていなかったサーシャが何だか凶悪犯を追い詰めているみたいになってきてしまった、とか思う中、追撃チームは宿舎へと足を踏み入れた。

宿舎は3階建てで内、ひかりを追撃チームが追い込んだのは二階の渡り廊下からだった。

このうち、ウィッチの宿舎として使われているのは2階と3階のみで一階には部屋を持っている者はいない。冷気は下へ向かう関係上とても冷えるからだ。よって追撃チームは二手に分かれ、2階渡り廊下を守るサーシャ・クルピンスキー組と突入するロスマン・菅野・ジョゼ・下原組だ。均等に分けなかったのは接敵する可能性が高い突入チームが確実に捕らえるため、戦力の逐次投入とならないようにするためであった。

ひかりは追手チームを待ち伏せ不意打ちで仕掛けてくるだろうというロスマンの読みにより、もし接敵した場合にはその場で無理に捕まえることを目指さず、逃げ出した場合に守備チームと挟み撃ちにすることを目的とした二段構えの策である。

チーム分けを行い、突入した菅野達。二階を端まで見て回り、三階

へと上がる。

「これは……!」

「ドアが全部開け放たれている!」

三階にある扉が全て開かれ、廊下を半ばまで塞いでいた。見通しが悪い上、体を隠すことのできる影が大量に発生し奇襲を仕掛けやすくなっている。

「ううううは、早く閉めちやいたい……」

「まずい。ジョゼの掃除欲が高まっている」

「落ち着いてジョゼ。慎重に行きましょう」

一つ一つ慎重にドアを確認し次いで部屋も確認する。一度に連続して襲われることの無いよう各々距離を取り、複数方向を見張る。そうして廊下の半分へとたどり着こうかという時、突然、窓が開け放たれ目の前にいた下原が組み敷かれる。

「きゃん!」

「ふおおっと、ふおほなひふひへへね(おおっと、おとなしくしててね)」

「!?ニパ!」

「ニパさん!?!」

窓から奇襲をかけてきたのは警戒していたひかりではなく行動不能となっていると予想されていたニパだった。

「ふおふおん!ふおうふふあえおわふあふいなふあふおのふあうふあふあふあえもふあひふあふあへひえひはへふつふえふあふは! (ふふん!スオムス生まれのワタシならこの寒さのなかでも待ち構えていられるってわけさ!)」

「何言ってるのかぜんっぜんわかんねえよ!つか、お前何食ってるだ!」

「むぐつモグ、ゴクン。これ?シャケトバって言うんだってこつち来てから作ったらしいんだけどおいしいよ。焼いてもいいらしい」

口の中にあつた欠片を飲み込んだニパがセーターのポケットからちらりとみせたのは赤い棒状の物。鮭の切り身を干して作る東北の風物詩。お酒に合うが塩味が強く、また酒のうまみが凝縮されている

こともあつてそのままでも非常においしい。

「買収されてんじやねえ!」「なんで買収されてるんですか!」「」  
菅野達が思わずそう叫ぶ。

「だってひかり可哀想だったし、手伝ってくれたらまたくれるって  
言ってくれたしね」

「うがぁ!ぶっ飛ばしてそれも貰ってやる!」

「待つて菅野さん!」

飛び出そうとした菅野の襟首をロスマンが魔力で強化した腕で捕  
まえて止める。グエツという声と共に菅野がクタアとなるが気にも  
留めずロスマンがニパに話しかける。

「ニパさん、雁淵さんはどこにいるのかしら?」

「え、言うわけないじゃん」

「……」

「……」

「しまった……やられた!」

そう言いながらロスマンが廊下を振り返る。つられてジョゼも見  
るが特に変わった様子はない。

「ど、どうしたんですかロスマンさん」

「ひかりさんに逃げられた!」

「ええ!」

時間が無いと言外に言うかのようにロスマンは早口でまくしたて  
る。

この場にいるニパは囷兼足止めであると。

「じゃあ、ひかりさんは!」

「もう封鎖チームに仕掛けてあるかあるいは……」

「ちなみにひかりは自分の部屋から鍛錬用だつていう木刀持ち出し  
ていったよ。すごい重たい奴」

つまり、本来なら封鎖チームが僅かなりとも時間を稼ぐ隙に突入  
チームが全力で戻り挟み撃ちにする計画が、突入チームが足止めを受  
けてしまった上、ひかりに武器が渡ったことにより封鎖チームが危機  
を告げるよりも早く制圧され、突破されてしまったということだつ

た。

「や、やられた」

「また振り出しかよ！」

ニパに組み敷かれた下原とロスマンの手の中の管野が悔しそうに呻く。それを見たニパは、

「んー、こんだけ時間稼いだら十分かな。あのね、ひかりはこの追っかけっこをいつまでも続けるつもりはないって言ってたよ」

「……どういう意味かしら」

「じゃあ、それを教えるためにサーシャさん達とも合流しに行こうか」

そう言うのとニパは下原の上から退き、手を指しだす。素直に下原はその手を掴み、立ち上がる。管野も立ち上がり、ニパを先頭に宿舎の二階渡り廊下まで向かう。

入り口には頭にたんこぶを作って倒れる伯爵と特に服の乱れたところもないサーシャが立っていた。

「……どういう状況？」

「二階からひかりさんが上がってきて足止めしようとしたのだけど、何を言うまでもなくクルピンスキーさんがのされてしまっ……」

「で、降参したってことか」

「木刀でガンツはちよつと……」

クルピンスキーを小突いて起こし、道すがら事情を説明しながらニパに続いて歩く。

「この先って、事務棟？」

ジョゼの思った通りニパの目的地は事務棟。そのまま一行がたどり着いたのは、

「執務室じゃねーか！」

「てことは……」

「カタヤイネン他六名入ります！」

「ああ、入れ」

部屋の主からの許しもあり、一行が部屋に入ると執務室の正面にある机にラルが座っておりその後ろに行李を足元に置いたひかりがニ

ヤニヤ笑いながら立っていた。

「それで？」

「六人から聞きたいことがあるそーです！」

そう言つてニパはひかりの方へと歩いていってしまふ。ひかりはとうとうと行李から巾着を取り出すとそれをニパに渡す。パンパンに膨らんでいる上、通常の物よりも大振りなそれをニパは開くと、中からひとかけの鮭とばを取り出し啜える。

「んにやろ〜！」

「雁淵の持つ食料品についての話だろう？」

「はい……」

「それに対する返答は”認められない”だ」

「食料品の供出はあくまで非常時故の判断だ。その停止を明確に告知していなかったのはこちらの落ち度だが今改めてその効力停止を通告する」

隊長の決定には流石に何も言えない、ということを感じたひかりは自らの”円”に単独で行動するニパが引つかかった時点で行動を開始した。足止めを任せている間に隊長に助けをもらおうようお願いしたのだ。

「他になにかあるか？」

「いえ、ありません」

「では、退出せよ。……雁淵」

「はいはい。何にしますかー？羊羹・落雁・和三盆とありますけどあと一つだけですからね？」

「うむ。……よし和三盆をくれ、茶もだ」

「りよーかいでーす」

悔しがる管野を抑えたりしながら各々談話室へ戻る。その中で下原だけは厨房へ向かう。作りかけてた料理の惨状を目にし、そっと一息ついて作業にかかる。その日の夕飯も豪華なものにするため手間がかかるが年明けに向けた料理の用意も必要だ。複雑になる段取り

について思案しながら腕を振っていると厨房の入り口から声をかけられる。

「下原さん」

「あつひかりさん」

行李を抱えたひかりが厨房へ入ってきていたところだった。

「あの、さつきはごめんなさい」

「お願い聞いてくれたら許してあげてもいいですよ？」

「お願いですか？」

「私お正月はどーしても伊達巻が食べたい人でして……」

「伊達巻ですか!？」

渦上に焼いた卵焼き、のような物。ひかりはこれの甘い味付けが好きだった。新年の集まりでは誰よりも早くそれに箸を伸ばし、どの具材よりも早く空にする。何年文句を言われ続けてもそれを続けた悪ガキだった。

「つく、れないことはないですね。白身の魚はあります」

「そして、それを私にちよおっと多く持つてくれるならこれもあげます」

「そ、それは昆布!」

後ろ手に行李から取り出されたのは折りたたまれ、ひもで縛られた乾燥昆布。大ぶりなそれは一目で良い出汁が出るだろうと下原に思わせる。

「ふふふ、これさえあれば下原さんの腕ならかなり扶桑のおせちを再現できるはず……」

「ち、ちなみに煮干しなんかは……」

「あつちやうんだなこれが!」

「そそそそれもください」

瓶に詰められた煮干しは既に頭と内臓が取り除かれ、料理をする人間によって処理されたものだと一目でわかる。ひかりはこれを実家の料理場からパチってきた。

「ならわかつてますね〜?」

「おいしい伊達巻を作らせていただきます」

「お願いしまーす！単純作業で良ければ手伝いますから言ってくださいな」

「あけましておめでとうございます」

「おめでとうございます」

年が明けて元日。扶桑組の朝出会って直後の一糸乱れぬ挨拶にギョツとされたりもしたが朝食の時間に全員が集まった。

「今年は扶桑風づくしですよー！」

「うおおお、おせちだ！」

目の前に並べられた料理に興奮する管野。使っている食材の微妙な違いこそあれど扶桑の調味料で味付けされ彩華やかなそれは懐かしいのそれだった。

「隊長！早く、早く！」

「ああ。では、皆今年もよろしく。頂きます」

「いただきます！」

新年最初に騒がしさに食堂は包まれるのだった。



## フリゲーター型ネウロイ

「オラーシャ第13独立戦闘機連隊が交戦開始」

「スオムス第15、16独立大隊から接敵の報告」

「リベリオン第17連隊長戦死！指示を求めています！」

”スリュムヘイム・スレファ” 作戦が開始された。

ペテルブルグを囲むネウロイの軍勢に対し北と東側の二方向から攻撃を行う。北側はVKT線を守る部隊が攻勢に出ることによって敵を誘引し、東側からは大口径のりゅう弾砲による長距離射撃による準備砲撃によって敵を混乱させることで突入を援護する。果たしてネウロイが混乱するのか、という問題は昔から議論されているがはっきりしていない。そのため、準備砲撃も短時間の全力射撃によって少しでも数を減らすのが主流となっている。

航空機隊は戦闘機を中心に広い範囲で戦端が開かれる。わずかながらも制空権をとったところから地上部隊の援護に襲撃機が投入され、押されているところがあれば予備の部隊や余裕のある部隊から戦力が抽出されるのを繰り返す。

空陸両方からの同時攻撃による開圀、その後の戦線の維持を第一段階とするこの作戦。その歩み出しは当初の想定から大きく外れるものではなかった。陸軍が接敵し交戦、同時に空軍も交戦を開始するが次の段階への移行は空軍が”フリゲーター”を撃破してからとなる。

そして、その任を与えられたのが502JFWはといえば、

「クソ、うざってえ！」

「何をしている菅野、雑魚に構わず進め」

「無茶言うなよ隊長！」

フリゲーターへと向けて進むことが出来ずに立ち往生していた。

当初の予定では護衛の空戦ネウロイをサーシャ率いる分隊は全速で振り切り、振り切ったそれに対し別動隊が足止めを行うはずだった。しかし、ネウロイ側の展開が速く、逆にサーシャ達の分隊が足止めを食らう形となってしまった。そのため、足を止めてその場での迎

撃を余儀なくされたサーシャ分隊に後を追う形で進軍していたラル達の援護部隊が追い付いてしまった。

追いついたラルが辺りを見渡せば、分隊はそれぞれロッテを維持してはいるものの苦戦していることが見て取れ、このままではいづれ磨り潰されてしまうと判断した。

「どうする隊長?！」

「エディーター! 発煙弾に詰め替えろ! サーシャ、予定変更だ。煙幕展張後にダイブして加速をつけ、包囲を突破してから折を見て登れ。私と戦闘機隊で援護する」

菅野が悲鳴を上げるように指示を仰ぐが即座に、そして矢次早に指示を返す。個人に対しての命令であったがその内容は無線で部隊全体へと共有されている。

ラルの指示を実行すべくロスマンが一時戦列を離れて後ろへ下がりを、フリーガーハマーへの再装填を行う。その穴をニパがカバーし、他の者も一時的に攻勢に出て圧力を高めることでロスマンの安全を確保する。また、その間にラルは周囲の戦闘機隊に空戦を中断し上されるものから上昇するように指示を出す。

「撃ちますー!」

計9発のロケットが疎らに打ち出され、辺り一帯を白く覆い隠す。同時に分隊の面々は一斉に降下を始める。対して、ラルとクルピンスキーの2人は煙幕の内部へ向けて盲撃ちをし、降下する分隊が気付かれにくくなるよう意識を誘導する。

「晴れるぞー!」

ある程度の高度があることに加え、近くにはリフリゲーターによって吹雪が浴びせられているペテルブルグがあることよって煙幕が長続きしない。端の方から引きちぎられるかのようにほつれていく。

「今だー!」

《全機突入!》

煙が完全に薄れて用をなさなくなる直前。ネウロイの姿が見て取れるようになり不意の衝突を心配しなくてもよくなる程度に視界が開くと同時に上昇していた戦闘機隊が一斉に降下し、アタックを仕掛

けて敵を削り落とす。

欧州機らしく、一撃離脱でもってその場を離れる戦闘機隊に対し、幸運にも被弾を免れたネウロイが追撃を仕掛けようとそちらへ機首を向ける。

「このタイミングだ」

「背中がら空きってね！」

そのネウロイを今度はラルとクルピンスキーの二人が襲撃する。ウィッチ故の投影面積の小ささから最後まで残った煙と太陽にギリギリまで紛れ、戦闘機隊の突入を隠れ蓑にネウロイたちの後ろをとったのだ。

「よし、後ろに構わず進めよ」

《隊長、ご武運を》

「そちらもな」

一連の攻撃によりごっそりと削れたものの、未だ残されたネウロイは多い。それらが二手に分かれ、戦闘機隊とラル達とにそれぞれ向かう。突破したサーシャ達に無線を返しながらラル達はそれを見ている。

「今更ですけど隊長、こっちに2人だけってのは少なすぎたんじゃ？」

クルピンスキーが距離をつめ、肉声でもってラルにそう聞く。

「何、そこいらのウィッチならそうだったかもしれないがな。お前なら一人で申し分あるまい」

「嬉しいこと言ってくれるなあ。前々から思ってたんですけど隊長も口説くのうまそうですね」

「人を見る目もあることだしもしかしたらお前以上かもな。先に行くぞ」

そう言っ言葉を切ったラルは眼前に迫るネウロイの一軍に向けて降下する。

「……いくら隊長でもちよつとそれは聞き捨てならないかなー！」

クルピンスキーも後を追うようにして同じ群れに突入、その右手に持ったMP43でもって射撃を始める。

ラルとクルピンスキー、どちらもカールスラントの欧州撤退以前から戦い続けた猛者。

多勢に無勢など常であり、たとえこの場のウィッチが二人であつてもそのことに恐怖を覚えたりはしなかった。

ネウロイの一群をせん滅しては新たな群れへと向かい、戦闘機隊と肩を並べてはまた別れと目まぐるしく戦場の様相は入れ替わつていく。そんな戦いが延々と続いていた。

「想定よりもかかっているな……」

新たな群れを切り抜け、周囲を確認する。傍に敵機がないことを確認したラルが左手に巻いた官品の腕時計を見ると、当初の予定よりもネウロイの殲滅に時間がかかっているようだった。顔を上げると未だ吹雪にとらわれたペテルブルグが見える。サーシャ分隊もまた、想定よりも梃摺つているようだった。

「この……」

クルピンスキーはというと目の前のネウロイをまた一機落としたところだった。どうやら、クルピンスキー達援護の部隊が気付かないうちにネウロイには一度増援があつたらしい。いつ頃からか相手をしているネウロイの姿かたちが微妙に変わつていた。動きのパターンにも変化があり、突然加速する個体などが存在していた。

「ああと、逃がさないよ！」

今もまた不意に加速する個体が現れ、他の個体がクルピンスキーに狙われている瞬間をついてその場から逃走した。クルピンスキーが今攻撃している群れは既に半壊しており、クルピンスキーから遠い個体から散り散りに別の群れへの合流を凶つていた。今逃げ出した個体も、位置こそクルピンスキーに近かったがその特性と状況から逃げられると判断したのだろう。

しかし、クルピンスキーは手早く目の前にあつた個体を撃破し、逃走を凶つた個体の後を追つた。

追われるネウロイは右に左に上に下にと鋭い切り返しを繰り返し狙いをつけさせないように動く。そのような激しい動きを行えばい

づれ失速し返って回避軌道がとりにくくなる。新人のパイロットやウィッチのような空戦における位置と運動のエネルギーの関係を理解していない者にありがちなミスである。

「はいはいそのままそのまま……」

クルピンスキーからすれば体のいい餌である。その動きも予備動作から十分に読むことが出来、照準にとらえ続けることも可能だった。空中での動きによる慣性で弾が逸れることの無いようクルピンスキーは慎重にタイミングを計る。

不意に、相手が機体を振ることを止める。余計なエネルギーの消費を抑え加速に集中しようとするその動きに、正に狩り時とクルピンスキーが引き金を絞ろうとする。

その瞬間にクルピンスキーの背後で弾丸がハジける音が連続して響き、続いて装甲が碎ける音。

反射的に機体をひるがえし回避行動をとる。元いた位置に目をやれば碎けてガラス片のようになったネウロイの破片が地上へと落下していくのが日の光に反射することで見えた。

「油断しすぎよ伯爵、明らかに釣りじゃない。幾らシールドで対処できる範疇と言っても避けれるものは避けなさい」

「うえっ!?!」

先ほどの金属音と同じように背後から今度は聞きなれた声があったことに驚いたクルピンスキーが振り向く。ところがそこに思い浮かべた人物の姿はなく、北国の青い空だけが目に入る。

「えっ、あれ?」

クルピンスキーが思わず混乱しているとすぐ傍へとラルが寄ってくる。

「油断しすぎだぞクルピンスキー。鈍ったか?」

「や、それには返す言葉もないんですけど……。隊長、突入した分隊ってまだ」

「まだ戻っていないな。向こうも苦戦しているようだ」

「ですよね、じゃあ今のは」

考え込むようにして口元に手を当ててしまったクルピンスキーを

見てラルが声をかける。その口元はわずかに吊り上がっていた。

「なんだ、いるはずのない人間の声でも聞いたか？」

「！その通り、ってまさか何かしたんですか」

「フツ。さて、な」

「笑ってますよ!?!」

背後からの追求から逃れるようにラルは降下した。

時間は巻き戻る。

行く手を塞いでいた護衛のネウロイの群れを突破したサーシャ達の分隊は、降下で稼いだ速度のまま一気にリフリゲーターへと接近していた。

ペテルブルグの上空を占有するリフリゲーターによって街を囲むようにして雪と暴風のドームが形作られている。分隊のウィッチ達はその手前から徐々に機首を上げ、運動エネルギーを失わないよう意識しながら緩上昇に移る。

上昇を続けるウィッチ。やがて、上空を包む鉛色の空をつき抜ける。

「いましたーリフリゲーターです！」

下原の報告が他の者達の耳に入るが、雲海を超えたことで見えたため、全員が同時に目にしていった。

「で、でけえ、あの時の奴よりもだ！」

そのリフリゲーターはオネガ湖に現れたものよりも大きく、各部のパーツや機能こそ同じなれどもその大きさは何倍にも膨れていた。従来のネウロイとは違い、幾つもの部品を継ぎ接ぎしたようなその異形のネウロイは、すぐそばにウィッチが来たことにもお構いなしに、あるいはその巨体故最初から視界になど入っていないかのように変わらず雪を降らせ続けていた。

「……ッ！まずはセオリー通り、魔眼の射程距離まで孝美さんを工スコートします！」

ネウロイから発せられる無言の圧力に全員が思わず気圧される中、最も早く立ち直ったサーシャが指示を飛ばす。遅れて反応した隊員

達が返事を返し、セオリーに伴った陣形を形作る。

ジョゼ・下原組のツートップに、その後ろに菅野、そのさらに後ろに孝美・サーシャが横に並び左右をニパとロスマンが固める。左右に広がる二人の援護の元に先頭の二人が道を切り開くという陣形だ。

下原達以前戦ったことのある二人の経験から、コアがあると予想される敵の上部に向けて上昇する。陣形の都合上腹部をさらすことになるため危険ではあるのだが、当然隊員たち自身それをわかっているため警戒はしているため問題はないと判断された。

しかし予想に反し、ネウロイからは攻撃が飛んでこなかった。

「変だよ、反撃してこない!」

「……いえっ、そうでもないかもしれない」

「どういうことですか?」

周囲の疑問に下原が返す。

「私たちの時も光線による攻撃はありませんでした。ネウロイの発する冷気でストライカーが凍ってしまうから接近し続けることが出来なかったんです」

「じゃあ、もしかしてこの陣形のまま突撃なんかしたら……」

「コアを探るまでもなく凍り付いて全滅、だと思います」

「まずいわね、突撃は一時取りやめてこのまま上昇しましょう」

下原の発言によりサーシャは突撃の中止を決定、このまま上昇し相手の上方をとることにした。

改めてリフリゲーターを上から見た一同はその大きさを再認識し、

遠近感の狂いから衝突の危険性がある事も察した。

「デカすぎてどこにコアがあんのか見当もつかねえ」

「私の魔眼でも一度の接近じゃ全体を見ることはできないと思います」

「厄介ね……」

スリコムヘイム・スレファ作戦の電撃的な進行作戦においてリフリゲーターの撃破が作戦の第一段階という早期に達成されると判断されたのは502での討伐経験と孝美の魔眼によるものだった。特に討伐経験においては直接撃破に参加した2人に加え、現場でその様子

を見ていた3人もいるということから勝算は高いと見積もられていた。凍り付く前に魔眼でもって捕捉することが可能と判断されたのだ。

「あの時のあれは結局どうやって撃破したの？」

「燃焼材に至近距離から着火することでガラスの熱割れみたいなことをおこしたんです。そうしたらコアも露出して……」

「同じ手を取るのは無理ね……」

事前に考えられていた策が潰されてしまい、続く手も打ち出せずにいる状況だった。

「状況を整理しましょう。まず、我々はリフリゲーター撃破のためコアを探る必要があるためには対象に接近し限なく魔眼で捜索しなくてはならない」

眉間にしわを寄せて考え込んでいたロスマンがそれをもみほぐしながら提案した。

「ただし、長時間接近すればストライカーが凍り付き作動停止してしまう恐れがあり、かつ対象は非常に巨大であるため短時間でコアを発見することが可能かはわからない、と」

「ついでに言やあ、デカすぎてコアを見つけてもそれを砕く方法がねえつてのものもある。都合よく表層にあるかはわかんねえからな」

「私の対戦車砲も20mmでしかないですから……」

その提案にサーシャと管野が返す。装甲を抜けないかもしれないという懸念に孝美も言葉をこぼす。孝美の使うS-18対戦車砲は管野達扶桑のウィッチが使う99式に比べ、一般の13mmに比べれば口径が大きい砲であることから、より強力な魔道徹甲弾が使えるという特徴がある。が、それでもあの巨体に通じるかは怪しいところであった。こういう場合、カールスラントや扶桑の大型を相手取る部隊ではそれぞれ30mm級の機関砲を採用していたりするのだが寄せ集めの502にそんな使いどころの限られる兵器は導入されていない。

「この中で一番破壊力があるのは……」

「俺のこれだろ」

”紫電一閃”は菅野の発。放出系でありながら魔力を体外に放出



するのではなく体内に貯めこむという能力である。本人はため込んだ魔力を使ってあいてを殴るところまでで一つの能力と認識しているが実際にはため込むことまでが発であり殴ることに関しては管野の固有魔法である”圧縮式超硬度防御魔方陣”の応用で剣一閃の延長線上でしかない。

「破壊に関しては菅野さんに賭けるしかないわね」

「近づかせてくれれば破壊する自信はある。だが近づく方法がねえ」

「結局はそこに帰結するんですね」

何をするにしても近づけないことにはどうにもならない。

「前はテーピングで最低限の断熱をしました。今回も一応用意はしてあります」

「ならそれはやるとして、あとは……」

「どれぐらい近づけるか試してみてもいいですか？」

そう声を上げたのは孝美。魔眼を使うべく接近するにしても具体的な距離や時間はわかっていない。それを試したいとそう言うのだ。

危険であるという意見こそあったものの最終的には避けられない事なのだという孝美の提言で実行が決まり、作戦の前の接近しての調査が行われることに決まった。

「エンジンオイル、92度。適温?です」

「では、始めてください」

声に従い、孝美がネウロイに接近する。傍らにはペアである菅野の姿もある。孝美は魔眼を使用しコアがあるか探るためエンジンオイルにまで気を使う余裕がないとして同型機を使いペアでもある菅野が共に飛ぶのだ。

「魔眼、射程距離に入りました」

「こちら菅野。油温はどんどん下がってるぜ、マジで長くはもたねえな」

魔眼の射程へと入った時点で菅野と孝美の紫電改はエンジンオイルが冷え始めていた。エンジンの冷却という意味では歓迎すべきな

のかもしれないが異常冷却は逆に害となる。

《そのまま外周に沿って飛んでみてくれる?》

「敵の中心部分まではまだこの距離では見えていませんが……」

《いざという時の回収が難しくなるから中心部は後よ》

サーシャの判断により、ネウロイの形状に沿ってぐるっと一周することになる。現在位置はネウロイの斜め上方であり、このまま一周すれば中央部を除いた上半分を確認できることになる。

ネウロイの下方ではストライカーに問題が発生した際に備えて他の隊員たちが二人を受け止めるべく展開していた。

「ツッ・異常燃焼だー!」

ネウロイの外周四分の一を回ろうかというところで、菅野の紫電改のエンジンに異常が発生する。異音と共に排気管からは黒煙が吐き出される。見ればエンジンからほど遠いスピナの先端から凍りだしているのに気づく。

「いったん引き上げるぞ。焦るこたねえ」

「ええ、……コアは見つからなかったわね」

「これで一周したことになるわね」

数度の調査が終えられ、おおよそのデータが集まる。どの程度の間でオイルが冷え切るのか、その結果起きる現象とはなどだ。また、突入には他の隊員も順次代わる代わる参加し、それぞれのストライカーでの条件を慎重に探った。

そうして集まった情報をもとに再度作戦を検討するべく全員が集まる。

「一周してもコアは見つからず仕舞いか……」

「下部は冷気を送りこむ送風部分がありますからコアがあるとすれば上部だと思うのだけど、そうなるに残る中央部分にあるということになるわね」

「厄介なところに……」

一番装甲が熱いであろう中央の部分。上部の巨大なパーツを支え

る柱がそびえ立つ、土台部分にこそコアがあるのではないかと予想されていた。しかし、そこに溜まる冷気は外周とは比較にならないレベルでありストライカーで突入などすればものの数秒で飛行体から落下物へとジヨブチェンジしてしまう。

「やるしか、ないでしょう」

「危険よ。コアを見つけてもそのままネウロイに激突してしまうことになる。寒さで意識が途切れればシールドにも期待できないわ」

「かといって闇雲に攻撃したところでコアを露出させられはしないでしょう。今から地上に戻っていいは今も足止めをしてくれている隊長や戦闘機隊の皆さんの奮闘が無駄になります。何より、ペテルブルグの開放はこれが最後のチャンスなんです」

覚悟を決めたような声で作戦の決行を進言する孝美。ロスマンからは当然反対され、続く声は徐々に小さくなっていき、最後には絞り出すような声で返す。しかし、声こそ小さかったもののそこに籠る思いは伝わった。ペテルブルグに取り残された仲間がいるのはこの場の誰もが同じであったが孝美にとっては唯一の妹でありそこにかけてられた思いは他とは違ったものなのだろう。周囲の者にもそれが感じ取れたのだ。

「はあ、仕様がなくてですね。菅野さん、あと”何本”ありますか」

本当に仕方なく、といった様子で額に手を当てながらため息をついたサーシャがそうこぼす。話を振られた菅野は上着のポケットへと手をつ突っ込みそこから数本の髪飾りを取り出した。

「5時間分が2本と1時間のが3本。何なら5時間のをここで使っちゃまっていいと思うぜ、ひかりが居りやまた作れるだろ」

「そうね、後のことを考えるとそのほうが良いかも。ニパさん、”周”はどうでした？」

「うん、やっぱり効果はあったよ。全力でやればしばらく持つかもしれない」

「上々ね。ならニパさんには孝美さんと一緒に突入してもらいましょうか」

「何のお話ですか？」

ニパたちの会話についていけないといった様子で困惑した顔の孝美がそう問いかける。それもそのはず、孝美にはまだ念について教えられていない。

「そうね、詳しいことは後で説明するから今は何も言わずにあるが  
ままを受け入れなさい」

「は、はい？」

「いいから、ほらっ」

菅野は手に持っていたシンプルな棒状の髪飾りの内、比較的長い一本を抜き取り残りをポッケへ戻す。髪飾りは二つ一組で一体になっており、菅野はそれを二つに割りそのうちの片方を乱雑に自分の横髪に突き刺した。そうして残ったもう一方を孝美に押し付ける。

「同じ感じでつけりゃいいから」

「髪につけさえすればいいから孝美さんはあんな乱暴につけなくていいからね？」

「んだとニパ」

突然ぎやあのぎやあのと言い争いを始めた二人を見ながら、孝美は言われた通り前髪に髪飾りをつける。瞬間、孝美の視界がグンツと後ろに下がったような感じがする。真つ暗な空間に自分の視界が浮かび上がっている。その横にまた新たな視界が映し出される。そこには口を開けてこちらを見るニパの姿。その後ろを飛ぶジョゼや下原の姿も見える。

「な、なに、これ!？」

「だから、つと孝美もつけたか」

「か、菅野さんこれは!？」

「まあいきなりつけられたら混乱するよね」

「説明は後です。混乱するのはわかるけどそういうものだと思う  
今は受け入れてください。今はリフリゲーターを倒すのが優先です」

孝美はどうしても聞きたい衝動に駆られるがリフリゲーターを倒す、というサーシャの言葉を聞いてそれをぐっと飲みこむ。今優先されるべきことは自分ではないのだから。

サーシャから全員に改めて作戦が伝えられる。まずは孝美による魔眼での目標捕捉、その援護として最初にロスマンによるロケット弾での砲撃が行われる。砲撃でもって冷気を吹き飛ばそうというのだ。次いで孝美が中央部に向けて突入、コアの位置を管野へと伝えそれを受けた菅野がコアを破壊するというものだ。また、突入に際し冷気に対する防御としてストライカーの外装に”周”を行い魔力で外装を包み込むことでエンジンの熱を逃がさないようにすることとされた。

”周”を行えない上、冷気へと突入する孝美に関しては強化系であり”周”も得意とするニパが補助につく。

ただし、”周”をしたところで冷気に対して無敵というわけではない。エンジンそのものには空気が必要でありインテークより吸気を行う必要がある。あくまで熱が逃げにくくなるだけであり、あまりにも低温の空気による異常燃焼までは防げない。

最初に、孝美とニパがネウロイの上方へと位置する。前回のリフリーゲーター型ネウロイ討伐時の経験からひまわりのような円環のついている方向とは逆側の位置にコアがあると予測されたためその方向にだ。

ニパは孝美の腰に腕を回し、がっしりと固定する姿勢だ。孝美のストライカーが推力を失った場合そのまま飛行を継続するためだ。

作戦開始前に全員が配置についたことをサーシャが確認し、腕時計で目をやる。10カウントが始まった。

「3, 2, 1, 作戦開始！」

「発射！」

サーシャの声に間髪入れずロスマンがフリーガーハマーの引き金を引き絞る。コンマ数秒の間隔をあけて9発のロケット弾が白煙を引きながら飛翔する。コアがあると目される部位を覆い隠すように爆炎が瞬き、直後に温められた空気が冷却されてその場にうすい霧が広がる。

「突入！」

タイミングを計っていた孝美が突入を開始する。一度の交差で確実にコアを捉えるため、敵ネウロイに対して斜めに横切るようにして降下する。魔力による身体保護をつき抜けてくる冷気に顔をゆがめつつも目だけは少しも閉じることの無いよう力を籠める。

「見えたー！」

ネウロイに対してほぼ横切ろうかというほどに接近した時、孝美の視界にコアが映る。それは今まで見たことが無いようなぼやけ方をしていたことから孝美はネウロイが魔眼の透過を阻害する新型の装甲を入手したかあるいは真コア持ちのように何らかのかく乱手段があるのだと考えた。

「菅野さんっ！」

「あとには任せろオ！」

すでに、接近により孝美のストライカーは凍り付き回っていない。それを支えるニパも出力は低下してしまい、もはや水平に飛ぶことさえままならない。孝美とニパにできることはなく、後を託すしかないという状況。

一方、後を託された菅野はというと孝美の視界にコアが映ると同時に反転急降下、コアへと向けて一直線に降下する。高速故、孝美以上に冷たい空気が肌に突き刺さるが纏がある分幾分マシだ。降下する速度はストライカーの限界ギリギリを迎え、紫電改が悲鳴を上げる。そうして得たエネルギーにため込んだ己の魔力を開放し後乗せする。

「貯蔵全魔力開放ッ！いくぜエ、”紫電一閃”ンンンッ！」

そうして一筋の矢と化しネウロイへと突き刺さった菅野の一撃はまず、対象の表面装甲を爆砕し、そのまま侵徹し大穴を残す。そうして傍からは穴しか見えなくなったころ、ネウロイの全体へと罅が広がり、巨大なその身が丸々白く輝く物体となって碎ける。

「イイヨツシャア！」

大穴の反対側。コアを殴り碎いてそのままつき抜けてきた菅野が振り返って全身で喜びを表現する。

撃破した勢いそのままに菅野は落下していく。

「カンノ！手、手！」

「ああ？」

頭上から聞こえる声に菅野が目を向けるとニパと孝美が手を伸ばしているのが見える。最初、降下する前は孝美の腰に腕を撒く姿勢だったニパだったが、孝美のストライカーが止まったからだろうか今はニパの肩に孝美が担がれている。

「へっ、あんな奴殴ったくらいで俺の拳は痛まねーぜ」

「ちーがーうってば！手え伸ばせよカンノ！」

「ストライカーはどこに行っちゃったんですか菅野さん！」

「は？」

菅野は言われて自分の足を見る。胡坐を組んで両腕を伸ばして喜びを表現していた菅野の足に紫電改の姿は無い。降下制限速度ギリギリでネウロイへと突っ込んだ紫電改はネウロイの体内を通る中で限界を迎え、ついには砕け散ったのだった。オートエジクション機能によって自動で足を射出したことによって菅野が巻き込まれることはなかったものの、生憎落下傘など背負ってはいなかった。

「やべえ!!おいニパア！もつと手え伸ばせエ！」

「ふざけんなよこれで精一杯だよ！菅野こそもつと伸ばせよ！」

「菅野さんこつち！私の手の方が近いわ！」

三人がそれぞれ全力で手を伸ばし合いながら少しずつ距離を詰めていく。菅野達の視界には映っていないものの彼女らの上方では他の隊員たちも菅野を受け止めようと必死で降下している。しかし、それで菅野と同じように降下制限速度を超えてしまつては意味がないため追い付けずにいる。

「つか、まえ、たあ！」

「いよおしー！」

菅野が降下速度を緩めようと大きく体を広げ抵抗を増し、ニパが限界をギリ超える速度を出し、孝美が大きく身を乗り出す。三人は努力の末、一つになることに成功したのだ。ニパはそのまま墜落することを防ぐべく、自らの体を振る事で姿勢を入れ替え二人を支える位置へとつく。

「よくやったニパ！あとは減速するだけだ！」

「ちよ、ちよつとまってね……。二人も抱えたもんだからバランスがって」

バン！という音と共に空へ金属板が舞い上がっていくのが孝美と管野の視界に移った。それは、長方形の、緩やかな弧を描く白く塗られたものだった。

「……フラップ？」

息の合った二人のつぶやき、次いでそれに答えるようにして今度はエンジンが黒煙を上げる。

「うわわわやばいやばいやばい！」

「てめえ！久方ぶりの不運に俺達を巻き込むんじゃねえ」

「はわわわわわ」

強引な減速を行おうとしたことでまずフラップが風圧に耐え切れずはじけ飛び、次いでエンジンが息絶えた。"周"によってなまじガワが強化されていたがために機体の限界を見誤ったことによる自壊だった。

慌てるニパ。そんなニパに管野はつかみかかり、孝美は顔を青く頭の中は真っ白にしていた。

「おーちーるー」

「おまつお、お前エ！」

「ひかりー！ひかりいー！」

ニパと孝美が管野を捕まえたことでほっと一息ついていたサーシャ達も三人が止まらず落下を続けしまいには黒煙を吐いたことで、慌てて再度降下を始める。が、到底間に合う様子はない。

すがるように上を見上げた結果、他の隊員たちを見て現状を認識してしまった3人。簡単なことしか言えなくなってしまう3人はただ叫び声を上げることしかできなくなってしまうていた。

「慌ててないで少しは体勢整えてくださいよ！」

「「え？」」

しつちやかめつちやかになつていた3人の耳に、3人以外の焦るような声が聞こえる。



3人が声のした方へと同時に顔を向けると、いつの間にか隣を並走するかのようにして紫電改を履いたウィッチが降下していた。他の誰でもない、三人の良く知る顔だった。

「掴んだーこのまま水平に戻しますから暴れないでくださいよ！」  
驚いた顔をする三人をよそにひかりは全員の体に腕を回すようにして抱きかかえると緩やかな角度で姿勢を変更し、ペテルブルグの建物スレスレをかすめるようにして水平移動へと移行する。抱きかかえられた三人は現実に頭が追いついていない様子だった。

街を横断するようにして飛び、その中で徐々に速度を落としたひかりは三人を近くの建物の屋上へと下ろす。

「一体全体どういうことなんですか?!なんで降ってくるのか、ていうかなんで管野さんはストライカーを履いていないんですか?!」

地に足着いたことで気が抜けたのか三人が座り込む。訳が分からないといった様子でひかりが問いかけるが3人に答える様子はない。3人が言葉を発したのは孝美とニパの足がストライカーから射出され、機体が床に落ちた音がした時だった。

「お、お前、ひかりっ!」

「ひかり!」

「ひかりい……!」

正気に戻った3人は三者三様の反応を見せる。管野は写真越しでないひかりの姿を見て気が抜けたのかその場にへたり込み、ニパはパアッと輝くような笑顔を浮かべて詰め寄ろうとする。が、ニパよりも早く立ち上がった孝美がそのままの勢いでひかりへと抱き着いた。

「苦しいんだけど……何も状況がわからないい」

なに?なんなの?と混乱するひかりをよそに孝美はその存在を確かめるように腕に込める力を強める。

先を越されたニパがやり場を無くしていると、遅れて降下していたサーシャやロスマン達も追いついてくる。

「あつサーシャさん」

「また壊したわねニパさん!まったくもう……」

「アハハ……その、」

「それに見合った戦果は挙げてますから勘弁してあげませんか？。それよりも今は、っとひかりさん」

抱き着かれたままになっっているひかりにロスマンが声をかける。

「助けに来ましたよ、ペテルブルグから脱出します。今すぐに！」

「はい??？」

唐突に吹雪が止んだかと思えば空からは姉と相棒と友人が降ってくる。まるで状況がつかめていないひかりはさらに混乱した。

## ノアの箱舟

唐突に止んだ吹雪とそれに次いで現れたサーシャ達によってもたらされた、ペテルブルグ解放作戦の報は閉じ込められていた者達にとっては正に寝耳に水であった。そもそも吹雪を単純に自然現象だと思っていた事もあり、止むまでの間は安全だろうと考えてられていたのだ。それが唐突に破られ、あげく吹雪はネウロイによって意図的に発生させられた物であり自由に操作ができた等と聞かされた臨時司令部の混乱には目を覆う物があつた。

ともかくにもペテルブルグを囲んでいた包囲網には今現在も穴が開けられている最中であること、解放と同時に脱出を開始しなければ成らないということ、街中の人間が撤退準備に追われていた。

「急げ！持ち出す物は最低限だ！」

「班長、この際ストライカーの部品も幾らか放棄せざるを得ないかと」

「やむを得んな……」

502基地でも慌ただしく撤退の用意が始められ、格納庫でも整備員が右へ左へと走り回っていた。燃料節約の観点から半ば放置されていたトラックもかき集められ小さいながらも換えの効かないストライカーのエンジンパーツなどから積み込まれていた。かさばる外装や持ち出しきれない弾薬等は焼却するだけの時間も惜しくそのままとなつている。

「また派手にやりましたね曹長」

「わざとじゃないんだって……」

慌ただしい喧騒の中でニパは破損した自身のストライカーを整備士に見せていた。管野を拾うのに無理をした結果飛行不能となったbf-109Kが整備台の上へのせられている。傍目にも分かる動翼の喪失、様子を見ようと整備士がハッチを開けた瞬間に魔道エンジンからの異臭があたりに漂う。

「エンジンはまだそのまま新品に載せ換えるしかないでしょうが、

翼回りと合わせてとなるとそんな時間はありませんね」

「作戦はまだ続くんだ！何とかならない!？」

「無茶ですって曹長」

ニパが何とか食い下がろうとするが整備士のほうも首を縦には振ろうとはしない。本来なら今整備士も引き上げの作業に追われているところをどうにか見てもらえないかと班長に拝みこむことで回してもらっている。この上でさらに人員を割いての修理というのは無理筋というもの。

「じゃあ、ワタシのを使えよ」

「えっ、イッル!？」

ストライカーを挟んでのやりとりを続けるニパと整備士の間から割って入ったのはエイラ。周囲のあわただしい様子など気にしていないかのように、ようニパ、等と言っている。サトウルヌス祭以来数か月ぶりに再会した二人。とはいえ、ニパのほうもエイラがペテルブルグにきているらしいということは聞いていたのでそのことについて過剰に驚くことはなかった。驚いたのは別のことについて。

「イッルのストライカーを使ったらイッルが飛べないじゃんか！」

「ワタシは代わりのがあるから良いんだ。もう組み上がったんだろ、アレ?」

「ああ、あれですか。出来てますよ」

エイラに話を振られた整備士が近くを通った別の整備士に声をかける。かけられた整備士と二人がかりで別の整備台にかけられた布を剥ぎ取る。その下から現れたのはは真新しい無塗装のストライカーだった。

「間借りしてた基地の格納庫から持ち出してきた奴だ。よくわからんけどメルスではないらしい」

「ホントだ、木でできているところがある。なんか懐かしいな」

スオムスで使われていたユニットには古い物も多く一部が木製のストライカーもあった。24戦隊が一齐にbf-109へと機種変更してからは見かけることもなくなっていた為ニパには少し懐かしく感じられた。

エンジンの積み替えを含めた改装を施されたその機体、P y ・ r r e m y r s k y をエイラが使うということ。ニパがエイラのもともど使っていたb f — 1 0 9 を使うということ。話はまとまった。

「ガワは元々使ってたG — 6 のままだけどエンジンはニパ達の予備に積み替えてるからそこまで違いは感じないはずだ」

「分かった、使わせて貰うね！」

「一応愛着はあったんだからなるべく壊すなよ」

「き、気をつけるよ。……あー、そういえばさ。イツル達はどういう経緯でここに？」

「あー、ほら。サトウルヌス祭の頃にも言ったじゃないか、カウハバ行きをバックれてヘルシンキの司令部に行っちゃったって」

「ああ……。うん、その選択は正しかったってここ一月で改めて認識したよ」

「?。そうか。まあ、そういう訳だからペテルブルグが包囲されたって話は即座に耳に入ったんだ」

気を付ける、と口では言いながらも内心壊れるような気がしてならないニパが話題を変える。

ヘルシンキとペテルブルグは共にスオムス湾に面しておりさして離れていない。情報のタイムラグが少ない上、ペテルブルグはオラーシャの要衝と言うこともありスオムスには元々そこを注視する部署がある。

「で、いても立ってもいらなくなった我が妹は姉の元へと駆けつけてくれたと言うわけだ」

「ちよっ、ネーチャン!!」

「あーアウロラ、さんー!」

また新たに会話に加わって行ったのはエイラの姉であるアウロラ。酒瓶を片手に握りしめてはいるものの顔が赤らんでいたりはしない。エイラは照れ隠しのように少し大きめの声でアウロラの発言を遮るかのように声を上げ、ニパもまたアウロラの名前を口にするが少し詰まる。

「姉の危機に勇んで駆けつける、そんな良い妹を二人も持てて私は

幸せ者だな」

「ハア？」

妹が二人、という言葉聞いたエイラが怪訝な顔をする。

「二人ってどういうことだよ。っ、まさかニパのこと言ってるのか!?」

「イツルとはまた違った感じだが、”アウロラねーちゃん”と名前付きで読んでくるのが新鮮だな」

「おいどういふことだニパ！」

「いや、これはその……。ご、ごめんイツル！」

「あ！まて、逃げんな！」

「あの人たちはもう……！」

格納庫を走り回るエイラとニパ。それを眺めて楽しそうに酒瓶を叩るアウロラの姿を見て、整備班の引き上げ指揮を執っていたサーシャは額に手を当てため息をつく。

「サーシャさん！下原さんたちが戻ってくるそうなので次は私と西沢さんで上がります！あと、扶桑班の積み込み作業はまだしばらくかかりそうです。カールスラント組もまだまだトラツクの前に山積みでした！」

「そう、やはり急に撤退だなんて言われても手早くいくわけないわね……」

基地からの運び出しを手伝っていたひかりからサーシャに中間報告がされる。魔法力による強化で小回りの利く重機と化すウィッチをもつてしても、引き揚げ作業は滞りを見せていた。

また、現在も戦闘が行われている戦域への上空援護にもウィッチを上げており、そちらにも人手をとられてしまっている。今上がっているのはジョゼ・下原組に加え管野と孝美のペア。弾薬損耗により先のペアと入れ替わりでひかりと西沢が上がる。

問題は他にもある。度重なる戦闘で基地の銃弾・砲弾の備蓄はゴリゴリ消費され、余裕があるとは言えなくなっていた。

「どうしたものかしら……。いざとなったら、弾薬くらいなら……」

「大尉！至急通信室の方へお願いします！」

状況を好転させる要素も見いだせず、手詰まりとなった。それでも少しでも早く撤退を成功させなければと頭を回転させるサーシャ。そんなサーシャへと声をかけたのは伝令の兵。

「相手は誰です？私がこの場を離れるほどの相手ですか？」

「前線司令部からの状況確認ですが、ラル少佐からです！」

「…、ちょうどいい時に。すぐに行きます」

サーシャが到着したサーシャは敬礼もそこそこに通信士と入れ替わるようにして無線機の前の席へと座り、受話器を耳にする。

「こちらはペテロパブロフスク要塞、第502統合戦闘航空団です」

《私だ。そちらの状況は？》

「502部隊の撤退は円滑に進んでいるとはいいいがたいですね。現場に混乱も見られます」

《やはりか》

通信を切り出せば向こう側で待っていたラルが即座に返してくる。時間が押しと言わんばかりにそのまま話に入る。

サーシャの現状を伝える言葉に通信先のラルも少し考え込むようなそぶりを見せる。自分の手持ちの情報をいかに伝えるのかを考えているのだろう。

《撤退の進捗が芳しくないことは臨時司令部からの報でも伝わっている。作戦司令部では全装備を投棄しての着の身着のままでの脱出が指示された。それこそ欧州撤退の時のようにな》

「っ、そうですか……」

かつてのカールスラントやガリア等の欧州各国がその土地を追いやられた時も、脱出した軍隊はその装備のほぼすべてを放棄していた。都合できた脱出船には兵士だけでなく取り残された多くの民間人も載せねばならず、その数はあまりに膨大だったためだ。今回も人数こそ比較にならないものの脱出経路が限られることもあって戦車や榴弾砲といった重量物を持ち出すことはできないだろう。

《ペテルブルグの東側にいた部隊で接触の図れたものから強引に

脱出させてはいるが整然としているとはいいがたい。時間もあまりないというのにな……」

タイムリミットであるグリゴリーの到着まで猶予はなく、なのに撤退はうまく進んでいない。現場も後方も、誰もが焦りを感じ始めている。

焦る、ということは問題が発生したということ。人は、問題が起きればそれを解決しようとする。

《む。サーシャ、少し離れる》

その言葉と共に無線が途切れる。それが再びつながるのにいくばくかの時間を要した。

《……悪い知らせだ。502に脱出部隊の援護が命じられた》

「？、それでしたら当初の作戦計画のままですが」

《殿軍として最後に脱出しろとのことだ》

「それはー」

殿軍。最後に脱出するということはその後ろをネウロイに追われながらの形で進まなければならないということ。戦いながら下がるという行為は非常な困難な物であり、ましてそれが空中でとなればベテランであっても容易に死ぬることを意味する。

《あの指揮官、思っていた以上に”ハズレ”だったらしい。ウィッチは無敵でもなければ替えも利かないということをおわかっていない》

「かといって無視して脱出すれば抗命罪……。やるしかないというわけですか」

《”現場での判断は任せる”》

「了解」

”現場での判断は任せる”

はつきりと言葉にしたわけではないものの、その意味は明白だ。つまり、状況によっては502部隊の戦力維持を優先しろという命令に他ならない。

ラルの言う通りウィッチは最も替えの利かない部隊だ。絶対数自体が少ない上、さらに空戦ともなれば飛べるようになるだけでも本来



なら数週間を要し、戦いまでとなると年単位で仕込まねばならない。ぶつつけ本番で戦えるような者などそれこそ”神”に愛されているとしか言えない。そして502はその空戦ウィッチの中でもさらに一握りのエースのみを集めた部隊なのだ。今後の作戦においても中核として用いられるであろう、ここで損耗させるわけにはいかない存在なのだ。

ラルとの通信の終了後、司令部から正式に殿を命じる電報が基地へと届いた。それを踏まえ502に属する各部隊は撤退作業を縮小し、ウィッチの出撃の規模を拡大すべくその支援体制に入った。つまり、出撃のローテーションが早まるのにあわせ、機体の整備などに人員を割り振るのだ。撤退作業はさらに遅れることになる。

作戦開始から3日目。

初日のリフリゲーター討伐後、順次動ける部隊から撤退が行われてはいる。司令部からのなりふり構わない命令により半ば強引に撤退させられたことにより当初の予定に近いだけの人間が市を離れた。その分、穴の開いた戦線にはウィッチ達が回り、何とか維持を試みてはいた。

リフリゲーターが消え、顔を出した太陽によって大地が照らされている。街を覆う氷もその多くが溶け、流れ出した水が海へと流れ込む。流れ込んだ雪解け水により凍り付いたスオムス湾にも海面が時折顔をのぞかせるようになっていた。

「点火アー」

ズズンと地面が揺れ、下部を吹き飛ばされて崩れた建物が大通りを物理的にふさぐ。ペテルブルグの守備隊も撤退していることから、市内にも徐々にネウロイが侵入し始めている。それをトラップやこういった物理的な方法で強引に押しとどめている。

スリュムヘイム・スレファ作戦に当たって、ペテルブルグで最初に放棄されたのが北側の戦区。さらに北にあるVKT線での攻勢もあ

り最も圧力が低かったことから移動に時間のかかる重装備の部隊から優先して下げられ、その穴を機動力と火力を持つウィッチ隊で埋めた。南側においても同様に開放軍のウィッチや戦闘機隊によつて遅滞戦闘が行われている中で現地守備隊が撤退を行っていた。

「隊長！3番目標が発、そこだけ瓦礫に穴が！」

「予定通り空爆要請！動かない的くらいになら当てられるだろ、多分」

市内唯一の陸戦ウィッチ部隊である502のストライカー回収班も通常戦力として駆り出され、あちこちで戦闘を行っていた。ほぼ人間大の大きさでありながらその火力と装甲は戦車以上という特徴を生かし、トラップを起動しては迅速に撤退する行為を繰り返すという戦い方だ。

「ニパさんひかりさん、準備はいいわね？」

「はい！」「大丈夫です！」

臨時の爆撃飛行隊を編成するのはロスマンを首機とした三人によるケツテ。かつてのヒスパニアにおける怪異との戦いでウィッチによるあらゆる戦術に参加したロスマンが若手二人を指導する形での編成である。

「投下！」

「カタヤイネン投下！」

「雁淵投下します！」

使用する機材が空戦用ストライカーであることから爆弾を抱えての急降下はできない。そのため離れたところからの緩降下で勢いを付け、強化した腕力で爆弾を放る。なお、ウィッチ用の爆弾懸架装置もなければ航空爆弾もないので放るのは守備隊が置いていった152mm榴弾に遅延信管をねじ込んだ急ぐしらせのものである。

「破壊確認！」

「よしよし十分だ。我々も引き上げるぞ！次のトラップの設置がある！」

臨時爆撃飛行隊の放った砲弾は建物の側面に突き刺さるように着弾。えぐるように吹き飛ばされたことで建物は自重に耐え切れなく

なり通りへ向けて倒れこむ。

工兵隊の設置した爆薬に誘爆こそ起こさなかつたものの任は果たせたためロスマンたちも帰投する。

「ユーティライネン大尉から任務完了の報告、ロスマン曹長からも同じく！」

「南側戦区の状況に更新無し。未だ空戦が続いている模様」

パブロフスク要塞では司令部として各地の戦況が報告され、必要に応じてウィッチを割り振る。現在指揮下にいるウィッチは502よりサーシャ、ロスマン、ジョゼ、下原、ニパ、菅野、孝美、ひかり。そして臨時で入っているエイラ、サーニヤ、西沢で計11人と奇しくも統合戦闘航空団の定員を満たしていたりする。なお、最高階級はサーシャの大尉なので隊長格がないことになるが

「大尉、正門で厄介事です」

「報告は正確に」

「失礼いたしました。避難民、とでも言いませうか、保護を求めて来た者らがいます」

指揮所で戦況の把握に努めていたサーシャの元に伝令の兵が駆け寄ってくる。軽い口調だが、これでも本来なら伝令をやるには不相応な階級の将兵であつたりする。

人手不足故に誰でもどんな仕事でも任せるのが今の502だ。

「避難民？軍属ではないのですか？」

「二応は軍属の者もいます。すぐ隣のヴァシリエフスキーやその対岸の工業区画にいた工員等です」

「なんで非戦闘員がまだ市内に!？」

ペテルブルグ西側、ペテロパブロフスク要塞のさらに西側。ネヴァ川河口辺りにはオラーシャでも有数の造船企業が2つもある。保護を求めて来た者達はそこで作業に従事する者達で、かなりの人数がいた。

「逃げ遅れた者や、最後まで仕事のあつた者達のようにです」

「……敷地内には入れて構いません。ただ、我々もいつ撤退を開始

するかわからないためすぐに発てる状態を維持させてください」

「わかりました」

この状況で逃げ遅れてまでなさなくてはいけない仕事とはなんだろうか。万が一にでも他国に流出させられないような資料でもあったのだろうか。サーシャがそんなことを考えていると、またもや声をかけられた。

「た、大尉！」

「今度は何ですか！」

「東側戦区で異常発生！現地地上部隊との通信途絶！」

「なんですって!?!」

「菅野さん！状況は!?!」

「おう、ひかり」

爆撃を終えたロスマン率いる飛行隊はサーシャの命令により、通信の途絶した東側の確認に向かっていった。現地には既に菅野と孝美のペアも到着しており辺りを見回しているようだった。

「見ての通りだ……。小型が山ほど湧いて出てぼこぼこにやられたってどこか。撤退中だった部隊どころか、その護衛についていた奴らもう残っちゃいねえ。俺達が付いたころにはもう飛び去った後ろ姿しか見えなかったぜ」

ラドガ湖の方へと続く道の中ほど。周囲を自然に囲まれた道の上は油と脂が燃える黒い煙によっておおわれ、その隙間からは赤い炎もみえる。路上は半ばで消し飛んだトラックや砲塔のみが転がる戦車、かつて人間だったナニかといったものから光線で蒸発してできたクレーターによって見るも無残な有様。道上のみならずその周囲にも撃墜された航空機の残骸が転がるその風景にひかりは言葉を無くす。

「これ、全部小型がやったの？」

「ああ。それも、VKT線の方からじゃねえ、もう少し東側から来た」

「待ちなさい菅野さん。航続距離の短い小型がそちらから来たってことはー」

ペテルブルグの北東側はラドガ湖の向こう側。つまり、先日まで管野達が守っていた東カレリア地方戦線の後ろ側だ。V K T線から来たのであればそのまま方向からくるだろう。他の戦線から流れてくるには遠すぎる。となれば答えは一つ。

「グリゴリー」がそんなに近づいて……！」

「小型の航続距離ギリギリってことはもうロイモラのあたりまで来てははずだよな」

東カレリアの防衛線の後ろにいる唯一のネウロイ。ネウロイの”巢”、グリゴリーから発進したとしか考えられない。今回はまだ市内にまでその航続距離が届かなかった為撤退しようだが、それももはや時間の問題だろう。一刻も早くペテルブルグを離れなければならない、が。

「もう猶予は無いつていうのに、」

「道が……！」

唯一確保されていた脱出路はたった今残骸によって閉鎖されてしまった。

取り残された人間は数百人にも上る。それだけの人間を一齐に脱出させなければならぬというのに車両が使えないのでは無事での脱出はほぼ不可能といえる。徒歩では市内から出ることすら怪しいだろう。その上、すでにグリゴリーからの攻撃圏内に入っている。他の道を開拓しようにも、未だ包囲は分厚く少なくとも502単独では突破出来るかどうか。市民を連れてでは之も不可能。

まさに八方ふさがりの状態であった。

「……ともかく。いったん基地へ戻りましょう」

「そう、ですね。ここに居てもできることはありません。手段を考えるのなら基地の人間も交えてのほうが良いでしょう」

管野達が言葉無くその場に留まる中、他より早く早く思考を切り替えたロスマンがここに居ても仕方がないと帰還を促す。孝美もそれに追従し、二人が身を翻したことで管野・ひかり・ニパもそれに続いた。

「ペテルブルグは再度包囲されてしまったと言うわけですか」

ペトロパブロフスク要塞にある施設の中で最も広いのは格納庫である。その格納庫の人口密度はこれまでになく高まっていた。

ウィッチの他に、臨時の最高司令官であるプロホノウ大佐や整備班からの人間も集まって机を囲み、地図を前にしていた。また、格納庫内には収容しきれなかった避難民の一部もいる。

「二番有力な脱出路は尤も危険と化した。此方の戦力では到底突破は不可能だろう」

話を切り出したのはプロホノウ大佐。

「二応、此方の戦力についても確認しても良いですか？」

「502の空陸ウィッチに、元々ここを守ってた防空部隊や歩哨やらが一中隊といったところでしょうか」

「整備兵や収容した避難民に銃持たせたところでたかがしれているな」

状況の打開策たり得はしないだろう。ネウロイというのはどれも兵器のような物であり、歩兵に相当する物がない。素人の持った小銃や機関銃では蠍の斧でしかない。

「救援を待つと言うのは？」

「グリゴリーかそれ以外か、どちらを攻撃するにしてもそれだけの戦力があるか……。あつたとしても再編が必要でしょう」

整備班から来たカールスラント軍人の言葉に司令部要員が答える。

「作戦に参加している部隊は言ってしまうえば敗走したような物。戦線が維持出来なくなった以上今度は取り返せるだけの戦力を集約する必要がある。当然、再編には時間がかかる。」

「救援よりも私達が磨りつぶされる方が先、か」

「生き残るにはグリゴリーが来るより先に脱出するしか無い事に変わりは無いわけだ」

「結論、じゃあどうやって脱出するのか、って話に戻ってきちやう訳ね」

机の上には地図と共に戦闘詳報の写しも並べられており、各戦区において最後に行われた戦闘と確認された敵戦力が記載されている。

「何処も万遍なく敵が囲んでいるわね」

「何処を攻めても相手の規模は同じってことだね」

ロスマンとニパの言うとおりどの位置からの詳報も敵の規模に関しては同等であり、言い換えれば包囲としては完璧ということでもある。

「北を抜けりやあそのままVKT線に合流できんじゃねえか？」

「確実にグリゴリーの勢力圏に入るから一長一短ですな」

「いや、それ以前に北への主要道路は陸戦型の足止めには瓦礫で塞いだばかりだ。それを除けないことには通れないぞ」

「そうでした……。自分達で逃げ道を潰してしまうだなんて」

管野が指を指し示したVKT線はペテルブルグ北方に位置する防衛線。現在の主防衛線でもあり、今回の作戦でも戦力の誘因のため攻勢に出てくれている。

が、市内を北へ抜けるための道はアウロラ達によってネウロイの北からの侵入を防ぐ為の破壊工作によって塞がれてしまっている。数百人が通り抜けられはしない。サーシャの言ったとおり自分達で逃げ道を塞いでしまっていた。

「どのみち南はない。抜けたところでネウロイの勢力圏だ」

「北か東か……」

会議は紛糾する。

東に抜ける派の主張は勝ち目のないグリゴリーと戦うのは避け、通常のネウロイを相手にするべきと言うもの。反対意見としてはグリゴリーを確実に避けられると言うほどの物ではないこと。何より抜けた先はラドガ湖であり、数百人を運べるだけの船がまだそこにいるかは分からないことがあげられる。

一方北に抜ける事を主張する者達は抜けた先は確実に味方の陣地であり、地続きであることをあげる。それに対する反論は先にも述べられたグリゴリーからの攻撃を避けられないという物。

どちらにも利と損があり、明確な意見を出すことは出来ない。強いて言うなら先行きの不透明具合の強い東側が劣勢であるがかって北と決めきれるほどでもなかった。

「なああんだ、ちよつと聞いてもいいか？」

互いの主張が平行線のまま言い争われる中、その輪の中から外れ、自分の考えを纏めようとしていたサーシャに声をかける者がいた。

その男は取り残された工員であり、ペテロパブロフスク要塞に避難してきた者たちのまとめ役であった。今、基地区画内の開いているところにバラバラに押し込められた避難民達の面倒を見て回っている男はその過程でこの格納庫での会議のことを聞いていた。

「なんででしょうか」

「なぜ、海から脱出しようとしませんか？」

「我々の中に船を動かせる人間はいませんし、何よりペテルブルグにもうこれだけの人間を載せられる船舶は残っていませんから」

冬になればスオムス湾が凍り付くのは周知の事実である。砕氷船でなくては航行できなくなる上、使い勝手の悪い代物だ。故に冬季が来るより前にペテルブルグの港湾施設からは大型船は姿を消し、せいぜい湾内で使われるタグボートぐらいしか残されてはいなかった。

他ならぬサーシャ自身がその手の物資搬入に関する処理を一手に引き受けていたからこそ、今のペテルブルグに輸送船がないことをよく理解していた。

「じゃあ、乗せられる船と動かせる人間がいれば選択肢に入るのか？」

だからこそ、目の前の男の提案にサーシャは己の耳を疑った。

「……あるんですか？」

「厳密には未完成だがな。だが動く、そうだな！」

男が振り返って声をかければ、格納庫の隅で押し込められるように固まっていた避難民の中から声がかかる。船体は完璧、燃料もある、人手もある。口々にそう伝えてくる。

「未完成？と言うことは造船所の……」

「ただの船じゃねえ。軍艦、それも空母だ！飛行甲板はもう据え付けられてるからウィッチも飛べるだろ！」

「え、いや、そう簡単な話ではないのですが……」

垂直に飛び上がれるからと言ってウィッチなら誰でも空母に乗れ



るといふわけではない。空母乗り込みのウィッチとして他と区別されるくらいには専門技術の習得が求められる。

移動し続ける空母へ垂直に降り立つにはそれなりの技量が必要かつ魔力や燃料を大量に消費する。その為、空母乗り込みのウィッチはアレスティングワイヤをつかんで着艦する方法を習得するし、その際の衝撃に耐えられる頑丈な艦載ストライカーを使用するのだ。閑話休題。

「動かせるんですか？」

「とつくに進水は終えて今は艀装中だ。だが、搭載予定のレーダーや着艦装置の一部が遅れていて就役が先延ばしになっているんだ」

動かせるのか、という問いに動かせる、と返ってくる。進水とは船のドンガラ、つまりガワのみが完成した状態で海に浮かべることが言う。それからエンジンなどを取り付けていく事を艀装工事というが、既にそれも殆ど終わっているらしい。

それを聞いたサーシャは一言断りを入れ、口元に手を当てて考え込む。

「……数百人を一度に運べて守りやすく、かつ堅牢。ストライカーでの離着艦は難易度が非常に高いけど未完成でも飛行甲板が据えてあるならその心配も無い、か」

陸路での移動となれば数百人からなる長蛇の列ができ、それを守るの為にはある程度戦力を散らさなくてはならない。襲われれば、そこで足が止まるか散り散りになって逃げることになるためどのみち犠牲は避けられない。しかし、軍艦でひとまとめにしてしまえば広範囲に散らばる避難民全体ではなく艦その物のみに気を払えば良い。移動速度も20ノットも出れば37km/h、もし30ノットともなれば55km/hの速度で逃げられる。荒れ地をトラックで走るよりよっぽど速いだろう。まして保有するトラックは全員が乗れるほどの台数が無い。

その他、高射機関砲で自衛が出来る等々利点は多い。

サーシャにとってこの提案はまさに暗闇の中の一筋の光のように思えた。

『まずはこの案を皆に提示してみよう、問題があってもきつと解決できる、そうに違いない』

そう考えたサーシャは机へと向き直り、議論に熱中して此方の様子を気にも止めない連中に対して口を開いた。

## 焦れつたい2日間

ネヴァア川河口。ペトロパブロフスク要塞のすぐ下流に位置するバルチック造船所。オラーシヤ屈指の造船所として、戦前は商船軍艦ともに多くを供給してきた。今次大戦が始まる直前にも海軍の近代化に伴って設備の一新と共に多くの発注を受けていた。しかし、1939年の頃には既にネウロイの手に落ちその役目を果たさなくなっていた。

その後、人類の手に戻って以降は対岸のアドミラリティ造船所と同じく北方における貴重な大規模造船所としての役目を期待されていたのだが、今回のペテルブルグ包囲に伴って再度放棄されることとなってしまうていた。

「……で、こいつはその人類の手に戻ってからの数年間のうちに計画されたうちのひとつってわけか」

目の前の軍艦を見上げながら菅野が言う。菅野と現在のその相方である孝美は何十人かの技術者と共に脱出に使う空母を見に来ていた。現在の502で空母について少しでも知見を持っているのは扶桑海軍の5人だけ。が、下原と菅野、ひかり、西沢は基地航空隊の間で空母乗りではない。唯一空母勤務の経験があるのが孝美であったため、その艦が本当に空母として使えるのかを確認するため孝美とそのペアの菅野が技術者たちの護衛を兼ねてここにいる。

「菅野さん、戻りました」

「おお、どうだった？」

「致命的にまずそうなところはなかったです。というか、どこことなく覚えのある作りがあつて赤城型が参考に使われているのは間違いないみたいです」

「チツ、釈然としねえなあ。技術流出の塊だぜこの”リュッツオウ”は」

”リュッツオウ”

アドミラル造船所にて建造されていたオラーシヤ初の航空母艦。原型はカールスラント製重巡洋艦リュッツオウであり、戦前に行われ

た2国間の取引により未完成の状態でオラーシヤへと渡った。引き渡し後もオラーシヤにてカールスラント技術者の指導の下、建造が続けられていたのだがネウロイの攻勢により一時中断。回航され放置されていた。

問題はその後である。リュッツオウが放棄されて以降、欧州の戦線ではリベリオン・ブリタニア・扶桑の空母機動部隊による縦横無尽の戦闘が行われた。それを知ったオラーシヤも当然航空母艦の入手を画策するのだが、そこに手を差し伸べたのがカールスラントだった。

もともと扶桑から輸入した赤城型3・4番艦を運用した経験があるだけあっていくらかの知見を得ていたカールスラント。しかし、欧州撤退の際にその2隻を失って以降は大型の艦船を調達できずにいたため、得た知見を活かせずにいた。そこで、オラーシヤ帝国の資金力と土地を用いてカールスラント式の空母建造技術の実証実験を行おうという契約を持ち掛けたのだ。もともとリュッツオウの姉妹艦であるザイドリッツの空母化が途中まで進行していたこともあり、その資材を流用することで早期に建造できるということであり、基礎研究の段階から一足飛びで空母の運用技術も建造技術も手に入れられるとあってオラーシヤ側も飛びついた。

それだけで話が終われば単純だったのだが。

カールスラント式などと言ってはいるがその実態は輸入した扶桑空母の技術でありそれを勝手に第三国へと輸出しようというのだ。当然、公になれば国際問題となるため、計画は極秘で進められていた。さて、完成だというところで今度は本家本元扶桑からオラーシヤへの空母を購入しないかとの打診があった。

カールスラントの微妙に信用ならない重巡改装空母とは違う正規空母の提案。オラーシヤとしてはぜひ欲しいところであったが、その余波で完全に厄ネタとなったのが“リュッツオウ”である。購入直前で国際問題ともなれば購入計画は白紙、それどころか今ウラルの戦線を支える扶桑の陸軍撤退などということになったら目も当てられない。

実際には陸軍撤退などしたら国際社会からの非難もあるだろうか

らありえないシナリオではあったが、とにかくオラーシヤはこのことの隠蔽を決定。リュッツオウの建造は完成直前で中断されてしまった。折を見て解体まで進めようというところで、今回のペテルブルグ包囲戦が発生してしまったのだ。造船所に最後まで残っていた人間たちはこのことが露見しないよう、関係書類の焼却や船体への偽装が命じられた者達だった。

「当人たちも拙いとは思っていたみたいですけど」

「あの如何にも事務方つてオツサンも空母の事問い詰めたら今にも自殺しちまいそうな顔してたからな」

基地格納庫での脱出作戦の場。サーシヤが持ち込んだ案を検討するべく呼び出された避難民の一人は、空母について聞かれた瞬間に顔色を青を通り越して白くさせてしまった。国家間の問題もそうだが彼個人の進退ももはや風前の灯火となったからだ。

「まあ、俺たちはとにかく使いりゃいいんだ。サーシヤ達にも報告しねえとな」

管野が乗っているジープ。その後部荷台には大型の無線機が積載されている。軽い身のこなしで座席を乗り越えた管野は無線機の電源を入れ、基地司令部をコールする。出たのはサーシヤだった。

『待っていたわ管野さん。それで、どうでした？』

「孝美が言うにはこれといったまずそうな点は無いそうさ。空母と言っても格納庫から下はほとんど普通の船と変わらねえからな。そっちは技師連中の領分だろ。そういうわけだから下原達はもうこつちに寄越していいぜ」

『甲板部分がウィッチの発艦に耐えられればいいわけですからね。それから下原さん達についてだけど、実は、もうとっくに出した後だったりします』

サーシヤの言葉に管野が眉を顰めようとしたとき、遠くからのエンジン音が耳に入ってきた。そちらに目をやると、下原とジョゼに加えエイラとサーニヤが飛んでいるのが見える。

「技師連中の護衛にしたって多すぎねえか？つか、確認の意味ねえじゃねえか」

『それについてはごめんなさい。どのみちその艦が使えなければ同じだと思っただので、それなら早いほうが良いだろうと思ひまして』

「ああ、そう」

『それから、護衛が多い件についてだけど南側はあまり長く持たないかもしれないの』

それはつまり敵が迫っているということ。二人は顔を険しくする。

『外延部はもう破られてみたい。南側の哨戒に出たロスマンさんとニパさんのペアがそのまま残って遅滞戦闘を始めたわ。じき、陸戦ウィッチ隊もそれに加わるはず』

「どう考えても守り切るには足りねえじゃねえか」

『わかっています。南側からバルチック造船所までの間には数本水路が通っていますから、その橋を落として防衛線にするつもりです。貴方達にもそちらに合流してください』

「こっちは下原達だな？ユーティライネン少尉達と空中合流して向かう」

『お願いします』

受話器を乱雑に投げ、跳ね上がるようにして駆け出す。

「行くぞ孝美！」

「ええ、これからおよそ2日。何としてでも守り抜かないと！」

この時代、船の動力と言えばその種類は現代よりも少ない。こと、戦闘艦とあつては蒸気タービンかディーゼルエンジンを何らかの形で使う物がほとんどだ。なお、リベリオンは除く。あそこは船の作りすぎでエンジンが足りなくなつて輸送船用のレシプロエンジンまで積んでいる。ジ〇リばりに鉄のアームがガツシヨンガツシヨン動くもはや時代の遺物だ。

閑話休題。

このリュッツオウモラモント式と呼ばれる蒸気タービンを積んでいるのだが、この蒸気タービンという代物は起動にえらい時間がかかる。諸々省くがとどのつまり、水を沸かして作った蒸気を羽根車につけるといふ設計上、大量の蒸気を作るところから始めなくてははいけ

ないのだ。

その上、この艦は海上公試前、つまり、船に積んだうえでのエンジンテストを一度もしていないのだ。

「定ちゃん、大丈夫かな……」

「正直私も不安なのだけど、やるしかないってのも確かだから」

船の運航を行う要員を基地から護衛してきた下原とジョゼ。もしも防衛に当たっているウィッチ達を抜けてきた場合に備え、岸壁の一部を滑走路として使えるようにして待機していた。

「どのみち、エンジンが始動するまでの二日で脱出する手立ても思いつかないし、勝算があるっていうのもわかるしね」

「待つだけってのはやっぱり辛いね。ダカールの時を思い出しちゃう」

「ダカールってアフリカの？」

ダカールはアフリカ最西部、ヴェルデ岬の街。元はガリア共和国が所有する植民地の一部であり良港であった。ガリア喪失後は南方ガリア政党政府という、世界中に何十と散ったガリア政府の一つが根拠地としていた。

「うん。ガリアの次はそこにいたの」

「直接リベリオンに行ったわけじゃなかったんだ」

ジョゼはガリア空軍に入隊後、アフリカ・リベリオン・オラーシヤと世界を転々としておりその戦歴はエースに見合うものだった。

「ダカールの街にネウロイがやってきて、ウィッチが私一人しかいなかったから海軍の艦艇と協力して戦ったの。港中の砲という砲全部と協力したこともあったんだよ」

「へえー。さすがジョゼ！」

「って言っても全部は守り切れなくて、リベリオンからの援軍に助けられちゃったんだけどね」

そう言っただけジョゼは自身の脇に吊ったホルスターをなでる。彼女の体軀には不釣り合いなほどに大きなそれから同じく大きなグリップがのぞいている。

「なんだかすごい吊ってるなーとは思っていたけれど、それは？」

「ダカールでお世話になった整備士さんがくれたの。差し上げますつて。これで撃墜したこともあるんだよ」

おもむろに引き抜かれたM1911拳銃で狙いを定めるようにして腕を伸ばすジョゼ。下原もそれを見てほほえましそうに笑う。

「……ジョゼ、抱き着いてもいい?」

「えっ、い、今ストライカー履いてるよ?」

「今のすっごい可愛かった。抱きしめたい。ほおずりしたい」

「い、今待機中だから!」

埠頭がにわかになくなってきているころ、往復を繰り返すトラックの一つに乗ってサーシャも港湾部へやってくる。

「!、大尉」

「ご苦労様です。積み込みはどうなっていますか?」

「最優先とおっしゃられた機関砲弾から急がせていますが、電力の問題でクレーンが使えないのが痛いですね。トラックの往復の方が速くて岸壁に積みあがってます」

燃料も人員もない今のペテルブルグでは発電所が止まり、その供給を受けていた設備も多くが機能を停止している。ペトロパブロフスク要塞程度の規模なら自前の発電機で賄えたが、造船所の規模となるとそうはいかないらしい。数少ない造船所自体の設備は燃料の供給や暖房に回されていたりする。

「最悪ヘルシンキまでたどり着けばいいですから食料等も最低限で構いません。機関部要員はどこにいますか?」

「始動に必要な人間は中ですが一度出てきた連中がどこかにいるはずです」

「なら、そちらにも話を聞いてきます」

道行くものに居場所を聞いて回ったサーシャは最終的に港湾部の倉庫として使われていた建物に行きつく。

「機関部の状況がわかる者はいますか?」

「ああ!隊長さん」

避難民からは隊長だと勘違いされていたりするサーシャ。方々に



指示を出している姿がよく見られたためだ。

「いえ、私は戦闘隊長であつて……。いえ、今はいいです。機関の方は？」

「缶への点火はもう済みました。あとは蒸気を発生させるのと暖機運転ですから待つだけですね」

「そうですか。では、出発予定は変わらず明後日1400ということの問題ありませんか？」

「ええ。その時間には確実に動けるよう、しっかり見ておきますとも」

蒸気の発生も、機関部の暖気も人の手でどうこうできる段階になり。まさに、人事を尽くして天命を待つ、だ。

一晩が明けて翌日。

リュツツオウを用意する港湾部の人間に大きな動きはない。しいて言うなら、船で出られるのだからと暇を持て余した整備班が持ち出す予定の無かつたものまで持ち出そうと港湾倉庫に山積みにした物資を運び込み続け、兵士たちは甲板の張り出しに設けられた機銃座の確認に勤しんでいた。

一方、大きな変化があつたのは南方だ。空陸戦ウィッチ6人ずつではやはり守り切れず、水路を超えられた先から包囲されぬよう後退を繰り返していた。現在はマリインスキー劇場から更に北側へと下がっていた。

「クソつたれ。ついに20mmも13mmもカンバンだ。おい、なんか武器くれ」

南側から進攻する敵は空陸どちらからも攻めてきており、その中で管野の持つ九九式は弾切れを迎えてしまった。やむを得ず、管野はその場を孝美に任せて一度下がることとした。とはいえ弾が切れることは管野も孝美も事前に察しており、援護役の弾が尽きる前に孝美の固有魔法・絶対魔眼を利用した連続射撃でもって敵の数を減らすことで隙を作ったうえでの交代だ。

「んじやあこれ使え。使い方はわかるか？」

「おう。これの使い方ならロスマンさんから、って」

管野は横合いから突き出された銃を受け取る。陸戦ウィッチ用のサドルマガジン付きのその動きを確かめるように槓桿を引きながら渡してきた相手を見る。そこには四号陸戦ストライカーを履いたユーティライネン、の少尉の方がいた。

「なんであんたが陸戦ストライカー履いてんだ!？」

「仕方ねーだろ燃料切れだ!補給が来るまで上がれないんだよ!」

市街戦ということもあり、空戦機動が限られるためどうしても燃費の悪い戦いを強いられることとなる。エイラはサーニヤの援護だけでなく陸戦隊の援護も積極的に行っていたことからいち早く切れてしまったらしい。よく見るとペアのサーニヤが上空で孝美と合流していた。

「じゃあこれアンタのか」

「そーだよ。ほれ、予備マグも入れてけ」

「おう、サンキュ」

ユーティライネン少尉が履いているストライカーはどこから出てきたのだろう、と考えて視線をずらすと、鉄骨に瓦礫をワイヤーで巻きつけたようなものをストライカーなしでぶん回す姉の方を視界に入れてしまった管野はそつと目をそらした。

受け取った弾薬を格納し、スリングを頭に回して肩にかけた管野はそのまま垂直に上昇し飛び立つ。比較的燃費のいい扶桑製ストライカーであるためエイラよりは余裕があるが、それでも残燃料は半分を割っている。

「孝美!リトビヤク中尉!」

「ああ、管野さん。事情はききました?臨時でケツテを組みましよう」

「よろしくお願いします。それから、私の事はサーニヤと読んでください」

「ああ、よろしく。機位は…」

『皆さん聞こえますか!?!』

管野達の会話に通信で割り込んできたのはサーシャだった。

「サーシャさん？ いったいどうし」

『北側で人型が出ました！ 今、ロスマンさん達をそちらに向かわせましたので交代でこちらに戻ってきてください！』

「なんだとー」

人型のネウロイ。それは、世界で501と502、504、507のウィッチ達のみが接触したネウロイ。ただでさえ謎の多いネウロイの中にあっても一際異彩を放つそれは、ウィッチの動きを模倣すること、そしてウィッチを連れ去るという点で危険な存在だった。

「北にロスマンさんたちを向かわせればいいじゃねえか！ そのほうが、」

『南側もけっしておろそかには出来ません、これが最速なんです……』

元々待機していたロスマン達は管野達の交代要員としての役割があった。それを北に向かわせてしまえば、補給や休息を必要とする管野達の代わりがいなくなってしまう。それを防ぐには管野達を一度戻し、補給と整備を受けさせるしかないのだ。

管野とてそれはわかつている。しかし、それでもなお管野が焦るほど人型は危険な相手なのだ。

『管野さんの懸念もわかります。ですから、一足早く私が北への援軍に向かいます』

「二人で大丈夫なのかよ」

『既に人型との交戦に入ったひかりさんからは敵は人型だけとの報告を受けています。勿論、警戒はしますが』

「……わかった、気をつけるよ」

通信を終えた管野が造船所の方を向けば、すでにそちらから近づいてくるウィッチの姿が見えていた。

ひかりと西沢のペアは初日からペテルブルグの北側への哨戒を担当していた。瓦礫による妨害こそあれど、何時までも持つわけではない。幸い。造船所は市街南西側にあり、北側からは距離があるが警戒は怠れないというわけで毎日必ず4度は北側から東側へ街を時計回

りに哨戒するようにしていた。

そんな彼女らが人型と出くわしたのは、数日前ネウロイの集団によって破壊されつくしたラドガ湖へと延びる道の近くであった。彼女たちの巡回路を把握していたというかのように進行方向空中で佇むソレをひかり達はほぼ同時に察知した。

「リベンジってことかな？」

「それはこっちも同じです」

現れたネウロイは以前ひかり達がとり逃したものとよく似ていた。否、不ぞろいの両足はさながら片方のみストライカーを履いているかのようにあり、また、以前は銃器のような物を生やしていたその右手には鐔の無い刀のような物が伸びていた。

「ひがし、これ持ってたな」

西沢は自分が持つ九九式をひかりに押し付け、背中の刀を抜く。押し付けられたひかりも素直にそれを受け取る。

「……」

邪魔にならないようにとひかりは少し距離をとる。対して西沢は刀を晴眼で構え、呼吸を整える。ネウロイも正面へと移動し睨みあう形となった。

ネウロイの方は構えをとらず、棒状のものをつけた腕をだらりと下げている。

どちらかともなく姿勢を動かし、前へ進む意思を見せる。しても即座にそれに反応し同じく突撃の構えをとる。ほぼタイムラグなしで飛び出した両者がその中間で交差する。

甲高い音が鳴り響く。

互いに傷をつけることなく終わり、背を見せ合う。互いにすれ違つたままの勢いで降下することを選択したため、旋回の後今度は地表近くで交差が発生する。

「前よりも戦ってる……?」

二機の戦いを上から見下ろす形になるひかりはその攻防を見てそうこぼした。

フレイヤ作戦の時に時と明確に違う点は、もみ合いになっていない

所だろう。攻撃を加えた直後、互いに相手の攻撃を捌くことに精一杯になることなく離脱することが出来ている。それはつまり相手の剣線を見切る余裕があるということだ。

「っ、雁淵ひかりより臨時指令所応答してください。繰り返す、雁淵ひかりより臨時指令所応答を……」

『こちら指令所、ポクルイーシキンです。問題発生ですか？』

ふと思いついたひかりは無線機に手を伸ばしコールする。管制の人間が出るかと思つたが、ウィッチからのコールということではサーシャが直接出てくれたのは幸運だった。人型の情報は国家機密どころか国際機密であるため、サーシャに代わってもらうには手間がかつたかもしれないからだ。

「ペテルブルグ北東、東経60北緯30.5の地点にて人型と接敵。現在西沢飛曹長が交戦中」

『なーくっ、すぐに援軍を送ることが出来ません。時間稼ぎに徹して距離をとって戦ってください』

「……じ、時間稼ぎですね？わかりました、通信終わり！」

『ひかりさん？ちよっ』

もうすでにインファイトを始めているなどとはいいがたかつたためひかりは通信を打ち切る。あとでまた問い詰められるのだからという思考を頭の隅に追いやり、西沢の戦いを注視する。万が一などとは思いたくないが、もしその時が来た場合には介入できるように。

戦いの中で西沢は違和感を感じていた。なんだろうか、と思いはするが明確な答えは思い浮かばない。気のせいだ、些事であると切り捨てるには惜しいような。いや、むしろそれを捨ててしまうことにこそ危機感を感じる。そんなモヤモヤとしたものを抱えながら幾度目かの交差を交わす。

「あつ、なに？」

人型の振り上げるような剣筋に柄を押し当てること軌道をずらし、出来た空間に体を捻じ込ませて振り向きざまに剣を風ぐ。我ながら上出来と思ってしまうほどによくできた一連の動きだと思つた。

しかしてその結果はというと、降りぬいた刀身に手ごたえは無く、代わりに視界に入ったのは下から迫る黒。

「っ、おおー！」

弾かれるかのように頭を振り上げれば、鼻先をストライカーのついた左足が掠めていく。完全に不意を突いたと思った一撃は、完全にかわされ、逆に西沢の方が不意を突かれる形となってしまった。

互いに渾身の一撃を外した一瞬。硬直した姿勢から持ち直し、再び建造物の間へと紛れる。低い屋根のそのさらに下の高度を高速で飛び回りつつ、西沢は斬り合いを始めて以来触れていなかった無線へと触れる。

「ひまり、聞こえてる?」

『西沢さん!聞こえてます』

「アタシが落ちたらあんたは逃げなよ」

『はああ!』

無線から響いてくるひかりの声からそらすように首を傾げるが、無線は耳にはめているので意味がない。

『何言ってるんですか!西沢さんらしくもない』

「アタシだって柄じゃないってのはわかってるよ。でも言っちゃうくらいあいつは強い。間違いなく最強のネウロイだ」

今の攻防で西沢には気づいたことがあった。距離を取り、相手の動きに思いを巡らしてこそ気づいたことがあったのだ。

『最強って、互角に戦ってるじゃないですか!』

「アタシで互角なんだ。アタシだから互角なんだ。あいつはアタシの動きをコピーしているんだ」

西沢は伊達や酔狂で最強を名乗っているわけではない。その実力は扶桑で一、二を争い世界でも5本の指に入ると言っている。

「アタシと同じ動きをするネウロイなんて最強だよ、驕りでもなんでもなくね」

そして、それを模倣した存在。模倣するにとどまらず、今なお成長を続ける化け物。それがあの人型ネウロイだった。

「まーアタシだって負けてやるつもりはないさ!ひまりはそこで決

着を待っていていればいい」

そう言つて西沢は無線を切る。また、直に人型と一戦交えることになる。何か確証があるわけではない、けれど確かに感じていた。

道沿いに角を左に曲がった西沢。路地の正面を塞ぐようにして建物があったことから、それを避けて再度左へ回る。

瞬間。

その角の先は少し開けた通りとなっており、見通しが良かった。今まで掛かっていた影が晴れ、上からの日光とそれを反射した雪の光に視界が明るくなったことで、ああ、これはくるなと察した。手足を振って、体を強引に回し、迎撃の姿勢を整えんとする。その途中でこちらへと迫る黒点を視界の端で捉え、こちらへ相對するようにして体を向けなおす。

迫りくるネウロイ。それに対しこちらからも加速をかけて突つ込む。互いに速度をつけての正面からの突撃。不利なのは西沢、早退するべく姿勢を変えるのに運動エネルギーを消耗させられた。軽量な零戦故の加速の良さで幾分持ち直しこそすれど、高度を味方に位置エネルギーを加えた攻撃をしてくるネウロイの方が重い一撃を放てる。

二機の衝突は正面からの単純な形とはならなかった。

刀の間合いに入る直前。西沢は左右のユニットを別々に動かし、さらに吹かした。いつもひかりがやっている燕返し、海軍では捻り込みと呼ぶその変形。あくまでそれっぽくつけているだけのネウロイでは模倣できない、体とは別の機械だからできる動き。瞬間的に相手の視界から消えた西沢は天地逆転の状態で自身の頭上、機位的には下方に居るネウロイに向けて刀を振る。

甲高い音と共に腕へと伝わる手ごたえを感じる。普段はやらない無茶な軌道に狙いがずれたのか脳天を狙うことは叶わなかったものの、相手の右腕を根元から斬り飛ばした。

このままトドメを。そう考えた矢先、反射的に体が動く。何を見たわけでもないが背をのけぞらせ、少しでも距離をとろうとした。その結果、西沢の手からは使い慣れた昭和12年制定海軍制式軍刀が離れていく。

(あー、柄にもなく焦っちゃった)

ネウロイのあまりの強さと感じた手ごたえから、一刻も早くその脅威を排除しようとした気が急いでしまったが故の隙だった。ネウロイの切り飛ばされた右腕には刀のような物が付いておらず、左腕の方から伸びていることに気づけなかった。それでも、無意識で刀を相手との間に割り込ませ、身代わりと出来たのは西沢だからこそでしかない。西沢の刀をはじめた際に腕を振りぬいたネウロイ。もはや相手に武器は無いと見てか、頭上へと刀を振り上げ首をはねようとしてくる。

そのネウロイの頭上から弾丸が浴びせかけられる。サツと身を翻して躲すネウロイと、流れ弾をシールドで受け流す西沢。両者の間に降り立ったのは九九式を二丁、小脇に抱えることで強引に保持したばかりだった。

「まだです、まだ終わってません！」

「素直に聞くとも思ってたけどさあ、逃げろって言ったじゃん？」

突然のことに目を見開いていた西沢だったが、降り立つひかりを見て気を取り戻し声をかける。

「まだ負けてない！たかが一回不意を突かれただけです！まだ戦える！相手が西沢さんと同じくらい強いなら二人がかりなら絶対勝てます！」

そう言ってひかりは抱えていた九九式を西沢に押し付ける。視線はネウロイを見据えたままに、左腕だけで押し付けてくるひかりには、恐れも怯えも、まして諦念の色などありはしなかった。

「ふっ、フフツ。そうだよな、後輩が認めてないのに先輩が負けを認めてちゃいけないよな」

機関銃を受け取り、負い紐に腕を通す。魔道エンジンに魔力を叩き込んでひかりの前に立つ。

「ひとつ人の世の生き血を啜り」

「ふたつ不埒な悪行三昧」

「みつつ醜い浮世のネウロイ退治してくれよう……西沢義子・再度



見参ってね！」

拾い上げた軍刀を背に、芝居がかった口調で見栄を切る。

「そうしてかっこいい感じの方が絶対似合ってますって」

「うんうんアタシもそう思う。それじゃあ、格好つけで終わらないようにあいつを退治しに行くとしますか！」

「はい！」

二人は同時に体をかがめ、勢いよく飛び出した。

## 2つのパブロフスク

ペテルブルグの街の外れ。中心部に比べると建造物が疎らとなり、背の低いものが増える。さらに北へ進めばすぐに山林へと差し掛かるようなこの場所は、道も広く中心地に比べればより自由な空戦機動が比較的低高度で行える。

だからこそ、歪な人型をしたネウロイと、西沢とひかりのペアの戦いは自然、この場所で行われた。

ネウロイの方はその右腕から刀のようなモノを伸ばし、申し訳程度の牽制にのみ光線を放つ。片足にのみ取り込まれたままのクルピンスキーのbf109Kが回ることには無く、あたかも空戦ウィッチを模倣するうえでの要素の一つとしてでしかない、装飾品のようだ。

対する二人は、手に九九式二号二型の本国仕様で二十耗弾を六十発入り弾倉で装着したものを持ち、その背にはそれぞれの愛刀を背負う。ストライカーは零式と紫電改、どちらも自分の愛機ではなく、それぞれ下原と孝美の予備機に手を加え、セッティングを変えたものを使っている。西沢が零戦でひかりが紫電改だ。

「私が上に行きます！」

「任す！あたしも本気で獲りに行くからしつかりと頭押さえて見せろ！」

先刻までのインファイトとは打って変わり、両者は交わることなく距離をとった戦いをしている。正しくは、ウィッチの二人が距離をとって戦おうとしているためにネウロイが詰められずにいると言わなければならない。西沢の動きを真似、相手の死角と裏を突く戦い方を覚えたネウロイを相手にするにあたって、二人は常に相手を視界に入れることのできる距離をとっての射撃戦を選択した。

西沢の剣術をもとにしている以上、たとえ片方が見失ってももう片方の視界に映るよう立ち回る必要がある。とはいえ仮に他のウィッチが同じ事をしてもあつさりとその姿を見失い斬られたことを自覚することなく短い人生を締めくくっていた事だろう。

動体視力に優れ西沢の動きを観察したひかりと、そもそもが自分の動きの西沢だからこそ、攻撃の起点をつぶすことも、動き出すタイミングを読むことも出来た。

リベリオン軍の戦術におけるサッチ・ウィーブのような二機の連携による封殺。これにより、ネウロイは行動の起点のこと如くを潰されてしまい、西沢のみを相手にしていたころのような激しい攻勢が出来なくなっていた。

しかしそれでも、ネウロイは接近戦を志向し尚も距離を詰めようとしてくる。

このネウロイにはそれしかできなかつたためだ。もし、他のネウロイ、それこそ501が出会った人型と同じような光線による射撃戦を行つたところで、片や扶桑最強<sup>魔王か虎徹か</sup>、方や優れた動体視力の固有魔法持ち。光線の投射量で大型に及ばない人型の弾幕程度では、この二人は墮とせない。逆に隙が生まれてしまうことになる。

しかし、二人のどちらであつても距離を詰めることさえ出来れば、今のネウロイの技量ならば一太刀の元に切り捨ててしまえるだろう。つまるところ、ネウロイが勝つには剣しかない。

ちなみに、逆に人型の防御力と言えば、それこそ二十耗はおろか7・92mmであつても人型にとっては致命傷になりかねない軽装甲だつたりする。ネウロイの装甲というものは大きさに比例すると思つていい。大型であれば硬く、小型であれば脆い。小型で硬いネウロイというのは、実際の装甲厚はそこまでではなく速度と傾斜などの形状で打たれ強くしているのだ。

なまじウィッチを模倣したがゆえに人型ネウロイの装甲は同サイズの小型以上に薄い。形状による避弾経始にも期待できない。対してウィッチにはシールドがある。

このことも人型が射撃戦を避ける理由でもある。

”——!!!”

「いい加減に墜ちろおー」

「逸るなつてばひかり。持久戦つてやつよ。じきゅーせん、わかる？」

ウイツチの二人が若干有利ではあるものの、互いに決め手にかける状況。三機の戦いは膠着していた。

その状況が変わったのは戦場に4人目が現れた時。

それに、最初に気づいたのは人型ネウロイ。膠着していたその場において、新たに表れた一人はネウロイにとって間違いなく敵である。二対一が三対一になれば状況はさらに悪化する。

しかし、同時に別の見方もあった。新たに表れた一機はまだネウロイには気づいておらず、人型からすれば隙だらけだ。また、こちらの二機も追いつき見逃さないようにすることで必死であり上空の増援に気づいていない。この一機を即座に切り捨てる事が出来れば、場をかき乱す事が出来るだろう。そうなればこの状況を打開する切っ掛けとなるかもしれない。

ネウロイは、狙いを一点に絞った。

アレクサンドラ・イワーノブナ・ポクルイーシキンはオラーシヤ陸軍の大尉である。

欧州撤退戦と以後の戦いの中で培った戦訓から独自の戦術を編み出し、それを母国の航空学校にて広めたことから戦闘教官としても高い評価を受ける。

ひかりからの人型出現の報告を受けた時、サーシヤはアドミラル造船所に係留された空母リュッツオウに居た。補助発電機が稼働したことから港湾部の倉庫より艦内へと指揮所を移した直後だった。

事前の予定を繰り上げ、即座にロスマン達を南方組への交代へと向かわせ、自身は管野達を待たずにひかり達の救援に向かった。

戦において戦力の逐次投入は愚策とされる。そのため、最善は戻ってくる管野達を待ち共に向かうことだっただろう。

サーシヤがそれをしなかったのは人型ネウロイの恐ろしさを知っていたためだ。以前の戦いでは、サーシヤ自身も頭部からの出血を伴うケガを負わされたほどの強敵。なにより、接近するだけで発動するウイツチに対する洗脳・催眠能力。ひかり達も一度撃退するほどに

戦っているとはいえ、二人だけで戦わせるのはあまりにも不安だった。

前述の経歴も合わせりサーニャ自身の实力は非常に高い。故に単独での先行を選択した。

戦域に近づいた時、サーシヤの目にネウロイはまだ映ってはいなかった。しかし、断続的な銃声と時折閃光のような物は感じ取っていた。それが低い高度で発生していると気づいたサーシヤは、徐々に高度を落としネウロイを捜して首を振った。

突然、銃声が自分の方へと近づいた。

咄嗟に警戒を強める。それと同時に連絡をしようと無線へと手を伸ばす。

そんな彼女が自分へと高速で肉薄する人型ネウロイに気づいたのは、もはや手に持ったDP28機関銃を向けて構える時間もないほどに近づかれた後だった。

まさかネウロイが狙いを此方に定めているとは思ってもみなかったサーシヤ。警戒はしていたつもりだったが、当然の判断として無線へ意識を向けたことが致命的な隙となってしまった。

ネウロイとひかり達はサーシヤが思っていたよりもさらに低高度で戦っており、ほとんど建物に紛れるような高さだった。そのため、限界まで陰に紛れて飛ぶネウロイにサーシヤは気づけなかった。また、距離を詰めようとする動きから突然逃げるように動きを変えたネウロイにひかり達も振り切られてしまっていた。

爆発的な上昇力でもって接近したネウロイは、サーシヤがこちらに気づいたと見るやそれまで気づかれないよう使わずにいた光線での攻撃を始めた。牽制も兼ねて放たれたそれをサーシヤは避けようとした。その結果、運悪く光線は機関銃を掠め、その弾倉を弾けさせた。

至近より殺傷力を伴って飛び散る破片から身を守るべくサーシヤはシールドを使わざるを得なくなる。咄嗟の事でもあり、また同時に複数方向へシールドを張るといふ高度な技を実践レベルで咄嗟に使

うような芸当はサーシャにはできなかつた。

此方が武器を失う一方で、ネウロイはすぐそこまで迫っており、しかし其方へシールドは張れない。

迫りくるネウロイがサーシャの瞳に映る。

相手に武器は無く、その身を守る盾も明後日の方向に掲げている。阻む物は何も無い。まさにこれ以上ない好機といえる。

眼前の敵を切り伏せるべくネウロイは腕を振り上げた。

「Заблудите<sup>思</sup>сь<sup>出</sup> в<sup>中</sup> цене<sup>に</sup> времени<sup>て</sup>」<sup>む</sup>

ネウロイに誤算があつたとするならば、サーシャにはこの状況下でも取りうる反撃手段と、それを実行に移せる冷静な判断力があつたと。

まず3発、続けてもう3発。つい一瞬前までDP28の銃把を握っていた右手の中にはTT-30<sup>ト</sup>／33<sup>カ</sup>拳銃が握られ、銃口から硝煙がたち昇る。シールドを張るにあたって後ろ手に回されていた左手には、いつの間にか茶色く厚い革表紙の本が開かれている。

最初の3発は振り上げるにあたって晒された脇腹へと打ち込まれ、それによってバランスを崩し、かつ動きが硬直した瞬間に追加の3発が剣の生える右腕、その付け根へと叩き込まれそのままもぎ取る。

脇腹に空いた3つの弾痕から伸びた罅はそれぞれ伸びては繋がりに、胴の広範にまで達した。グラリと支えを失ったかのように頭が後ろへと倒れ、糸を断ち切られた操り人形のようにそのまま眼下へ広がる街並みへと落ちていった。

「……っ、はあ！はあ、はあ、ハアー、あ、危なかつた……」

太刀の間合いまで入り込んでいたネウロイが視界から消えたことにより、呑んでいた息を盛大に吐き出すサーシャ。これでも故国で挙げた戦術では肉薄しての近接攻撃を挙げているバリバリのインファ

イターなのだ。言っていることやっていることはブレイクウィッチーズと変わらなかつたりするのだが、彼女らと違うところは無駄な突撃と無理をしないことだろうか。

「サーシャさん！」

ネウロイの行方を見失っていたひかり達も上空で響いた自分達以外の発砲音に気づき、ネウロイを撃ち倒したサーシャの姿を見つけた。

「大丈夫でしたか?!」

「ええ、咄嗟に”此れ”で迎撃できましたから」

”Заблудитесь в цене времени”

サーシャの作った具現化系能力。

これまでサーシャが完全記憶能力の固有魔法で見て来たモノが全て書き込まれたハードカバーの本を具現化する。その中から好きなものを手元に具現化できると言う能力。

ただし、一度使用すればそのものに関する記述は抹消されサーシャ本人も思い出すことが出来ない。また、具現化した物品は手に持った人間の魔力を消費して存在を維持し、手を離れた場合には内包した魔力に応じて現界時間が変わる。

サーシャは咄嗟に使える武器を求め、過去に見たトカレフ拳銃を具現化しそれでもって人型ネウロイを撃ち据えたのだった。

「やるね、えつと……大尉さん。あれだけ近づかれててよく咄嗟に迎撃できたよ」

「同じことをやれって言われても、もう御免です」

追いついて来た西沢も声をかける。刀の間合い、その内側に入りこまれてはいかな西沢であっても確実にうまく凌げるとは言い切れない。だからこそ出た素直な賞賛の言葉だった。

「ひかりさん達こそ無事だったようですねによりです。どちらかだけでも洗脳されて連れていかれていたらどうしようかと」

「や、なんかそういうのは使ってこなかったな。剣での決着に拘ってたようにも思うし」

「あー、そうですね。今思えば、初めて戦った時の考えがまとまらない感じって自分が焦ってたからじゃなくて洗脳をかけられてたからだったのかな……」

ラドガ湖の西岸で初めて人型ネウロイと戦った時、ひかりは2体の人型ネウロイを相手に徐々に思考能力を奪われていつていた。なんとか抗おうとするも“円”の中に入った相手にがむしやらに切りかかる事しか出来ず、撃墜されてしまったのだった。西沢の介入とそれによつて一機が落とされていなければこの場にひかりはいなかっただろう。

「それだけ西沢さんとの戦いがあのネウロイにとっては印象的だったのでしょうか」

「……というか、あのネウロイって破壊されたんですか？」

ふと思いついたような口調でひかりが言った。

一瞬、誰ともなく発した息を呑むかのようなヒュツツという声と共に全員が動きを止め、次いで弾かれるようにして銃口を下に向けて構える。

その先にはただ人がいなくなっただけの建物群が広がり、人間大の金属の塊が落ちた<sup>空</sup>ような跡も<sup>中</sup>ネウロイの<sup>立</sup>姿も<sup>直</sup>なかった。

「サ、サーシャさんの弾がコアまで届いてたとか……」

そうであつて欲しいと言うかのよう<sup>に</sup>ひかりが溢す。

「脇や肩にコアがあるとは思えません。もし仮にあつたとしてもその場で碎けていたでしょうから……」

「あちゃー…取り逃したつてわけか」

その言葉をサーシャが否定し、西沢が結論を言う。

破壊できなかつた以上、また戦うことになるだろう。この場での撃ち漏らしは後々に響く、不味いことをなつたとサーシャは思った。

「あの落ちていつたのは死んだふりつてことかあ……」

「どんどん賢くなつていてる気がしますね」

人型ネウロイはたびたび出現しているが、この北方では目撃例が多い。また、1度の接触で撃破することが出来ず複数回の戦闘を行う事



もある。その中で以前の戦いを踏まえた戦い方をする個体が多い。過去にもウィッチを真似た個体はいた。

「仕留めそこなつた身で言うのもなんですが、ここに居ても出来ることはありません。造船所へ戻りましょう」

結局、北側からペテルブルクへと侵入していたネウロイの影響は大きなものではなかった。より、中心部へと近い南側に戦力は集中している事が分かったと言うこともあり、哨戒は切り上げとなる。

サーシャ達が連れ立ってリュッツオウへと戻ると埠頭ではちやうど管野達が上がろうとしているところであった。

燃料の余裕の問題からひかり、西沢最後にサーシャがの順に降りる。救援にと急いで補給したのであろう管野達も、無事に3人で戻ったことにホツと息をつく思いであった。

「どうかしたんです？隊長」

オネガ湖湖畔の前線基地。滑走路の規模こそ小さいものの、ほどよい距離にあることから”スリュムヘイム・スレファ”にあたって司令部が立てられることとなり、作戦にむけて確保と整備が行われた。その基地も、現在は少数の部隊がとどまっているに過ぎない。作戦開始によつて駐留していた部隊は皆前線へ向かった。ペテルブルグから多くの兵を脱出させることに成功してからはその護衛に当たっている事だろう。

”スリュムヘイム・スレファ”作戦の露払いとしてペテルブルク市外に残つたラルとクルピンスキーは市を覆っていた吹雪が晴れた後、502と合流を図ろうとしたが司令部の命で渋々外に留まった。

司令部としては、内部がどうなっているか分からない状況で貴重なエース級ウィッチを手元から失いたくないという思惑が会つたのだろう。現に、二人は507と共同で使つていた基地ではなくこちらに留め置かれているのだから。

二人に割り当てられた宿舎は見慣れたかまぼこ型宿舎のクオンセット・ハットだが、滑走路と格納庫に一番近い物だった。果たしてこれが優遇されての物なのかいざという時は真つ先に上がれという

意味なのか、はたまたただの偶然かは分からなかったが。

そんな立地の兵舎の窓から外を覗くラルが唸るように声を上げた事に夕食後のティーブレイクに興じていたクルピンスキーは気がついたのだ。

「あれは、KG76、か？」

「KG76？って第4航空艦隊でしたっけ？てことはオラーシヤのウラル側に展開してたはずじゃ？」

カールスラント空軍第76爆撃航空団。主要装備はJu88。原隊は1935年からある古参ウィツチ隊だ。所属の第4航空艦隊はその多くがオラーシヤ南部戦線へと集中して投入されている。その部隊章を描いたHe115水上雷撃脚がオネガ湖に降り立ち、基地へと向かってきたのだ。

「いや、あれは2中隊だ。彼処<sup>あそこ</sup>は戦力損耗に伴い本国に戻って、42年からはヴェネツィアに展開している」

「ええ？わざわざ地中海から援軍ですか？あっちも余裕があるわけじゃないでしょうに。今、ガリア奪還のあおりを受けてるって聞いてますよ？」

昨年9月に行われた501によるガリアを占領していたネウロイの巢の破壊。これに伴い、以前から計画だけはされていた欧州逆上陸作戦が修正された上で実行された。ガリアにおける拠点を喪ったネウロイはニュルンベルグやプラハの巢から戦力を放出。その余波で比較的距離の近いヴェネツィア方面での戦闘が増加。

しかも、ヴェネツィア防衛を任務とする504が直近に行われたトラーヌス作戦で壊滅的被害を受けた上、新たに従来型とは違う、さらに強力なネウロイまで現れるといった有様。なお、その新たな巢は再建された501が担当することとなっているのだが、諸般の事情もあつてこちらも戦力不足である。

その状況でアルプス戦線の貴重な防衛戦力である部隊が引き抜かれてくるというのはおかしい。

「……クサイな」

「おつ、何か感じ取りましたか？」

口元に手を当て、考えを纏めようとするラル。クルピンスキーはそれをちやかした。

「部隊章がな。意匠は元のを踏襲しているようだが、何か付け加えられている。それに一機だけというのもな」

「前を横切った一瞬で良くそこまで。一機だけというのは先ぶれとか連絡役ということもあるのでは」

「ふむ、少し出てくる」

「行ってらっしゃい」

しばらくして。

カフエインの効果も切れ、眠気を感じてきたクルピンスキー。明日になればまた、ペテルブルグに対する新しい作戦でもあるかもしれない、あるいは今の司令部ではこれ以上の戦力損耗を嫌って、今脱出させられた人員で十分と判断されてしまうか……などと考えつつ、ならばもう寝てしまおうと椅子から身を起こした辺りでクオンセン・ハツトの入り口が開かれた。

「KG76じゃなかった」

当然と言えば当然だが、入ってきたのはラル。

入ってくるやいなや、足を止めることなく自分のベッドへ向かい、荷物を漁りだす。とはいえ、作戦後に直接こちらの基地へと移った以上彼女の手荷物など身につけられていた手帳の類がせいぜいだが。

「はい？」

バサバサと慌ただしい様子で手帳をめくる自身の上官の姿に面くらいつつ、開口一発に言われた言葉について聞き直す。着水して基地に収容された機体の部隊章がKG76の物だと言ったのはこの人自身ではなかっただろうか。

「フェイクだ。部隊章はまやかしだろう。機体を見た時点で気づくべきだった」

「何がですか？」

「水上脚だぞ。爆撃飛行隊が何でそんなものを持って、スオムスでもあるまいし」

「ああ」

世界的に見て、水上機はウィッチ、非ウィッチ問わず減少傾向だ。クルピンスキーの感覚がおかしくなっていたのはここが機体というだけで貴重が故に水上機だろうと中古複葉機だろうと最前線で使ったあげく戦果を挙げている連中の国の近くだったからだろう。

「おまけに出迎えが中佐だぞ？たかが一爆撃ウィッチに自ら足を運んでいた」

「そういうこともあるのでは？」

「無論、裏付けはとった。連中、近衛軍諜報部だ」

親衛隊保安諜報部  
”近衛軍諜報部”

カールスラントに存在する組織。余人にわかりやすく誤解を承知で直すならスパイ組織だろうか。ただし、カールスラントには正式な諜報組織である国防軍情報部”アプヴェーア”が存在する。こちらの方が歴史ある組織だ。

「……わぁーお。あの悪名高い？」

「そう、あの悪名高きKDだ」

皇帝の、という意味でKが付くもののその設立に皇帝はかかわっていない。

カールスラント本土がネウロイの手に落ち、彼らがノイエ、と呼ぶ南米へと居を移した後の事。これまで築き上げてきたものの多くを失ったカールスラントが今次大戦を切欠に凋落することを恐れた者達がいた。彼らはあるとあらゆる手段を用いた。それこそ同盟国への工作や国内における意にそぐわないものの殺害などありとあらゆるものをだ。

”カールスラントが必要とされる状況を作り出す”

本土から持ち出せたもので最も価値があったのは、技術者たちと軍だった。彼らが必要となる戦場を探り当て、頼りとされる状況を演出し、その障害となるものを消す。

そうして国際社会における国家の立場を用立て、他国からの支援を引き出す。いずれ本土奪還を果たした後も列強国であり続けるために。

「防諜を旨とするアプヴェーアとバチバチにやってるってのは聞きますけど、なんだってこんな北方、それも作戦中の基地なんかに入り込んでくるんです?」

「お前もなかなか情報通のようだな」

「まあ、女の子ってどこにだっていますからね。そういうのにどっぴりな子も……って」

話をそらされたのかと思ったクルピンスキーがラルに向けた目を細める。

「わかっている。奴の、奴らの目的だろう。ハッキリと言うが、わからなかった」

「ちよつと隊長?」

「この短時間にそこまで探れるか。あのウィッチがKG200とかいうところの第一中隊所属というところまでだ」

「それはそれでどうやって知ったんです……?」

見ろ、と言ってラルが見せてきた手帳には『“ND”から“KD”へ移管』『“任務内容・不明”の文字と共に書かれたKG200についての細々とした情報とそのエンブレム<sup>部 隊 章</sup>。』

「ともかく、我々にできることは二つだ。無視か、行動か」  
「で、どちらに?」

「動くぞ」

そう言ったラルは手帳の他に野戦服のポケットに詰められるものだけをもって踵を返す。それについてクオンセン・ハットを出るクルピンスキーの方は手ぶらだ。

「いいんですか?何か後ろ暗いところがありますよ、と喧伝しているようなもんじゃないですか」

「向こうの目的が最初から我々なら今更、そうでない時用に出先で適当な命令書もでつち上げておく」

「命令で移動しただけだからしようがないんですって?」

「疑いこそすれど問い詰めようはないさ。してくるようならばそれをきつ<sup>ネ</sup>かけ<sup>タ</sup>に探り返す」

「おお怖」

「それでどちらに向かうおつもりで？」

「北、それから西だ」

ムルマン港

国境越え

「北はともかく西？ スオムスに入るんですか？」

歩哨をやり過ぎし、格納庫へと忍び込む二人。それぞれのストライカーを確保し、オネガ湖の方へと走る。

「連中の目的はわからなかったが面白い話は聞いたのでな」

「と言いますと？」

偵察型B-17爆撃機

「リベリオンのF-9が夜間の高高度偵察でペテルブルグからの無線を拾っていたらしい」

「何も聞いていないんですが？」

「連中にとつて不都合だったのだろう」

先ほどからKDの目的についてはわからなかった、という話を繰り返されていくような気がするがそれはそれとしてさっきの所属についての話も今の話に関してもさっきの短時間で探れるものじゃない。むしろ、探れてしまう隊長だからこそ、探れなかったことに思うところがあるのかもしれない。

ストライカーを肩に担ぎ、雪原を走りながらクルピンスキーはそう思った。

「取り残された502も独自の脱出を計画しているようだ。海に出るつもりのようだがあと3、4日はかかるだろう」

「なあぐるホド。ここに居ても出させてくれるわけないから、スオムスの側から迎えに行こうと」

「彼女らが海に出ればスオムス側も何かしら動かざるを得ないだろう。すぐに出せるのは魚雷艇が精々だろうが今から働きかければ幾らでも動かしようはある」

会話を交わしながら二人がたどり着いたのはオネガ湖でもまだ氷の残る部分。氷上は臨時の飛行場としては上等な部類だ。基地の滑走路を使ったのでは脱走だ何だと騒がれてしまうかもしれない。バレ難いよう距離をとってそれへ上がり、翌日の朝にばれるよりも前にでっち上げの命令文を基地宛に送ってしまえば、何時基地を出たのかわからない以上最低限の言い訳は立つ。

「まずはここからムルマンだ。強行軍で行く」

「やれやれ。大変だけど502の可愛いみんなのためだ、頑張ろうしよう」

静かに空へと上がった二機はあつという間に、月明かりを逃れるようにして雲へと潜った。

ひかり達3人が人型ネウロイと戦った日の晩、ネウロイからの襲撃は無かった。エイラ、サーニヤ、下原、ひかりが数時間ごとに区切って交代で待機こそしていたものの、見張りにも電探にも敵影は映らず哨戒も無駄に終わった。

襲撃が始まったのは夜明けと共にだった。

最初上がったのは交代を待っていた下原とたたき起こされたひかりのペア。襲撃のあったタイミングでサーニヤは艦へ戻るところだった。そのため、ほぼ徹夜明け疲れた状態で向かわせることはできないと判断され一度戻ることとなりひかり達の後を追うようにしてロスマンやニパといった昼間要員が期初時間よりも早くに起こされることとなった。

「昨日までよりも数が多いよ!」

「しかも大きめの奴も混ざってる!」

「これは……夜戦用の個体までまとめて投入したというの?」

敵は昨日に引き続き南方からの侵入であった。しかし、陸戦の個体とそれを援護する小型が多かった昨日までと比べて明らかに中大型の数が多かった。

夜間に投入されやすい大型大火力の個体を昨日までの部隊と纏めて送りつけてきたのだった。

敵の規模が強大であることから、ペテルブルグ臨時司令部は午前中のうちにこの場での迎撃を断念。リュッツオウでの脱出を急ぐこととなった。

「陸戦ウィッチ隊、ユートイライネン大尉が戻られました!」

「全速で戻ったぞポクルイーシキン。これで次にいけるな？」

「ええ。限界まで粘っていただきありがとうございます」

地上部隊で最後まで残っていたストライカー回収部隊が艦内へと引き上げられる。なお、タラップでの乗艦のできない陸戦ストラカーは海中に投棄されてしまった。

陸戦ウィッチ部隊に先駆けて、歩兵や整備兵などからの志願による一般兵部隊は下がっている。こちらも装備のほぼすべてを海中投棄している。

「タグボートに牽引の開始を指示しろ！」

安全に出航するためにはある程度船体を岸壁から引きはがしてから自艦のエンジンで動き出す必要がある。そのため、三隻のタグボートが用意され、ワイヤーでもって牽引が開始される。

徐々に船体が動き出したのを乗員が感じ取った瞬間、すぐ近くの工場区にて爆発。現在上がっているウィッチ達では攻め寄せる敵を受け止めきれず、漏れ出た小型機が放った光線がリュッツオウを掠めて工場の壁を貫通。内部の空気を一気に膨張させてそれが爆発と化した。

「敵小型による長距離射撃によるものと思われまます！」

「煙幕展開！無いよりはいい！」

空いた金属缶に薬剤を詰めただけの簡易煙幕装置が整備員たちによって甲板に置かれたり海中へ蹴り落とされたりする。化学反応によって湧き上がる白煙がスクリーンとして船体とその周囲の空間を覆い隠す。同時に煙突からは不完全燃焼による黒煙が立ち上り辺りに漂う。

果たしてネウロイが視覚によって目標を捉えているのかは定かではないが、対戦当初から有効な手として使われてきた。

「ブロホノウ指令、ローテーション的にユーティライネン少尉・リトヴヤク中尉は燃料弾薬共に限界です」

「ウィッチ隊に帰投命令！同時に扶桑ウィッチ隊は直掩に上がれ！ここからが正念場だ！」

「了解、《甲板待機中の全機は順次発艦！》」



南側での遅滞戦闘に従事していたウィッチ達が呼び戻されると同時に甲板上の発進促進装置で待機していた扶桑海軍の5人が発艦を開始する。この場の扶桑ウィッチは全員海軍所属であり、一番経験の浅いひかりですら最低限の発艦訓練はこなしており、なんなら実戦での発艦経験まである。残りは扶桑の海外派遣古参ウィッチだ。

「機関室！状況はどうか！」

『試験無しのぶっつけではありますが、今のところ主缶に問題は見られないようです。回転数も正常、あとはギアとの接続ですな』

「頼むぞお……やってくれい！」

「了解、主機接続！」

号令と共にギアが接続される。大気の48倍もの気圧を誇る蒸気が噴き出すパワーから生まれた回転がそのままシャフトへと伝達され、フライホイールがうなりを上げる。これによりスクリューが回転を始め、わずかな揺れと共に乗員の多くがその推進力を感じた。

『タービン回転に問題なし！』

『シャフトへの動力伝達に異常は見られません！異常振動等もありません！』

「敵機接近！」

「作業員は至急退避！対空戦闘用意！」

敵機接近の報に艦全体に警報が響き渡る。甲板に残っていた作業員たちは発進促進装置と共に昇降機で艦内へと戻り、入れ代わるようにして機銃座にはそれを生業とする者達が慌ただしく駆け寄っている。パブロフスク要塞に配備されていた空軍第12高射砲連隊は第9高射砲師団隷下で長年戦ってきた者達であり、慣れない艦の上でもこれまでの経験から良い動きをした。

「指令、後は」

「そうだな。では、行くでしょう！」

——”ペテロパブロフスク”発進！」

「了解！総員配置につけえい！」

”ペテロパブロフスク”

脱出の間際になって、この艦は少数の人間と共に小規模な竣工式な

どをやった。追い詰められた極限の状況だからこそ、つかの間の息抜きとして行われたそれは見物に來た兵たちによつて少しばかり華やかなものとなつた。

その中で、本来ならば進水式の際に行われる艦名の発表、あるいは付与ともいふべきものが行われた。

リュッツオウとはあくまでカールスラントの重巡としての艦名。オラーシャ側に引き渡されたのち命名される予定となつていた艦名があつた。

そしてそれは、どういつた偶然なのか、502が使う要塞と名を同じくしていた。

502はウィッチだけの隊ではない。整備兵や炊事洗濯等を行う者達もいる。要塞に住まうという意味では直接の指揮下になくとも高射砲連隊の者や憲兵隊の人間だつて502の仲間だ。

長く過ぎた要塞に愛着を持つ者だつてゐる。ネウロイのただなかに置き去りにしてしまふことを悔しく思う中で、せめてその存在を少しでも思えるようにと艦名の変更に賛成するものは多かつた。

”パブロフスク”という名の基地に屯する部隊。ウィッチーズではない、【統合戦闘航空団】がそこにはあつた。

10+3で出来た1

「機関！両舷全速！」

「ヘルシンキまで保てば良い！」

空母パブロフスクに乗り、ペテルブルクを脱出した502と乗り合わせた者たち。包囲されていた状況からも脱したものの、未だ敵は彼女らを追い続ける。

海に出たことにより、陸上型を気にしなくて良くなった。しかし追いつめる空戦型は強力な大型が多く含まれ、一筋縄ではいかない。

「サーシャ！弾くれ！二十耗！」

紫電改を履き、機関銃を握る管野。空母パブロフスクへと迫るネウロイに対し銃弾を叩き込み粉碎するものの、弾倉に残された二十耗弾はもうあと数発もないだろうことを悟る。

敵の数が多く、それに応じて消費する弾丸も増える。管野もベテランのウィッチ。焦りや恐怖から無駄弾をばらまくような真似はしない。それでも、大型を墜とすには必要な弾数の多さからストライカーの燃料が尽きるより早く手持ちの九九式が沈黙してしまう。

ここは一度補給に戻るべきかと考えるも勝手に下がるわけにはいかない。急に己が抜ければそこに穴が開く。下がるには他のウィッチ達とも話さねばならない、と考えたところで、甲板から補給を終えたウィッチ達が飛び上がっているのを見つけた。サーシャが銃弾を用意できることはウィッチ達には伝えられていた。管野はこれぞ天の恵みと言わんばかりに声を張り上げ、サーシャを呼んだ。

「呼ぶのなら無線を使って下さい。そんな大声出さなくても！」

「無線をいじる手間も惜しかった。それよか弾くれ弾」

「まったく……、どうぞ。他の人たちも射耗してしまっていますか？」

「ああ。ひかりと西沢は他に弾渡して刀で戦ってる、それでもこうだ。孝美や下原も単射で節約してるが、弾倉一つ分も残っちゃいねえだろうな」

パブロフスクの出向に合わせて扶桑組と交代する形で1度着艦し

ていたサーシャ。管野の求めに応じて、具現化した二十耗弾を弾倉ごと渡す。管野によれば他の面々もとうに残弾は限界らしい。

消費した記憶に対応したページの記述は抹消され思い出せないこと、古い記憶であるほどに消費するオーラ魔力は減り、逆に新しい物ほど消費するという誓約と制約によって成り立つこの能力に、部隊長であるラルは戦場での補給役を求めた。その為、具現化した物品の存在を維持する分のオーラ魔力はそれを所持するガワに負担させることでサーシャ自身の負担を減らす取り組みを付け足させたのだ。

それでも、サーシャの魔力は有限であり、記憶とてまた同じだ。使どころはある程度見極めなければならぬ。が、ここはその使い時だろう。何故なら、ペテルブルクとスオムスの首都であるヘルシンキは同じスオムス湾に面した近距離にあり、其処まで、いや、近づいてスオムスの防空圏に入ることさえ出来れば戦闘機やウィッチの援護を受けられることだろう。

流石にストライカーの燃料は空中での補給が出来ないが、其方に余裕があるのであれば弾薬さえ補給出来れば戦闘力を維持できる。一々パブロフスクまで取りに戻らせるだけの時間が惜しかった。

パブロフスクに乗るウィッチは11人。統合戦闘航空団の定数を満たすが、隊長であるラルと、一緒に残ったクルピンスキーがいない代わりにエイラ・サーニヤのペアが指揮下に入っている。

全員が名の知れたエース級のウィッチ。唯一新人でウィッチの最低階級であるひかりですらペテルブルク防空戦とそれ以前の戦果でエース認定させるだけのネウロイを落とし、守備隊の間では名も知られていた。

余談だが、この頃に撃墜認定に改訂が入り、コアを持たない小型ネウロイをコア持ちの付属と見なすようになったため全ウィッチのコア計算にやり直しが入った。

敵が迫る中、決死の思いで埠頭を離れて数時間。

一騎当千が11人。それぞれが奮闘し、互いに補い合う。パブロフ

スクに乗り込んだ高射砲師団もまた良く奮戦し、被害こそあれど浮力と推進力を維持したままスオムスの勢力圏へと入ることに成功したのだった。

最初に得られたのはスオムス軍が設営した監視所との通信。誰何の問いに返した答えはすぐにヘルシンキの司令部へと届き、其れは旗下の部隊への命令へと変わった。

まずパブロフスク上空へと到達したのは戦闘機隊、それと僅差で到達したのはスオムス空軍第24戦隊。エイラやニパの古巣だった。

「ラプラー！」

「前を向けニパー！ここを切り抜けてからにしろ！」

” こちらはスオムス空軍第24戦隊。これより戦闘に参加する”

との通信を皮切りに戦場へと突入した12人からなるウィッチ隊。ストライカーこそカールスラントデイのbf-109G-6型に統一されているものの、カールスラント本国では既に旧式とされている機体。しかしそれを感じさせない動きでネウロイへと襲い掛かる彼女たちは間違いなく精鋭で、各々の手に持った機関銃や装甲ライフルでもって次々とネウロイを落としていく。

24戦隊の現在の展開地点はカレリヤ地峡のすぐ北。彼女らも北部前線での防空に従事していたのだが、スオムス海軍からの通報が司令部へと行った後、脱出する艦を護衛するようにとの命令を受けたのだ。

部隊からは3人ものウィッチが統合戦闘団に参加。また、ニパ達の在籍していたころの隊長であるルーツカネンがあがりの年を迎えたこともあって、現在は残ったラウラ・ニツシネンが次期隊長として現場指揮を執っている。ラプラーは彼女の愛称だ。

「ねえ！ルーツカネン少佐は!?!」

「もう上がりを迎えられた！まだ飛べなくなるほどではないが現場からは身を引かれたよっ！」

エイニ・アンティア・ルーツカネンはニパがいたころの24戦隊の隊長だ。45年現在、既に20歳を迎えて一年以上が経っている。本

人もあがりを見越して隊長職をハッセに引き継いでいたのだが、その前にハッセが507の隊長に抜擢されてしまったため予定していた34戦隊への移籍を遅らせて24戦隊の維持に注力している。

「あつ、そうか。そうだったね……」

「ウィッチである以上致し方のないことだ。お前が気に病むことじゃない」

「うん……」

ニパが旧友との親交を温める中にも、空母パブロフスクはヘルシンキとの距離を縮め、それに伴って徐々に援護の戦闘機も増える。スオムス側も自国の領域への大規模な進行ということもあって国内のあちらこちらから戦力をかき集めている。前線から引き抜いて空いた穴をスオムス湾までは航続距離の足りない基地から飛び石のように経由させて前線の穴埋めを図っていたりもする。

飛来したスオムス空軍の戦闘機は新旧入り混じった雑多な編成で、中には複葉機まである始末。機体のハンドレを腕で補うパイロットたちによつて戦果こそ挙げられているが、空を見回せば落とされた味方機の吐く黒煙が海面から立ち上っているのもわかる。

それでもなお、ネウロイは空母パブロフスクへの攻撃を辞めようとはしなかった。

「ああもう！コイツら何処から沸いて来てんだ！」

「ペテルブルクからついてきてる奴らだけじゃねえ、大陸側からも飛んで来てんぞ！」

追撃を続けるネウロイがウィッチ達によつて受け止められ、戦闘機隊の増援もあつてその数を減らすと、スオムス湾の対岸、ネウロイの支配地域下にある土地からも追加のネウロイが現れ出すようになった。

ペテルブルクから追いかけてくるネウロイは航続距離の問題もあつてか小型、中型のモノは徐々に脱落し、数を減らしていた。この為人類側に増援が来ると一気に戦力差がひっくり返ったのだが、この大陸側からの増援により、一進一退の様を呈するようになった。

「右をやる！続けひまり！」

「ひかりです了解！」

502部隊は当初、空母パブロフスクを中心に纏まって戦っていた。現在はスオムス空軍が援護に来てくれたこと、ネウロイの攻撃が彼らにも分散し圧力が下がったことからロツテごとにある程度分散してより多くのネウロイに対して圧を加えていた。

ひかりと西沢のペアも自分たちで選んだ目標に対して攻撃を加えていた。先任である西沢の判断の元、周囲の味方機の戦況も踏まえて対処すべき相手を見極めて仕掛ける。

前に出るのは西沢。左手に九九式二十耗機銃を、右手には昭和12年に制定された海軍制式軍刀を握る。銃弾を自分の前方へとまき散らしながら、銃口の先とはまた別の敵機をすれ違いざまに切りつける。斬りつけられたところを中心に砕けた装甲。そこからはネウロイのコアが存在することを示す紅い光が漏れ出す。

西沢はそれには目もくれずに更に新しい敵へと向けて飛翔する。代わりに、西沢について飛んでいたひかりが同じくすれ違いざまに一撃。右に握ったひと振りを瞬時にコアに突き立て最小限の動作で終わらせる。

「終わりが、見えない！」

「とか言ったところで敵が減るでもなし。やるしかないでしょ！次、中型3」

ペテルブルグも日中は似たような敵の襲来頻度だったが、あの時と違うのは下の状況だろう。ペテルブルグでは被弾や燃料切れを起こしても味方の勢力圏に向けて強引にでも降りてしまえばあとは隠れたいれば回収に部隊がやってきた。

ところが今は海の上。着陸に比べて難易度が上がるし長くは浮いていられない。味方の部隊にだって回収する余裕はないだろう。

「眼」を使います！」

「ん、コレはつけてるよ」

次に西沢が目標に選んだ中型の集団は味方の戦闘機隊が敵機と乱

戦を行っている空域に横合いから割り込もうとしているのが見て取れた。戦況は五分五分だったがそこに装甲を持つ、さながら重戦闘機ともいうべき中型が大挙して押し寄せれば機動に何のある戦闘機などあつという間に駆逐されてしまうだろう。

故に一早く処理する必要があると判断したひかりは魔眼とそれを共有する髪飾りの使用を決めた。どちらも無制限に使えるわけではないため使いどころを選んでいる。

「見えてますね！」

「ばつちり！」

三機アローヘッドで飛ぶ敵中型ネウロイ。その先頭を飛ぶ機体を隊長機とみなし、二人の機銃の火箭を集中させる。ピンポイントで装甲を削り飛ばされ、そのままコアまで粉碎された敵機は爆散。それについて飛んでいた二機はそれを避けて散開する。

「そこ！」

「切り捨て、御免ッ！」

別れた敵機も先頭機の破片が自分たちの前から落ちてしまえば再度編隊を組んだことだろう。そのほうが火線を集中できるし迎撃する側からすれば厄介だ。

故にこそ、敵機が破片を避けようと二手に分かれた瞬間に二人は攻撃を仕掛けた。

どちらも扶桑刀を用いてコア部分を切りつけ、最小限の一撃のみで撃墜する。傍からは刀身の厚み分の切断痕しか見えなかったことだろう。

「よし次！」

「はいっ！」

破片に巻き込まれないよう離脱しつつ、ひかりは魔眼を収め刀も鞘に仕舞い銃を改めて構え直す。西沢は既に新たな敵集団を見定めたらしく呐喊している。それに遅れぬよう、ひかりは紫電改の魔道エンジンを吹かして加速する。



時間が経つにつれて戦況が細かく推移するなかで周囲の割を食った者達がいた。艦隊後方から大陸側にかけてをカバーしていた雁淵孝美・管野直枝のペアである。

「孝美！」

「管野さん！あれを！」

こちらが有象無象と戯れている間に眼下を通り抜けようとした中型を孝美は見逃さなかった。孝美はその魔眼でもって見抜いたコアの位置を正確に狙い、引き金を引く。続けて放った次弾でもって露出させたコアも撃ち抜くが、其方に気を取られて別のネウロイに近づかれてしまう。

もはや同時に気を払える限界を超える数のネウロイを孝美は引き受けてしまっていた。

無論、周囲が手を抜いているというわけではない。誰だって限界なのだ。首都へと近づいているだけあって味方の数は増えてこそいるものの、スオムスという国の規模が足枷でしか無かった。

戦闘機隊はともかくウィッチ隊が僅か二個。それも、首都防空の34戦隊のみならずカレリア北方を守る24戦隊も入れて二つだ。502を含めても50人に届かない。

ウィッチとて無敵ではない。弾切れ・損傷・時には負傷で下がらざるを得ない者もいる。ウィッチはまだマシだ、多少無様でも無理矢理空母パブロフスクに落ちてしまえば助かる。パブロフスク側もそれを見越してシートや毛布を積み上げて緩衝材の足しにしている。戦闘機隊は墜とされれば助けは無い。キャノピーを開けられるか、スピコンに陥ってないか、機体にぶつからずに脱出できるか、パラシュートは開くか、光線が当たらないか。

これだけの条件をクリアしたラッキーガイに与えられるのは未だ氷の浮かぶ3月のスオムス湾に浮きも無しに放り出されるという結末だ。墜とされてなお戻ってこれる者が果たして何人いるか。

そうして減った味方が引き受けていた筈のネウロイを今度はだれ

が相手するのか。誰かが引かざるを得ない貧乏籤を孝美が引いたというだけの話だ。

攻撃こそ最大の防御。

飛び回りながら、敵が撃つより早く自分が撃ち墜とすことで身の安全を保っていた孝美。とうとう、シールドで凌ぐがざるを得なくなる。あつという間に光線で身動きがとれなくなった。

ペアである管野は、自分が対処しなくては、と考える。眼前の小型を手早く撃破した次は、孝美を襲う一気に中型との距離を縮めにかかる。

「うあつーッ、邪魔すんじや、ねえ！クソオ！」

近年、ネウロイの進化は著しい。局所的には戦術まで使ってくるほどだ。そんな彼らからすればウィッチを、それもエース級ともなれば確実に捕殺したい相手だろう。

その妨害となる管野に攻撃型が浴びせられるのは当然の帰結であつた。

孝美に雨あられと光線を浴びせ身動きをとれなくしている中型は3機。その距離は遠く、闇雲にバラ卷いたところでコアはおろか装甲すら抜けないだろう。

かと言って妨害してくる個体を墜としていたら間に合わない。シールドは個人差があるとは言ってもそう何発も光線を受けていられるものじゃない。極一部の例外を除き、あれだけ浴びせられていれば遠からずシールドが解け、孝美の肉を灼くだろう。

（如何すればいい、何か手は、誰かいないのか、どうしてオレは——！）

管野の頭は限界まで回っていた。相方の危機、なのに今それをどうにかする手立てが目の前に無いということがこの数十秒後に何を意味するようになるのかを理解してしまっているから。

『管野さんは放出系ですね!』

ふと、この場に似つかわしくない抑揚の声が聞こえた気がした。

『放出う? ふーん…』

『カンノのイメージにあわないなあ』

『まあ、アレを見てるとね。放出、ていうより溜めて固めるって感じだ』

次々と声が聞こえてくる、いや思い出していた。耳にしているのではない、脳裏によぎっているのだ。この場にいるはずの無い者の声も交じっていたことから気づいた。

これは、初めて水見式を行った時の会話。基地の談話室でグラスに木の葉を浮かべるといふ傍から見たら奇妙な図の中で水が薄っすら色を増し橙色になった時のことだ。

『圧縮式超高密度魔法陣、でしたっけ。うーん…でも固有魔法が性質と関係するかって言われると違う気もするし…』

『私、あんなに小さくなった魔法陣を見た時は内心ビツクリしてたんだよね』

『ああ、わかるわかる。シールドとして使ってるときは普通の大きさだったからね。解放したらあの大きさになのに? ってギョツとしたよ』

シールドを圧縮して拳に展開し、敵に向かって突撃する”剣一閃”。魔力の”放出”からは程遠いというあいつらの言葉も理解できなくもない。

それよりも気になったのはあのエセ伯爵が何気なしに言った言葉だ。

”解放したらあの大きさに?”

”解放したら”

”解放”

管野の念能力は魔力のストックだ。

欧州戦線を戦い抜いてきた管野にとって、戦場で一番気にかける物といえば魔力の残量だった。拳一つでネウロイを墜とす身からすれば、残弾がたとえ尽きようとも魔力さえ有ればネウロイは墜とせるという考えからだった。

故に、魔力の消費を抑える、あるいは魔力そのものを多く持つという発想へと至り、それは日々使い切らなかつた余剰魔力を少しずつ右腕に呪印の画数という形で貯め込むという能力となった。

能力のメモリ・容量はなるべく小さくするべき、というひかりの助言と、自身の魔力を圧縮するという固有魔法から形になるのは比較的早かつた。

ニパとも相談を重ねた上で出来上がったそれを管野は気に入っていた。ただ、他の隊員達的能力を聞くに、なんとも爆発力に欠ける力だ、と能力に名前をつけることもなくただひかりに対するびっくり箱程度にしか使っていなかった。

その考えは間違っていた。

爆発力に欠けてなどいない。

爆発させようとしていなかったただけだ。

「解放」：っ！ブツ飛べ、オラアアアア！」

開放作戦からこっちチマチマ使い続けて残った3画全て惜しむことなくつぎ込み放たれた一撃は管野の行く手を塞いでいたネウロイを真つ向から撃ち抜き、そのまま孝美に集っていた中型の一機に命中し炸裂した。

貫通せずに表面で炸裂した魔力光線を受けた中型は拉げて折れ、悲鳴のような金属音を響かせて爆散した。副次効果なのか強い衝撃波を伴って拡散した破片は他のネウロイへも襲い掛かる。

「今ならっ！」

近くにいた孝美もそのあおりを受けて吹き飛ばされるが、もともとシールドを張っていたことも相まってダメージを受けることなく、逆

に吹き飛ばされることで危機的状況から脱することに成功した。

体勢を立て直した孝美の目に入ったのは、破片と衝撃のダブルパンチに襲われたネウロイがバラけた光景。体の大きいものはより多くの破片を浴びて再生に手間取り、小型はと言えば衝撃波に耐えられず海に突っ込み砕けたものもあつた。再生にエネルギーをとられて動きの鈍ったネウロイなどの的ではない。厄介な中型から順に魔眼を駆使して排除していく孝美。

(今のは管野さんよね、とっておきの一撃ってことかしら。それだけの威力はあつたわね)

手と目は休めずに狙い撃ちつつ、この惨劇を引き起こした管野の一撃について考える。

「うお、すっげ……」

当の放った本人はと言えば自分のはなつた一撃が思った以上の威力を見せたことに呆けていたのだが。

『やるじゃん！……うえーつと、ああ。菅野！』

「うお、見てたのかよ」

孝美のピンチを見ていたのはなにも管野だけではない。パブロフスクには大勢が乗り込んでおり見張りを行っているものもいる。その者が艦橋に報告をあげ艦橋からウィッチ達へ至急救援に向かうように伝えられていたのだった。

その中で最初にたどり着いたのが西沢だった。

「けっ。見てたんなら早く来いよ」

『やあ、それはごめん。いやあたしも急いだんだけどさ』

「まあ、孝美も無事だしそこはいい。それよか、」

他の戦況はどうなっている、と管野が続けようとしたとき、大気を振わせる轟音と共に空が割れた。

「うおおおおお!?!」

「なんだ!?!」

突然の暴風に躰を煽られ、管野も西沢もひっくり返る。

手足を振り回し、その反動も活用して何とか落ち着くまでに三十秒近くを要した。

見上げた先では曇天の空が二つに割られ、その向こうには青空。そして、その青に落ちた一点のシミ。黒く細長いそれは次第に近づいてきており、日差しの向きでその明暗がはつきりすることです。そのディテールが徐々にわかる。

「んだよ、ありや……」

「大型も大型、あのクラスは……それこそ扶桑海以来かな？」

前後に伸びたその形状。上部には艦橋のような突起を、本体の大部分は上下に二枚の開放型バレル。その後部、中央で薄い煙を纏う赤い発振部からそれが超大型ネウロイにして超大型砲であることが伺えた。

高度3000程の位置に鎮座するそれに、動けずにいる管野達。その視線の先で、発振部が赤く輝きだしバレルの間は紅く放電しだす。

「ヤベえ！第二射だ！」

『全員衝撃に備えて！』

無線から飛び込んでくるサーシャの叫び声。

次の瞬間には視界が発射の閃光で白く染まり、さらに光線で紅黒く上書きされる。

空中にいるウィッチに捕まれる物など有るはずもない。気休め程度に体に入力グツと待ち構える。

着弾の衝撃か、大気との摩擦の熱によつて瞬時に大気が膨張したからか。或いは両方か。

遠目には白い靄の样に見えたそれは、次の瞬間には自分の体を包み込んでいた。

靄の样に見えた衝撃波はあつという間に戦場を包み込み、そのまま後方へと抜けていった。

突き出したシールドが受けたこともないような振動で腕ごとにもぎ取られそうになる。

躰が揉みくちやにされてねじ切れそうになるのを必死にエンジン

を噴かすことで抵抗する。

時間にしてみれば僅かな間だっただろう。体感には何倍、何十倍にも思えた時が去った後、管野の目には一見何も起きていなかったのように見える。

「あ……？」

衝撃波によって薄く掛かっていた雲が晴れた事で視界が明るくなってこそいたものの、眼下の海上に変わりは無く、空母パブロフスクも浮かんでいる。

いや、違う。無事なのはそれだけだ。

管野の後方で何かが水に落ちる音がする。気安く其方に目を向けたことを管野は後悔した。

ウィッチは捕まる物こそ無かったがシールドで身を防げたし幾分衝撃波その物を緩和することも出来た。

では、そうで無かった物は？その答えが管野の後ろには拡がっていた。

海面には人類側の戦闘機と大小様々なネウロイの残骸が波間を漂っていた。機体の制御を失い海面に叩きつけられた戦闘機は原形をとどめておらず、折れた翼やグシャグシャになった胴体がまばらに浮き、管野の見る前で沈んでいった。

水を苦手とするネウロイも自ら離水することも出来ずに沈み、やがて海中で光となって消えていった。

「うえっ……」

人類の仇敵、そう頭で分かっていたものものがき苦しむようにしてやがて力尽きる様を思わせる光景に思わずえづく。

「管野さん！」

「サーシャか……」

「パブロフスクへ。皆さん集まっています」

パブロフスクでは負傷したウィッチや海面から引き揚げられたパイロットが収容されると同時に、燃料や弾薬の補給も行われていた。燃料の過剰な消費を無視すれば専門の艦載ウィッチでなくとも垂直

発着艦ができる全通甲板空母型の利点を生かした前線基地だ。

「俺たちが目障りだからってあんな奴まで投入してきやがるのかよ」

502の面々は優先して補給を受けるとともに直掩も兼ねて艦上空に集合していた。

「さっきのもだけどき、あいつ何処狙ってんの？」

大型砲ネウロイの射撃間隔は空いていた。最初の一発と次弾こそ間隔が短かったがそれ以降は照射されていない。

「下原さん」

「見えています、狙われたのは戦艦です。戦艦が2、いえ1隻すでに沈んでいますので元は3隻だったみたいです」

魔眼を用いてネウロの観察を行っていた下原が対象を海上に向けると、小規模な艦隊が航行しているのが見えた。すでに舳先が海面に残るのみとなった大型艦のほかにも大なり小なり被害を受けた艦が10隻ばかりだ。

「艦名は分かかりますか？」

「スオムスの……。ええっと何でしたっけ、海防戦艦が1、それからかなり古いタイプの戦艦が1です」

『それはカールスラントのシユレスヴィツヒホルシユタインだ。前大戦の頃の物だから古く見えるのも当然だろう』

ほのかなノイズ交じりの音声が502の部隊内無線に割り込んでくる。

「隊長！」

『お前達の脱出計画をうまく拾えたのでな。迎いの艦隊を、と思っただらこれだ。』

『助けに来たのはこっちのはずなのにね』

半島をぐるっと反時計回りに横断し、スオムス軍との連絡を図っていたラルとクルピンスキーがこの艦隊には乗り合わせていた。正確には、ペテルブルグを艦で脱出する組がいることの通達とその回収に艦隊を出すよう根回しをしたのはラルなため乗り合わせたという表現は正しくないのだが。



「隊長、我々はあの大型を」

『ああ。あれは私たちの獲物だ。——これより502JFWは敵空中砲台の排除を行う。ロツテごとに集合、突入する』

「了解！」「」

およそ一月ぶりに、502の全員が揃った。

## 前哨戦

13人のウイッチ達は2人一組になって飛ぶ。

ラルとロスマン、クルピンスキーはケツテを組み、ニパとサーシャ、ジョゼと下原、エイラとサーニャの組み合わせは以前から変わらな  
い。

残る4人の扶桑組は西沢と組んだことがあるのがひかりだけという  
ことから管野と孝美が引き続きペアを組む。

「敵砲台の射撃間隔は不定期的で読めない。だが、高速で飛び回る  
ウイッチに照準が合わせられるとは思えん」

「ですので、皆さんは砲台の射線に入らない位置から攻撃を行って  
もらいます」

とはいえ、いざ発射されればその余波だけで全滅しかねない。いざ  
発射体制となれば無理をせず距離をとることとした。

ラルの指揮の下、部隊は敵砲台を横目にして一度背後へと回ってか  
ら突入を行う。

まず最初に仕事があるのは孝美と下原。

「…見つけた!」

「いえ、待ってください!下腹部にも!」

下原と孝美の魔眼を髪飾りの発で重ねることで、より遠距離からよ  
り精密にコアの位置を探るといふ組み合わせだ。

横に長いコの字型の形状の砲台型ネウロイ、その最後部に存在した  
コアを下原が発見した。しかし、それと同時に孝美も己の視界にちら  
りとだがコアを映した。言われた場所を下原が見れば、確かにそちら  
にもコアがあることが見て取れた。

「コアが二つある!」

驚く孝美たちとは対照的に冷静だったのはラルやロスマンと言っ  
た年長組。

「これで合点がいったな」

「ええ。あの不定期的な砲撃は2発だけ連続で撃てるのではなくコア

が2つだから連発できたのですね」

ロスマンの言う通り、この砲台型はいわば2発装填できる銃のような物だ。装填された2発だけは好きな間隔で撃てるが、撃てば再装填が必要となる。そしてどちらも再装填には時間がかかっているのだ。

「んー、さっきのはあまり間隔を開けずに撃つていたけれど、第三射はずいぶん間隔が開いているあたり装填には時間がかかりそうだ」

「次が何時かはわかんねーけど、撃つてきたらまたスグその次が来るかもしれないってことでもあるわけだ」

管野の言う通り。装填には時間がかかるが短時間に続けてはなつたことで第3射と第4射の感覚は短い。カラクリはわかっても油断はできない。

「方針は変わらん。射線外から懐に潜りこんでコアを破壊する」

比較的低い高度を、ロツテごとに距離をとって飛ぶ。あの大威力の光線の他にも攻撃する方法が無いとは限らない。道中、たどり着くまでに発生する損失を少しでも抑えるための策だ。

砲台型までの距離が直線であと半分と言ったところまで来た頃。途中の空間にジワリとにじむように黒い点々が浮かびだす。索敵を担当する下原の目に映ったそれは、無数の小型といくらかの中型が砲台型から吐き出されて出来る様だった。

「母艦型…拠点型ということもあるな」

「自分を削って小型を生み出すというあれですか？南の方で何度か見られたそうですがこちらでは初めてになりますね」

下原からの報告を受けてのラルのつぶやきにロスマンが反応した。母艦型は大型が内部に小型中型を格納しているタイプであり、言ってしまえば見慣れたタイプだ。逆に拠点型というのは初期のアフリカや地中海で見られたタイプで、何処かに居座った大型が自らを資材に小型を生み出すタイプだ。特徴として小型を落とし続ければ大型の構造・装甲が削れて弱くなるというものがあるがアフリカではその特性を利用して小型移動プラントととして鉱山や資源地帯を襲い猛威を振るった。時折マルタ島に現れたのもこのタイプだ。

「地に足つけられない以上、無尽蔵ってことは無いでしょうが……」  
「取り付きにくくなったのは確かだよな」

ニパが口にした通り、それらは間違いないくウィッチ達を足止めするべく用意されたものだろう。シミのようだった小型も、互いに接近しあっているためにすぐに他のウィッチたちにも大きくはつきりと見えるようになりそのまま戦闘の火蓋が切って落とされた。

「突入！」

号令を背に一気呵成にウィッチ13機の全機が戦闘に入る。フリーガーハマーを持った二人が一番最初に前に出る。魔力のこもったロケット榴弾が二人合わせて18発。装填された全弾をただの一度で使い切る豪勢な攻撃だが、その威力は折り紙付きだ。敵の軍勢、その先頭を行く集団を纏めて消滅させる。

即応弾を全弾撃ち切って一時的に攻撃が出来なくなった二人と編隊を組む者達が即座にカバーに入り、再装填の時間を稼ぐ。同時に、先頭集団が消失したことで生まれた空間に他のウィッチ達がその身体を捻じ込み、消滅した最前衛の後ろにいた敵機に火線を浴びせかける。

「コア無しだけど結構多い！」

「まずいよ定ちゃん！横に広がってる、囲むつもりなんだ！」

「ニパさん、私たちが側面に回ります！」

対峙するネウロイの個々の力は大了なものではない。ここ一、二年の間に見かけられるようになったコアを持たない小型のネウロイは7mm級の機銃弾でも十分に貫ける程度の装甲にシールドで余裕を持って弾ける程度の光線しか持っていない。一般の兵士には有効でもウィッチの前にはカモでしかない。

なぜ苦戦しているのかと言えば、数の問題である。押しとどめられる、削る、それ以上の数が押し寄せては取り囲もうとしてくる。

もしも囲まれてしまえば、ウィッチ達は全方向に気を使いながら戦わざるを得ない。ウィッチ達とて一人ではなく十三人。互いが互いを信頼し背を預けることも出来る。しかし、それでは足を止めて戦わ

ざるを得ない。急がなければ第三射が放たれるかもしれないという状況でここで足止めされるのは敵の思う壺だ。

「ちいーぶつとべえー！」

管野が覚えたての魔力砲撃で敵の一角を削るが、被弾を免れた個体がすぐにその穴をふさぎにかかる。

「くそっ！」

「無駄遣いするな管野！もう何画も残っていないだろう！」

ラルの声にハツとした管野が左の袖をめくればもうそこには呪印が無く、残るはグローブの下に隠れた手の甲の3画のみであることを示していた。

「菅野さんの一閃は大型の装甲を破れる数少ない手段なんですよ!? もつと大事に使ってくださいー！」

「うっせえー！んなことはひかりに言われるまでもねえ」

「そんなこと言ってえー！余裕が出来るようになったからって気軽に使いすぎなんじゃないですかあ!？」

「んだとお!？」

敵の包囲が徐々に完成に近づき、ウィッチたちは密集して戦うことを強いられだす。管野の近くにまで下がってきていたひかりが飛ばすヤジに管野も敏感に反応する。言い合いながらも視線は敵に向けられ銃口もまた同じくだ。

「余裕なのか危機感が無いのか…」

「お姉ちゃん的にはどうなの?」

「……き、緊張して動けないよりかは、い、良い…ん、じゃないでしょうか……」

「複雑そうだねー」

「懐かしい感じの頭痛にホツとしてしまった自分が嫌になりそう…」

「大丈夫?サーシャさん」

「ニパさん……お願いですからまだしばらくは落ちないでください  
ね……」

「まだしばらくはってなに!？」

彼女らのペアもまた戦場とは思えない軽口をたたき合う。これが新米や練度の低いウィッチ隊ならば絶体絶命とでも思ったのかもしれないがそれを幾度も経験した者たちにとってすれば数ある戦場の一つに過ぎない。

とはいえ余裕があることと態度は別の問題。生真面目なサーシャは周囲の空気間に頭痛を覚えると同時にそのことに当に順応している自分の感性との間に揺れ動いていた。とりあえず、彼女は自分の気持ちに折り合いをつけることを後回しにして後々の悩みの種が増えないよう祈ることにした。

「あまり出し惜しんでもいられないか…」

戦況を見据える指揮官として彼女は、戦う部下達の背を見て全体の状況を知ることが出来る立場にいる。だからこそ、今の奮闘が続いたところでこの場を突破できないとわかる。いや、このまま戦い続ければいつかはこのコアなしの小型や中型とて殲滅できることだろう。しかし現状、今すぐにも敵砲台型にとりつきたい身としては第三射に間に合わないだろうと勘がささやく。

故に彼女は、指揮官として自身の手札を切ることを躊躇わなかった。

おもむろに右腕を顔の横にまで上げる。手の形は扶桑人の管野やひかりたちが見れば貫手でもするかのように、とでも言っただろうか。あるいはそれにしては親指が離れている、と言っただろうか。

親指とそれ以外の4本の指の間。そこに、何の前触れもなく厚い紙の束が現れる。

「Puppenshaus」

「突破力となるとバルクホルンあたりか」

この書類の中身はほとんど頭に叩き込んでいると聞いていい。記憶を頼りに何枚もまとめて摘まみ一度にめくる。期待通り、一回目で目的のページを見つけることができた。それに連なる数枚を間違

かないか確認したうえでまとめて引き抜く。改めて確認を終えると、右手のうちに残ったお目当て以外の紙束を消す。

そうして左手の中に残った数枚を両手でつまみ上げ、一息に破り捨てる。

「Mensch<sup>+</sup>・rger<sup>二</sup>のDich<sup>目</sup>nicht<sup>王</sup>」

視線の先で空間が急激に歪みだす。見る人が見れば破いた書類からあふれた魔力がそこにたまっていくのが見えるだろう。

それは人型とかたどったかと思えば徐々に色が付き始める。総じて瞬き数回分もないかという時間の後、何もなかったはずの空間にはこげ茶の髪を後ろで二つ結びにしてbf109のE型を履いたウィッチがそこにいた。

「サーシャ、MG42を二挺。低燃費化にそこだけ省いた」

「はいー……どうぞ」

話を振られたサーシャは、それでも慣れた手つきで己の”発”を行って求められた銃を具現化した。具現化した銃をサーシャから手渡されたそのウィッチは、ピクリとも表情を動かすこともなく無言のまま敵へ向き直ると、そのままその只中に向けて突入した。

「ああ!?誰だ!知らねえ奴が一人で突っ込んでるぞ」

突っ込むまでに横合いをそのウィッチにすり抜けられた管野が無線で叫ぶ。その間にもそのウィッチは何物も顧みないかのように突き進む。両手に構えたNG42はその高レートの発射速度が話題に挙げられる機関銃だ。その特性を十全に生かしそのウィッチは早くも手前にいた数機を撃墜していた。

「落ち着け管野。私の”発”だ」

グンドユラ・ラルの発、それは『人自所類/Puppenhaus』と『十二人目の撃墜王/Mensch・rgerDichnicht』。

二つで一つのことを成す発。『人自所類/Puppenhaus』は書類を具現化する能力であり、『十二人目の撃墜王/Mensch・rgerDichnicht』はそれを破り捨てることに

よって書類に記載されたウィッチの念人形を具現化する能力。具現化されるウィッチの能力や持続時間は書類にどれだけ緻密にその人物について書き記すことが出来たかが反映される。

特質系という希少な系統と事前準備にかかる時間と労力を対価にした制約によって成り立たせている発。

「お、おう。そんなことまでできんのかよ”発”って」

そう口にしながら管野は具現化された念人形だというウィッチに目をやる。自在に飛び回る彼女の軌道からは”人間らしさ”とでもいべきものが感じられ、管野にはとてもそれが人ならざるものだとは思えなかった。

「あの人突っ込んで行っちゃったんですけど大丈夫なんですか？」

ひかりの言った通り、具現化されたウィッチ”ゲルトルート・バルクホルン”は獅子奮迅の活躍をしているともいえるが同時に時折、敵の攻撃で姿勢を崩していたりと不安になる場面もある。その戦闘技術は決して稚拙なものではないのだが、どこか冷静さを欠いているようにも感じる

「おお、ドっからどう見ても大尉だ……。しかもなーんか見覚えある感じの」

「今の大尉じゃなくて去年の夏ごろ、芳佳ちゃんが部隊に来る前の大尉みたい」

バルクホルンとは501JFWで同じ部隊だったエイラとサーニヤが彼女を模した念人形の動きを見てそう評する。

彼女らの感想は正しい。バルクホルンの『人自所類』は情報を書き込むのがラル自身ということもあって再現される彼女はラルの知っている時の姿となる。故に、ラルとバルクホルンがまだ同じカールスラント空軍JG52で戦っていたころの、妹を目の前で昏睡状態にさせてしまった頃の姿をもとに具現化されている。故に、彼女たちが言う宮藤芳佳とミーナ・デイトリンデ・ヴィルケによって持ち直した後の姿とはならず、ネウロイに対して苛烈なウィッチとして再現され



たのだ。

「あー…あれは彼女自身がちよつと追い込まれていた時期というか……。まあ、今は全然持ち直してるから気にしなくて大丈夫さ」

「そういうことだ。今、敵がかき乱されているあのポイントを突破する。全機集合！一点突破で行く、後ろに構うな！」

バルクホルンの持ち直した後、目を覚ました妹さんの見舞いにブリタニアまで行ったこともあるクルピンスキーが一応のフォローを入れる。

過去の彼女を知る、複雑な表情を浮かべる者もいるが、それはさておき集合したウィッチ達は突撃陣形を形成。管野とニパを要する2ロツテをトップとして一塊となって突入する。

「行くぞおー！」

「「やあああああああ！」」

シールドの強度に優れる2人をトップとし全員のシールドを一つとしての突撃は統合戦闘航空団ではたびたびおこなわれる戦術だ。激戦区で採用されるだけあつてのその威力は確か。バルクホルンの念人形がかき乱した空域を横合いから殴りつけることに無事成功し、その包囲を抜け出したのだった。

## 前へ進んで／前へ進ませるために

敵の包囲が完成する前に危機を脱することができたウィツチ達。しかし、敵を殲滅して脱出したわけではないため、難を逃れた個体が追撃に転じてくる。

追撃を受ける側というのは常に苦しいもの。まして空中戦となると逃げながらの攻撃というものが難しい。時折振り向いてやみくもにばらまく機関銃では当たる弾も当たらない。こういう時にも役に立つのが広い範囲を攻撃出来て火力もあるフリーガーハマー。これを見越して突撃の際に後ろ側に2人が配された。

包囲を突破した後もラルは部隊をあまり散開させず適度な距離をとらせるにとどめた。追われる側が一塊になることで追う側もまた塊になることを強要する。こうすることで機関銃の低い命中率をカバーし、フリーガーハマーの効率を上げている。

ただし代償として、敵の攻撃が集中することも意味している。

「……まだ遠いか」

目標まではまだ距離がある。どうやら出せるネウロイは吐き出しきったのか前をふさぐ敵こそいないものの、追撃の光線に妨害されて最短距離をまっすぐに突き進むこともできない。

「火力不足だな」

「このままではたどり着いたところで挟み撃ちになるだけということも」

このままネウロイを引き連れていった時、砲台型に自衛能力があった場合前後両方からの攻撃にさらされることになる。

「部隊を分けますか？」

「……」

故に、ロスマンの提案通り追撃を相手にする部隊と砲台型を攻撃する部隊とに分けるといふ策もありだろう。ただしその場合、追撃を押しとどめる側は先ほど以上の敵の圧力にさらされることとなる。同時に、攻撃を担う者たちも少ない人数で未知の大型を相手に攻撃を敢

行することになる。

部隊長として、未知の敵を相手にするのならば持てるだけの戦力で臨みたいところだった。

「……わかった。全員聞け！これより部隊を二手に分ける！」

「サーシャ、ニパ、ロスマン、クルピンスキー、ジョゼ、下原はこの場で追撃部隊の足止め。それ以外の者で敵砲台型を相手にする」

フリーガーハマーを持つロスマンを火力役に残し、ほかの者たちも2年近くを共に戦ってきてその実力はよく知るところだ。まとめ役となるサーシャも大戦初期の地獄を生き残った実力者。多くのネウロイを相手にしても生き残ってくれることと信じている。ジョゼも粘り強い防御的な戦い方を評価されたウィッチであり、部隊唯一の貴重な治癒魔法を持つゆえにこちらへと回した。

対して、ラル自身が率いる6人は大型ネウロイを相手取るのに長けた人選だ。魔眼持ちの雁淵姉妹、火力役の管野とリトビヤク中尉。西沢飛曹長は扶桑海事変以来のベテランで大型を多く相手取ってきた経験を持ち、ユーティライネン少尉は未来視の魔眼持ちで一度も被弾したことがないという逸話で名の知れたウィッチだ。仮に何かあるうとも彼女だけは必ず生き残って情報を伝えられる。

「了解しました。お気を付けて」

「そちらもな」

別れの挨拶は端的に。言い終わったが最後互いに背を向け合い、それぞれの目標に向かって飛ぶ。

「散開！」

追撃を相手にするにあたってサーシャが最も恐れたのは先刻のように包囲されそうになること。13人いた時ですら固まって突撃などという手段でなくては突破できなかったのだ。人数が減っていればなおさら危険な状況になる。

だからこそその散開。ウィッチ同士の距離が離れてしまえば、こここのペアを囲むネウロイの数は著しく減少する。それぞれの相手で3分割される上、囲むとなればさらに薄くなる。

距離を離しすぎなければ局所的に挟み撃ちの固いも狙えるかもしれない。古い時代の支城戦術のようなものだ。火力と実力を備えたカールスラントのペアがいち早く自分たちの割り当てを殲滅すれば状況はより有利に傾くことだろう。

「ニパさん。改めて背中はお願ひします」

「まっかせて！シールドの固さと体の頑丈さには自信あるからね！」

「…ストライカーのほうが脆いっていうのはどうなんでしょう」

部隊を分けて早十分近く。

状況はおおむねサーシャの予定通りに推移している。三か所を同時に包囲せねばならぬ上、空中では三次元的に囲む必要があることから去らぬ必要とされる数は増える。必然的に一か所一か所のネウロイの厚みは減り、火力によっては一撃で穴をあけることもできた。

ただし、敵の数が圧倒的なことに変わりはない。

もともと13人で相手にしていた数だ。脱出のときの突撃に巻き込まれて大きく数を減らしはすれども未だに雲霞の如き数がある。減らせど減らせど空いた穴をほかの個体が埋めるという無限ループとも思える時間。ウィッチの体力や弾薬が尽きるのが先か。ネウロイが蹴散らされるのが先かの勝負になるように思っていた。

異常が起こったのは下原・ジョゼのペアが戦っていた場でであった。

「ぎゃあー！」

「ジョゼ!?!」

まず最初に悲鳴を、次いで何かが発射したかのような音を耳にした下原がジョゼがいたはずの方に顔を向ける。そこには黒煙が漂い、ジョゼはそれを振り払いながら中から抜け出てきたところだった。

「ジョゼッ、大丈夫!?!」

煙の中から出てきたジョゼは服装の端やストライカーの先のほうが煤けている。対して体の中心のほうは何ともないように思えたため、咄嗟にシールドで防ぐことに成功したかのように思えた。

ところが、下原から見て影になっていた左腕には沿うように走った裂傷から血がしたたり落ちていた。

「ジョゼー！」

「大丈夫だよ定ちゃん。血は出てるけど動かせる」

仮にこれが神経や骨などにまで達する傷だったのであれば状況が許せば即座に撤退させられただろう。幸運だったのはこの傷が飛び散った破片があくまで腕を切りつけた、かすめた程度であったという点。そしてジョゼが貴重な医療系固有魔法の使いであったことだろう。

「——Isolde aux cheveux dorés そのイノチニに翳りなく」

治療系固有魔法を基にしたジョゼット・ルマールの“発”。

系統は具現化系で彼女の生まれ持ったの形質にあったもの。具現化されるのは特に変わったところのない純白の包帯。

その特徴は“重ね掛け”と“遠隔治療”。

包帯を巻きつけた部分のみを集中的に。かつ、巻き重ねた回数だけ重ねて治療できる。その特性上、胴体部などよりは腕や指などの比較的末端部位のほう巻き重ねやすく治りが早い。

もう一つの特徴である“遠隔治療”は直接手を翳さずとも包帯そのものから治療が発動する。そのため、飛行中等においても低リスクでの治療が可能。いざという時には戦闘しながらでも傷をふさげるという力。

固有魔法と合わせたこともあってかなりメモリの消費が少なく作られた“発”。

『彼女』の固有魔法は決して優れているとは言えなかった。彼女の生まれは宿屋で、医師の家系というわけではなかった。比較的早くから軍で飛行資格を取ってみせたとはいえず、固有とあるように治療魔法の出力は生まれ持ったの才能によるところが大きかった。

彼女の治療魔法は応急処置程度と評されたがそれですら貴重なほ

ど数が少ないのが治療系固有魔法持ちのウィッチ。出力が低いなりにその扱いにも習熟し、また、上げた戦果はガリアでも名のあるエースに数えられるほどまでになった。

それでも、彼女は自身の”発”に固有魔法を応用した、固有魔法をより医療に特化させた能力として扱うための者としての力を求めた。”発”はなにも固有魔法に縛られる必要はない。絡めることで魔力やメモリの消費を削減するものもいるがまったく関係のない能力を作ったものもいる。

それでもなお、自身の戦闘力を強化するでもなく、戦いにおける手札を増やすでもなく、固有魔法の強化を選択した。

部隊における生命線。

昔、ラル少佐から502で失われたら最も困るウィッチだと言われたことを彼女は正しく受け取っていた。

手に取った包帯を器用に片手だけで巻いていく。最後は口も使つてきつく縛り上げた腕からは淡い光がともし、赤く染みた血が徐々に収まっていくのが傍からも見て取れた。

「私はこれで大丈夫。それよりも、今私を攻撃してきたネウロイについて」

「そう！何があつたの？」

「自爆してきたの。あいつら、自分自身を爆弾みたいに使つてきたの！」

ジョゼ達我突然行動を変化させたネウロイに襲われたところ、同じように襲われていたのはロスマン・クルピンスキーのカールスラント組。

同じようというのは正しくない。彼女たちはより一層激しく攻撃されていた。

「次、上から！」

「くっ、矢次早に」

数機ごとに突っ込んでくるネウロイがこちらの懐に入る前に撃墜しなくてはならない。クルピンスキーは正確に照準を合わせるために体ごと寝そべるように上を向き、きちんとMP43の銃床を肩に充てて引き金を引く。

戦闘に行く一気にねじ込まれた弾丸は自爆用のエネルギーを刺激し炸裂。後続を巻き込んで花を咲かす。その間にも、失敗したとみるや次の一団が突入しようとして蠢くのを感じ取ったロスマンが榴弾を叩きつけ機先を制する。

このような攻防をすでに十何回と繰り返していた。

「こいつら、なんでいきなりこんなー！」

このような状況下にも関わらず口を開く余裕があるのは彼女らがトップエースたる証左だろう。

「わからないわ。考えてもしようがないなら手を動かさないさい！」

だが、戦場に長くいたトップエースとはいえど敵の、それも人ならざる者の考えなどわかるはずもない。今はただ、生き残るために瞬間瞬間へ全力を投じるのみだった。

「もう、手どころか足も頭もフル回転だよ」

その状況を正確に把握しているものが居た。

「ねえ、サーシャさん！これってどういうこと!？」

「なんてこと、敵も私たちと同じようなことを……!」

まず、ニパが感じ取った違和感。それは他と同じく自爆する個体が現れたこと。次いで、撃破されて減る以上の数のネウロイが彼女たちの周りからいなくなっていることだった。

そして、サーシャが気が付いたこと。それは減ったネウロイがロスマン・クルピンスキーのペアのところへと集って行っているということだ。

「同じようなことって!？」

「戦力の分散、いえ、手分けをしているとでもいうべきです」

ラルの判断でウィッチ達は二方面の敵に対し、“足止め”と“撃破

”で二手に分かれたのだ。

「じゃあこいつらは足止めつてコト…!？」

「ええ！そして、それ以外の戦力集めてまずあの二人から墜とすつもりなんです！」

なぜ、ここで最初に狙われたのがあの二人だったのか。それはあの二人が飛びぬけて戦闘力が高かったから。本人の技量と取り回しのいい銃で撃破数を稼ぐクルピンスキーと高火力範囲攻撃ができるロスマンの組み合わせは、ほかの機関銃のみを装備したペアに比べて脅威度が高かった。

特に、この分断作戦で他のペアに狙いを置いた場合、その高火力から包围を突破されて逆に痛手を負うことになる可能性が高いと判断されたからであった。逆にここでこの二人を捕殺できれば残る4人も同じ方法で時間をかけて始末することができた。

「最近のネウロイやっばり変だよ！」

「明らかに知能をつけています。……いえ、その兆候ならもう何年も前からありましたね」

サーシャの脳裏によぎるのは度々起きる人型ネウロイによる事件。戦争初期のスオムスにおけるいらん子中隊の複数にわたる交戦記録から、502でも去年に引き続き今年にも出会い計二回。501が遭遇したという資料をミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐からの密書で見たとし、ヴェネツィアで人型との接触作戦を行った504が壊滅状態だという話は耳に新しい。

幾度となく人類の、そしてウィッチの前に現れる奴らはそのたびに他のネウロイとは違う行動をしてみせた。

自爆という戦術をとったのは小型のネウロイであっても防御を強要でき、かつそれを抜いて手傷を負わせるだけの威力があるから。コアなしの小型など使い捨てでしかない。数の優位を利用した戦術であった。

(もしや、今回のこの動きも…?)

サーシャはそう考えずにはいられなかった。



クルピンスキーとロスマンの連携は見事の一言に尽きた。互いの行動、そのすべてが噛み合い、常にどこかの敵機が撃破されて塵と消えゆく。

しかし、それでも徐々に敵の包囲が狭まっていく。リロードの間、確認の瞬間など、どうしても手が止まるときがある。常に絶え間なく押し寄せるネウロイにそのような“停止”する瞬間は存在しない。

もはや、これまでか。

そう言葉が頭をかすめる。

見れば敵との距離は縮まりきり、これ以上近づかれればフリーガーハマーのロケット榴弾は信管の安全距離の問題で起爆しない可能性すらある。クルピンスキーもはや飛び回る空間がなくなり、ロスマンのバツクブラストを避けて上方で留まっている。足を止めたことでリロードに割く意識が増えたこともあつて撃破レートは増えているような気がしないでもないが焼け石に水だ。

「ともすればこれが最後に引く引き金かもしれないわね」

そう口にしてから放たれた数発。せめて少しでも多く巻き込めるようにと祈りつつ放たれたそれ。

縁起でもない、とクルピンスキーが文句をつけようとした。

ロケット弾の着弾とは別に、下方の包囲を行っていたネウロイが一齐にその身をガラス状の欠片へと転じた。

「!?、伯爵!」

「りよう、かい!」

咄嗟に体を翻してその穴へと飛び込む。声をかけられたクルピンスキーは行き掛けの駄賃とばかりにカンピピストルの26mm榴弾を

放ちそれに続く。

穴を抜け、ネウロイの包囲で暗かった空間から一転明るい日の光の下に出たロスマンが一瞬目をくらませる。その瞬間をつかれやしないかと”円”に意識を注ぐ。自身の近く範囲が拡大していき、周囲を飛び交う光線と銃弾までも手に取るようにわかる感覚にやがて飛び込んでくるいくつもの存在。

「……ウィッチ？」

「お待ちせしてしまいました」

見慣れたbf-109のG型からガリアのMS406。ほかにもリベリオンやロマーニヤ等雑多なストライカーを履いてはいるものの服装は統一されている。空色の軍服に両サイドには四角い物入れがつくそれはこれまでにも幾度も纏っているものを見たことがある。

「スオムス空軍第24戦隊…いえ、この場にはそれ以外の者もおりますが。ともかく救援に参りました」

先頭に立つ少女。ラウラ・ヴィルヘルミーナ・ニツシネンがこの場のまとめ役なのだろう。よく見れば周囲のウィッチの中にはストライカーに真新しい応急処置をした痕のあるものや巻かれた訪台が制服の破れた跡から覗いている者もいる。

「先の攻撃の後、動けるものをどうにかこれだけそろえるのに手間取りました」

「そう、パブロフスクから来たのね？」

「はい。そこで補給と整備を」

これだけ、という言葉にふとクルピンスキーがあたりを改めて見まわすと自分たちのところだけでなくサーシャやジョゼ達のほうにもウィッチが向かっており、すでに4人とも包囲を脱していた。

「よく短時間でこれだけ集められたねえ」

「誰もが死線をくぐってきた者たちですから」

「ほうほう。それはそれは。よくよく見ればかわいい子たちばかりじゃないか」

窮地を脱してか意識の浮ついているクルピンスキーにロスマンが思わず肘を入れる。ラウラもラウラで何やら視線が厳しくなるが、閑

話休憩。

空気を換えるようにラウラがんつと咳をいれ、改めて仕切りなおす。

「この場は我々スオムス空軍で受け持ちます。時間が立てば今動けなかった者たちやヘルシンキのカールスラント夜戦中隊もこの場へ集うでしょう。あなた方は大型の方へ」

「それは…ありがたいけれども」

「こちらは大丈夫です。みな、傷だらけでも強い。それよりも私たちではあの大型にどこまで立ち向かえるかはわかりませんから」

「…：わかりました。ご武運を！」

「そちらこそ！曹長殿！」

階級では尉官であるラウラのほうが上なのだが、最後まで目上を敬う態度を崩さなかったのは彼女なりの敬意なのだろう。

包围を抜け、近づいてきていたサーシャたちに向かって声をかける。

「サーシャさん！聞いていましたか！」

「ええ！ここはスオムス軍にお任せして私たちは隊長たちの方へ行きます」

加速をつけるべく緩降下からの上昇を行う中でロスマンはちらりと後ろを振り返る。空の広い範囲であちこちで銃火が交わされているのが見える。それでも致命的な被弾をしたものや落ちていくものは見えない。

視線を下に向ければ、ヘルシンキから来た艦とパブロフスクが合流し艦隊を組んでいる。甲板にはウイツチと思わしき影が数人おり今にも飛び上がりそうな雰囲気を見せている。

「大丈夫そうね」

「ここは信じてあげるとしようよ先生。彼女たちだって立派なウイツチだ」

「ええ。そうしましょう」

前へと向き直り、一度目を閉じる。

改めてロスマンが目を開いた時にはすでに意識は切り替わり、ただ

目前の砲台型のみを見据えていた。